

---

# 星師

基

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星師

### 【著者名】

基

### 【ノード】

N7753U

### 【あらすじ】

都内の高校に通う蒼路には、右手の甲に星型のあざがある。それは、彼が普通の人間ではなく、「星師」であることを示す印だつた。

星師とは、すなわち闇に生きるさだめを背負つて生れた者。

世にはびこる「魔」を祓つことを使命とし、そのために不思議な異能を持つ者たちのこと。

最強の星を持つて生まれたがため、凄惨な過去を背負う幼馴染。

己の運命を呪う兄、その兄のため悲しい結末を迎えた妹。

さまざまな人物と出会い、関わる内に、蒼路は星師として成長してゆく。

大切な人を守るために強くなりたいと願う、不思議な『星』を持つて生まれた者たちの物語。

## 登場キャラクター

人物

高村 蒼路

十五歳の少年。高校生。

一見ふつうの高校生だが、右手の甲に五芒星の形をした特殊なアザを持つ「星導師」である。

妖怪や悪霊等を視認することができ、彼らと戦うことが役目。母と妹との三人暮らし。

特技は家事。苦手な事は勉強。

口は悪いが素直で心優しい性格。正統派美人が好み。

五辻 深紅

十六歳の少女。蒼路の幼なじみ。

額の右はじに星を持つ、若手最強の星導師。魔物に対しても容赦がなく、冷酷とも言えるほどの戦いぶりを見せる。

相当な美人。どこかの旧家のご令嬢。気丈で硬派な性格。

学校以外ではだいたい着物を着ており、着物が好きらしい。

伊勢 遙

十七歳の少年。蒼路の高校の先輩。

眉目秀麗で頭脳明晰、人柄も良い生徒会長。ややうさんくさい。

イギリス人とのハーフで眼が緑色。

他校に通っている双子の妹がいるらしい。

通称はハル。

好きなものはビスケット。

伊勢 阿南

十七歳の少女。遙の双子の妹。

通称アン。ハルとは違う高校に通っている。  
さばさばして姉御肌な性格。特技は運動。  
眼が緑色なのは兄と同じ。

好きなものは焼き立てのパン。

兄とはとても仲が良い。

筈 喜代

蒼路の師匠で星師。八十八歳。胸元に星を持つ。  
蒼路にはババアと呼ばれている。

巨大な屋敷に一人で住んでいるが、その屋敷は妖怪たちの吹き溜  
まりになつていて。

年老いてはいるが相当な術者らしい。

若手の星師の指導に力を入れている教育者。

獣、あるいは異形のものたち

青藍  
せいらん

深紅の召喚獣。

彼女に絶対の忠誠を誓っているが、おしゃべりが過ぎて時々怒られている。  
彼女からはランと呼ばれる。

元々は沖縄出身のケラマジカ。

緋醒  
ひざめ

人を喰らい、妖怪となつた狼。  
漆黒の毛並みにしろがねの爪、緋色の瞳を持つ。  
強大な力を持つ大妖である。  
元々は山を守る鎮守神の狼ちんじゅがみであった。  
一匹の銀狼、ギンとオリを眷族として従えている。

花緒  
はなお

蒼路の友達の猫又ねこまた。

百年以上を生きる猫で一本に分かれた尾を持つ。  
人が好きな善き妖怪で、街をパトロールして回っている。  
純白の毛並みに左右色違いの瞳を持つ。  
体の大きさを自在に変えられる。

ハルの召喚獣。グリフィン。

甘茶色の体躯に黄色い眼をしており、蒼路からは「獅子鳥」と呼ばれる。

プライドが非常に高い。

略称オー。

珠枝  
たまえだ

嘉代の召喚獣。

神にも通じる力を持つ強大な妖、九尾の狐。

蒼路をいじめ抜いて鍛えるのが趣味。

人の眼を覗きこむと、その血筋を読むことができる。

## プロローグ

星導師、といふ。

体のどこかに星を持ち、何がしかの異能を持つ者たちのことを。彼らは遠い昔に神々たちと契約を交わし、その役目と力を授けられた。

すなわち、この世のありとあらゆるものに宿るとされる八百万の神、彼らを守るという役割と、そのためには必要な異能能力を。

世には様々な闇が潜む。

そしてそれらの殆どは、人の心から生じたものだ。

憎しみに悲しみ、狂氣、嫉妬、差別意識。

人の弱い心がそういった感情に乱れた時、本来ならば相容れない存在である「惡」や「魔」が取り憑いて、真の「闇」として成長してしまうのだ。

神々は闇を<sup>いと</sup>厭う。

光が喰われてしまつからだ。

ゆえに、星導師たちをこの世に送り、闇を祓つて光を取り戻すよう命じられた。

彼らは決して歴史の表に顯れる存在ではない。

ひそやかに、だが着実に、その「星」の力と役割を後世へと伝えてきた。

どんな名聲も得られなくとも、彼らがこれまでに救つてきた命は数かぞえきれない。

その存在は、光の無い闇夜でも人々を照らし、導く、まさしく星そのものだ。

そしていつからか、彼らを知る者は、その在り様をこう呼ぶようになった。

星を持つて闇を祓い、世に光を導く者たち、つまり

星の導師、と。

強くなりたい、と思っている。

俺は、彼女を守りたい。

気丈で、いつも前だけを見ているあいつが、本当は大きな悲しみを抱えているということを知ってしまったから。

だから助けたい。

誰よりも、その近くで。

蒼路。  
あつひの

六年前、親父さんが亡くなった時、あいつは泣いた。

怖いよ、蒼路……！

雨に打たれながら、血まみれの遺体に取りすがるあいつに、俺は

何も言えなかつた。

違う、その時だけじゃない、ずっとだ。

いつも俺は、あいつの背中を見ているばかりで。あいつの強さに憧れるばかりで。悔しいけれど何もしてはこなかつた。

だから俺はあの時誓つた。

強くなると。

誰よりも、あいつよりも強くなつて、あいつを守ると。

そしてこいつのまにか、六年の歳月が経つた。

\*\*\*

朝からクソ暑い日だった。

できるなら家でじつとしてたいのに、いつこいつに限って、屋敷からは呼び出しがかかる。

しかも、暑い苦しいことこの上ない、着物着用といつでもレスコー  
ド付きだ。

……あのクソババアめ、絶対狙つてやつてやがる。

苛々と汗を拭きながら門の前に立つ。じゅりっと草鞋がコンクリ  
ートの地面に擦れた。

街を見下ろす高台に建てられた、この箕家の巨大な屋敷。  
辺りには一面竹が植えられ、先ほどまではつるさこほどだつた蝉  
の声も、ここまで来るとほとんど聞こえなくなる。

大きな両開きの門は開け放たれていた。

だがまだ修行中の身である俺が、そう簡単に通してもうかるはず  
はない。

どうせあのババアの事だ、また罷をしかけているに決まっている。  
俺はふつと息を吐き出すと、着物の合わせに手を突っ込んでく  
いを一本取り出した。

そのまま手首をしならせ門めがけて放り投げる。

すると くないは門を通過することなく、畠のある一地点で捕ら  
われて碎け散つたのだった。

「……めんどくせえ」

ち、と舌打ちをした俺だつたが、既に走り始めていた。

くないは止まつただけではなく、碎け散つたのだから、仕掛けら  
れた罠は決まっていた。

門番がいるのだ。

開け放たれた門の中央、先程くないが捕らわれた辺りの空間が、じわりとわずかに光つて歪んだ、と思ったら。

一頭の妖弧が現れた。

俺はすばやく右手を掲げる。

甲に刻まれた痣に左手を沿わせ、そこから何かを取りだすような仕草をする。

かすかに痛みが走り、左手が『何か』を掴む。

俺はその『何か』を引っ張りあげると、そのまま全力で妖弧の方へと突っ込んだ。

『ちょ……真正面からっ！？』

妖弧はあわてふためいたが、俺は全く気にしなかった。

手足をばたつかせて逃げようとする白い狐めがけて、両手に握つたものを思い切り振り下ろす。

『いっ、いやーーっ！！』

狐は、額に俺の刀がぶち当たる寸前に、そんな悲鳴を上げて遁走了した。

白い姿があつという間に空中にドロンし、結果として、俺の刀は門の敷居にふかぶかと突き刺さる羽目になる。

俺はため息をついてそれを引き抜くと、再び右手の痣の中に納めて、大股で門をまたいだ。

ろくでもない門番だ。まあ、どうせババアが臨時に雇つた妖怪なんだろうが。

それにしても、屋敷の中に入るだけでもこの面倒臭さ。

ざくざくと玉砂利の敷かれた車道を歩いて行きながら俺は呪詛の言葉を吐いた。

「だから嫌なんだよ、あのクソババアがつ！」

「誰がクソババアじゃと？」

ひえっ！

俺は飛び退った。  
いつの間に現れたのか、背後に、他でもない『クソババア』が立っていたのだ。

白い髪にしわくちゃの顔、小さい体を着物に包んで、背中の後ろで両手を組んでいる。

俺は慌てて弁解を試みた。

「い、いやっ、何でもねえよ！…」

「ん？ 何やら私に対してもう一つ見えたんだがのう。違うのか？」

「違います違います」

思い切り首を振って見せる。

はつきり言つてババアの怒りだけは買いたくなかった。

この老婆、見た目はただの歳寄りだが、じつは恐ろしい奴なのだ。  
何しろ、齡八十八才にして現役の星師ほしし、しかも、その名門中の名門、算家の当主を務める器。

「……フン。まあ良いわ。それよりもお前には話があつて呼んだのじゃ。ぐずぐずしないで早く中に入らんかい」

ババアはまだ胡散臭そうに俺の顔を覗き込んでいたが、やがてふいと背中を向けて、屋敷の方へと歩き出した。  
俺は心底ほーっとしながらその後を追う。

玄関から廊下を使って中庭へと回り、やがて池のある裏庭へと辿りつくと、今まで入ったことのない間の前で待たされた。

「ここでしばし待つが良い。勝手にふすまを開けるんじゃないぞ」「開けねえよ。っつか、ここどう?」

いつもは屋敷に呼び出されると、必ずと言つていい程修行道場の方に通されていた俺は辺りをきょろきょろしながら聞いた。ババアは口をへの字にしましたま答える。

「すぐにわかる。とにかくしばし待て」

「いいけど。また妖怪差し向けてくんじゃねーだろうな」

ババアのいつものやり口を知つているので、完全に冤家不信に陥つてゐる俺は言つたが、ババアは黙つてこいつ答えただけだった。

「……そのようなことさせさ」

そして廊下をすたすた歩いて行つてしまつ。

俺は首を傾げたが、取り合えず待てと言われたので、待つ事にする。

着物の裾を払つてあぐらを搔くと、廊下に座り込んだ。

\* \* \*

『また星持ちが居ますな』  
『うむ。いつもの姫様とは違うようじやのう』  
『しかし星持ちはうまそつうな匂いがしますな』  
『うむ。はらわたを喰うと人間になれると聞いたが本当かのつ

……池の鯉たちがそんな風に会話している。  
しばらく時間が経つていた。

大した時間じゃなかつたが、俺は屋敷の清浄な空氣と、さうさら  
笠の葉が風に揺れる音に聞き入つて、すっかりぼうっとしていた。  
池の水面が夏の太陽にきらめいて揺れている。

ゆつたりと泳ぐ鯉の影は綺麗だが、彼らはたぶん本当の魚じゃない。

さつき話をしていたのから考えて、妖怪の一種だろう。

ふいに、向こう側からきらきらと笑う子供の声が聴こえたので顔を上げると、おかっぱ頭の女の子が手に毬を持って、渡り廊下を走つて行く所だった。

『星持ちが来たよ』

『みんな、星持ちがいるよ、あそこ』

『お姫様に会いに来たんだ!』

楽しそうな笑い声に、俺はまたかと肘をついて、その子が走つて行く様子を眺めた。

箕家にはあの年頃の子供はない。

あの子も妖怪なのだ。座敷わらし。

俺はため息をついて苦笑した。

相変わらずこの家は、妖怪の吹き溜まりになつていらしか。

「待たせたな、蒼路」

名前を呼ばれて、俺ははつと顔を上げた。

ババアがそこに立つていた。

またしても、気配を全く感じなかつたので俺はビビりながら立ち上がる。

……だから怖えんだよ、いいつ。

「ああ、待たされた。何だつてんだ、一体」

「相変わらずの減らす口じゃの。仮にも星歸の卵、もつ少し品格を持つて」

ババアは眉を跳ね上げながら俺をにらんだが、俺は意に介さなかつた。

肩をすくめて両手を広げて見せる。

「ああにく様。生まれが悪いもんで、これ以上にはなれねえよー。」  
「……まあよいわ。入れ」

やがてババアが襖を開けた。

小柄なうしろ姿に続いて、俺も入る。

四面張りの小さな部屋で、奥にはまた襖があつた。多分、そらこ

部屋が続いているんだろう。

よく滑る畳を足で踏みしめ、促されるままそこそこに坐す。

ババアも少し距離を置いて俺の前に座つた。

沈黙が流れ、どこかで風鈴がちりんと鳴つた。

「……で？」

やがて俺から口を開いた。

「このババアとあんまり長時間一緒にいたくないのだ。なんつーか、居心地が悪すぎで。

するとババアはすっと眼を上げて俺を見た。

「高村蒼路

まともに名を呼ばれ、俺はびびる。  
老いた顔の中でそこだけ一点、火のよつに輝く瞳。

「……な、なんだよ

しじろもじろに俺は答えた。

ババアは一瞬たりとも俺から眼を逸らさないで、さりげに続けた。

「お前、星師の修行を始めて何年になる?」

「……六年だけど。それが何?」

「今でも星師になりたいか?」

「は?」

俺は思い切り眉をしかめていた。

何故ならババアの質問が、俺にとつてかなり失礼な質問だつたらだ。

前述した通り、俺は九歳の時から星師 星導師 になるための修行を始め、昼も夜もこの箕家にて猛特訓を重ねてきたのだ。箕家は由緒正しい星師の一族であるが故、星師を絶やさぬために若手の育成にはかなり力を入れている。

そして箕の当主はこのババア、他でもない箕喜代だ。

ババアによる猛特訓というのが、興味本位で続けられるほど簡単でもラクでもないことは、想像すれば誰にだってわかるはずだ。俺は息を吸うとババアを遠慮なく睨みつけた。

そして言つた。

「あんた、俺を馬鹿にしてんのかよ？ 俺はもう六年間も、あんたの元で命がけの修行をこなしてきた！ 星師になりたいから、そのためだけに、俺は今まで生きてきたって言つても過言じやねえんだ」「そう怒るでない。相変わらず短気じやの！」

ババアは嫌味つたらしく長いためいきを吐きだした。おまけに肩まですくめている。

ますます腹が立つことに上ない。

……畜生、絶対馬鹿にされてる！

「短氣とはなんだ短氣とは！… どうちが言いだしたことなんだよ  
つ」

「ひめやいのう、だからそうキレるでないと言つておるのじや。私は何もお前を馬鹿にしているわけではない 馬鹿だとは思つてい  
るが」

「んだとおおおつー？」

俺は激昂して立ちあがつた。言わせておけばぬけないと！  
懐からくないを取りだし、ババアの頭めがけて振り下ろす。  
するとババアは当然のようにそれを左手の指一本で受け止めて、  
弾き返した。  
……ちつ。

相変わらず隙がない野郎だ。

俺が舌打ちをして腕を下ろすと、ババアは何故か微かに笑つた。

「 フム。少なくとも、すぐに星に頼るわけではなくつたよう  
じやな」

俺は面喰つた。

ババアの笑つた顔など、勿論始めて見るものだつたのだ。

「 ……は？」

「昔はお前は、星の力を過信してすぐ剣を取りだしたり、炎を  
出したり、無駄な力を使つていたもんじやが。ちつとは成長したよ  
うじやな」

「は？ え？ もしかして、試したのかつ？」

「人聞きの悪いことを言つた。それもこれも貴様自身のためなのじ

やからな

「だから、さつきから一休何なんだよつー」

俺の苛々は頂点に達した。

回りくどいことは大つきらいなのだ。

「言いたい事があるならさつきと話いやがれー」

「あー、わかった、わかった。本心としてはまだ、お前に任せてもいいものか悩むところじゃが……」

「いい加減、ぶつ殺すぞ、ババア」

再びくないに手を伸ばして脅すと、今度こそババアはため息を吐いて、俺にこう言ったのだった。

「 蒼路。実は、お前に頼みたいことがある」

驚きのあまり時間が止まった。

……気がした。

「頼みたいこと……？」

俺は思わず座り込んでしまった。  
ババアはうむ、とやけに神妙な顔で頷く。  
腕組みをすると寒はな、と切り出した。  
俺もつい頷いてしまう。

「ある者の護衛を頼みたいのじゅ」

「護衛？ 俺に？」

言われたことが意外過ぎて、俺は自分で自分を指差すといつ古風なリアクションをしてみせていた。

ババアは眉を吊り上げて「他に誰があるー」と言った。

気づけばしわくちゃの顔が俺の目前に近づいていた。仰け反る。

「うわっ！」

「お前も修行を始めて六年。そろそろ一人前の星導師として認めて  
やつても良いころじゃや」

「マジでー？」

「だあがー！」

一瞬歓喜した俺を押さえるように、ババアは顔をさらに近づけた。  
俺は逃げ場がなくてうええ、と思った。だって、背中の後ろはまたふすまなんだよ。

ババアは続けた。

「だがな、わしから言わせればお前はまだまだ弱いし、無鉄砲だ

し、馬鹿だし阿呆だしまぬけだし、一人前には程遠い…」

「言い過ぎだる！」

「事実じやううが。そういうわけで、お前の他にももう一人護衛が

つく

「……もう一人？」

「もうじや

ババアはそこじでようやく離れた。

居住いを正すと自分の背後のふすまをひらとふり返つて、

「入れ」

と命じた。俺は眼を瞬く。

ふすまの向こう側から淡々とした声が返ってきた。

「失礼を」

そしてすうつと開かれたふすま。

華奢な指先があでやかな紅い着物が、その上に波を打つて流れ落ちる漆黒の髪が。

何よりも、長いまつげに覆われた眼差しが。

次々と現れて俺を釘づけにした。

俺は、動く事ができなかつた。  
息すらできない。

「  
深紅みにい……？」

信じられなかつた。

彼女が目の前に存在して居ることが。

六年前、雨の中でも号泣していた、あの幼い少女と、まさか。

まさかこんなに早く再会することになるなんて。

「ええ。久しぶりね、蒼路」

「おやお前達、面識があつたのかい？」

落ち着いた様子の深紅に対し、ひたすら驚愕するばかりの俺を見て、ババアが首を傾げていた。

無理もない。

だつて深紅は、俺とは住む世界が違う人間なのだ。

この覧家よりもっとずつと高貴な家柄の娘で、しかもそこを継ぐべき次期当主。

俺はこいつと縁あつて幼少時代を同じ里で過ごした幼馴染だが六年前に別れて以来、もう会つ事はないだろうと思つていた。

いや、ちがう。

正確に言つと、俺は深紅に会いたかった。

いつか正々堂々と会いに行つて驚かせたかった。

そのために、星師になろうと修行していたのだ。

だから、まさかその口がこんなに早く訪れようとは。

(……聞いてねえんだよ)

驚きは次第にその性質を変化して、俺は不機嫌になつてきた。

深紅がババアにこう説明しているのを、やたらふてくされた気分で聞いた。

「キヨ様は」「存じではありませんでしたかしら。私と蒼路は同郷の出身なのですね。子供の頃、彼の御両親には色々とよくして頂きました。もちろん、蒼路自身にも」「ああ、そうであったな。そういうえば蒼路の父親、将星殿はそなた

「やめろ」

とつさに遮っていた。

親父の話は聞きたくなかった。

取り澄ましたような深紅の声も。

ババアが怪訝そうな顔で「ちらを見たが、俺はぜんぜん構わない。話題を変えてやる。

「余計な話してんじゃねえよ。それより、もう一度ちゃんと説明しろ。何で俺が……」

その名を呼ぶのを一瞬ためらつたが、名字を呼ぶのはもつとためらわれた。

俺は声を低めて言った。

「……深紅と組みなきゃなんねえんだ?」

「決まつておるつが」

ババアは深紅の肩に軽く手を触れると説明を始めた。

「ここの深紅は若手の中では群を抜いて優秀な星導師。くわえてお前と歳も近く、今回の任務を遂行するにはうってつけの人材なのだ」

「それじゃ答えになつてねえよ」

俺は声を荒げた。

自分でも何故かはわからんが、激しく苛々する。  
すつと立ち上るとババアを睨みつけていた。

「なんで深紅じゃなきゃいけなかつたのかつて聞いたんだ。若手な

「…」

そこで初めてババアは俺が機嫌を損ねていてことに気がついたら  
しい。

まつ白い眉を跳ね上げ、俺を見つめた。

「お前、何を怒つてある?」

「へんな世えな！」別に怒ってなんかいね！よ！」

「怒ってるではないか。別にお前にどうて悪い話ではないじゃろう。それとも何だ、怖気づいたか？」

ババアが鼻で笑う。

俺ははつとした。

思わず佩き 拳を握りぐるめでじあ

「...違つ。」

「違わないわい。本当に子供じやのう、お前は。つまりは同年代で女の深紅と組んで、実力の差を見せつけられるのがいやなんじやろ」「ちがうー。」「いい加減にしろー。つまりん意地を張るくらーなら、星なんて捨ててしまえ！」

卷之二十一

感情が爆発したせいで、右手の痣  
つまりは俺の星  
から紅  
焰が迸り出る。

俺は怒りに我を忘れていた。

まっすぐにババア目がけ、焰を突進させる。  
だが 素早く飛び出してきた深紅が、それを真正面から受け止

めた。

息を呑む。

「……やめるのよ、蒼路

彼女は全身に水煙<sup>すいえん</sup>を纏ついていた。

蒼い霞<sup>かすみ</sup>の立つ指先で俺の焰を押さえ、留めている。

その漆黒の瞳の中に、焰の燐光がちらちらと躍った。

「止めるの。お前はこんなに愚かな人間ではないはずだわ」

底の知れない瞳だった。

「……フン

俺はやがて焰を納めた

左手で右手の星を押さえて『消火』する。

すると深紅も水煙を納めた。

彼女の星は、白い顔の上にある。

「キヨ様。少し蒼路と、話をしたく存じます」

やがて深紅がババアに向き直った。

俺は面喰つた。え？

「構わぬが。こんなガキと組みたくないれば、遠慮なくそう言つてくれて良いのだぞ、深紅」

ババアが厭味つたらしい口を利いたので、俺はまた怒髪天を突きそうになつたが、深紅に片手一本で制されてしまった。

「蒼路」

「んだよ、深紅っ！」

「さつきも言つたでしょ。 大人しくして頂戴」

厳しい声でたしなめられて、思わず従つてしまつた。  
なぜだか顔がかーと熱くなる。

ババアがそんな俺を見て眼をまるくした。

なんだよ、と俺は思った。

……なんか、やりにくいで！

「キヨ様。道場を使わせて頂いて構いませんか」

深紅がふたたびババアに尋ねた。

ババアは頷きながらも不思議そうに彼女を見た。

「構わぬが。どうするつもりじゃ？」

「ですから、蒼路と話をするだけですわ。」

深紅は笑つた。

その顔は、きれいだが、何と言つか得体の知れない怖さに満ちていたので、思わず背筋が凍りついた。

深紅はいま一度、ついと首を曲げて俺を見ると、さらに艶やかな笑みを浮かべた。

「幼馴染同士、積り積もつた話を……ね

この瞬間、俺は本氣で死を覚悟した。

## 幼馴染

深紅が言った道場とは、もちろん星師の修行に使う道場のことだ。前述した通り筧家は、若手の育成に力を入れているので、星師の訓練所としての役割も負っていた。

だから道場も二つある。白いのと黒いのと。ちなみにこのモノトーンが区別すると白は白が武術用、黒が呪術用の道場だ。

深紅が俺を連れてきたのは黒道場の方だった。

「……話って何だよ」

俺は言った。

道場の中は真っ暗だった。

背後で音を立てて入口の扉が閉まる。

「なんだよ、ですって？」

闇を切り裂くように深紅の凛々しい声が響いた。  
俺はその声にああ、と眼を閉じる。

昔からこうだった、この人は。

いつも、痛々しい程に、全てに立ち向かってゆく。

「わからないの？」

闇の中でも深紅がどこに居るかはわかった。

星師は互いを気配で読める。

それは逆に言えば深紅にも俺の居場所がわかっているということだ。

俺は右手を持ち上げると、ゆっくりと、星の中から刀を取りだした。

ゆり。

紅い焰が闇を焼く。

「……わからないから聞いている。俺は、まどろっこしいのは大嫌いだ」「そう。なら、言いましょうか」

俺の焰に照らされ、深紅の姿が離れた場所に浮かび上がった。闇の中にあつてなお白い手が、同じく白い額に触れて そこから魔方円を創り出す。

「 不愉快なのよ

俺の中で、最後の記憶の彼女は十歳。その頃にはもう既に、深紅は星師として恐ろしい程の才覚を現していた。

戦師、治療師、陰陽師、召喚師、空間師。

大まかに五つに分類される星師の才能、その全てを。

そう、全てを、彼女は持つて生まれたのだ。

彼女の基色である紅が、闇に五芒星を描いてゆく。

俺たち星師のシンボルであるセーマン・ドーマン。

まずは円を。

そして、その中に、流れるような一筆書きで五芒の星を描き入れ、彼女はその魔方円越しに俺をきっと睨みつけた。

「 あたしと組まなきやいけない、なんて言い方をしたこと。謝つてもううわ

「え……」

久しぶりの深紅の術に見惚れていた俺は、彼女の声に反応するのが遅れた。

まずい。

遅れを取つたと悟つたが、もう遅かった。

「絶対に、謝つてもらうわ！」

深紅が叫んだと同時に魔方陣が膨張し、そして一瞬後に消滅した。彼女の姿が見えなくなる。

そして

「 つ！ ！」

俺は足もとから吹き飛ばされていた。

道場の壁にしたたか背中をぶつけて崩れ落ちる。握りしめた手が緩み、刀が音を立てて床に落ちた。

「足もとが御留守。反応が遅い。昔どぜんぜん、変わらないのね

「…………ん、だと…………つ」

深紅の声に顔を上げると、彼女が恐ろしく冷たい顔をしてこちらを見下ろしていた。

その紅い姿の傍らには一頭の鹿が従つている。

青味がかかった灰色の毛並みに、こぶのある角。

深紅の細い指先がその顎先をくつって撫でると、『彼』は嬉しそうに眼を細めた。

「…………青藍、てめえ……本気でぶつ飛ばしただろ…………！」

俺が立ち上がりうとしながら声を震わすと、鹿 青藍 は愉快そうに前足を踏みならした。

『もちろん本気さー。久しぶりの蒼路との勝負で、けっこにハテンシヨン上がってるんだぜ。楽しませてくれよな』

「本当よね、青藍。期待を裏切るようなことだけはしないでほしいものだわ」

「……バカにすんじゃ……」

俺は刀を手に取った。

「 ねえっ……」

闇を払つ一閃は、深紅でなく、深紅の前に飛び出してきた青藍の角で受け止められた。

ぎりぎりと押し返してくる力を受け流し、俺は一度身を退いた。とたんに青藍が突進してくる。

軽く助走をつけて高く飛んだ俺は、彼ではなく深紅の方へと刀を振り下ろした。

「あら」

深紅はひらりと一撃を交わす。

結構な力を込めたつていうのに、相変わらず恐ろしい女だ。俺は舌打ちをしながらもう一度刀を振るつた。

今度のそれは水煙を持って受け流された。手じたえのない感触が空しく俺の手を伝つた。

「何考えてんだ深紅っ！ 俺は、お前と戦う気なんてねえ！」

繰り返しぐりかえし、剣を振るつ。

しかしその全てを深紅はやすやすと交わした。

背後から青藍が突っ込んできた。

跳んで交わした拍子、鋭くとがった角が俺の脇腹を切り裂く。着物の分厚い生地が幸いして大したことはなかつたが、それでも焼けるような痛みが脇腹に走つた。

俺は舌打ちした。

一対一では明らかにこちらが不利だ だが、俺は召喚術は使えない。

「戦う気もないけれど、手を組む気もないのでしょ」

深紅の声が間際で響いたと思つたら、眼前に彼女の顔があつた。ぎょっと飛び退る俺の喉元に、つめたい糸のような感覚が走る。

……水糸みずいとだ！

深紅の性質である水を糸に変えて、相手の動きを束縛する技。

「が……はつ」

ぎり、ぎりと力を込められて俺は喘いだ。

左手から刀が落ちる。

首を締め付けるものを引きはがすと手を伸ばすが、もちろん水に触る事なんてできない。

俺の指先は俺の皮膚を引っ搔くだけだった。

次第に足が宙に浮いた。

「どうしたの？ もう終わり？ お前、星師を目指して修行してい  
たのではなかつたの？」

深紅は笑顔すら浮かべて足搔く俺を見上げた。

本気だ、と俺は仰け反りながら意識の端で考える。

『いいつ、本気で俺を殺す気だ……！

「……ふざけんじや……」

俺は、両の手をなんとかして、宙に掲げた。

息が苦しい。頭が熱い。

左の指先で星に触れる。

唱えるは 焰の術。

「……ねえっ！」

両手に焰を持つて、俺は喉元を焼いた。

じゅう、っと嫌な音を立てて水糸が蒸発し、束縛が解けた。

俺は再び床に転がる。

息が苦しいのと、火傷の痛みで喉を押された。……やっぱり少し  
焼けちまつた。

「な お前、馬鹿……！？」

深紅が驚愕に眼を見開く。

俺はせいぜいしながら彼女を見上げて 言つた。

「どちらがだ……？」

「え？」

『深紅、よけろっ！』

茫然とした様子の深紅に青藍が声を掛ける。  
だが少しばかり遅かった。

深紅が気がついた時には俺はもう、刀を再び手にしていたのだ。

「俺と、幼馴染を殺そつとするお前と、どっちがバカかって聞いてんだよっ！！」  
「……」

深紅は完全に間を奪われていた。

俺が自分の額めがけて刀を振り下ろすのを、ただ見つめている。青藍が走ったのがわかった。だが彼は、間に合わなかった。彼の角が俺に届くより前に、俺の刀は深紅に届いていたのだった。

『深紅　……』

青藍の咆哮を最後に、道場の中はぴたりと静かになつた。

＊＊＊

俺の刀は深々と突き刺さつていた。

……深紅ではなく、深紅を背後から襲おうとしていた、一頭の白狐に。

「……なつ」

深紅はやはり気が付いていなかつたようで、俺の視線を追つてから驚きの声を上げていた。

青藍が駆け寄ってきて彼女に頬を擦りつける。

『こいつ、見た事あるよ。普段はこの家の門番やつてるけど、悪狐だからちょくちょく人を襲つては楽しんでた』

「ああ、さつきのへつぽこ白狐か。どうりで弱え」

俺は納得しながら狐から刀を引き抜いた。

途端に狐はその身を焰に包まれて消滅する。

……門番殺しちまつて良かつたんだろうか？

首を傾げる俺を、深紅が理解できないといつ顔で見ていた。

「お前、私を助けたの……？」

「まあそーだ」

俺は星の中に刀を戻した。

驚いている深紅が愉快でたまらず、思わず笑ってしまう。

「感謝しろよー、おまえ、人の事言えねえよ。」この白狐が現れた時  
かんつぜんに足もとが御留守だったもんな。俺が気づかなければあ  
ぶなかつたんだぜ」

「やつこつことを聞いているんじゃないのー。」

やにわに彼女は叫んでいた。

俺は眼を瞬く。

「え？」

「え、じゃないでしょ。私は 私はおまえを傷つけたのよ？」

「ああ、これ？ 別に大したことないし」

さつき青藍にやられた傷を見ながら俺は言った。

ざつくりと裂けた着物の生地を持ち上げて見れば、非常にきれい  
な切り口。

この分だと縫合もそつ面倒ではないだらつ。

「これぐらいなら化膿もしねーだる。さすがは深紅の召喚獣だな」  
（しょつかんじゅう）

「だから、そういうことじゃないって……！」

「 なあ。お前、ただ戦つてみたかっただけなんだろ？」

彼女の言葉を遮つて、俺は深紅の眼を覗き込んでいた。  
今気がついたけど、ずいぶん身長差がついたもんだ。  
あの頃はこいつの方が背が高くて、俺はいつも見下ろされていた  
もんだけど。

「……なんで、お前は……」

わずかに下がった視線の先で、深紅が唇を噛んだ。  
青藍が鼻を鳴らす。

俺は彼女が泣いたのと思ったが、そうじゃなかつた。

「お前は、いつもそうなのかしら」

「……深紅？」

俺は驚いた。

深紅は 笑っていたのだ。

口許に手を寄せて、ほほ笑みながら俺を見た。

「 変わらないのね。本当に」

白い手が俺の喉元に伸びた。

ぎょっとして、それから紅くなってしまつ。

「み、みみみ深紅つ？」

「バカ正直で、素直で

何があるひとつ人を責めない。本当にあの

頃とおなじ

「あ……」

ふいに俺は喉元がこちよく温まるのを感じた。  
そういうえば、さつき自分で自分を焼いた時の火傷があつたんだつ  
た。忘れていた。

『 我が星を持つて、汝の闇を祓う』

深紅は静かに呪を唱えて、俺の傷を癒した。  
紅い光が淡く輝き、それから静かに消えて行つた。  
静まり返る道場。

「覚えている？」

深紅はひつそりと言つた。やわらかな声だった。  
俺は首をかしげた。

「何をだ？」

「あたし達が小さい頃、こんな風に星を使って、毎日ケンカをして  
た。……よく怒られたわね。あなたのお父様や、私の父に」  
「ああ……そういや、そうだつたな」  
「なつかしいわ」

ふふ、と深紅はまたほほ笑んだ。

「本当に、なつかしい」

彼女は青藍に戻つていい、と命じた。  
大人しく青鹿は彼女の星のなかに帰り　そして、俺達は一人き  
りになつた。  
……げつ。

俺は辺りを見回して動搖する。

「、こいつってどうすつやいいんだつー？」

「 蒼路？」「

「な、なんだよッ？」「

こわなり呼びかけられて声が思につけり裏返った。

……うわあ、格好ワリー。

けれど深紅は真面目な顔で俺を見ていた。

「お前の考えが正しいわ

「何だつて？」

「私は、ただお前と戦つてみたかった。どれだけお互いが成長したのか、どれだけ変わってしまったのか、確かめたくて」

「……やり方が悪すぎんだよ。途中、マジで死にそうになつたじやねーか」

俺が毒づくと、彼女はけろつといつ答えた。

「だつて本氣だつたもの」

「なぬ！？」

「戦つてみたかったのも本当だけれど、お前のあの一言で腹が立つたのも本当なのよ。私と組まなきゃいけない、だなんて、無礼にも程がある。何様のつもり？」

そしてじろりと向けられた田線は、なるほど確かに怒っていた。

俺はここ来てようやつと自分が彼女を侮辱したところにてつたつた。

頭を搔きながらしどりもどりと言葉を探す。

「……えーと、あれはだな、そういう意味じゃなくて……」「ではどういう意味なのかしら、聞かせてもらいたいものだわ」

詰め寄られ、俺はますます弱つてしまつた。

だつて、言えるわけねえだらう。

『早すぎた』なんて。

俺はまだお前を守るほど十分には強くない。

まだ、早い。

だから 突然の再会に驚き、不機嫌になつてしまつた、などと。本人の前でどうして言える?

「えーと、だからその……」

「その?」

「……えーっと……」

弱つた。ほんとうに弱つた。

全身が熱くなり、腋から汗が噴き出していく。

ちらと眼を上げれば深紅はあいかわらず俺を睨みつけていた。勘弁してくれ。

「……悪かった」

俺はやがて根負けした。

ぱんと両手を打ち合わせ、深紅に向つて頭を下げる。

「頼むから勘弁してくれ。あれは俺が悪かった! このとーりだ!」

深々と下げた頭のもじりで、深紅は黙つていた。

いつまでも黙つていた。

俺が許してはもらえないのかと冷や汗を搔くほど長い間黙つてい

たが やがて、いきなり噴き出した。

「ふつ」

「へ？」

俺は思わず顔を上げた。

たちまち、お腹を抱えて笑っている深紅の姿が目に飛び込んで来る。

長い間お辞儀していたせいですこしふりふりする頭を押さえ、俺は眼を白黒させる。

「おい、深紅……？」

「ふふふ、あははっ！ もう、蒼路つて本当にバカ正直」

「お前、もしかして」

「そう。カマかけたのよ。 でも、その一言がもうえたから満足」

切れ長の田じりに浮かんだ涙を指先で拭い、深紅はそうほほ笑んだ。

その笑顔に出かけた俺の怒りも引っ込んでしまつ。やがて深紅は言ったのだった。

「蒼路」

まだ少し笑みの残る、晴れやかな声で。

「私、お前の任務を受けることにするわ」

その任務といつものぞれだけ大変で、かつ面倒なものか俺と深紅が知るのは、それからずいぶん後のことだった。



## 一日の始まり

翌日は月曜日で学校だった。当たり前だけど。

「……痛え。」

「ビーしたの、お兄ちゃん？」

玄関でスニーカーを履いた拍子、深紅にやられた傷が痛んだ。  
思わずうめくと妹の藍あいが寄ってきて俺の背中に抱きつく。  
俺は笑いながらそのつややかな頭を撫でた。

藍は六歳。

親父が死んだ年に出来た子供で、俺も母さんも死ぬほど可愛がっている。

「どこかいたいの？ また悪い奴らと戦ったの？」

「いや、大丈夫だよ。ありがとな、藍」

「藍もお兄ちゃんと一緒にいきたい！」

「お前は小学校あるだろお～」

やわらかいほっぺたを引っ張って遊んではいるが、今度は母さんが  
家の奥から出てきた。

手にハンカチでくるんだ弁当を持つている。

俺は眼を丸くする。しまった、弁当忘れてた。

「蒼路、忘れ物よー。お弁当」

「……ありがと。母さん」

母は高村優子、口外は厳禁だが四十五歳。

親父を亡くして以来、女手一つで俺達きょうだいを育ってくれた。

俺は弁当を受け取ると鞄に押し込み、立ちあがった。

「じゃあ、行つてきます。」

「ニーザ」ヒリハリ

「氣をつかんで」  
「行かでござりますまい」

「いやかな藍と母さんに見送られ、玄関のドアを開く。出で行いつと家の敷居をまたいだ瞬間、母さんの声が俺を呼びとめた。

「あ、  
蒼路」

九

ふり返る。

すなと母上 笑しながらハヽヽヽた

「深紅ちゃんによろしくね？」

六六六

……そ、う、な、の、だ。

深紅が、転校してくることになつたのだ。

一学期も終了間近といふの中途半端な時期に、俺と同じ高校の一年生として。

「つたく、ありえねえよな、あのババア……」「

マンションから学校へと歩きながら俺は一人ごちた。  
なぜ深紅が転校してくるのかといえば、他でもない、俺達が護衛  
するべき人間が俺達の高校に居るからなのだ。

が。

しかし！

……だからと言つて転校までさせるか、ふつり？

「あーあ、ほーんと、めぢやくぢやなババアだよなあ！」

叫んで思い切り伸びをした俺だが、次の瞬間耳に届いた声に、驚き飛びあがつてしまっていた。

『 悪かつたな』

「うおっ！？」

俺はたいそう驚いた。そりやそりだ。

だつて、歩道の脇のガードレール、その上に停まっていた鳩がいきなり口を利いたのだ。

誰だつて飛びあがりたくもなるものだらう。

「な、なんだよババアか～。ビビりせんなよー。」

よく見ると鳩の肩のあたりに星印せいこんがあつた。

それはババアの星と同じ位置で、つまりこの鳩がババアの式神であると証明する印でもある。

俺は周囲の眼を気にしながら鳩を手の上に載せると、そのまま人気の少ない小道に入りこんだ。

物陰に身を潜めるとしゃがみこみ、

「……で？」

と鳩を睨みつけた。

「「ひなん」とここまで何の用だ、ババア。」

愛らしき鳩は、しかし、ババアそのものの声で答えた。

『決まつておるじやう、深紅のことじや』

「深紅？　ああ、てめえが俺の高校にきよし無理やり転校させてくれる深紅のことだな。あいつがどーした」

『かー、減らず口だけは本当に五つ星ものじやの……』

鳩は俺の手から飛び上がつてぱたぱたと翼を上に動かした。どうやら怒つていむらじいが、俺には構つていむ余裕がなかつた。早くしないと遅刻しちまつ。

「で、深紅がビリしたつてんだよ。俺もう行かなきゃなんねえんだけど」

『お前、深紅の幼馴染なのじやうり?』

「あー。それがどうした」

ほんとに時間がやばくなつてきて俺は腕時計を見た。

七時四五分。

バスが出るのは四十八分なのだ。

『ではあの子の体の事も、知つておるのだうつな?』

踏み出しかけた足が、止まつた。

俺は鳩をふり返る。

それはただの式神であつて、ババアではないの!』

「……知つてゐるけど。それがどうした」

『ならば多くは言つまい。良いか、お前たちは一人一組のパーティ

だが、それはつまりお互いをお互いに守る義務があるということじや。特に深紅にはそのような事情があり、しかもかの五辻一族のご息女じや。お前の負つた責任は重大と心得よ』

俺は一瞬、答えに詰まつた。

いつもこりうだ。

深紅の名字を聞くと、なんともいえない気分になる。スニーカーの足もとでコンクリートを蹴ると、再び鳩に背を向けていた。

「……話はそれだけ?」

『蒼路』

「心配すんな。ちゃんとわかつてゐる」

分かり切つている。

深紅と出会つた時からずっと。

あいつと俺は、決して対等な立場になんてなれないんだと。

「じゃあな。」

俺は走り出した。

時刻は七時五十分を過ぎてしまつていた。

\* \* \*

バスを逃したので仕方なく走つた。

結果、授業には間に合つたがホームルームを遅刻してしまつた。

一時間目の開始五分前のチャイムとともに教室に滑り込むと、クラスメートの一人が待ちかねていたかのように俺に声を掛けてきた。

「聞いたか高村っ？ 一年生に超美人の転校生が来たんだつてよー。」

「……へえ……」

顔が引きつる。

ある程度予測してはいたが、実際にこういつ事態に陥ると、やっぱりかなり腹立たしい。

「すげえ綺麗だつたぜー。色白・黒髪・紅い唇のミステリアス美人でさー、着物が似合ひそつた感じ！ どうだよお前、興味ない？」

「ない。」

どきつぱりと断言してから、俺は自分の席に着いた。  
クラスメートはまだ話しかけてくる。

「でも変な時期に転校してきたよなあ？ もつ一学期も終わりじやんか。期末テストは畠と受けなきやいけないつていうのに、何か事情でもあんのかねえ」

「さあな。つてか石岡、もう授業始まるぜ」

イライラしながら鞄を開き、教科書を取りだした。

一時間田は数学だ、今日は何をやるだらうとか考えて気を逸らそうとするが、情報通のクラスメートはまだ深紅についてくどくど喋っている。

顔がますます引き攣るのが感じられた。  
ともすれば星から火が噴き出しそうだ。

だから、あいつが転校なんて嫌だつったのに。

「なんか噂によると、かなり金持ちの家のお嬢様らしいぜ。名字が変わつてさあ、たしか、五……」

「うねれこ。」

俺はついに遮っていた。

もう我慢ならん。

なんで幼馴染の俺があいつにこじへじへじ聞かされにゃならんのだ。

あいつのことなら俺はもう、知りすぎると程に知つてこる……

「興味本位で人のことをべらべら喋んな、デリカシーないぞお前……」

じりりと睨みつけて言つてやると、クラスメート 石岡正  
も黙つてはいなかつた。

「なつ、何て言い方だ高村！　お前はほんとに硬派だな！」

「硬派で結構、少なくともナンパじゃねえよ。」

「もうちよつと愛想よくしないと、女子にモテないぜー」

「つねせえ！」

「だー、もう、セレーフード蠅い！」

そういひしてこる内にやつと教師がやつてきて、石岡は離れて行つた。

心底イライラしながら俺は起立の号令に従い席を立つた。  
だが、立ちあがつて礼をしようとした一瞬

なにか尋常でない気配に気がつく。

はつと顔を上げる。

廊下の方からだつたが、今はドアに遮られて何も見えない。  
いや、見えなくてもわかる、あれは

（ 魔の気配だ……）

しかも、ベースは人間だ。

恐らくは悪霊だろう、人の体に憑依して操る厄介な存在。明確な敵意が感じられる気配だった。

(誰だ?)

着席の合図がかかる。

俺は訖然としない気持ちで椅子を引いた。

今までこの学校で魔を目撃したことはなかった。

いや、地縛霊とか猫又とか、そういう可憐いのは見たことがあるが、こんなヤバそうなのは知らない。

そもそも俺は星師だ、これほど悪質な魔がいればすぐにわかる。

(もしかして、依頼人……)

考えて、俺ははつと眼を見開いた。

あり得る。

すぐにノートの端をやぶつて簡単なセーマン・ドーマンを書きつけると、右手でくしやりと握りつぶした。

たちまち握りこぶしの間から蒼い煙が染み出して、次に拳を開いた時にはきれいさっぱりなくなっていた。

よし。

リリース、完了。

「はい、じゃあ教科書の三十六頁を開いて下さいねー」

やがて担任がそう声を上げて、そこにはじゅうからぱりぱりとう紙をめくる音が響いた。

俺も教科書を開く。

ちらと窓の外に眼を走らせると、思った通り、俺の式神が上の階

めがけて飛んでいくところだった。

## 依頼人

式神が帰つて来たのは一時間目が終わるころ。窓をすり抜けて机に舞い戻つたそいつを拾い上げ、俺は思わず笑みを浮かべた。

それから三時間、午前の授業が終わるまでひたすら待ち、四時間目終了のチャイムと同時に教室を飛び出す。

「高村あ！　まだ挨拶は終わって無いぞ！」

後方で叫ぶ科学担任の永富の声ながとみが聞こえたけれどもなんのその。センセ、すまんね。

俺には今、やらなければならぬことがあるのだつ。全力疾走で上階への階段を駆け上がり、屋上に到達。息も荒くドアを開けるとそこには、そこには

「あら。早いわね、蒼路」

初めて眼にする制服姿の深紅がいた！

俺は思わずじろじろ見た。

こいつが着物以外の服を着ているところなんて初めて見たが、なかなか。

……いや、かなり。  
似合っていた。

まつ白なシャツに、藍色のスカート。

スカートはウエストインしてその上からベルトを巻くデザインなので、腰の細さが際立つた。

それに、意外と足も長い。

「……何よ。あんまり見ないで頂戴」

やがて俺の視線に耐えかねてか、深紅はふいと横を向いてしまった。

普段はツンツンしてゐるへせこ、ここには意外と照れ屋なのだ。  
俺は知つている。

「見てねえ見てねえ。それより、式神届いたか？」

なんだか気分がたいへん良い。  
ご機嫌で俺は深紅に話しかけた。

彼女はそんな俺を不審そうに見返したが、やがて小さく頷いた。  
お、顔赤い。

「だから私も返信したでしょ。あの気配。私も感じたわ  
「……ああ。」

声を低めて言つた深紅に、俺も頷いて見せた。  
屋上に来たのはこのことを話すためだつたのだ。  
給水塔に腰かけている深紅に近づいて行き、その丁度足もとあたりでフェンスに寄りかかった。

あー、空が青い。

雲ひとつないし、黙つてれば本当に良い夏の日なんだけど。

「……あればヤバいぜ」

俺が言つと、深紅も認めた。

「……そうね。少なくとも、簡単に祓える類の魔ではないわ  
「依頼人なんだろう? もうあんなにヤバい状態になっちまつてん  
のか?」

「私もまだはつきり確かめたわけではないの。でも、キヨ様から依  
頼人の大体の情報は頂いている」

そこで深紅は給水塔から飛び降りた。  
スカートの裾がひらりと風に揺れ、それは優美な姿だったが、下  
着が見えやしないかと俺はどうぎまきしてしまったよ。  
……見えなかつたけど。

「いい、蒼路?」

俺の隣りに立ち、深紅は言つ。

「依頼人の名は伊勢遙。」この学校の三年生で、生徒会長。

「……マジかよ?」

俺は思わず深紅を振り仰いでいた。

その人のことは知つていた。

つていうか、話したこともある。

いい奴なんだよ。本当に。

格好いいけど気取つて無くて、優しいけど面白くてさ。  
年上ぶる上級生つて俺は大つきらいだけど、伊勢遙はほんとうに  
良い意味でフランクだから、俺は結構慕つてた。

「ハル先輩が魔に憑りつかれてる? ……ちょっと信じられねえぞ

「あら、知り合い?」

「ああ。ま、そんなに深い仲じゃないけど」

答えると深紅はふうんと軽く唸つた。

その仕草に引っかかるものがあったので俺は聞き返す。

「何？」

「いいえ。では彼の双子も知っている？」

「双子？」

それは初耳だった。

あれだけ美形の人に双子がいたら学内では相当立つだろう、  
見たことも聞いたこともない。

「知らねえ」

驚きも露わに答えると、深紅はいつの間にか手にしていた紙に眼  
をして頷いた。

「やつぱりね。いらっしゃるのよ。他校に通つ妹さんが。こひらは  
阿南さんっていうみたい」

「へえ……。つてか、その紙なに？」

「キヨ様からのお手紙よ。依頼人について書いてあるの。」

深紅は手紙を掲げて答え、ふいに俺に目線を据えた。

俺は思わず居住いを正す。

……深紅の眼は、いつ見てもドキッとする。

「な、何だよ？」

「いい？ 今からその伊勢遙さんについての情報を喋るから、必要  
があればメモして。ちゃんと全部覚えて頂戴ね。」

「え、全部！？」

「え、じゃなくて。当然でしょ。 始めるわよ

そして深紅は朗読を始めた。

\*\*\*

……俺はがんばってメモした。

伊勢遙。

ここ市立明星高校の三年生。

父はイギリス人、母は日本人のハーフ。

金茶の髪をして、瞳もまた茶色がかつた緑色。

見目麗しく頭脳明晰、人徳もあり、三年生の今は生徒会長を務めている。

趣味はチエロ……に乗馬、それに何だと、アーチェリー！？

「……すげえほんほんだったんだな、伊勢君。しかし、チエロってなんだ？ 車？」

「馬鹿者。」

素朴な疑問を口にした俺は、背後から思いつきり突っ込まれていた。深紅である。

したたか頭を平手で打たれて、その予想外の強さに俺はつんのめりながら叫んだ。

「つてーだろーが、この馬鹿力つ！」

「馬鹿はどういう。お前、チエロも知らないの？」

冷徹な眼で見下され、俺は思わずうつと言葉に詰まってしまう。何度見ても制服姿が新鮮だ。

黙つていれば間違いなく美女に見える。が。  
もちろん深紅はそんなに大人しい女ではなかつた。

「チヨロつて、いうのはね、西洋楽器の一つよ。ヴァイオリンはさすがのお前でも知つてゐるでしょ？ チヨロはあれの仲間で、もつと大きな、足で挟んで演奏する楽器。ちなみにお前が言わんとしたのはチヨロキーのことでしょう。まったく、これぐらいの常識知らないでどうするの。恥ずかしいわ！」

「……別にそんなこと知らなくてもいいし。」

「お前はそうでも、私は無知な男と組みたくはないの」

深紅がにべもなく言い張つたので、俺はたいそうショックを受けた。

「マジで！？」

口を開けて見つめる先で、彼女は駄目押しのため息まで吐き出してくれた。

ちらりと投げかけられた視線には、なんだか哀れみの色すら混じつている。

「お前、昔から自分の興味あること意外はからつきしだつたものね。  
……まあいいわ。続けるわ」

長い黒髪を搔きあげると、深紅は手の中の書簡をいま一度取り上げた。

「伊勢遙くん。彼が今回、私たちが護衛の役を担つた御方よ。そこまではいいわね？」

「子供扱いすんなっ！」

「だつて子供じゃないの」

深紅は再び一警をくれた。

俺は本気でキレそうになる。

……「、」のアマツ……！

「一歳しか違わねーだろ！」

憤激して叫ぶと、深紅はうつむかせた。耳を押された。

片手を俺にむかって翳すと、ひらひらと振る。

「いいからお黙り。」 で、彼の双子の妹さんである阿南さんにみると、彼は近頃とても具合が悪そ�だつていうの。顔が青ざめて、瘦せてしまつて。夜中に徘徊しているそんなんだけれど、本人はそのことを覚えていない。かと思えば、誰もいなはばずの場所で、誰かとぶつぶつ喋つていたり……。アンナさんは彼の部屋から知らない人間の声が聴こえたこともある、と言つているわ

「悪靈か？」

深紅の説明から俺は推測をする。

妖怪と違つて悪靈は実体を持たないが故、人間に憑依しようとする性質を持つ。そしてその方法はまず「会話」から始まるのだ。

悪魔との会話。

「可能性は高いわね。でも、生徒会長は立派にこなしている。成績は少し下がり気味だしそうだけど それでも十位圏内からは外れな

いつていうことだし。まあ、素晴らしいお人」

「けつ。本当に素晴らしい人間だつたら、悪靈なんかは近づけもないだろ？よ」

俺は吐き捨てて、手にしていたアイスココアを口に運んだ。

一しきりその涼しい飲み物を楽しんでから深紅に尋ねる。

「けどさ、悪靈に話しかけられるなんて よつぽど弱つてないと無理だろ？。そいつ、なんか落ち込むことでもあつたのか？」

「……ええ。」

俺の質問に、深紅はわずかに眼を伏せた。

「今年の春に。とても大切な人が亡くなつたそつよ

あまりにも悲しげな声色だったの、俺は思わず息を呑んでしまつた。

長い睫毛の際だつ白い横顔が、六年前の泣きじやぐる少女と重なつて見える。

が、それはほんの一瞬で、深紅はすぐに顔を上げると、こつもの顔に戻つていた。

「とにかく、依頼人に関する報告は以上。何か質問はあつて？」

「……ありません」

「よひしい。」

照りつける日差しの中、チャイムが鳴つた。

気がつけばもう昼休みが終わる時間だ。

深紅が腕時計を見て、そろそろ教室に戻るわ、と言つ。

「突然の転校生っていうことで、やらなければならぬことが山積みなのよ。期末試験も来週なんでしょう？。面倒くさいつたらないわね」

「え、お前、期末受けんのー？」

「あたりまえじゃない。」

けろりと答えた深紅は、そうだ、そういうえば頭が良かつた。昔つかう。

「お前と違つて私にはキヨ様の監視の目がついているのよ。実家の  
もね。つていうことで一度教室には戻るけど、放課後には伊勢君に  
会いに行こうと思うわ。お前も来るのよ」

「……わーかつてらいー。偉そうに指図済んじゃねえつー！」

「偉そう、じやなくて、偉いのよ。お前より

噛みついた俺に、じりっと一瞥をくれ、深紅は歩き出した。

屋上を横断して入り口まで辿りつくと、そのドアノブに手を掛け  
ながら、思い出したように俺をふり返った。

「とにかく、蒼路。授業が終わつた二年生の教室棟にいらっしゃ  
い。」「だから……つ」

指図するな！ と叫びました俺だったが、その時にはドアは既  
に閉じられていた。

## 半星の双子

……しかし。

「蒼路！」

ホームルームが終わつた後、俺はわざわざ三年生の教室棟に赴く必要はなかつた。

深紅が向こうからやつてきたからである。

「おおー。」

「美人！」

「あれが噂の？」

たちまち同級生たちが深紅を賛美し、教室の中にも外にもギャラリーができた。

しかし、深紅本人はその身に張り付く好奇の視線をものともせず、つかつかやつて来ると俺の机に両手をついた。

「早くするのよ、蒼路！ 大変なんだからー。」

「いや、ちょ、み？」

「説明している暇はないのー！ とにかく早くおしー。」

言いつづま俺の手を取ると、深紅は無理やり教室の外へと引つ張つて行つた。

俺は驚くやら、周囲の視線に優越感を覚えるやら、なんとなく気が恥ずかしいやらで訳が分からぬ。

けどこういう時の深紅は絶対に止まらないので、取り合えず引つ

張られるだけ引っ張られることにする。

廊下をずるずる引きずられていく途中、クラスメートの石岡と眼が合つた。呆気にとられた顔をしていた。

はつはつは、ざまー見ろ石岡！――

「ざまーみろじゃないでしょ、この緊急事態に何言つてゐるの前！」

「――」

いきなり怒られて、優越感に浸つていた俺は現実に引き戻された。

「え、俺、口に出してたっ！？」

「ダダ漏れよ。」

「マジかよ……」

がつくつとなつた所で、深紅はようやく立ち止つた。

掴まれていた手が離れて息を吐く俺をふり返つて、彼女は言つた。

「蒼路、突撃するわよ」

「は　つ？」

ますます訳がわからなくなる俺に、深紅はすぐんだ。

「は、じゃなくて。許せないのよ。馬鹿にしてるわ――」

「だから何の話なんだ一体！――」

「あれを御覧！――」

深紅は叫びざま廊下の奥を指差した。

この時には彼女がどうやら怒っている感じと氣づいた俺は、黙つて示された場所を見やつた。

それは音楽室。

閉ざされた何の変哲もない扉。  
だが、その上に

「……なんで結界？」

驚きに眼を丸くした俺に深紅が答えた。

「挑戦状よ。」

今度こそ明確な怒りの色に染まつた声である。  
見ればその額にも青筋が浮かんでいた。

俺はあー、と頭を抱えた。

そういえば深紅って、エベレストよりプライド高い女だった。  
こういつ謂れのない中傷とか、侮辱とか、絶対に許せない奴なんだよな。

「いい根性をしているではないのー！」の私に向つて結界を張るなんて！ 破れるものなら破つてしまふといふようなものだわー！

完全にブチ切れてこむ深紅は俺の先に立つてぎんぎんと歩いて行く。

俺は慌ててその背中を追つた。

「落ちつけよ、深紅。ハル先輩がこんなことするわけ  
「これが落ち付いていられるわけがなかりづー。」

囁みつくように深紅は叫んだ。

彼女は怒ると言葉遣いが古風になるのだ。

なんでも実家ではみんながそういう風に喋るから、それが当たり

前だと思つて育つたといふことである。

やがて音楽室の前に立ちはだかり、右腕を掲げると深紅は言つた。

「『じ開けるぞ、蒼路』

結界は俺達の眼の前に、見えるものにしか見えない淡い緑の膜として存在していた。

表面上西洋の文字が一面に書きこまれたその結界に、深紅の白い細い手がちょくせつ触れる。

……こいつだから成せる技だけど、良い子は真似しちゃいけないぜ。

なぜって、種類にもよるけど結界とはすなわち空間が不自然に捻じ曲げられたもの。

呪術に耐性のない人間が触れば体ごと結界に吸収されちゃう」とだつてある。

「……相変わらずダイタンだよな……」

半ば感嘆し、半ば呆れながらそう呟いた俺であつたが、そつこいつしていいる間にも深紅の白い指先は結界にずぶずぶと沈み込んでいった。

そして、ある一点で急に抵抗がなくなつたかのようにすり抜けた。急にその存在をたわめられた結界は、まるで生き物のように身を震わせて ぶるりと揺らいだ。

深紅はその一瞬を見逃さなかつた。

勢いよく結界から手を引き抜くと、叫ぶ。

『 解!』

強い声に感應し、結界が内側から消滅した瞬間、音楽室の扉も開

いた。

同時に風のように中から飛び出してきた影が一つ。それは完全に深紅を狙っていた、が。

許すわけねえだろ？

俺は飛び出し、深紅の盾となつた。

影の振り下ろした一閃を刀で受け止める。つ。

一瞬、きいん！ と金属同士がぶつかりあつ高い音が廊下に響いて、それから。

それから急に、静かになった。

「……誰だてめえ」

低い声で俺は尋ねた。

すると相手はふつと笑つた。

剣が退けられて、俺の刀から重みが離れていく。

「なあらほど。」

耳を打つたアルトの声に、よく見て見れば女だった。

金色がかつた茶色の髪に、緑色の眼、それに超ナイスバディ。明星の制服を着ていないと云ふことは部外者だ。

「さすがは五辻のお嬢様だね。護衛がいるとは  
『 質問に答えぬか！』

背中の後ろで深紅が吠えて、俺はビビった。

……多分こいつ、名字を出されて更に神経逆なでされたな。

深紅は俺の前に進み出た。

謎の女を真っ向から睨みつけて、そして言つ。

「貴様は誰かと聞いているのじや、無礼者」「これは失礼」

すると女は再び笑つた。  
長い腕を体の前で組み、余裕さえ感じさせる動作で手にしていた短剣をしまつた。

……その長い首の上に浮き出た、三つの星の中に。

俺ははつとした。

深紅も眉をひそめたのがわかつた。

「あたしの名前は伊勢アンナ。ハルの双子の妹で、半星なかほしよ

「半星」

その言葉を、俺が思わず反復してしまつた時、ふいに背後から足音が立つた。  
焦つたように駆けてくる足音。  
俺はふり返つた。  
するとそこには。

「アン！ 何をしているんだいっ！」

……真っ青な顔をした、ハル先輩がいた。

＊＊＊

「『』説明して頂きたいわ。」

深紅はカンカンだつた。

当たり前である。

護衛の依頼を受けたのはこっちだといふのにて、なんのためかアンナさんによつてあれだけ滅茶苦茶なご挨拶を受けたのだ。心のひるーい俺でさえ怒つていいのだから、エベレストプライドの持ち主である深紅が怒らない筈はない。

「……申し訳ない。」

しかし、答えたのはアンナさんではなくハル先輩だつた。さつきから吊り上つていた深紅の柳眉が更に吊り上る。おお怖い。

「謝るべきはあなたの妹さんであつてあなたではありませんわ、ハル先輩。私は状況のご説明を求めたのですが」

「はい。」

ハル先輩はかなり恐縮していた。

アンナさんはと言えば、グランドピアノの上に座り込んで完全に傍観者を決め込んでいる。

え？ ああ、俺たちは今音楽室の中にある。

さすがに廊下でいつまでも騒いでいるわけにはいかないからな。

「ええと、单刀直入に言つと ね。これはアンナが勝手にやつたことで、僕はまったく関与してない。大体彼女はこの高校の生徒じゃないし、本来なら入り込むだけで警察沙汰だ」

マジかい。

ハル先輩の説明に俺は内心で思いつきり突つ込んだ。  
けど口には出さずに、説明を続けてもらつことにする。

先輩は続けた。

「けど、護衛を依頼したのは実のところ僕じゃなくてアンナだ。だから彼女、こいつ言い方はあれだけど……」「けど？」

言い淀んだ先輩に深紅が先を促した。  
その声は静かで落ち着いてはいるものの、逆らえない威厳に満ちていた。

「……君たちを試そうとしたんじゃないかと……」

やがて先輩は言った。

とたんに深紅の額に青筋が浮かぶ。

アンナさんをぶつ飛ばしでもするんじゃないかと思つたが、存外に、深紅は押し殺したような息だけを吐いて堪えてくれた。  
あれ？

なんか意外だ。

「お話は理解できました。けれど、はっきり言って私たちが護衛を任せられた理由がわかりませんわ。」

深紅は言い、それからやおいら田線をアンナさんに据えた。

「先ほどアンナさんは『自分を半星だと仰つた。だったらわざわざ私たちを呼びつけるまでもなく、』自身でハル先輩を守ることができるはずです。」

「それができたら苦労しないんだけどさ」

アンナさんも答えた。

今やピアノの上に寝そべり、気ままな猫のようじらしくしている。

ちなみに半星つてここののは、俺や深紅の持つ五芒星じゃなくて、三ツ星や一ツ星のように不完全な星を持って生まれた術者のことだ。星が半分なので力も半分。

だから半星。

一部の例外を除いて、彼らが星師として認められる」とほとんどないという。

アンナさんが続ける。

「言つた通りあたしは半星だから。力には限度がある。それにハルに憑依している悪霊は段々力を蓄えてきて、他の魔物も呼び寄せ始めてるから。あたしの手には負えなくなつた」

話を聞いているうち、「深紅が息を止めた。

俺は思わず問い返した。

「……他の魔物？」

「そう。憑依は既に完全なのよ。」

そこでやにわにアンナさんは起き上がった。  
ぱちりと指を鳴らしてハル先輩を自分の元に呼び寄せ、彼の首元の一点を指さす。

俺たちの視線はそこに集中した。

アンナさんの三ツ星と全く同じ場所に浮き出た一ツ星。

ああそうか、と俺は悟った。

この人たちは双子だから、生まれた時に星が分かれたんだ。  
五芒の星を分かち合つ、半星の双子。

それはなんて悲しくて美しい刻印だろう。

「御覧の通り、ハルも半星。」

言葉もなく見つめる俺たちに対して、アンナさんは言った。

「だから普段の状態なら彼もある程度の術は使える。けど今は駄目。  
悪靈のせいで」

「その悪靈だけど」

俺は口をさしはさんだ。

ハル先輩が走ってきた時からずっと疑問に思っていたのだ。

今朝感じた凶悪な魔の気配が、先輩からはカケラも感じられなか  
つた。

あらかじめ聞いた情報の通り、頬が少しこけていたり、目元に隈  
が浮かんでいたりはするけれど それだって特筆に値すべきもの  
じゃない。

「……ぜんぜん、気配感じないけど。憑依されてるのは確かにわけ  
？」

「ええ。間違いない。彼が眠ると出てくるのよ」

「僕はぜんぜん覚えてないんだけどね」

「だから危険なんじゃないの。」

横からの先輩の言葉に呆れたようにアンナさんは答え、それから  
やおら深紅を見た。

彼女はさつきからずっと黙つて事の成り行きを見守つていた。

恐らくはその豊富な知識を総動員してハル先輩の状態を観察して  
いたのだろう。

急に自分に視線が向けられた事を察知して、彼女は伏せていた眼  
を上げた。

「 何?」

その視線を真っ向から受け止めて、アンナさんが言った。

「改めてお願ひするわ。」

その顔が、急に歪んだように見えた。

俺はぎょっと体を起こした。

まさか、と思う間もなく、アンナさんの生氣にあふれた立ち姿がやわらかいバターのように溶け始める。

深紅は黙っていた。

ただ黙つて、アンナさんを見つめている。

『ハルを助けて。』

彼女の声はもはや人が発するものではなくなっていた。

それは心に語りかける声だ。

音声ではない、精神に直接ふれてくる言葉。

『ハルにとりついた悪霊は、あたし』

アンナさんの、足が溶け、服が溶け、手が溶ける。

俺は何も言えなかつた。

顔が溶けだす寸前に眼が合つた。

泣いているように見えた。

今年の春に。とても大切な人が亡くなつたそつよ。

昼の深紅の言葉が脳裏をよぎつた。

ずんつと胸に、刺さるような痛みが走る。  
そういうことか。

そういうことだったのかよ！

「アンナさん！！」

『あたしはもう死んでるわ』

その言葉を最後に彼女は完全に溶解した。

残ったのは淡く輝く黄金の光だけで、しかし、その光すらも、やがては河のように寄り集まってひとつの方に向に流れて行った。

一つの方向。

そう ハル先輩の元に。

「かわいそつなアン……」

アンナ先輩だったものを、先輩は呑んだ。

文字通り口を開けて、水を飲むかのように喉を鳴らして。

俺は前進がぞつとそそけ立つのを感じた。

だつて、先輩の、その、顔。

呆然としているようにも、うつとつしているようにも見える、その綺麗な顔。

このひとだ、と思つた。

この人がアンナさんを悪霊にしたんだ。  
妹の死が信じられなくて、悲しすぎて。

どうにかして戻ってきてほしくて。

## 闇と呼ぶもの

突然、空気がその質を違えた。

ハル先輩がアンナさんを呑みこんだ途端だ。  
さきほどまではとろりとした熱気を帯びていたそれが、今や俺達の皮膚にひんやりと張り付いて、冷酷な温度を主張する。  
いや、温度だけではない。

空間そのものの在り方が、一瞬前までとは歴然と異なっていた。  
俺達の世界では呼吸の度に体内には新しい空気が取り込まれるが  
今のこの空間では、それはできない。

むしろ息を吸う度に何か濁んだ古いものが、決して未来には進むことのできない存在が、体内へと侵入していく。

まるで異界に足を踏み入れたかのように、全身が拒否反応を起すこの感覚。そう、これこそが。  
俺達が闇と呼ぶもの。

「アン……」

先輩が　　闇を呼び寄せていた。

彼は豹変していた。

さつきまで優しかった瞳からは一切の輝きが失われ、なのにその眼球自体は不気味な程あざやかなエメラルド色に変色している。  
上品で優美な口許が長く伸び、裂けるように吊りあがって、その紅い割れ目からは並びの良い歯と舌が覗いた。

「かわいそうなかわいいアン。僕がずっと守つてあげる」

突然、その双眸は焦点を失った。

左右の眼がてんでバラバラな方角に向き、同時に、彼は体そのもののバランスを崩したように膝をついてしまった。

「 おいつ！？ しつかりしろ！」

叫びながら駆け寄つた俺は、次の瞬間眼にしたものに凍りついた。頃垂れた先輩の背中から突如として 何かがボコリと隆起したのだ。

俺は心底恐怖した。

魔物が怖いんじゃない、先輩の体が怖いのだ。

悪靈が厄介とされるのは、彼らが自分自身の体を持たず、人の体を奪うからだ。

中身は悪魔でも肉体は人。

つまり 壊れれば元には戻れない。

「……やめろ」

俺はかすれ声を発した。  
先輩の背中がうごめく。

まるで巨大な蛇がうすい布の下で暴れているかのようだ、ぼーじぼーじと、ぬめぬめと、背骨さえ無視して縦横無尽に動き回る大蛇。

先輩の体は異常な程に痙攣していた。

苦しそうだ、その表情はとても苦しそう。なのに、

『アン、ぼくの、アン』

先輩は、さつきから、アンナさんの名しか呼ばない。

「やめろつて言つてんだろ？」「

「馬鹿つ、離れるのよ蒼路つ。」

俺が叫ぶのとほぼ同時に深紅が叫んだのが聞こえた。

その声に俺は振り返ろうとする、しかしきながつた。

先輩の背中から、まるで火柱でも上がるかのような勢いで、  
その皮膚の下に居たものが飛び出してきたからだつた。

「……ぐあつー？」

触手のようなものが俺を捕獲し、物凄い力で締めあげてくれる。  
完全に宙吊りにされた俺は苦痛に絶叫した。

大蛇ではない それは、植物だつた。

シダの葉のような赤黒い羽、不気味に枝分かれした根、ぬらぬら  
と湿つた薦が先輩を呑みこんで、まったく別の生き物と化している。

「蒼路……。」

悲鳴のような深紅の声に答えることすら困難だつた。  
そもそも、息ができない。

隙間なくみぞおちに巻き付いた薦が完全に呼吸経路を遮断してい  
る。

(焰が……ちくしゅう、焰え呼び出せねばこんな草なんて……つ)

俺はあまりの苦しさに身もだえしながら思つた。

しかしこの恐々しい薦は俺の両腕の動きも完全に封じてい  
どつする」ともできなかつた。  
ああクソ、頭が真っ白だ

「 お行き青藍！！」

え？

深紅の声に俺はかるうじて薄眼を開けた。  
すると視界に映つた優美な青鹿。

化け物の魔手をかいくぐつて宙を飛びながら、その額に生えた角  
で俺を捕縛していた薦を搔き切る！

「 っは……ッ！」

自由になつた俺の体は背中から床に落ちた、が。  
青藍がキヤツチしてくれた。

酸素不足で朦朧とする頭ながら、俺はなんとか体勢を整える。

「 蒼路！ 無事か！？」

「 おかげ……わま、でなつ……」

深紅の声に俺はかるうじてピースサインを送つて見せる。  
が、休んでいる暇はない。

烈しく咳き込みながらも立ち上がると、今しも化け物がその根を  
這わせてこちらに向つてくるところだった。

植物の癖に意外と早え動きで、形こそ人型だけれど、シダの翼に  
虚ろな穴ぼこだけが空いた顔、とこれ以上ないほどグロテスクな眺  
めだ。

俺はこの期に及んでまだ信じられなかつた。

「 ……これが本当に、全部アンナさんなのか……！？」

触手が伸びてきた。ものすごい数と勢いだ。

俺は刀でそれらを一閃しながら叫ぶ。すると横から深紅が答えた。

「違う。これは彼女と、その兄の悲しみが引き寄せた魔の集合体じゃ。しかも一人とも星を持つが故に、かなり強力な魔を引き寄せてしまっている」

言いざま彼女はスカートの裾から長い銀針を取りだして構えた。それは毒針だ。

女の深紅が物理的に相手にダメージを与える時に使う武器。

「全く、よりにもよって学校内で暴れるとは……！」

忌々しげに柳眉をひそめながら、一本、一本、三本、彼女はそれをハル先輩に向けて放った。

全てが見事に命中して、とたんに化け物は物凄い声で絶叫する。空気がびりびりと震えてうねり、ガラス窓が割れそうに音を立てた。

俺はおもわず耳を塞いで叫んだ。

「深紅っ！！ これじゃ学校中大騒ぎだつーの！！」

「わかつておる！ だからこいつを眠らせるのじや、お前も手伝え！」

「眠らせる？」

「どうにうことだ、と聞いつけた俺の言葉を待たずして は床を蹴っていた。

深紅

「さつき聞いただろ？ ハルが眠ればアンナが眠り、アンナが眠ればハルが眠る」

なるほど。

と思う間もなく、長い黒髪が宙を舞つ。

ふたたび銀の針が放たれた。

まるで糸のように細いそれは眼で追うのが精いっぱいだったが、  
今度は全部で五本あつた。

今や起き上がり、不気味なぬるぬるとした触手を蠢かせながら暴  
れる化け物にそれは星の形を描きながら命中する。

深紅の毒は猛毒だ、化け物はまたもんざり打つた。

『 星・我・以・滅』

すとんっと化け物の目前に着地しながら、深紅は呪を唱え始める。  
細い指先に紅い光が宿り、針と針をつなぎよじにして魔法円を描  
いて行く。

だが化け物も負けてはいない。

呪に半ば捕えられながらも、シダの翼を広げて飛び上がろうとし、  
触手を、根を、やみくもに伸ばしてのた打ち回っている。

俺は駆け出した。

刀にありつたけの焰を乗せて。

『 我が星を持つて 』

深紅の髪が風を孕んだように膨れ上がった。  
毛先がばちばちと音をたてて呪力を放出する。  
もう少しで呪は完成する、だがその時、狂ったように暴れまわっ  
ていた触手の内の一本が彼女の腕を掴んだ！

「深紅！ 続けろつ！..」

俺は叫びながら跳んだ。

深紅と瞳が交わる。

彼女は 頷いた。

「いい加減眼え覚ませよおお、先輩！！」

『我が星を持つて汝が闇を祓う ー。』

俺が触手を焼き切つたのと、深紅が呪を唱え終えたのはほぼ同時。紅い魔法円が輝いて膨張し、先輩の体を取り巻いた！

びくんっ！

化け物の体が思いつきり仰け反る。

眼鼻の部分に虚ろな穴があいただけの顔が、苦痛のような、悲しみのような表情を浮かべて、声にならない声を上げる。

さつきより凄い悲鳴だった。

微動だにせずに化け物を見つめる俺の横で、深紅が静かにこう言つた。

「……眠れ。生まれた闇の、奥深くに還るがいい」

すると。

まるでその言葉に縛られるようにして、先輩はぴたりと動きを停めた。

まるで電源が切れたロボットのように急停止したと思ったたら、それからゆっくりと前のめりになつて、倒れ伏した。

ずうんっと音を立てて崩れ落ちた化け物の体が、一瞬後にはきやしゃな人間の体に戻つている。

「 ハル先輩！！」

俺は叫ぶと、駆け寄つてその人物を助け起こした。

## ハル

駆け寄り、助け起こした先輩には意識があった。  
それだけでも脅威に値するというのに、今しも覗き込んだ背中の傷からは、一滴の血も流れていなかつた。

俺は眼を疑つた。

傷をもう一度確かめる。

さつき悪靈が火柱のように猛烈な勢いで食い破つたこの背中は、  
今ももちろん裂けてはいる。  
ぱつくつと肉が割れ、確かに傷付いてはいるのだが。

「どういづ…… ことだ」

ゆるゆると驚愕が、そして恐怖がやつてくる。  
駆け寄つて来た深紅もまた、俺の視線を追つと短く息を呑んで動きを止めた。

嘘、と呟く彼女の声が耳に届いた。

「 もう治癒しかかつてゐる……？」

そう。

先輩の傷は、俺達の目の前でみるみる内に塞がつてしまつた。  
まるで生き物のように割れ目の中の肉がもぞもぞと動き、内側から傷を開じた。よつと見えた。

俺も深紅も、言葉を失つてしまつた。

どうということだ。

さつきから、俺の頭の中で何百回も繰り返されているその問いかげが、再び頭脳を占拠する。

半星の双子、死んだ妹、その憑依を受け入れた兄、そして。

今度こそ極めつけだ。

「これは、人の治癒能力ではないわ。」

深紅が低く言った。

その時、俺の手の下で先輩の体がピクリと動いた。  
俺ははつとする。

「先輩！？」

「……アンナの力だ。」

「え？」

何を言つたのか聞きとれず、先輩を助け起<sup>こ</sup>そうとした俺だったが、次の瞬間射るよ<sup>うに</sup>にこちらに向けられた冷たい瞳に動きを止めた。

恐ろしく澄んでいながら、同時に恐ろしく暗い、エメラルドの瞳。

「離してくれ」

懇願の言い方でありながら厳然たる命令の口調であった。  
俺は驚くと同時に、かすかな反抗心を覚える。

だってこれまでど<sup>さ</sup>いぶん態度が違わないか。

黙つて眼を細め先輩を見つめ返すと、彼はいらだたしげに身を起<sup>こ</sup>そうとした。

「……聞こえなかつたのか？ 離せと言つているんだ」

「聞こえましたが、従う義務は俺達には無い。俺達はあなたの護衛であつて侍従ではないのだから」「護衛？」

は、と先輩のきれいな唇から嘲笑がこぼれた。いよいよ態度が豹変する。

緑の瞳が俺を、深紅を見つめる。

それはぞつとするような侮蔑の眼差しだった。  
俺達を眼に映しているくせに、真には何も見ていない、つまりは存在を認めていない、といつ。

「さつとも言つただろう。僕は護衛なんて頼んではいない」

先輩は言いつざま俺の手を音を立てて払い落とした。

ばちん！ と良い音が響き渡る。

当然ながら俺はカツとした。叫ぶ。

「……何すんだよつ！」

「触るな。僕は星師が大嫌いだ。」

先輩は冷たく言ひながら立ちあがろうとした。

しかし、傷は塞がつたとはいえ、悪霊にその身体を奪われている以上、生氣はかなり吸い取られているはずだ。

先輩は膝を震わせながら壁に手をついて何とか立ちあがつた。

背筋の曲がつた、とても見ていられないほど弱々しい立ち姿だった。

それでも、その佇まいには俺達が簡単に声をかけられない何かが  
眼に見えない氷のような拒絶が みなぎっていた。

先輩が、自分の知る先輩とはまるで別人のように思えて、俺は息を呑んだ。

彼は言った。

「全く、どうしてアンは君たちのところに駆けこんだのか……理解できない。忌まわしい星を持って生まれ、あまつさえそれを理由に

公然と人を殺す呪われし者「

対して大きい声でもないのに、よく通る声だつた。

むしろ甘くて響きの良い声であるだけに、口にしている内容の禍々しさが際立つてしまう。

俺はますます困惑した。

どうして。

こんな顔をする人じゃなかつた。

こんな風に誰かを憎むような人じゃないと、思つていたのに。

「 星師など、星など、消えて無くなつてしまえばいいんだ」

その言葉には真の憎しみが、怒りが、そして悲しみが込められていた。

半星ということで、しかもその双子という事で、きっとこの人たちは今まで俺達の想像もつかない苦労を強いられてきたんだろう。星が完全ならば俺達の力は星師という存在目的を持つ。

けれど、半星の場合はただの異常だ。

……俺は舌打ちをした。

先輩に同情してしまいそうな自分が嫌だつた。

「お前たちはアンを殺そうとしている。僕はそれを望んでいないといつのに、星師だからという理由を掲げて。護衛など必要ない。むしろ逆だ。君たちがアンを殺すというのなら、僕は君たちに容赦しない」

先輩はゆるゆると歩き出していた。

壁に手を這わせながら部屋の入り口の方へと進んでいる。

その姿はあるで足を折った馬のようだつた。  
もう走れない。もう生きている意味がない。

だから死地に赴くつとしている馬。

けれど。

そんな先輩の前に、深紅がすつと立ちはだかつた。

「……退いてくれないか」

先輩は息も切れ切れにそう言つた。

しかし深紅は微動だにもしなかつた。

黒い瞳に強靭な意志をみなぎらせ、先輩をまっすぐに見据えている。

先輩はそんな深紅に腹を立てたようで再度叫んだ。

「退けと行つているんだ、五辻の姫！」

「私が五辻の血筋であるうがなかろうが」

ようやく深紅は口を開いた。

黒い髪が風もないのにぐらりと流れ、その額に刻まれた星が露わになる。

「ここでは関係のない話だ。」

「……大アリだ」

先輩の手にはいつのまにか短剣が握られていた。

さつきアンナさんが持っていたのと寸分違わぬそれを、彼は迷わず深紅の喉元目がけて突き付ける。

俺は叫んだ。

「深紅！」

「蒼路、控えよ。」

雷のよつと激しさでせつ制され、俺は飛び出せうとした姿勢のまま固まってしまった。

だが先輩の短剣は今にも深紅の、まつ白で細い首筋を切り裂きそ  
うなのだ、じつとしていられる訳が無い！

「けど、深紅つ」

「控えよと言つておる。……大丈夫じゃ」

黒い瞳がひとときだけ俺を捕え、それからまたすぐに先輩の方を  
向く。

「伊勢遙。我が一族について、なにか言いたい事があるなら聞くが  
？」

「……言いたいことも何も。それは姫君が一番よくおわかりではな  
いのかな？」

ハル先輩のきれいな唇が憎しみにまくれ上がる。  
ナイフを持つ手に力がこもり、深紅の首筋にすつと紅い細い筋  
が走った。

俺は怒りに震える右手に左手を沿わせる。

先輩は続けた。

「貴方の一族のせいで、我ら星を持つ者は戦いの歴史の幕を開き、  
そして人殺しを行う事になつたのだ。それも決して日の当たらぬ闇  
の中。星を持って生まれた子供とはすなわち、闇に生きる運命を  
背負つて生まれた子供」

「それがどうした？」

深紅は、己の置かれた状況に全く平然としていた。  
むしろ挑戦的な態度で先輩を真っ向から見据え、その美しい顔に

ほほ笑みを浮かべすらしている。

「始まりはどうあれ、星師たちは既に生まれてしまつておる。そして今なお闘つているのだ。人殺しなどではない。お前が言つようこそ、闇の中で、闇を祓つために、誇りを持つて仕事をしている！」

「誇りだって？　あなたは　あなたが、その言葉を口にしていいと思つてゐるのか？」

先輩の声に殺氣が滲んだ。

もう限界だ。

俺は悟つて音もなく床を蹴つていた。

深紅の目前に着地しづま、先輩の握つていた短剣を片手でもぎとる。

瞬間、そつはさせまいと前のめりになつた先輩の、その顔の前に刀を突き付けて、動きを封じる。

「蒼路！」

深紅の声にもふり返らず、俺はただ、先輩を見据えた。刃を握つた左手から血があふれた。熱い血潮。

「……なんかよくわかんないけど」

俺は言った。

そう、よくわからない。この状況が。

先輩が急に態度を豹変した理由も、俺たちを憎む理由も、せつぱりわからない。

けど。

「ここでの誇りとおりだ。俺達は誇りを持つてる」

「なんだと？」

先輩は牙を剥いた。

「闇に生きることを余儀なくされた人生が誇りだつて？　君は本気でそう言つのか？」

ハル先輩の瞳は俺の刀から発せられる焰に照らされ、鮮やかな緑色に輝いていた。

明確なその、怒りの色と敵意。

ああ、と俺は確信する。

今朝、教室で感じたあの殺氣は、アンナさんじゃなかつた。

間違いなくこの人、ハル先輩から発せられたものだつたのだと。

俺は息を吸つた。

そしてはつきりといつ答えた。

「ああ。星師として生きること」そが俺の誇りだ

「……どうしてだ」

先輩は俯き、ぎりりと音を立てて歯ぎしりをした。

「どうしてそんな言葉を吐ける？　その女の前で。僕の前で！　半分の星しか持たずに生まれてきた僕たちを認めず、あまつさえ引きはがそうとしている癖に……どうしてそんなことが言えるんだ！！！」

先輩の肩の線がわななき、その感情が爆発したのがわかつた。

俺は思わず身構えた。

また何がしかの攻撃を受けることを覚悟したのだが　予想とは裏腹に、先輩の殺氣は急に消失していった。

代わりに残つたのは悲しみだった。

緑の瞳が虚空を見つめ、ふたたびあの名前を、呼ぶ。

「……アン！」

俺はその時理解した。

先輩はただ、悲しいだけなんだと。

「先輩」

思わず呼びかけた、けれど先輩は答えなかつた。

俺を押しのけて、ふらふらとした足取りで音楽室を出て行こうとする。

俺ははつとした。

片手に彼の短剣を握つたままだつたのだ。

ふり返つて呼びとめようとしたが、それより先に深紅が口を開いていた。

「お待ち。」

先輩は、肩をびくじと震わせて、ふり返りこそしなかつたが立ち止つた。

深紅はその背中に言つた。

「これだけは言つておく。星師は人殺しなどではない。少なくとも私は皆に、蒼路にそんな真似はさせん。」

「……深紅」

意外な言葉に眼を見開くと、深紅はやにわに俺の方を向いた。

そして白い手で俺の左手を取ると、そこから短剣を抜きとつて先輩に向けて投げつけた。

「返しておいつ。」

深紅は言った。

唐突な返却だったが、先輩はその短剣をしつかり片手でキャッチしていた。

……さすがといつべきか。

「いくら私たちでも四六時中お前を見張れるわけではない。自分の身は自分で守つてもらわねば困る」

「……一度と僕らに近づくな。」

深紅の言葉に答える代わり、先輩は言った。

「さつきも言つた通り、僕からアンナを引き離そとするなら、僕が君たちを殺す。……もう後輩だからといって、見逃したりはしない。君達は、星師として僕の前に現れたのだから」

……といつことは、今までも俺が星師だと知つてはいたんだ。

俺は思った。

知つていたけど何も言わず、良い先輩を演じてくれてたつてわけか。

でも、一体何のために？

なんだか腑に落ちず、俺は再び歩きはじめた先輩の背を、視界から消えるまで黙つて見送った。  
そしてようやく息を吐く。

その場にしゃがみこむと両手で頭を抱えて、髪の毛をかき乱した。  
さつきから訳わかんねえことばっかりで頭がぐちゃぐちゃだ！

「あー！ 僕たちもしかしたらスーパー面倒くさい仕事引き受けち

まつたんじやねえか、深紅？』

スマートな深紅に状況検分をして欲しくて言つてみたが、彼女からの返答はなかつた。

「……？」

俺は彼女を見た。

さつきからずつと、黙つて立ちつくすその人を。

「おい、深紅？」

嫌な予感がした。

白い顔がゆっくりと俺の方を振り向いた。

血の氣を失い、蒼白な顔であつた。

胸の中で予感が確信に変わる。

深紅の体がふらりと前後に揺れ、続けて、黒い瞳が閉ざされる。

「…………」

彼女はその場に崩れ落ちた。

深紅には秘密がある。

俺はそれを知っている。

何故なら、彼女がその秘密を負った瞬間、俺も傍にいたからだ。

＊＊＊

深紅はババアの屋敷に運んだ。

え？ どうやつてつて、勿論俺がおぶつて運んだんだよ。  
地上を歩いたんじや目立つから、学校の屋上から屋根づたいに飛  
んで歩いてな。

今回ばかりはドレスコードも門番も無視して突入したが、さすが  
のババアも邪魔しなかった。

それどころか俺達が来るのをわかっていたようで、俺が玄関を突  
破した瞬間、召使たちと共に出迎えてくれたもんだ。

「む。」

ババアは深紅を見た瞬間そつ唸り、即座に屋敷の奥へと彼女を連  
れて引っ込んでしまった。

「待てよババア、俺もつ

追いすがろうとした俺だったが、たちまち召使たちの持つた薙刀  
が道を塞いでしまった。

ぬがー！

俺は暴れた。

何なんだよ一体！！

「おい、ババアっ！」

「やがましいわ、こん馬鹿者が！ 言つた傍から深紅に無茶をさせおつて、全く、これだからお前に任せるのは不安だと言つたのじや。」

ぎらりとした眼差しで睨みつけられて俺の心はひやりと冷えた。  
薙刀から身を乗り出して、必死に突破しようとする。

が、召使たちはびくともしない。

……ちくしょう、これ絶対ババアの式神だろーー！

「深紅、ヤバいのか！？」

突破は諦めて、仕方なくそう叫ぶ。

ババアはやれやれと息を吐いて首を振った。

「大事はない。だが全く問題がないわけでもない。ちと時間がかかる。お前も怪我を手当してやるから、それが終わったら帰るが良い」

「え！？ いいよ、俺のことなんて、それよりー！」

「駄目だ！ 帰るのじゃ。良いな」

で。

ババアは行つてしまい。

俺は召使たちに腕を掴まれ、屋敷の客間へと引きずられて行つた。  
さつきから放置しておいた左手の傷を手当され、そのまま帰らせられるところだったが、おあいにく。

俺は全力で抵抗して屋敷に居残つた。

大体、ババアに聞きたいことも山ほどある。

ここで帰るわけにはいかない

そう思つてまんじりともせずに待つていたのだが  
やつぱりといふか、眠くなつてきた……。

気づけば寝ていた。

疲れも少ししあつたらじへ、眼が覚めた時には夜になつていた。

「うおお、マジか！？」

慌ててふすまをすばんと開き、廊下に飛び出すと、辺りは闇。濃厚な緑の匂いに風の流れが身に体じゅうに吹き付けられてくる。池の方からぼしゃんと快い水音が立つた。

『おや。またいつかの星持ちが来ていますな』

『つむ。先ほど姫様もお帰りになられたようじやのう』

『おばば様もなにやら忙しそうにしていましたな』

『つむ。姫君の封印がまた強まつたと言つておられたのう』

何だと！？

池の鯉たちが話している内容を聞きとつて、俺は飛び上がりそつになつた。

慌てて廊下を駆け始める。

今のは本当だとしたらエライことだ。

姫君とは深紅のことであり、封印とは恐らく封呪を指してゐる

六年前、俺の目の前で深紅に施された、あの封呪の法。

それは深紅の力が強まるほど彼女自身を戒めていくといふ、恐ろしい技だった。

「……なんのことしたんだよ……」

親父、ど。

俺は呟いて唇を噛んだ。

薄い皮膚がたちまち破れて血が流れるのを感じたが、憤りは収まらない。

強く握りしめた拳からも血が流れた。

ああそういういえば、怪我してたんだっけ。どうでもいいけど。

俺が傷ついて、深紅が樂になるのなら、いくらでも傷ついてやる。けど実際はそうじゃない。

わかつているから、俺は深紅の傍にいることに決めたんだ。それなのに

「廊下は走るでないわああ！！」

「ぎゃーっ！ 出たな妖怪！！」

突如視界いっぱいに映ったしわくちゃの顔に、俺は悲鳴を上げて飛び退つた。

だがよく見るとそれはババアで、手に何か盆を捧げ持っている。俺は手にしたくないを下ろした。

「あれ？ なんだババアか。何持つてんだ？」

「なんだではないわ、このこわっぱ！ 帰れと言ったのに何をしてある！」

「なんだとう！？」

「事実であろうが！ だあーれーが妖怪じゃ、このばつかもん！！」

侮辱の言葉に怒った俺に、ババアは痛烈なチヨップをお見舞いしてくれた。

「痛つてえーーー！」

脳天に火花が散つて俺はもんざり打つた。

またしても避ける隙すらなかつた。

本当にこいつ、妖怪ババアじゃねえのか。

「ふん。これは罰じや、未熟者。」

「罰？」

その言葉が何を指すのかわかつて、俺ははつとする。

「そうだ、深紅はつ！？」

ババアに取りすがつてそう尋ねた。  
彼女にふりかかる災いの全ては俺の罰だ。  
俺はそのことをようく知つている。  
だから星師になつたのだから。

「深紅は大丈夫なのかよ、ババア！？」

「……」

ババアはすぐには答えず、無言で俺を見下ろした。

その視線。

感情の読み取れない瞳に俺の焦りは最高潮に達する。  
ババアの着物の裾をつかむとがくがくと揺さぶつた。

「おい、答えるよ！ 深紅は？ 深紅は！！」

「……安心せい。ただの疲労じや」

やがてババアはそう言った。

俺は安堵のあまり、一瞬息ができなかつた。  
ずるずるとババアの足もとに崩れ伏し、よつやつと全身の緊張を  
解いた。

よかつた。

「……良かつた……！」

そうしてしばらくじっとしていた。

何を考えることもできなかつた。

ただ、深紅が無事であればそれで良かつた。

ただ、俺は、彼女に傷ついてほしくない。

彼女を守るために俺はここにいて、だから、俺のせいで彼女が傷を負えば、俺はもう彼女の傍にはいられない。

つまり、深紅を守るという事は。

俺にとって、何より大事な自分の居場所を守ることでもあつたのだ。

「来なさい、蒼路。」

「え？」

やがてババアが沈黙を破つた。

俺は顔を上げた。

彼女の手にした盆の上には、そういうれば薬湯やくとうの椀が載せられていることに今更ながら気がつく。

ババアは俺の背後を指差して言つた。

「お前の怪我にはもう少し特別な手当でがいる。聞きたいこともあらじやろ？ 共に私の部屋に来なさい。」

これは師匠としての彼女の言葉だった。

本當はすぐにでも深紅の元に駆けつけたい俺だったが、こういう時のババアに逆らうのは嫌だった。

なんつーか、非礼だから。

……というわけで一秒だけ迷ったが、それでも俺はすぐに姿勢を正し、床に拳をついて一礼していた。

「承知いたしました。」

「うむ」

ババアは厳かに頷くと、着物の裾をさばいて歩き出した。

\*\*\*

左手の傷には草花の種子が植え付けられていたらしい。  
自分では全く気が付かなかつたので、ババアにそう聞かされた時  
ぞつとした。

植物。そういえば、アンナさんが憑依したあのハル先輩は、植物  
の化け物に変化したっけ……。

「どうやらその双子、縁の性質をもつらしいな。深紅もその毒に当  
てられたようじゃ」

「やつぱそうか。」

ババアの言葉に、薬湯の盃を傾けながら俺は眉をしかめた。  
怒りが一瞬胸中に生まれたが、それは不思議に燃え立つことなく、  
すうっと静かに消えて行つた。

……なんだか俺はひどく落ち着いていた。

行燈の光に照らされた薄暗いババアの部屋。

辺りには甘い香りのする香が焚かれており、くゆる白煙を吸い込む度に、なにか身体が緩んで行くような感覚がある。

恐らくはこれも薬草なのだろう。

鎮静作用のある薬草。

「しかし半星とはいえたの男、なかなかの術者のようじゃ。お前、結構な深さまで種を植え付けられておるぞ」

ババアが言つた。

こいつはさつきからずっと、俺の左手から種子を取り除く作業に従事している。

先刻麻酔を打たれたので痛みこそないが、自分の手の肉を、棘ぬきのような器具でほじくられるのは見ていて気持ちのいいものではない。

眼を背けた俺は、部屋の天井付近になにかゆらゆらと漂っている影のような「もの」を見つけた。

影縫いだらうか。影の中に潜むだけの、害のない妖怪。

「……でも俺、わっかんねえんだけどさ。アンナさんがもう死んでるってことは、俺達が会って、話して、あまつさえ戦つたあの人は幽靈だつたつてことだろ？　あまりにもはつきりした靈で、俺でさえ全然気が付かなかつた。そんなことつてあり得るのか？」

俺は尋ねながらアンナさんを思い浮かべる。

にやりとした魔女っぽい笑い方、生命力にはちきれそうだったナイスバーディ、何よりも、ハル先輩を呼んだあの声。

信じられない。

もうこの世に居ない人だと、とても。

考えているとババアが答えた。

「星の力が作用したのじゃな。彼女が半星であり、お前たちは星師。どちらも普通の人間よりもずっと闇〔冥界や異界に近い所にいる者じや。星師の中には幽靈を専門にしている奴らもあるへりこじやて」

「へえ。初耳だな」

「お前はわたしの元で、典型的な闇祓い専門の教育を受けておるからなの。ま、その分今回の依頼は良い経験になるじゃろう？」

「 そうだ。そもそもその依頼だけど」

ババアの言葉に思い出したことがあり、俺は視線を元に戻した。傷口に薬草の煎じ汁を染み込ませた布があてがわれて、ツンとした独特的の香りが鼻を付いた。

「ハル先輩は、護衛を依頼したのは自分じゃなくてアンナさんだって言つてた。つてことは、アンナさんはここに来たのか？」

「 来たとも。兄を助けてやつてくれと泣きつかれたわい。自分ではどうしようもできないのだと」

「 .....けどさ、さっきも思つたけど、それっておかしくない？」

俺は言った。  
だつてそつだろ。

「 なんで妹の靈が、実の兄貴に憑りついたりしちゃうわけ？ 恨みつらみがあつたわけじゃないみたいだし、自分で憑依した上で”兄貴を助けてくれ”つて、アンナさん矛盾しまくりだろ。」

「 お前の言つていることは最もじやが、あいにくとな。幽靈にはそういう現世の理は通用せん。彼らは体を持たぬ残留思念のような存在だ。己の意思とは無関係に、自分が引き寄せられた人間に憑率してしまうことは少なくない」

「え、そうなの！？」

俺は心底びっくりして眼を見開いた。

だとしたら靈つて、なんて悲しい存在なんだ。

思わずババアを見つめてしまつたけれど、ババアは俺の顔を全く

見すに話を続けた。

「やうなのじや。アンナの場合は、兄が心配で成仏できず、死してなお靈として兄の傍に添つてしまつた。それだけなら良いのだが、まずいことには双子は星を持つ身だつた。ゆえに、アンナは非常にパワーを持つ靈となり、ハルの方でもそんなアンナと触れあう力を持つていた。そして互いに、離れがたくなつたのじやな。確かにあれだけはつきりとした靈はなかなかおらん。わしどさえ驚いたくらいじゃから、あれの兄はさぞ驚いたであろうよ。驚いて、そして喜び……妹を手放せなくなつたのじや。」

哀れじやのう、と、ババアの声が何か慈しみを含んだように低く、優しくなつた。

俺は少し胸を突かれて黙つてしまつた。

確かに。

俺だつて藍や母さんが死んでしまつて、幽靈として俺の前に現れたら……先輩と同じ事をしないとは言ひ切れない。

愛しくて、恋しくて。もう一度と傍を離れて欲しくなくて。

でも。

「でも……俺たちは星を持つてゐる。」

俺は薬湯を飲みほした。

香ばしく熱い液体が喉から胃に滑り落ちて行く。

ババアは今度は針と糸を持って、俺の傷口を縫い始めた。

「さつきババアがそう言つたみたいにさ、普通の人間よりは死んだ人とか、靈とかに近い場所に居るんだ。そのことを生業にしてる。だから、うまく言えねーけど、そういうことに関して、間違つちやいけないと思うんだよな。星であるうが、半星であるうが。異能を

持ち合わせている以上、この使い方を勘違いしちゃいけねー気がするんだ」

「……フム。」

傷口を縫う手を止めて、ババアは俺を見た。

行燈に照らされたその瞳は、今までに見た事のない眼差しをしていた。

俺は何となく気恥かしくて眼を逸らす。するとババアは言った。

「お前は、誠に甘い奴じゃのう？」

「……甘い？」

「情にもろい」ということじや。お前、双子の兄の方に同情しているんじやろ」

「うう」

図星を指されて俺は固まつた。な、なんでわかっちまつたんだ！？

「良いか、蒼路。」

ババアはふと針を置くと、脇に置いてあつたハサミで糸を切つた。今度は包帯を取り上げて傷口に巻き付けてくる。

ずっと天井を泳いでいた影縫いが、ふらふらと行燈に照らされた俺達の影の方に泳いでくるのが見えた。

影縫いは影から影へと渡り歩き、けして一つの場所に棲みつかない。

影から外へはどこにも出られず、なんの力も持たない、ほんとうに儂い存在だ。

「優しいのはお前の良い所じゃ。深紅に対するお前の態度からも、それはようくわかつておる。しかしながら、可哀そうという気持ちはただの自己満足で、優しさではない。相手のためににはならないからじや」

「……わかるよ。でも」

「聞くのじや。ようく考える。双子の兄は確かに可哀そうな男じや。半星で、愛する妹を亡くして、悲しみと怒りに狂うあまり、その妹に憑り付かれてしまった。しかもその状態を嫌だと思つ余裕すらなく、むしろ喜んでらいる。お前達がアンナを退治すれば、彼はもしかしたら立ち直れないかもしだね」

「だつたら」

「だが、だからこそ！」

耐えきれずに口をはさんだ俺をババアは眼だけで制した。

その瞳。

いつも通りに厳しいが、どこかに……なんていうか、優しいような、悲しいような色を浮かべた瞳。

この人のこんな眼を、初めて見る気がした。

「だからこそ、じや。蒼路。ここでアンナを引きはがしたら彼は立ち直れないかもしだい。だが、このままにしておいてはもつといけないのじや。アンナがお前たちにハルの護衛を依頼したのは、彼に生きていて欲しいからなのじやぞ。兄が助かることはつまり、自分が退治されることだとわかつていて、アンナはお前たちに助けを求めたのだ。彼女が助けてほしいのは自分ではない。兄だけハルだけなのじや！」

俺は言葉を失つた。

やつとわかつた。

ババアも胸が痛いのだと。

あの双子を引きはがす事に、アンナさんを退治する事に、胸を痛めているのは俺だけじゃないんだ。

当たり前の事実に言われて初めて気がついた自分が悔しい。

「俺……」

俺は俯きかけて、思いなおした。  
まっすぐにババアを見る。

瞳を合わせると、彼女は頷いた。

「お前が言ったことは正しい。蒼路。星を持つ者はすなわち闇に生きる者である。だが決して、闇に呑まれた者ではないのだ。そのことをハルに教えておやり」

「……星を持つ闇を祓い、この世に光を導く者

俺は呟いた。

それは幼いころから幾度も繰り返しくりかえし、父に、深紅に、  
そしてこの師に教えられてきた物語。

「 星導師。」

右手を見つめた。

行燈の光に透けて、わずかに赤みを帯びた肌に浮かび上がる五芒の星。

望んで得た星ではない。

俺たちの運命は、俺達が選びつむるものではなかった。  
けれど。

眼を閉じた。

けれど、俺達は今生きている。

この手で、この足で前へ進み、生きてゆく事ができる。

(星なんて、あつても無くても。本当は多分、じつがだって同じだ)

俺は思つた。

でも、それでも俺は星導師なのだ。

「……わかつた。」

ババアに向つて頷いて見せると、俺の師は、しわくちゃの顔にかすかな笑みを刻んだ。

そして静かに立ち上がつた。

「さて、そろそろ深紅に会つに行くか? もつ眼を醒ましこるせ

ずじや

「お、おつ。」

俺も続けて立ちあがり、部屋を後にして

涼しい夏の夜風が心地よい。

ババアの後について廊下を歩きながら、迷つてはいけない、と口に言い聞かせた。

迷つてはいけない。

俺はたぶん。

ずっと進み続けなければいけない。

うまく言えないが、星を持つて生まれたといつてはつまつ、  
そういうことなんだわ。

「母さん！ もう起きないと遅刻するだーーー！」

夏のさわやかな朝日が差し込むキッチンにて、朝飯を作りながら俺は叫んだ。

時刻は七時。

窓の外には澄んだ青空と白い雲が浮かび、お向かいのビル（うちにはマンションの八階に住んでいる）に干された洗濯ものが風にはためいている。

あー、今日も良い朝だ。

「お兄ちゃんおはよう～」  
「あ。おはよー藍」

オムレツをひっくり返した所で妹の藍が起きてきた。

眼をこすりながらここへ歩いてきて、冷蔵庫の中のオレンジジュースを取りだす。

俺はオムレツを目に盛つながら藍に頼んだ。

「なあ藍、母さん起きたか見てきてくんない？」

「うん、いいよ～」

「で、寝てたら叩き起こして」

「それはヤダ～」

藍はリビングを突っ切って、母さんの私室に突撃した。

「」の隙に俺は支度を整える。

まづできあがった朝食をテーブルに並べ、コーヒーメーカーに豆

をセット。電源を入れる。

そんでもって今度は冷蔵庫から、昨日の内に作つておいた弁当を取りだして、白いご飯だけ追加するとハンカチで包んだ。で、それをテーブルに並べると準備は完成。ようやくエプロンを脱いでネクタイを締められたとこうわけだ。

「おはよ～」

やがて藍に先導されながら母さんが起きてきた。

寝ぐせでぼさぼさの頭に思わず笑いそうになつたが、寝起きの母さんは怒らせると怖いので堪える。

熱いコーヒーをマグに注ぎ入れたものを手渡すと、彼女は喜んだ。

「ありがとー、蒼路。あんたもすっかり主夫つぶりが板についてきたわね」

「お陰さまで。オムレツ、うまいよ。冷めない内に食つて」

「チーズ入つてる?」

「入つてる。パセリとバジルも」

言いながら俺もコーヒーをマグに注いで口にした。

ちょっと前は全然飲めなかつたこの液体も、最近じゃあ毎朝口にしないとしゃつきりしない。

不思議なもんだと思ひながらテーブルの椅子を引くと、一足先に食べ始めた母と妹が唸つていた。

「うむむ……また腕を上げたわね」

「おにーちゃん、これおいし〜！」

「そう。良かつた」

率直な感想に思わず顔がゆるんだ所で、ふいに母の目線が俺の手

に止まる。

オムレツヒップチャートをもぐもぐ咀嚼し、飲みこんでから彼女は言つた。

「蒼路。あんた左手、怪我したの？」

「ああ。昨日、ちょっとね。ババアとの修行で」

俺はできるだけ何気なく答えた。

が、母は腑に落ちない様子である。

首を傾げながら「ヒーヒーを傾けてなおも言ひ募る。

「本物〜？ 深紅ちゃんとの仕事でやつちやつたんじやないの？ 結構面倒なことになつてたりするんじゃないの〜？ あんたバディーが深紅ちゃんだからって言つて、変な意地張つたり格好つけたりしてると、命がいくつあっても足りないわよ」

ぞくぞく、ぞくぞく、と。

母の台詞は一言ずつに核心を突いてきた。

……何も話していないのに鋭すぎる。

俺は居心地が悪くなつてきて、高速でオムレツを食べ終えると立ちあがつた。

「うわー わーー。俺もう行くわー

言ひざま弁当と鞄を取り上げて俺は踵を返す。  
背中の後ろから母と妹の声が追いかけてきた。

「え？ まだ早いじゃない、蒼路！」

「おひーちゃん、早い〜

「今日は早く行かなきゃなんねんだよ！ じゃあね！ 行つてく

るー。」

「行つてらつしゃい……」

バタン、と。

音をたてて玄関を閉めれば、眼に突き刺さるような日の光。これを浴びると気合が入る。俺はよつし、と拳を握った。

今日も一日が始まる！

＊＊＊

『おや、坊。早いね』

『お早う、坊。どこへゆくのだ?』

いつもより大分早く出たので時間が余った。なので、回り道をしながら登校することにした。近所の寺の境内を抜けて行く時、さんもん山門のたもとにちょこんと座っている一匹の神狐しんじゆと出会った。俺は手を振つて答える。

「よー、カリヤにスリヤ。俺はこれから学校だぜ」

『学校とは何だ、スリヤ』

『人が学ぶ場所の事ぞ、カリヤ』

『わらわもたまには外に出たいのう、スリヤ』

『わしらにはここを守る務めがあるのでござぞ、カリヤ』

カリヤとスリヤは金弧と銀弧。

その体毛と、青と紫という瞳の色以外は全く同じ姿かたちをしている。

よくわからんが、『限りなく相似しているものの絶対的に違う存在』であるらしく、一匹でこの寺の守護を務めている。

「お前らも毎日お勤め御苦労さんだよな。今度つまご油揚げ買ってくるからもちよつと頑張れ」

そういう声をかけると、一匹の神狐は文字通り飛び上がり喜んだ。

『なぬ！ 本当か、坊』

『嘘はなしぞ、坊！』

「俺は嘘はつかねーよ。んじゃあなつ」

笑いながらまた手を振って、行き過ぎた。

星を持つていると、こういう風に他人には聽こえない声が聽こえて、見えないものが見える。

かつての俺はそれが嫌でたまらなかつたし、異形のもの達もただ恐ろしく、逃げ回つてゐるだけだつた。

けれど、交わす言葉があるということは幸福なことで。

俺は彼らも、時には他愛のない事で喜んだり笑つたりするんだと知つた。

優しくされれば嬉しいし、冷たくされれば悲しい。

それは人も妖怪も精霊も同じだ。

異形のものたちと触れ合つといつことは、俺にそんな当たり前のことを教えてくれた。

『あ、蒼路だ。珍しいわね、こんな早くに』

境内を抜けて、ゆるやかな坂道を上つて行くと、今度はそんな声がかけられた。

発しているのは猫である。

まつ白な身体に左右色違の瞳、一本に裂けた尻尾。

……猫又の花緒だ。

「よ、花緒。おはよ

しゃがみこんで喉を搔いてやると花緒は嬉しそうに眼を細めた。  
見た感じは全く普通の猫と変わらないが、じつは花緒が夜な夜な  
この近辺のパトロールをして回っていることを俺は知っている  
だつて手伝つたこともあるしな。

「最近変わったことないか?」

『うん、近頃は平和よ。』

「そか。何かあつたら言えよ。手伝つから

『ありがと、蒼路。』

花緒は喉を鳴らして甘い声でさつさつと、俺が坂を登り切るまで  
きちんと見送ってくれた。

花緒はこの近くにある老舗の豆腐屋で、一世紀ほど前に飼われて  
いた猫なのだ。

とても大事に飼われたせいか人間が大好きで、死んだ後もこの辺  
りに棲みついて、土地を守るようになつた。

俺達が気が付いていないだけで、そうやつて人の傍に寄りそ  
う存在というものはとてもたくさんいる。

今より闇が深かつた時代には、人は彼らの存在を信じていて、ゆ  
えに視認することができた。

けれど良くも悪くも光があふれるにつれて、人々は彼らを忘れる  
ようになつた。

妖怪や精霊たちと共に存し、助け合っていたことをすっかり忘れて、  
まるで自分たちだけがこの世界の住人であるかのように生きている。  
……そういう人の馬鹿さみたいなことを、星師として闘う時、お

れはいつも考える。

人は一方的に闇を嫌うけれど。

その闇の中には何て言つか、愛しい闇、可愛い闇、悲しい闇  
色々な種類があつて。

俺達がその善悪を判断する権利などないのだ。

俺達は星を持っているけれど、その力は決して、誰かを虐げたり、  
苦しめたりするためのものではない筈。

僕は星師が大嫌いだ

ふいに、昨日のハル先輩の言葉が頭をよぎつた。

あの瞳。

真の憎しみと怒り、そして、悲しみにまみれた姿。

「……」

痛々しいと、思った。

そして何があつたのだろうと。

バス停に辿りつき、俺はバスに乗り込んだ。  
つり革を掴んで立ちながら、尚も考える。

先輩は何故あんなに星師を憎んでいるのだろうか？

それは、アンナさんの死と、彼らの半星と、何か関係があるのだと  
もうか。

俺はまずそれを知らなければいけないような気がした。

そうでないとハル先輩の護衛をする権利はないんじやないか、と。  
迷うのは駄目だ。

けど、間違いうことはもつと許されないと思つ。

( …… アン！ )

つましいえなけれど、あんなに悲しい顔をした先輩を、更に悲し  
ませるような結果だけはあつてはならないと思うのだ。

（つましいえなけれど、あんなに悲しい顔をした先輩を、更に悲し  
ませるような結果だけはあつてはならないと思うのだ。）

でもそれにはどうしたらいいんだろう?

考えている内にバスが停まった。

ん、と顔を上げれば、窓越しに高校の校舎が見えている。

俺は慌ててバスを降りた。

「危ねえ危ねえ。乗り過げずといろだつたぜー。」

ふいー、と眩きながら正門の方に歩き出した。

目の前に飛び込んできた光景にひっくり返りそうになった。  
たつた今、正門を抜けた一人の青年と、その横を歩く……女性。  
二人とも同じくらいの背格好をしていて、すらりとしていた。  
金色を帯びた淡い色合いの髪、ちらりと見えた横顔にエメラルド  
の瞳が輝く。

「つて、オイーーー！」

「一人ともすゞく楽しそうに笑っていたが　だからこそ、俺はこの状況を見過ぎしてはいけなかつた！」

「何やつてんのアンナさんつ！」

深紅の技を喰らつたくせに、思い切り皿をめでんじやんーー。  
ていうか、朝つぱらから幽霊が、兄貴と一緒に登校するもんじや  
ねーだろつーー！

『あーー、星師の蒼路くんじゃないの。おはよう。昨日は悪かったた  
わね』

駆け寄るとアンナさんが気が付いて笑つた。

ハル先輩はと言えど、けりと俺を一瞥したつまつ完全に無視を決め込む。

俺はむしとしたけれど、取り合えず今は、相手を妹だけに絞ることにした。

「おはようござなぐて。普通すぎでしょ、アンナさんー。」

## 悲しき恋

『普通すがりて、なにがよ?』

これがアンナさんの答へだつた。

今日も今日とて彼女は幽霊に見えない。

顔色なんかつやつやだし、エメラルドの瞳は田光にきらめく輝いて、その動きに合わせて揺れるボインも実に見事。生きてる人と違うのは影が無いことぐらい。

周囲の人を見渡して、この人が本当に見えていないのかどうか聞いてみたくなるぐらい、それくらい生々しい靈体だった。

「なにがじゃなくて! あんた幽霊なんだぜ、ハル先輩の傍にいちや駄目じやんか!」

アンナさんはハル先輩のすぐ近くに、寄り添つよつとして立つていた(アンナさんにはもちろん足もあつた)が、俺に突つ込まれるとその長い腕を先輩の首にまわした。  
そしてそのまま背後から抱きしめる体勢を取る。おおつ。

俺は思わず身を乗り出した。

あ、アンナさんのボインが先輩の頭を挟んで気持ち良さそう……!  
つて違う! —

「だー! くつくな、朝からつ。幽霊の癖に! —!」

『つるさいなー、もう。しょうがないでしょ。身体が勝手にハルにくつこいつやうのよ。』

アンナさんはハル先輩をぎゅうぎゅうに抱きしめながら言った。

……どう見ても意図的にやつてるとしか思えんが。

俺は軽くため息をついた。

全く、アンナさんという人はいつもおどけていて、言ひ事のどこのまでが本気なのかさっぱりわからない。

「しょうがなくないだろ。あんたがそういう心持だからハル先輩に負担かけるんだぜ」

『あんたに言われなくたってわかつてるわよ、小僧っ子。余計なお世話、偉そうに』

「なんだと！？』

「高村くん。さつきから、何を一人で騒いでいるのかな？」

「」で、さつきから無言だったハル先輩が突然口を利いた。

驚いて見てみれば、彼はきれいな顔に柔軟な笑みを浮かべ、けれど緑色の瞳に明らかな迷惑の色を浮かべてこちらを見ていた。

俺ははっとして辺りを見回した。

すると見つかる多くの奇異の視線。

ヤバい、と思った。

アンナさんが他の人間には見えていないことを忘れて、つい騒いじまつた！

「近頃暑いから、ちょっと頭がおかしくなっちゃったのかな？ 保健室に行つたほうが良いんじゃないかい？」

ハル先輩はいま一度ほほ笑んで、俺の方に近寄つた。

その身体から発せられる殺気に気押されて、俺は一步後ずさる。あーあー、この人つてやつぱり一重人格だつたんだな……。

眉目秀麗で頭脳明晰、人柄も良い生徒会長なんて、出来過ぎた話だと思つてたんだ！

「大丈夫？ 熱はない？」

優しげな声がさりに近づいて、そして、整った顔立ちが俺の目前まで寄つた。

俺は全身を緊張させた。

まさか、こんな公衆の面前で攻撃されることはないだろうが、それでも今のハル先輩は何をしでかすかわからない危うさを孕んでいたからだ。

「 アンに近づくな、と言つただろう」

やがて先輩は俺の耳元に囁いた。

甘く冷たい声。

思わず緑の瞳を睨み返して俺は答えた。

「 ……こつちじゅわ、あんたの命令に従う義務はないと言つたはずだ」

馬鹿言つてんじゃねえよ。

低く呟くと、先輩はかすかに鼻を鳴らし、俺から離れた。

おおおムカつく！

この間も思つたけど、この人の笑い方つてマジでムカつく！

「ま、いい。とにかく邪魔はさせない」

「 ……邪魔？」

それは奇妙な言い方だった。

俺は怪訝な顔をしたと思うが、先輩の肩の上にいるアンナさんはもつと深刻な顔をした。

いつものおどけた様子が消えて、緑の瞳が翳つている。

彼女は先輩を呼んだ。

『ハル  
「行くよ、アン」

ハル先輩はアンナさんを遮った。

「そろそろ姫君のお出ましだ

言ひざま踵を返し、昇降口の方に行ってしまった。  
当然ながらアンナさんも彼と一緒に消える。  
残された俺は何だか釈然としない気持ちで頭を搔いたが、やがて  
背後をふりかえっていた。

校門の前で人垣が分かれている。

その中心をまっすぐな背筋で、優美な歩き方でやつてくる少女が  
いた。

長い黒髪が風に揺れるたび、額の端に星の痣がかいま見える。

俺は眼を細めた。

深紅だった。

\*\*\*

「お、おはよ深紅！」

俺は彼女に声をかけた。  
だが深紅は、俺をちらと見やつたものの、返事もしないで昇降口  
の方へと歩いて行ってしまった。  
ええ！？ とショックを受け、半ば怒りながら俺は彼女の後を追  
う。

「おい、深紅！ 何シカトしてんだよー！」

「……」

尚も声をかけるが、深紅は俺の声がまるで聽こえてもいな「うにずんずん歩いて行つてしまつ。

一年と二年の下駄箱は隣同士だ。

一瞬別れたものの、俺はちよつ早で靴を履き替えると再び深紅の後を追つた。

だつてあいつ顔色が悪い。

白い肌が青ざめて、眼の下にはうつすらと隈が見えてる。

……昨日の今日だから、俺はどうしても気になつた。

「深紅、おい、深紅つてばー！」

俺はめげずに追いかけた。

噂の美人転校生と、それを追いかける後輩の男（つまり俺）という構図はかなり人目を惹くものらしく、周囲の人間があからさまに何か喋つていいるのが聞こえてくるが、気にしなかつた。

気になるのはただ深紅の様子だけで

「五月蠅いわね。」

「え。」

やにわに……嫌、よつやくといつべきか、深紅はびたりと立ち止つた。階段のたもとで。

俺をじろりとふり返り、そのまま、薄暗く死角となる階段の陰にひっぱりこむ。

俺は突然、耳に火がつくような痛みを感じた。

深紅に耳朵を引っ張られていたのだ。

「痛つ……」

涙目になつて叫ぼうとしたが、それは深紅によつて遮られていた。

「しーつ、静かにおし、この馬鹿者！」

「何すんだよ深紅！？ つてか何なんだよさつきからーーー！」

「それはこちらの台詞でしょう。お前、何を憑靈と楽しそうに話しこんでこるのよー！」

「あ？」

「あ、じゃなくて！ あの双子の妹の方のことよー！」

そこで急に静かになつた。

俺が黙つたからだつた。

すぐ傍の階段を生徒たちが昇つて行く足音と話声がする。深紅はさらにて用心深く、俺を物陰の奥の方へとひっぱりこんだ。

距離が急激に縮まり、深紅の、ほのかに甘い香を感じて俺はびきめぎしてしまひ。

「な、ん、お、俺は楽しそうに話したりなんてしてねーぞ……」

もう「もぐ」と言つとい、深紅の厳しい視線が投げかけられた。

「していたではないの。さつき、校門の前で。」

「別に楽しんでたわけじゃないよー！」

「そういう問題じゃないでじゅうー！」

ぴしゃりと怒鳴りつけられた。  
俺はますます混乱する。

「じゃあどういう問題なんだよー！」

「わからないわけ？ 本当に大馬鹿者ね。」

蒼路、彼らは敵なの

よ。仲良く会話するべき相手ではない。鬭わなければいけない相手なのよ！」

微塵の躊躇もなく深紅が言った言葉に、俺は、むりとした。だつてそれ、昨日もババアに散々言われたことだ。

「わかつてゐる？』

言い返す。

すると深紅は首を振った。

「そうは見えないわ。』

「つせーな、ちゃんとわかつてゐつて言つてんだろー。』

「だつたら何故、彼らと不要なかかわりを持つとするのー。』

厳しく言つた深紅の、その瞳に浮かぶものを見て俺ははつとした。  
純粹な嫌悪。

俺に対しても、妖怪や惡靈、精靈といった類の「魔物」に  
対して深紅が抱く憎しみ。

俺は自分が忘れていた事に気がついた

星師としての深紅が、ひどく冷酷だとこいつことを。

「お前は甘い。蒼路

深紅は言つた。

「すぐ人に好きになる。そして好きな人は無条件で信じ、疑う事を知らない。それは星師として致命的な事だわ』

その通りだつた。

俺は返す言葉を失い、黙ってしまった。

深紅は続ける。

「そんなお前の事だわ。彼らと話をして縁を深めてゆくうちに、その状況に同情するに決まっている。あの双子を哀れんで、アンナさんを祓わないでいい方法があるのではないか、なんて言いだすでしょう。そうなればどうなる？ ハル先輩は妹に憑り殺されるだけよ……」

俺は返事をしなかった。こういう深紅は大嫌いなのだ。

頭が良いだけに結果を見通して、合理的に物事を進めようとする優等生。

でも、わからないだろう、未来がどうなるかなんて誰にも。俺達が努力すれば今この瞬間に何か変わるかもしれない。

その可能性を、一体だれが否定する事ができる。

目の前に悲しんでいる人がいるのを、誰が黙つて見てられるかつていうんだ！

「……身体は大事ないのか？」

拳を強く握りかため、やがて俺はそう言った。

深紅に対して言いたいことは山ほどあった。

残酷なお前は大嫌いだ、から始まって、俺には俺のやり方がある、まで色々。

けど、そのどれも口に出すことはせずに、俺はただそう言った。

「……何よ、いきなり。」

当然と言えば当然だが、俺の質問に対しても深紅は虚を突かれた顔をした。

俺はそんな彼女を見て眼を細める。  
黙つていれば普通の女の子なんだ。  
とても綺麗で、少し気が強いだけの。  
けど彼女はそうじやない。

普通じや、ない。

「昨日、ババアが言つてた。双子の毒にやられて倒れたって」

すると深紅はこもなげに答えた。

「大したことはないわ。ハル先輩の短剣に毒が塗られていただけ。  
それも微量なものだつたから、もうほとんど抜けているわ。」

「そう。ならいい」

俺は頷くと深紅から離れた。

スクールバッグを肩の上で持ち直し、そろそろ教室に行こうと歩  
きはじめる。

「ちよつと蒼路！ 話はまだ終わつてないのよ！」

背中の後ろから追いかけてきた深紅の声に、ふり返らざるに答えた。

「お前もそろそろ行かない、ホームルーム遅刻するぞー！」

「蒼路！？」

「ああ、そうだ。」

俺は思い出した事があつて足を止めた。

頭だけをちよつと動かして、肩越しに深紅を見やる。

まだ何か言いたげにしている彼女を遮るようにしてこう言った。

「一つだけ聞きたい事があつたんだ。昨日、お前が昼休みに俺に言った事」

「なによ?」

「アンナさんがちゃんと生きた人間として、他校に通つてるって言つてた事。なんであんな嘘ついた?」

尋ねると、深紅はわずかに下を向いて逡巡した。  
俺は黙つて答えを待つ。  
するとやがて彼女は言った。

「……お前が。さつと悲しむと思つたから  
」「ひつ」

じわりと、胸に広がるあたたかな感触があつた。  
俺は深紅から眼を逸らすと、また前を向いて歩きはじめた。  
もう深紅は何も言わない。  
けど俺にはわかっていた。

口ではああ言いながらも、深紅もまた、この依頼をやつこへこと思つていることを。

双子を、可哀そうだと思つてこること。

(確かに悲しい……)

俺は思つた。

ハル先輩の愛する妹。彼と全てを分かつやる唯一のひと。  
残された人間が何と言おうが。

アンナさんはもう死んでいる。



## 侵入者

「たつかむら~」

教室では石岡が待ちかまえていた。  
いや、石岡だけではない。

彼を始めとして十数人の男子生徒と、女子もちらほら。  
俺はうつと身構えた。

来たな、魔物！

「さあ、説明するんだ。昨日といい今朝といい、お前が噂の美人転校生と親しげに話していたのはどういうわけだ~？」

石岡は言い、入り口で立ちつくす俺の肩に腕をまわした。  
逃げようかごまかそうかうるせえ！と怒鳴ってみようか、俺は  
数秒迷つたが、変な嘘をついても後々面倒な事になると思い、結局  
端的にこう説明していた。

「幼馴染だから。あいつと俺。だから話してた。それだけ」「ほほう。なんとも都合の良い設定だな」

石岡が眼を眇める。

そう言われても事実なんだから仕方ない。  
俺は肩をすくめた。

「それだけか？ もういいだろ」

言ひざま石岡の腕から逃れ、前に進もうとする……が。

「まだだつ

今度は田の前にずらりずらり！ と他のクラスメートたちがしゃしゃり出てきた。

俺は一気に囮まれた。身動きが取れなくなる。ぬ、どうしてなかなか、こいつら素早いっ。

……つて、違うか。

「何なんだよ！？ お前ら一体何が目的なんだつ」

田の前の状況が理解できずに俺が言つと、敵はたちは、にんまりと不敵に過ぎる笑みを浮かべた。彼らの内の一人が言つた。

「ズバリ、深紅様の情報が欲しいわけよ」

俺は一瞬何を言われたのか判らなかつた。

クラスメートの発言が頭の中でリフレインする。

……深紅、『様』？

様つてなんだ、様つて。

あいつの一族を知るわけでもなければ星師でもないお前らが、なんであいつをそう呼ぶ必要がある。

つつーか、あいつの情報が欲しい」とはどういうことだ！ 聞き捨てならんつ。

「あいつの情報なんて知つてどーする

俺ははつきりそう言つた。

ついでにクラスメートたちを睨みつける。

すると彼らは口を揃えて恐ろしい発言をした。

つまづ、いつ僵つたのだ。

「 もちろんこの恋の役に立てるのを…。」

「 イヒ…。」

俺は絶句した。

まつ、まさかこの高校の中に、これほど凶悪な魔物がうじゅうじやと潜んでいたとは…！ 知らなかつた！  
ああ、星師としてあるまじき失態…！

「 まあ教えるんだ高村、深紅様のスリーサイズを…！」

「 好きなものと趣味を…！」

「 好きな男のタイプを…！」

「 女子もこるのよ高村くん、深紅様の得意教科…！」

口々に叫んだクラスメートたちは、なるほど頬が薔薇色に染まり、瞳はきらきらと光り、幸せな恋に身をやつしているようだ……が…

「 知るかーっ…！」

俺はブチ切れておぞましい魔物どもに襲いかかつた！

星から火が出そうになつたのは鉄の意思で堪え、代わりにゲンコツ制裁をお見舞いする。

しかし、魔物どもの先頭に立つていた男（いつのまにか石岡になつてた）はすんでの所で俺の拳を交わし、逆に俺の腕を掴んだ。  
俺はぐいっと引き寄せられ、石岡と息がかかるぐらいの位置で睨みあつ羽田になる。

「 ……ふふふ、甘いな高村！ 俺はこんなことじやあきらめないぜー！」

「……上等だぜ。」ひちひそ、いくら聞かれたつてあいつの情報は渡さねえからな！」

「すりいぞ高村！」

「そりよ高村くんつ

外野の声に俺が今ひとたび激怒して、彼らに一度田のゲンコツをぶちかましてやろうとした、その時だった。

新たな魔物が登場した！

「お前ら、やめんかあああーー！」

……担任の永富ながとみである。

俺達はたちまち蜘蛛の子のように散り散りになつて逃げた。が、運悪く石岡が襟をつかまれ、その石岡は俺の腕を掴んでいた。

げげっ！ なんか嫌な展開パターン！！

「離せよ石岡！」

「センセ、元はといえば、悪いのは高村ですー！」

「俺は何もしてねえだろー！」

「……喧嘩両成敗だ」

もがく石岡と、その手の先の俺に向つて、永富は言い渡した。その一言にあつたりと急所を刺され、俺達は揃つて硬直する。両成敗。

つてことはつまり！？

「高村、石岡！ お前ら一人揃つてグランド十周してこいつー

つまり、こうこうことなんだな。

俺と石岡はうなだれた。

\* \* \*

「高村あ～～お前もちやんと走れよ～！」

へろへろの石岡が、よつやくグラウンドのランニングコースに入りながらそう言つた。

俺は校庭の端っこに腰かけて耳をかっぽじつながら答える。

「つせーな、俺はもう終わつたつーの」

事実である。

グラウンド十周程度ならば俺は五分もかからない。  
小さいころから親父やババアに鍛えられているので体力だけは自信があるのだ。

はつきり言つて並ではない。

……ま、九尾きゅうびの妖弧と一緒に結界張つた山に放り込まれて一週間サバイバル生活を強いられたり、東京都中に潜むプロの星師を相手に鬼ごっこさせられれば誰でもそうなると思つが。

そもそも最低限の運動能力がなければ魔物相手に鬪つことは愚か、逃げ回ることもできないからな。

だがそんなことは勿論つゆとも知らない石岡は、へろへろと乱れたフォームで走りながら、尚も愚痴を吐いてくる。

「なんでお前、勉強はできにくせに運動だけはそんなできんだよ～、おかしいだろ。それに元々こんなことさせられてんのはお前が原因じゃないかよ～。俺を巻き込むなよ～」

「つせえな、俺は悪くねえだろつが！　何度も言わせんじゃねえよ、てめーらが深紅について聞いたりしてこなれば、こんなことこまらなかつたんだぞ！」

俺は額に青筋を立てて怒鳴る。

石岡は座り込んでいる俺をつりめしそうに見つめながらカーブを通過して行った。

「鬼<sup>く</sup>」

「何とでも言え、バーカ」

あーあ、あんなフォームじゃ百年たつても走り終わることはねえな。

永富は走り終わったら一人で職員室に来るようと言っていた。だがこの様子だと石岡が走り終わるにはまだまだ時間がかかるだろうと踏んだ俺は、校庭の隅に歩いていくと周囲に人気がないのを確認して、簡単に式神と連絡を取つた。

これは先日深紅と話し合つて決めたことだが、授業中や放課後など、先輩を直接見張つていることができない時間帯には式神を使う事にしたのだ。

式神つていうのは要するに、パシリのことだな。

安倍晴明あべのせいけいが使ってたのが有名だけど、あれは鬼神きしん

だ を使役するスタイルだから、俺の式神とはちょっと質を異にする。

俺の場合、式神は作るものなのだ。

紙や葉っぱなんかに呪力を込めて、自分の意のままに操ることのできる人形を作る、という感じだろうか。

ただ当然その人形は俺から生まれたものなので、俺が知らない場所には行けないし、意思も持たない。

が、だからと言って星師の全員がそういう式神しか持っていないというわけではない。

たとえば深紅の青藍は召喚獣はあるものの、彼女の命によつては式神としても動くので、式神の一種といえよう。

深紅のよつに魔物を折伏し、使役する「」の術を俺達は「召喚」と呼ぶ。

更に、それができる奴は召喚師と呼ばれて重宝される。まあ、呼び出せる魔物のレベルによっては重宝されない召喚師もいるが。

話が長くなつた。巻き戻そう。

ともかくそういうわけで俺はハル先輩の元に送つていた式神と呼びもどし、その安否を聞いた。

答えは安。彼は大人しく教室で授業を受けていたらしい。アンさんの気配はしないようだ。

眠つてゐるのかもしれない。

「了解。サンキュー」

俺は手のひらの上の式神に礼を言つと、再び息を吹きかけてハル先輩の元に戻した。

ノートの切れっぱなしで作ったその身体は、ひらりと一瞬風に乗つたかと思つたら、次の瞬間にはもう消えていた。

「お~い、高村どこだ~、終わつたぞ~」

お。

どうやらせつと口岡が走り終わつたらしく。グランズの方から俺を呼ぶ声がする。

校舎の脇の影にしゃがみこんでいた俺は、立ち上がると伸びをし、ぎりぎりとした日差しの照りつけるグランズに戻りつつ歩き出した。

その時。

「...」

俺はぴたりと立ち止った。

突如として精神に触れた、強力な邪氣を感じたからだつた。  
はつとして首を動かしたが、そこには何もない。  
ただ萎んだ朝顔のつぼみがフェンスに絡みついているだけだ。  
しかし、俺は右手の星が痛みだすのを感じた。  
ということはやはり見間違いじゃない。

魔物だ。

今度は本物の。

「おい、高村。 どうした？」

立ちつくしていると、やがて石岡が俺の姿を見つけて走り寄つて  
来た。

息をぜいぜい切らして汗まみれである。

俺は彼の眼を見返すと答えた。

「……いや。 何でもない」

多分今の俺はかなり真面目な顔になつていると思つ。

足もとからじわじわと緊張感が這い上つて来て、身体が星師として戦闘態勢を整え始めるのがわかつた。

……白昼の学校に魔物。

その状況がもたらす緊迫感が、胸に暗雲を投げかける。

今までならあり得なかつたこと、というよりも、あり得てはいけないことだ。

アンナさんという悪霊の場合、その狙いはハル先輩という一点に絞られているが、他の魔物はそうではない。

場合によつては彼らは見境なく人を喰らい、危害を加えることがあるのだ。

星師の俺がいるのに……

俺はくしゃりと前髪を搔き乱した。

イライラしていた。

星師というのは五芒星を身体の上に持っているため、その存在そのものが一つの魔除けであり、魔物を弾き返す結界といえる。にもかかわらず魔物に侵入されたということは、入ってきた奴はそんじよそこらの小物ではないということだ。

防げなかつた。

つまりこの身は、今の俺の力は、所詮その程度のものとこいつことだ。

「畜生……」

「おーい、ホントにビリじた高村」

思わずうつむいた俺の顔を、石岡が覗き込んだ。

日焼けしてない生白い顔の中で、澄んだ眼が俺を心配しているのが見える。

……駄目だ、しつかりしな。

俺は自分で自分を叱咤した。

侵入されたなら、追い返してやればいいだけのことだろう。

「……悪い」

俺は言った。

色々な意味での謝罪だった。

「でも俺、ちゃんとやるから」

「は？ 何を？」

石岡はキヨトーンとしたが、俺は彼の問いかねに答へず、ポケットに手を突っ込んで歩き出した。

「おい！ 高村？」

追いかけてくる石岡の声に心中でだけ答える。

大丈夫だよ、ちゃんとやるから。

俺、ちゃんと守るから。お前のこと。

みんなのこと。

巻き込んだりしない、一人だって、傷つけたりはしない。

「高村、待てよ、何かヘンだぞお前！？」

「べーつーに。それよりお前、遅い。早くしろよ」

「殺生だな～、あんだけハードなランニングの後で……」

「どこが。あんなの屁でもないじやん」

「お前、ほんとに入間か！？」

石岡と言葉を掛け合いながら昇降口の方に歩いていくと、また星  
が痛んだ。

同時に背後から刺すような視線を感じて振り向く。  
さつきは見えなかつた、けれど今度は捕えた。  
上空だ。

屋上の、フェンスの上に、見事にバランスを取つて立つ巨大な獣。

黒妖犬か……！

俺が視線を合わせると、その犬は緋色の瞳を細めて笑つた。

## 黒妖犬

すごい妖氣だ……

俺は身体じゅうに汗が噴き出すのを感じた。

黒妖犬。

人を喰らい、その血肉によつて妖力を得た狼だ。ゆえに人を極上の餌とし、その肉を得るために何でもする、妖怪の中でもやつかい至極な食人鬼の類。

こんなのが学校の中で暴れたら

俺はぞっとして背後の石岡を窺い見た。

真つ赤な血の海のイメージが脳裏を占拠する。

教室の中から溢れて、窓から校庭へ、廊下から校舎中へ、あふれて飛び散る友達の血。

守らないと……！

(……が……つた……)

はつと顔を上げる。

緋色の瞳が俺をはつきりと捕え、その身の内に荒ぶる意思を伝えてくる。

(腹が、減った……！)

黒い毛並みが抑えきれない欲望に逆立ち、ざわづと無数の触手の  
よつに蠢く。

俺は堪え切れなくなり、ぱっと石岡をふり返ると、叫んだ。

「悪い石岡！ 先に行つて！」

「……は？」

彼はまさしく鳩が豆鉄砲を喰らつたような顔をしたが、とにかく  
俺はここから離れて一人にならなければいけなかつたので、そのま  
ま走りだすと石岡を引き離した。

「おいっ高村、逃げんのかよ！？ ひきょう者 つー！」

背後から、そう絶叫する石岡の声が聞こえたが、無視した。

……ごめん、石岡。

俺は内心で滂沱の涙を流しながら（いや、マジで）全力疾走し、  
校舎の裏側へと入つて行つた。

朝顔のグリーンカーテンを通り過ぎ、スイカの畠を飛び越えると、  
校舎からは窓が消える。この辺りは教室棟ではないのだった。

俺は窓がない場所を見極めると地面を蹴つた。

そのまま懐から鉤繩かぎなわ 先端に爪のついたザイルみたいなもんだ  
を取りだすと、ひょいと校舎の屋上へとひっかける。  
一瞬後にはぐんつという強烈な重力が腕にかかり、俺は校舎の壁  
に縄一本でぶらさがつている形になつた。

そのままするすると縄をつたい屋上まで昇つてゆく。  
やがて田の前に登場したフェンスをすたんつと鮮やかに飛び越え  
ると とたん、ものすごい威圧感がこの身を襲つた。

俺はとつさに両腕で顔を覆った。

それほど強烈な邪気が俺の方に吹き付けてきていた。

眼に見えないのが不思議な程だ。

どろりと重く、濁つたその黒い力が辺り一帯に滯り、闇の温度を発している。

『……腹が減つた……』

闇の中心に、それを発しながら坐していたのは先ほど黒妖犬。じうして間近で見ると本当にデカい。

屋上のほとんどを埋め尽くすようにして座り込み、その状態だけでこちらが圧倒される程の邪気を発している。

針金のように強い体毛に覆われた身体はやせ細つてはいるものの、緋色の瞳は深い知性を湛え、生への渴望に輝いている。

毒々しく赤い口許が物欲しげに半ば開かれ、その口内には俺の指ほどもある牙がびつしりと隙間なく生えているのが見て取れた。

『腹が減つたぞ、星持ちよ……』

黒妖犬の声は地鳴りのように俺の身体を揺らした。  
ぞざつ、と、全身が鳥肌立ち、急速に体温が冷えていくのがわかる。

俺はひとつ、腹から息を吸い込むと吐きだして、両足をかるく広げると踏ん張った。

腹に氣をこめて対峙しなければ、意識だけでこの妖怪には負けてしまつ。

「いいから、出でいけ」

俺はゆつぐりとそづ言った。

同時に右手を掲げ、星からざるりと刀を引き抜く。焰を伴つて出現した刃が闇を焼き、俺の周囲だけわずかに空気が暖まった。

「 出ていかないと、お前を殺す」

いま一度念を押して、刀を構えた。

そのままじわじわと脅迫するように星の力を刀に移してゆく。が、黒妖犬は答えない。

ただ、青く光る俺の星をじっと見つめ、緋色の眼を嬉しそうに細めている。

そこで初めて妙だな、と俺は思つた。

これだけ腹が減つているというのに、何故すぐに襲いかかつてこないのだろう。

そもそも、黒妖犬は山に棲む妖怪だ。腹が減ればすぐ傍の人間を捕えて喰えはばすむ話だというのに、何故わざわざこの学校までやってきたのだ？

『……星持ちの肉……』

考えていると犬がようやく口を開いた。  
俺は刀越しにその瞳を捕える。

「 なんだと？」

『うれしやのう……極上の餌である人間の、更にその中でも強力な靈性を宿した星持ちの肉……この身に力を取り戻すにはふさわしき獲物よ』

そして彼は（雄だと言つのは何故かわかつた）、ゆっくりと立ち上がつた。

がりりと、金属が固いものをひつかくような音が立つ。その爪が地面をこすったのだ。

夏の太陽の光に、しろがね色の爪が反射して輝き、彼は僅かに身を屈めた。俺はとっさに構えた。

来る！

『 我は星の匂いに誘われてここに罷り出たまか』

その瞬間、何が起こったのかわからなかつた。

犬がまったく重さを感じさせない動作で地を蹴り、飛んだところまでは見えた。

が、その後、自分が刀を振り下ろしたかどうか覚えていない。気がつけば俺は、黒妖犬の前足の下敷きになっていたのだつた。

「…………うあつ…………！」

驚いた。

『デカイ団体して、なんて早さだ。

みしみしと身体がきしみ、胸と腹の数か所が焼けるように痛い。あのしろがねの爪が喰いこんでいるのだと、見なくてもわかつた。

『ほう。我が一撃を喰らつても生きているとは。坊主、なかなかの力を備えているな。どうりでうまそつな匂いがするわけだ』

「…………なせ、よつ…………」

犬の前足を避けようと俺はもがくが、このとんでもない大妖はびくともしない。

彼は俺の顔に鼻面を寄せてくんくんと匂いを嗅いだ。

『だが、お前ではない。もつとうまそつな匂いがする。もつと強い

もつと甘い匂いが

「……。」

俺は驚愕に眼を見開いた。

聞き捨てならないセリフだった。

この学校で俺以外の星師なんて、もちろん一人しかいない。

#### 『星持ちの姫』

心臓の鼓動が跳ね上がる。

その動搖を、犬は悟った。

俺をまんじりともせず見下ろしている緋色の瞳に、狂喜が躍った。

『やはつこにこるのだな……。』

「……離せ」

俺は低く言った。

激怒に近い怒りが体内を走り抜ける。

身体の上を抑えつけている黒い前足を右手で掴むと、そのまま怒りに任せて焰の術を叩きつけた。

「離せつて、言つてんだよつ……。」

じゅうつといつ音と共に、動物性の物が焦げる嫌な匂いが広がった。

犬がとつたに前足を退き、俺はその隙に飛び退る。  
途端に口許にこみあげる物があり、思わず吐いた。

びちやびちやと音をたてて、真っ赤に染まつた胃の中身が地面に飛び散る　内臓に傷が付いたらしい。

俺は喘ぎながら腹に右手を押し当てる。星印には、最低限の治癒

能力が備わっているのだ。

『……この小僧……我の毛皮を燃やすとは……！』

犬の声が怒りに染まつてゆく。

見ればその全身の毛が針のように伸び、縮んで、生き物のようにな  
蠢いている。

俺は空いた左手で刀を捕え、それを地面に突き刺した。  
焰の力が地面に走り、びしひと表面に亀裂が走つてゆく。

「……犬っこる」

俺は言った。

息を吸い込む合間合間に、空気が漏れるひゅうひゅうとう音が  
漏れる。

だがいつまでも座つてはいられない。

ぐつと、左手で刀を強く掴むと、立ち上がった。

「深紅に手え出してみろ……」

星持ちの姫。

それはすなわち、俺の幼馴染であり、この命かけて守ると決めた  
彼女のことだ。

「ぶつ殺してやる……」

吠えた瞬間、犬の毛束がひと房、ムチのようにしなりながら振り  
下ろされた。

が、その時にはもう俺も跳んでいる！

右手で犬の毛束を叩き落とすようにして振り払う。

漆黒の毛束が瞬時に灰と化し、地面に落ちるのを尻目に、上空から犬目がけて切り込んだ。

『調伏の焰ちょうふく……小僧の分際で、なんという力……！』

驚愕に見開かれた緋色の双眸が眼前に迫る。

間近で見るそれは、遠くで見るより遙かに澄みきつて美しい。俺は犬の背中に斬り付けた！

だが、鋼のように固い体躯は俺の刀を受け付けず弾き返す。反動で俺も吹っ飛びフェンスに叩きつけられそうになつたが、すんでのところで宙返りして回避した。

ざわつと制服の膝が地面を擦れ、熱が走った。

「……お前、ただの黒妖犬じゃねえな」

俺は刀の刃を指で撫ぜながら言った。

「星師の刀を刃こぼれさせるなんて、並の妖怪にはとてもできるまい当じやねえ」

『……フン。思いあがつた星持ちの小僧が、何を言いたい』

犬の尾がぴしりと地を打ち、それだけでも地面が揺れる。俺は犬の眼を見据えた。

そして 刀を納めた。

「何をしに来た」

犬が、瞳を丸くするのが見えた。……お、虚を突かれてる。その眼をまっすぐに正面から見据えて、俺は更に言つ。

「いや、何があつた、が正しいか。……お前のその力、俺達星師の保護を乗り越えてこの学校に入り込んだところからしてみても、少なくとも土地神か鎮守神の位。ちんじゅがみにも関わらずそれほど瘦せこけ、俺達星師を喰おうとしている。どう考へても尋常じやない」

犬は尻尾を打ち振つて、嫌味たらしくそう口の端を吊りあげた。

『見かけと違つて頭は悪くないようだな、小僧』

「どういう意味だよ、この犬つころ……」

『犬ではない。狼だ』

犬はゆっくりと立ち上がると、四肢を伸ばして身震いした。  
すると先ほどまで竪のよつこ蟲<sup>ムカシ</sup>でいた毛並みの触手がぴたりと

並みへと変化する。

俺は犬の影に呑まれながら茫然とその姿を見上げた。

かなり場違いだが、綺麗だと思つた。

こんな癒せて、こんな絶麗なら、何處でござるか、は、一休どねほんと美しい姿をしているのだろうと。

『確かに今は、かつてこの界隈の山を守護した鎮守神であつた。だがそれも今は昔の話よ。今の我には力がない。ゆえ力が必要なのだ、小僧よ。長きにわたる眠りの間に、失つてしまつた力がな』

犬は瞳を細めて言つた。  
俺は眉をひそめた。

「だからって、人を喰うな。神としての誇りはないのか？　人を喰え  
ばその時点で、あんたは闇の道に落ちるんだぜ」  
『もう遅いわ。我は既に妖と化しておる』

犬は自嘲するように笑つてそう言った。

俺ははっと顎を上げる。

ということは！

「おいつ、つてことはもう喰つたっていうのか！？」

『……案ずるな。最後に人を喰らうたのも、もう遠い昔の話よ。』

そう言つて再度笑う。

低い声が銅鑼のように重く辺りの空気を揺らした。

犬はわずかにあごとを開き、くつくつを身を震わせるようにして笑つている。

その様子を見上げながら、俺は、魔物が笑うのを初めて見たと思った。

そしてそれは中々悪いもんじゃないのかもな、とも思つ。  
ババアや深紅が聞いたらまた甘いとかなんとか言われるに決まつ

ているが、あるいは魔物でも笑えば、闇に生まれついたその性質を違えるこ

ともできるんじゃないか、と。

そう思った。

瞬間だった。

「すいぶん楽しそうね」

凜とした声に、背筋が凍りついた。

ぱつとふり返ると、その人はいつのまにか、給水塔の上に腰をお

ろしていた。

あまりにも無防備なその姿に、俺の全身をぞわりと恐怖が包み込む。

咄嗟に叫んでいた　来てはいけない、と。

だが俺の見る者を、背後では黒妖犬もまた同時に囁いていたのだった。

声も無く、彼が歓喜するのがはつきりとわかった。

俺は立ちあがろうとした、だがその時にはもう、頭上を黒く巨大な影が通り過ぎて行つた。

完全に間に合わない。

足がまるで鉛になってしまったかのように感じられた。絶望的に前へ進むことができない。

重い手足をひきずるように走り出し、俺は声を限りに咆哮した。

「深紅　！－！」

『捕えた、捕えたぞ』

黒い彗星のごとき犬の影が、深紅目がけて突っ込んで行く。

俺は喉が潰れるかと思った。

だが自分がそれほど声を上げて居る事にも、この時は気づかなかつた。

『捕えたぞ、星持ちの姫　！』

妖犬の歓喜の声が屋上を取り巻く空気を揺らす。

俺は物事の全てがスローモーションで進行してゆく錯覚に陥った。まんじりともしない深紅、その柔肌にぴたりと狙い定めたしきがねの爪、そして、何よりも凶悪に開かれた紅い口。

端から泡を吹き、びっしりと隙間なく並んだ牙をむき出しにしたそれが

深紅の小さく美しい姿を一番みに

「犬畜生が」

え？

俺は眼と耳を疑つた。

「誰に向つて物を言つて居る？」

深紅が　笑つたのだ。

紅い唇の端を吊り上げて、艶やかといつよつは、残忍に冷たく。そして立ち上がった。

俺よりも早く、妖犬にさえできない速さで。

驚いたなんてもんじやない それはほとんど脅威だった。

圧倒的な戦闘センスと強さ。

呪を唱えることすらせずに青藍を召喚し、彼が飛翔した時には既に手の上に新しい術を載せている。

「私たちはお前などに構っている暇はないのだ、忌々しい魔物よ！」

青藍が猛々しく吠え、低く角を構えた姿勢で妖犬めがけて突っ込んでゆく。

俺は肌が鳥肌立つのを感じた。

彼は 彼も、容赦がない。当たり前だ。

主人である深紅が魔物を激しく憎悪しているのだから、その召喚獣である青藍に情けなどあるうわけもない。

畜生、俺、間違つてた！

俺は舌打ちをした。心配すべきは深紅じゃなかつたのだ。

妖犬だつたのだ！

いま一度星から刀を閃かせる。

妖犬が鋭く叫び声を上げたのが聞こえる。青藍の角が前脚を裂いたのだ。

瞬間、わずかに動きが鈍つた漆黒の体躯めがけて放たれたは銀の針。

あれは交わせねえ！！

大体、空中戦は俺には不得手だつ一つの！

イライラしながら俺は走り、加速をつけると、強く強く地面を蹴り、妖犬の前に飛び出した。

視認できるだけの毒針を刀で叩き落とす！  
余りはしようがないから制服の袖で受ける！

『え、ちょ……蒼路　っ！？』

青藍が驚愕に眼を見開いて、身の動きを留めようとする。

俺はかすかに笑った。無理だろ。

だつて目の前のこの角には、もう十分に加速と重みが載っている。

「受けるぜ。青藍」

両手を広げて俺は見据えた。

稀なる青い鹿と、その背後に控えた彼の主人を。

鋭い角の切つ先が腹に到達する寸前で、呆れたように見開かれた深紅の瞳と瞳が合った。

彼女の唇が開く。

なにか言つている。叫ぶような大きな口で。  
けど。

( 駄目だ、もう、聞こえねえ…… )

『 小僧……！？』

というわけで、俺は妖犬を庇い、青藍の角に刺された。

そしてさつき犬から喰らつた怪我もあいまつて、そのまま意識を手放した。

ダサいな。

でも、ちつと無理しすぎたわ。

鎮守神レベルの妖怪と、深紅が相手じゃ……いくらなんでも分が悪すぎだ。

とうわけで『メン』。ちよつと震る。

\* \* \*

……て

泣いている。

誰かが、とても、悲しんでいる。

……じうじく

ああ、そういう声、俺ダメなんだよ。  
可哀そうすぎる、聞いていられない。  
なあ、泣くなよ。何があったか知らないけど。

ううして、あたしのせいなのに……！

おいおい、だから、泣くなつてば。  
それだけ苦しんでるならもうこいつらやんか。  
何が起きてても。  
なにがあつても。  
俺達は何回だって、やり直せるんだから。

怖いよ

……え？

怖いよ、蒼路……！

あ。  
何だ。この声、もしかして。

「深紅……？」

そこで俺は眠りから醒めた。  
自分で自分の声に起こされたのだ。  
ぼんやりとした思考に現実という外界が割り込んできて覚醒を促す。  
まぶたを開けると、薄暗い天井が見えた。  
それから鼻腔をついた薬品の匂い。

どうやらここは医務室で、俺はベッドに寝かされているらしい。  
訳もなく大きくひとつ息を吸い込んだ。  
そして吐きだしながら首を僅かに横に巡らすと。

「……深紅」

なんだか強張った表情の、彼女と。

「れ、ハル先輩……？」

そう、先輩が、並んでいた。

俺は思わず起き上がるつとしたが、その途端内臓を走り抜けた激痛に身体を折つた。

はうっ……痛み、超痛み……！！

さすが青藍、深紅の僕、とか思いながら身を震わせて痛みに耐えていると、横から呆れたような声がかかつた。

「馬鹿だなあ。肋骨骨折、内臓損傷、おまけにベラドンナまで盛られちゃって。普通の人間なら死んでるところだよ。あんまり校内でできてれつな怪我をするのはやめてくれないか、面倒至極なことになるから」

「……は、ハル先輩……なんで」「元気」

俺は涙目になりながら先輩を見やつた。  
だつて近づくなとか言つてる癖に、向こうからやつてくるなんて  
変じやないか。

すると先輩は嫌味たらしく腕を組んでため息を吐いた。

「君を見舞にきたわけじゃない。むしろ逆だ。注意しに来たんだよ」「注意つて、何の」

「忘れたのかい？ 僕は今学期まで現役の生徒会長。校内の平和を  
守る義務があるんだ」

「平和つすか……」

「そう。白昼の屋上で堂々と魔物とチャンバラやられてみろよ、校  
内は大地震だ世界の終わりだつて大騒ぎだつたんだ。なんとかごま  
かしたけど」

は。そういうば。

俺、妖犬に気を取られるばかりで、学校が授業中だつてことぜ  
んぜん考慮してなかつた。

……でも、それを言つなら昨日の放課後の一一件だつてかなりやば  
いと思うんだが。

俺は思つたが、ハル先輩はそれを指摘する前にはもつ身を翻して  
いた。

「とにかく、死亡コースにならないように戦つてくれよ、誇り高  
き星師さん」

「い……嫌味！」

俺は痛みとはまた別の意味合いで身体を震わせた。  
ほんとうに、なんてむかつくなんだ！  
が、罵声を吐こうにも身体が痛いし、そもそも先輩はもつ行つてしまつていた。諦めるしかない。

「……つだよ、相変わらずむかつくな……」

俺はため息を吐きだすと、改めて横の深紅を見やつた。

「なあ？ 深紅？」

深紅は答えなかつた。

それどころか深く俯いて、膝の上で両の手を固く握りしめたまま微動だにもしない。

俺はいぶかしんだ。

「おい、深紅？」

「……鹿」

小さな声が耳朵を打つた。

俺は可能な限り身体を彼女の方に傾けて、耳をそばだてた。

「え？」

「……馬鹿つて言つたのよ……」

「バカ？」

俺はその言葉を復唱した。

まさしく青天のへきれきである。

俺は確かにバカかもしれないが、何故このタイミングでそれを言われるのかわからない。

小首を傾げて頭を搔いた。

その瞬間。

「 蒼路ッ！」

「 はい！？」

怒鳴られた。

反射的に答えてしまった。

いつも通り、姿勢まで正して彼女を見つめる。

「お前を、ここまで馬鹿だと思ったことはない」

「は、いや、あの？」

「黙つて聞け！！」

凄まじい一喝であった。

……何でかわからんけど本気で怒つてる。

俺は従わざるを得なかつた。

わずかな沈黙が流れ、深紅がゆづくりと息を吸い、そして吐いた。彼女は言った。

「……再会してからのお前を見て氣付いた事がある。お前の戦い方の無謀さ。その精神の甘さ。何よりも、己の力量も推し量れない愚かしさよ」

深紅の声は低く、何か感情を押し殺すようにかすれていた。

この声、さつき聞いたばかりだ、と俺は意識の片隅で考えた。

夢の中で。とても遠い場所で。

深紅は、泣きじやくっていた。

。

「はつきり言つて、今のお前では一人前の星師にはなれぬ」

「……は？」

俺は止められたのに声を上げていた。  
さすがにカチンと来たのだ。

「なんでだよ

眉を吊り上げて問う。

すると彼女は立ち上がった。

寝ている俺は彼女に見下ろされる格好になってしまい、再びその存在に威圧感を覚えた。

深紅は恐ろしく冷たい眼をしていた。

氷のような怒りを浮かべた瞳で俺を見据えていた。

「わからぬか？　お前、このような戦い方でこの先、どうのこうして生き残つて行くつもりなのだ！　お前は自己を省みない。そのくせ自分勝手に突っ走つて、満身創痍になつてある。……私はな、その態度に腹が立つのじゃ！」

「……はあ？」

わからない。深紅の言いたい事がさっぱりわからなかつた。

はつきりと核心を突いてくれればよいものを、なにを湾曲的な表現ばかり使つているのか。

俺は思った。

なので、はつきりといつも言つた。

「意味わかんねーし。はつきり言えば？」

「……

間があつた。

深紅が黙つた間だ。

彼女の、元々白い顔がさらりと紙のよつて由へなり、それから一気に紅潮した。

深紅はまぶたを一度閉じて、一瞬のちに勢いよく開いた。同時に振り上げられた右手が俺の視界の端をよぎった。

ばちいんっーー！

マンガの効果音のように良い音をたてて、彼女のビンタは俺の頬を直撃した。

瞼の裏に星が炸裂する。

あまりの衝撃に全身が痛んだ。もちろん傷には相当響いた。

「………」

どこもかしこも痛くて悶絶する俺を尻叩いて、深紅はさつさと出で行つた。怒鳴りたいが到底できない。さつきと一緒にだ。

なんなんだ。

何なんだよ、みんなして！

『あーあ、君、幸せもんだねえ……』

今度こそ涙を流して呻いていると、ふいに今まで無かつた気配が登場して、俺は顔を上げた。

もう誰が来たって驚きやしないぞ。そつぽつて見てみると。

「……何してんのアンナさん」

『やあやあ

幽靈の彼女が、ベッドの端に腰かけて笑っていた。

## アンナ

「なんでここにいんの、アンナさん。ハル先輩ならもう行っちゃつたよ?」

俺が医務室のドアの方を振り向きながらそいつ指摘すると、アンナさんは緑の眼をいたずらっぽく瞬いて答えた。

『勿論、わかつてゐるわよ。だから出て来たんだもの』

『どういう意味?』

『待つてたつて意味。ハルと、あなたのこわーいお姫様がいなくなれるのを』

緑の瞳が猫のように細くなつた。あ、笑つてゐる。

笑つた顔、いいな、と思つてから、俺はやつぱり信じられなくな

る。

この人が幽霊だなんて。

目の前にいるのに、もう、死んでしまつた人だなんて。

(神様……)

柄にもなく祈りたくなつてしまつた。

あなたは何てひどい。

胸が苦しくなつて、緑の眼から眼を逸らした。

「……つうか悪靈さん、兄貴の傍にいなくていいわけ?」

『何言ってんのよ。離れられる時ぐらいは離れておかないと、ハル

に負担がかからっちゃうじゃない』

「いや、自分の意思でどうにかなる問題なのかよー?』

思わず突っ込むと、アンナさんは僅かにほほ笑み、長い脚を組んだ。

くつきりと彫りの深い顔に浮かぶものを見て、俺はぞきりと胸を突かれた。

そのエメラルドの瞳。

切なくて　そして、なんていうんだろう。

寂しい?

……ああ、そうだ。

とても寂しそうな、この彼女のまなざし。

『蒼路、だつけ』

「え? うん」

名前を呼ばれて素直に首肯する。すると彼女は眼を細めた。

『あんた、姫様のこと好きでしょ』

「なッ! ?」

俺は一瞬で真っ赤になつたと思ひ。

血が沸騰した気がした。いや、錯覚じゃない、ぜつてーそつだ。畜生、そんなしおらしい態度で、いきなり何を言い出すかと思えぱつ。

「す、すすす好きなんかじゃねーよつー勝手に決めんなよつー。」

絶叫して否定した。途端、また傷に響いた。

『ぎやつ！

たちまち身体を二つ折りにして悶える俺の耳に、愉快そつなアンナさんの声が届いた。

『あつはあ、ビンゴ！ 良いわね～、青少年』  
「ち、違つて言つてんだろ！…」

俺は呻きながらも顔を上げて精いっぱい否定し続けるが、アンナさんは顔の前で人差し指をすくち、と左右に振つて言った。

『「まかしても無駄よ無駄。あんた、わかりやすすぎだもん。いいじゃない、お姫様、綺麗だし。ちょっと気が強そうだけど「ちょっとビンゴりじやねえよ』

痛みに耐えながらもそこは思わず訂正してしまつ。  
するとアンナさんはまた笑つた。

……良く笑うひとだ。

『あはは。確かにね。魔物には容赦ないみたいだしねえ。さつきの黒妖犬も、あんたがいなきや間違いなく殺されてたわ』

「え 見てたの？」

アンナさんの意外な発言に俺は眼を見開いた。

驚いた。さつき屋上には俺と深紅しか星の気配はしなかつたと思つたが。

『見てた。というかハルがね、見に行つたのよ。昼間つから校内を騒がせてけしからん！ って言いながら。まあ、行つたら丁度君が倒れてたところだったんだけどさ』

「うわー」

あの醜態を見られていた、と知つて俺は頭を抱えた。恥ずかしい！仮にも星師が魔物を庇つて、しかも同じ星師からの攻撃に倒れる、なんて。

ババアが聞いたら末代までの恥、とかなんとか言つに違いない。俺だって　あんまり褒められた行動じやないことは自覚している。

けど……身体が勝手に動いちまつたんだ。

あの犬、理由はわからんねーけど、腹ペコだつたみたいだし。すぐ瘦せてた。

そんな状態の妖怪を手にかけるなんて、良くないことのよつた気がしたんだ。

『ね、蒼路つてさ。優しいのね』

「……は？」

アンナさんが身を乗り出してきてベッドに肘をついた。また笑っている。

その表情に、俺はやや斜に構えて問い合わせ返した。

近頃、甘いだの優しいだのって悪い意味で周囲から言われ続けているもんだから、俺はその言葉に対し懷疑的になつていた。

「自覚してるよ。最近みーんなに注意されらー。お前は甘い、優しきる、とかなんとか」

『え？　何言つてんのよ、あたし、褒めてんのよ？』

「え？」

また眼を瞬いてしまつ。……なんかアンナさん相手だと、このパターン多いな。

言動の予測が付けづらい人だからだろうか。

彼女は続けた。

『びっくりしたよ。今まで、魔物を殺した星師ならそれこそ星の数ほど見てきたけど、助けた星師は一度だつて見た事無かつた。しかも、あんな風に身を挺してさ……ちょっと感動しちゃつたもの』

「……いや、そんなに、格好良いものではない、と思つ」

率直な感想を述べられ、照れた俺はもじもじ口の中で呴いたが、アンナさんはそれをばつさり否定した。

『格好良かつたわよ！　あたしはそう思つたもの。それに多分、あの犬もそう思つたと思うわ。あたし達が屋上にかけつけた時にはもう飛んでいくところだつたけど、振り向いてあんたの姿をちらちら見てた。気になつてゐる様子だつたわよ』

俺はそんな妖犬の姿を想像した。

青空を飛翔する美しい身体が、戸惑つたように空に浮かんで、学校を見下ろす様子を。

そしてぽつりと呴いた。

「無事だつたのかな」

『わんちゃん？』

「ウン。腹ペコで、弱つてるみたいだつたから、気になつて」

『……大丈夫よ、多分ね。あれだけの妖怪なら、餌は自力で取れるでしょ?』

アンナさんは頷くと、優しい声でそう言つた。

俺も勇気づけられて、そうだね、と首肯した。

なんともいえない沈黙が落ちる。

俺は、ヘンな意味じゃなく、アンナさんを好きだと思った。

明るくて情に厚い。

良く笑う、ユーモアのある人。

太陽のような。

「アンナさんて」

『何よ』

「太陽みたいだ。ハル先輩は冷たいのに。似てないね、双子なのに」「ハルも、本当は優しいのよ。ただ君たちの事は、ちょっと、訳があつて。ごめんね。ゴキブリ見るみたいな眼で見てるけど」「ゴキブリ……」

あまりといえばあまりの比喩に俺はがっくり頃垂れてしまつたが、アンナさんの言葉のなかに引っかかるものがあるのに気づき、直ぐまた顔を上げていた。

そうだ、今しかないじゃないか。

アンナさんにそれを聽けるのは。

「アンナさん」

『なに?』

「教えてほしいことがあるんだ」

俺は单刀直入に尋ねた。

アンナさんの緑の瞳に理解の色がよぎつたのがわかる。

俺はそこでああ、と思った。そうか、彼女も。

アンナさんも、それを話すためにここに来たんだ、と。

『……ハルが星師を憎む理由?』

彼女の表情が翳つたのが胸にこたえたけれど、俺は知らなくてはならなかつた。この人を助けるために。この人の兄を、救うために。

「そうです。それから　」

「

だから言つた。とても残酷なひとつひとを。

「 それから、あなたが死んだ理由も」

アンナさんは、ただ笑んだ。

## アストリア

そしてアンナさんは語り始めた。  
長いながい彼女の物語を。

『どこから話そうかしら。そうね まず。  
あたし、ハルが大好きなのよ。  
もちろんヘンな意味じやないわよ。きょうだいとして、家族とし  
て。

あたしたちは男女の双子としては多分、規格外の仲の良さだった  
と思うわ。

って言つても、仲良しになつたのはつい最近だつたんだけじゃ。  
中学生くらいまでは死ぬほど仲が悪かつたの。お互に憎み合つて  
たぐらいで。

どうしてかつて？

だって、あたしたち双子でしょ。双子つて、いつも周りからワン  
セットで扱われるのよ。

双子だから一緒にしましよう、同じ服を着せましょうつて。ふざ  
けんなつて感じよね。

何よりあたし達、半星だつたし。

あ、言い忘れてたけど、うちつて歴代の星師の家系なのよ。  
外国では星師のことアストリアつていうのよ。知つてるでしょ？  
え、知らない？ …… 蒼路つて、面白い奴ね。

とにかくね、うちはグランパもグラーマもパパもママも、みいん  
なアストリア。

だもんで、あたしとハルが生まれた時は相当がっかりしたみたい。  
だって、よりによつて半星よ？

半分の力しか持たない異端児が一人もじやあ、そりや一族のお荷  
物よね。いつそ星を持たないで生まれたほうがどれほど楽かという

ものだわ。

でもあたしたちは生まれてしまった。半星を分かち合ひ双子として。

でもどうにかしてあたし達をアストリアにする方法はないか親はこう考えたのよ。だつて、アストリアしか生みだしてこなかつた家だもの。他のなにか、パン屋さんとかさ、スチュワーデスとかにしようなんて思いもよらないわけ。

でも半分の力しか持たないので到底戦えないでしょう？  
すぐに死んでしまうのがおちだわ。

親は始めは諦めようとした、つて言つてた。

でもね、まずいことに、あたしとハルは、半星としてはかなり強い力の持ち主だった。それこそ弱いアストリアと同じくらいには、二人とも力を備えていた。

だから一人で一緒に戦えばいい 親はこう判断したのよ。

……そしてあたし達は双子のアストリアになつた。

世間様からは受けが良かつたわ。珍しかったんでしょうね。  
けつこう、有名なのよ。あちらでは。

あたしたち途中で解散しちゃつたし、日本にはほとんど帰つて来なかつたから、こちらでは全く知られてないと思うけど。

そう、解散、したのよね。中学を卒業と同時に。

もういやだつて言いだしたの。ハルが先に。

あたしはね、嫌い嫌いって言つてても、心のどこかではハルをやっぱり大好きだつたから、言わなかつたけど、向こうに嫌だつて言われたら力チンとくるじゃない？

大げんかしたの。

あたしはアストリアの仕事を続けたかった。誇りを持つていたからね。

誰かの力になれることが嬉しかつたし、笑つてくれると自分の存在を認めてもらえるような気がして、ほつとしたの。自己満足だけれど。

けどハルはまじめだつたし、星以外にやりたいことがたくさんあつた。

というよりも、星を憎んでいたのね。

あの子、チョロを弾くの。知ってるでしょ？

とても良い音を出すのよ。

…… チェリストになりたいんだと思う。本人はけしてそう言わなければ。

だからハルにとつては、星なんて邪魔な烙印でしかないのよ。

とにかく、ある時から彼は、もう絶対にアストリアはやらない！的一点張りを始めたわ。

で、あたしと絶交して。

あたしはひとりでアストリアをやり始めた。

はじめはうまく行つていたのよ。

あたし、言つたように結構強かつたし。

なにより空間支配能力を持つていた。

わかるでしょ。日本で言つ、空間師の力を備えていたの。

半星なのにアストリアができたのも、この力を持つていたからつて所が大きいでしょうね。

ご存じの通り、空間師の絶対数はとても少ない。だからいくら半星の双子でも、あたしたちは重宝されたの。

あ、勿論ハルも空間師だつたわよ。

はじめてあんたと姫君に会つた時、結界張つて威嚇したでしょ？

あれ、あたしとハルが張つた結界だつたの。

……で、どこまで話したつけ？

ああ、そうそう。ハルと別れてあたしは一人でアストリアをやり始めた。

はじめは上手く行つてた。ハルがいなくても。

でも一年ぐらいたつて あたしはその頃、イギリスのハイスクールに通い始めていたんだけど なんか、身体がおかしくなったのよね。

じつ、きしむつていうか。

星を使うと、身体じゅうが痛いの。

病院に行つたけど異常はないって言われたから、氣のせいかなつて思つて、そのままアストリアは続けたけど。お決まりの展開が待つてたわ。

いつこつに、身体は良くなる氣配がないの。むしろ、酷くなつてくるの。

身体のきしみというか、なんだらう……肉体の内側に、なにかが住んでいるような妙な感覚がはじめて。

それが星を使うと暴れて、もー、本当に苦しいのよ。いつそ殺してくれつて言つ位。

あたし、段々、悶絶するようになつてしまふ。

歩けないくらいになつちゃつて。

戦闘を外されて、アストリアの治療師に身体を見てもちつたの。そうしたら。

信じられないことだけれど、体内に星が根を張つてゐる、つて診断が下された。

星が根を張るつて聞いたことある?

……あるんだ? そう。じゃあ、深くは説明しないわ。

とにかくあれつてさ、星の持ち主が星の力に負けた時に起きた、一種の拒否反応でしよう。

蒼路も知つてゐると思つけど、弱つた星師や、星師としての務めを放棄したり、間違つた行動をした星師には必ずこの定めが待つている。

星師は星に殺される可能性があるの。

まるで、神様が、もうお前は要らないから死ねつて言つてるみたい。

……あたしはショックだった。だつてそうでしょ?

半星で生まれたのはあたしの責任じゃない。そう決めたのは神様

よ。

なのに、好きでアストリアをやつてるあたしに、星の根を張らせたのよ。

でもまあ、根を張つた星に勝てた星師はいない。あたしはどんどん衰弱していった。

で、ハルがさ。

久しぶりに日本からイギリスにもどつて来て、あたしの病状を知つたわけよ。

……その時、信じられない事にあいつ、泣いたの。星の運命に対して泣いたんじやないわ。星が憎いから泣いたわけじゃなかつた。

あたしに対して、「ごめんつて言つて。

そう、謝罪の意味で大泣きしたのよ。

何も謝ることなんてないのにね。そう思うでしょ？

で、あたし達は晴れて仲良しの双子に戻つたのだけれど 病状は元に戻りはしない。

ハルはあたしの傍についててくれた。ずっとね。

信じられないことにアストリアの仕事に戻つてくれさえした。罪滅ぼしのつもりだつたみたいで、見ていられなかつたけど。あいつはね、優しい子なのよ。

誰よりもほんとうは優しいの。

血を見るのが嫌いだし、誰かが傷つくのも嫌い。

皆に幸せでいて欲しいと思っている子なの、本当は。だからアストリアの仕事が嫌いなんだと思うわ。

なのに無理して復帰してさ。どんどんやつれていつて。

このままじや一人とも死んじやうつて思つて、あたし、言つたのよ。

無理しなくていいわよつて。

あなたの星はあたしが引き受けけるから、あんたはやりたいことをやんなよつて。

あたしは恨んでなんかいないし、憎んでもいいから。誰も。

そう言つたの。

それで、死んだの。

……でもね。やつぱりハルが心配でさ。

気が付いたら彼に魂がくつついちゃつてて。  
離れられないのよ。

ハルはずつと泣いてた。あたしが死んで。  
迷子になつたみたいな顔をして……あたし、そこで氣付いたの  
ね。

ハルはずつとあたしを必要としてくれてたんだって。  
なのにあたしはそんなハルを捨てて、ひとりでアストリアをやろう  
うとして、それで勝手に死んじゃつたんだって。  
すじぐ身勝手な妹だつたのよ。

だから謝りたかったの。

でもね、それを言う前に　ハルに魂が憑依してしまつた。  
それからあとは自分の自由も利かないし、かといってハルに祓つ  
てくれるよう頼んでもハルは受け付けてくれないし、あまつさえ暴  
走しはじめちゃつたし。現在に至る。  
あたしはこうやって僅かに自由がきく時間を見計らつて、キヨ様  
に助けを求めに行つた。

……それで、後はあんた達の知る通りよ。』

「それで、ハル先輩は 元々嫌いだつた星をさらうに憎むようになつたつてわけ？」

『そういうこと。……あたしのせいだわね』

話終え、アンナさんはやや疲れた様子で髪をかきあげた。  
俺はなんだか苛立ちを覚えて軽く彼女を睨みつけた。

「カンケーねえだろう。そんなの自分だけの問題で、他人がどうできる」とじやねえ』

アンナさんは答えない。

ただ笑んで、静かに息を吐いた。

俺はその何とも言えない表情を見つめている内に、彼女の身体の輪郭が薄くなつていてことに気がついた。

いつかのように、黄金色の燐光をちらちらと瞬かせて、バターのようにならけて溶け始めていく。

思わず声をあげた。

「ア、アンナさん!」

『え? 何?』

「か、身体! っていうか靈体!」

俺が指差して口をぱくぱくさせると、彼女は自分の体を見下ろして、納得したように『ああ』と呟いた。

『駄目だ。それもう時間切れだわ』

「時間？」

俺は心臓をドキドキさせながら問い返した。

この鼓動はなんだらつ ああ、そつか。

俺、怖いんだ。

アンナさんが消えてしまつのが。

『ハルが呼んでる。戻らなきや』

すっくと立ち上がったアンナさんの靈体から、膝から下の部分が  
どろりと崩れて溶け落ちた。黃金色の光が宙に広がる。

つづいて髪の毛先に耳、身体の外側の部分が順当に溶けて行く。

俺はぞっと背筋を凍らせた。

これは、一時的なものなのか、それとも？

「 アンナさん！ 」

思わず呼びとめていた。

彼女は首を傾げて答えた。

まるで緊迫感のない、愛らしさこといふべきの仕草だ。

『 なあに？ 』

「 何じゃないよ！ もしかして、ハル先輩から離れるのって靈体に相当な負担がかかるんじゃないの！ ？ 靈体に傷がついたら、成仏も、生まれ変わることも、できないんだよ！ ！ 」

必死な自分の声が、まるで悲鳴みたいだった。

アンナさんは少し眼を見開いて それから、細める。

猫みたいに。二日月みたいに。

どうしてだよ、と俺は歯ぎしりした。

じつしてこんな時にすらあなたは笑うんだ！

「アンナさん！」

『いいもののあげよか。蒼路』

アンナさんは俺の声なんてまるっきり聞いてないみたいだつた。  
やにわに笑うと、俺の方に身を屈めて、同時にその細い首に手を  
当てる。

一瞬、星を使うのかと思ったけれど、そうじゃなかつた。  
首にかけていたネックレスを外したのだ。

極細の銀鎖にぶら下がる緑の石。

輝く夏の森のような色合ひが、双子の瞳の色と酷似していた。

『あげる』

アンナさんが言った瞬間、ネックレスをつまんでいた指先が溶け  
た。

俺は泣きたくなつたが、彼女はぜんぜん構わずに、指のない手の  
ひらにそれを載せて俺に押し付けてきた。

ふわりと羽が載るような感触が手のひらに触れた瞬間、質量を伴  
う。

冷たい石と金属の重さが、わずかに俺の手のひらに沈み込んだ。

『お守り。きっとあなたをお守ってくれる』

アンナさんはさつぱりと言つて、俺を見た。  
そしてまたにっこりと笑う。

俺は何か言おうとした。

気の利いた一言じやなくとも、でも何か、この人に届くことばを。

けれど。

『じゃあね。蒼路』

「アンナさん……」

何を言つよりも先に、彼女は溶けて消え去つていった。  
光の届かない場所に。

孤独な闇の中に。

「くわつ

俺はベッドを殴り付けた。

固いマットの感触が身体を空しく伝つたけれど、今度は痛みなん  
て感じなかつた。

痛いのは、俺じゃない。彼女なんだ。

俯いて両手で顔を覆つた。

ああ、アンナさん。

あなたはどうして。

(あたしは誰も恨んでなんかいない)

どうして、そんなに優しい。

\*\*\*

「……ただいま

学校が終わり、俺は深紅に即刻帰宅させられた。  
あ？ もちろん抗つたさ。

深紅にだけ護衛の仕事をやらせて、俺がのうのうと家で寝てるわ

けにはいかないってな。

けど、そう言つたらあいつは俺を鼻で笑いやがつた

「お前、だからこそバカだと言つているのよ。自分の不始末でそんな怪我をしておいて、あたしとまともに張り合えると思つているの？ 大きな勘違い、傲慢もいいところだわ。足手まといだからさつさと帰つて寝て頂戴。あんたに今できることはやつせと怪我を治して復帰することだしょ」

……だつて。

正直かなり腹が立つたが、事実なもんで言い返せない。

怪我は確かに酷かつたし、この状態では護衛の仕事をするどころか、気配を殺してハル先輩の近くに控えていることすら辛い状態。それより何より深紅が昼間のビンタの件以降、著しく機嫌を損ねているようなので俺は大人しく言いなりになることにした。

「あれえ？ お兄ちゃんだ？」

玄関を開けるなり、藍がリビングの方から駆け寄つて来た。

その声を聞きつけて母も出てくる。

一人とも一様に驚いた顔をしていた。

「蒼路。どうしたのよ、早川じゃない。深紅ちゃんとの仕事は？」

「……ちゅうと」

「ちゅうとじやわかんないでしょ。どうしたの？ また怪我でもしたの？」

「べつに

相変わらず母は鋭い。

俺はふい、と顔を背けてスニーカーを脱ぎ、家に上ると、その

まま母の横を通り抜けようとしたが

「ギヤツ……」

腹に肘鉄を喰らって悶絶した。母のしわざだ。

廊下に膝を折ってしまった俺はうらめしく母を睨み上げた。

「……か、かあさん……マジで死ぬから……」

「ウソをついたお前が悪い。ほれ、じらんなさい、怪我したんじゃない。何したの。言つて」「うん」

厳しい視線に見下されて僅かに竦んだが、魔物を庇つて怪我をしたなどとは恥ずかしすぎてとても言えない。腹の傷を押さえながら立ち上がつていた。

「別に……だから、何もないつて」

「夕飯抜きにするわよ！？」

「マジでつ！？」

俺は迷つた。

同時に、台所の方から漂つてくる料理の匂いを嗅ぎつけ、今日の夕飯のメニューを想像する。

香ばしく肉の焦げた匂い、にんにくとハーブの織りなす重厚な香りのハーモニー、その中に僅かにパン粉の氣配がするつ！

「お兄ちゃん、今日、ハンバーグだよ～」

背後で藍が答えを言った。

俺は本気で悩ましく、頭を抱えて唸つた。

「ハンバーグ……くつ

「く、じゃないでしょ。何真剣に悩んでるの、阿呆！　お母さん何があつたのかさつさと教えなさいよ、格好つけてないでつ」

「るせえ、これは俺の沾券に関する問題なんだ！」

「じゃあお兄ちゃんのハンバーグ、藍がもうつ

「それは駄目……」

「それは駄目……」

反射的に妹を叱つてから、俺はハアとため息をついた。  
仕方がない。

母さんと藍は星師じゃないし……まあ、大丈夫だろ？

「わかつたよ、話すから。取り合えず着替えさせて」

諦めてそう言つと、母は大袈裟に頷いた。

「よひしー

で、まずは自室に戻つた俺だが。  
部屋のドアを開けて、制服を脱ごうとブレザーのボタンに手をかけた所……

『……蒼路！』

耳に届いた人ならざるもの声にひっくり返りそうになつた。

ええー！？

一体どこから、と思つて視線を巡らせると、ベッドでもなくマンガの詰まつた本棚でもなく、机の上でもなく、窓枠の上だった。日の長い夏だからまだ夕暮れには遠いけれど、空気が青っぽく染まり、陽は翳り始めている。

そんな空を背景に一本の猫の尾が揺れていた。

おお、まさに逢魔ヶ刻、だ。

「よお、花緒おー。」

俺は思わず笑顔になつて駆け寄つた。  
そう、猫又の花緒が、窓枠にちよこんと座つていたのだった。

『蒼路、血の匂いがする』

ぱてつと音をたてて窓枠から飛び降りると、花緒は俺の足もとにまとわりついてきた。

ふんふんとしきりに鼻を動かしながら一本の尾を振り立て、無意識なのだろうが白い毛並みをふくらませている。

その瞳は針のように細くなっていた。

興奮しているのだ。星師の匂いに。

『いい匂い。甘い匂い。怪我したの?』  
「……ちょっとな。あんまり嗅ぐな、喰いたくなるぞ」

俺はさりげなく花緒の身体を手で押しのけて、この身体との距離を広げた。

星師の血肉は魔物達にとって至高の珍味なのだ。

強い力を宿すだけに喰うつまい上、魔物達に特殊な力を与えてしまふらしい。

つまり俺達は魔を祓う存在でありながら、魔を引き寄せてしまつ体質なのだ。

……不思議だと思つ。

星師に力を与えたのは神々で、それは俺達が神々のために魔物を祓う役目を担つたからだ、と言われている。

けれど俺達がいくら魔物を祓つても、この命続く限り魔物は湧き続けるだろう。生き物の骸に群がる虫たちのよつこ。どう考えると不思議でならないのだ。

ほんとうに俺達は神々からこの星を得たのだらうか。  
だとしたら何故、星は魔を吸い寄せるのか と。

『蒼路?』

黙々と考えていたら、花緒の声で我に返った。

はつと白い猫を見下ろす。彼女は眼を蛇のように細くして俺を見上げていた。

「あ、悪い。それで、どうしたんだ? わざわざ」

尋ねながらずつと手にしていた鞄をベッドに放り投げた。  
同時にネクタイをはずして、シャツの襟をはだける。

花緒はそんな俺の一挙一動を興味深そうに眺めながら言った。

『うん。蒼路、気がついた? 北山の犬塚の封印が、今朝解かれた』  
「なに?」

俺は花緒の報告に驚くと同時に、はたと気がついたことがあって手を止めた。  
頭に浮かぶのはあの黒妖犬。

尋常でなく腹をすかしていた彼はこう言つていなかつたか。

今の我には力がない。ゆえ力が必要なのだ、小僧よ。  
長きにわたる眠りの間に失つてしまつた力がな。

“長きにわたる眠り”とは、つまり。

「封印のことか」

『え? 蒼路、やっぱり気づいてたの?』

花緒がぱつと顔を上げる。

俺は小さく頷いた。

彼女はこの丘の街を守る意識が強い、<sup>よ</sup>善き妖怪だ。街に異変あらば全力をもつて解決しようとする。

今日俺の元へやってきたのも、だから、そのためなのだろう。

「ああ。気づいてたつづーか、そいつ、俺のところに来た」

『え！ 星持ちの肉、食べようとしたの！？ するい抜け駆けっ  
「突つ込みどころが違うだろ花緒！ ……まあ、そういうこと。正  
確には俺の星を狙つたわけじゃないみたいだつたけどな』

『ああ。それも聞いた。星持ちの姫君が、蒼路の傍に現れたって』

訳知り顔に頷く花緒に、俺の心は不穏にざわついた。

星持ちの姫 深紅。

元より魔物を吸い寄せる体を持つ俺達星師のなかで、抜きんでて魅惑的な芳香を放つ娘。

あいつの存在は魔物達の間ではもはや生きた伝説らしい。  
生まれた瞬間から魔物を御身に引き寄せ続け、ゆえに故郷を滅ぼしてしまった、血ぬられた姫君。

『本当に、ものすごく美味しいそうな匂いがするよね。あの姫君。でも不思議。なんだか力を押さえられている感じもする』

ぱたぱたと尻尾を振つてそう言つ花緒に、俺は低い声で答えた。

「……封呪をかけられてるんだよ。強すぎる星を持って生まれたから

『ああ。なるほどね。で、犬塚の鎮守神は、姫様を食べたの？ 食べなかつたの？』

妖怪だけに、花緒はぞつとするようなことを無邪氣に呟つ。

俺はただ首を振つて今度こそシャツを脱ぎ棄てた。

「喰えるわけねえだろ。俺がついてるんだから」

『へえ。蒼路は姫君の護衛なの?』

「ちがう」

『じゃあ恋人?』

「……もつと違つ」

「それよりも花緒。いまあの犬、ビコにいるかわかるか?」  
顔がじわじわ紅くなるのを自覚しながら俺は私服に着替えた。  
動きやすいジーンズにポロシャツ。

夏なのに紺や藍という暗い色合いで選んでしまつのは、この後に控えた展開を何となく予測しているからだろう。

濃色は、闇に紛れる。

着替え終えると俺は花緒をふり返つて言った。  
すると白い猫は実にあつせりと首肯して、再び窓辺に飛び乗つた。

『わかる。おかげで街中の妖怪たちが大騒ぎしてるの。だから蒼路に頼みに来た』

……やつぱりな。

俺は思つたが、口には出せなかつた。

代わりに手を探るよつに腹の傷に押し当つて、その治癒状況を確かめる。

どうやら深紅が治療してくれたらしく大事には至らなかつたが、この傷、実を言つとかなり深い。

ハル先輩が言つていたように、俺が星師でなければ間違いなく死んでいるだろう。

しかし。

眼を閉じると浮かぶ、いつも厳しい表情をした深紅の顔。  
痩せこけた鎮守神。

悲しみに暮れるハル先輩と、痛々しいほどに笑うアンナさん。  
俺は右手をきつく握りしめる息を吸つた。  
怪我をしていようがいまいが、そんなことは関係ない。  
大事なのは俺に今、やるべきことがあるということだから。

「よし。んじゃあ、行くか。ちょっと案内してくれよ、花緒」

ぱんっと両手を打ち合わせて笑うと、花緒は応えるように一本の尾を振り立てた。

『わかつた』

\*\*\*

『人間の足は遅い』

ぼやく花緒の背に乗せてもらい、黄昏の街まちを駆ける。

眼下に広がるのは薄闇に包まれて濃い紫色の影のように見える俺の街。

君見丘、といふ。

君に見える丘 そんな名前を持つこの街は、元々は山だつた土地を開発してつくられた街だ。

開発元の会社は鉄道会社で、山を切り崩して駅を建設し、そこを中心として街を広げた。

だから今でもこの街は山を連想させる形状をしている。

丘のてっぺんから中腹にかけてまではさつき述べた学校や住宅地、病院などの生活施設が密集しており、小奇麗に整頓されているが、そこから下の裾野にあたる地区にはあまり手が及ばなかつたようだ。今でも昔ながらの縁深い田畠や神社、ゆるやかに流れる小川といったのどかな光景が残されている。

その本質を物質ではなく氣 つまり、心や感情、思念という力のことだ とする魔物たちは、環境から氣をとりいれることでのきない都會にはあまり住みたがらず、縁豊かな田舎を好むことが多い。

まあ中には魔物のように、人の悪しき心を好んで都會に跋扈する魔物達もいるが、今は彼らの事は置いておこう。  
ともかくにも、花緒が俺を導いてるのは、いつそうとした縁に覆われた、山の裾野めがけてだつたのだから。

「……暑いな」

これほどの高台を飛んでいても、吹き付ける風はほとんどなく、夏の暑気は弱まらない。

俺は腕で額を軽くぬぐいながら花緒の背にまたがつていた。  
彼女の毛並みはしつとりと細やかなだけに、肌に触ると暑い。

『蒼路へ、また雑魚が来たよ』

汗を拭っている俺に向けて花緒の声がかけられる。

俺はまたか、と舌打ちをして眼下の闇の海を見下ろした。

足もとから広がる藍色の靄のなか、湧き上がるよつにして、蟲のような雑魚の魔蟲たちが絶え間なくこちらへと上つてくる。星の、星師の血の匂いに誘われているのだ。

キチキチと嫌な鳴き声をたてて無数に飛んでくる彼らは、大抵は星の力に反応して、俺達に触れることすらできず蒸発してゆくが、

中にはそれなりのレベルの魔物も混じつていて、家を出てから何度襲われたかわからない。

今しも、一匹の鳥妖がするどい嘴を開いて突っ込んで来るところで、毒々しい緑色の羽が闇に妖しく光をはじいた。

『蒼路!』

足もとを素早い動きですりぬけたその鷲のような姿の妖怪に、花緒も気が付いて俺に注意を呼び掛けた。

「ああ、わかってる」

俺は短く応えると、花緒にまたがる両足に力を込めた。

振り落とされないように体制を整えると、両手を解放し、宙に魔法円を描いて呪を唱えた。

『我、星を以て万魔を調伏すべし』

鳥妖が俺の上空に閃光のように伸びあがり、そのまま急降下を始めた。猛禽類より尚鋭く巨大な嘴がまっすぐに俺の眼玉に狙いを定めている。

蒼く光る魔法円を両手の中に掲げて俺はやれやれとため息を吐く。ほんとうは、術はあんまり得意ではないんだが。  
……とにかくにも、今は極力体を動かしたくない。

「降魔調伏」

小さな声で呟いた瞬間、手の中から蒼い光があふれ出た。

鳥妖は悲鳴をあげる間すらもなく、その光に呑みこまれて消滅する。

おまけに魔蟲たちも、いましも林の合間からわらわらと飛び立とうとしていた別の魔物たちも、皆灰と化して崩れ去った。

ふう、と軽く息をついて俺は呪を解いた。うまく行つた。

『蒼路、前よりは術、うまくなつたね』

何事もなかつたかのように飛翔を続けながら花緒が言つた。  
俺は首を振つてわずか苦笑する。

「まあな。でも、やっぱ肉弾戦のほうが得意だ」

『今はやめたほうがいいよ。身体を動かして傷が開きでもしたら、もつとたくさん蟲が寄つてくる』

「わかってる」

短く応えて俺は腹に右手を当てた。  
じわりとした温もりが傷に染みいる。……確かに、しばらくなはあまり派手に動けない。

この血の匂いが呼び寄せる災には、俺だけではなく俺の大好きな者までをも飲み込むだろ？

「しばらくなは、術を中心に戦つつもりだ。……それより花緒、まだ

?』

『もう着く』

答えた花緒の声は明確だつた。

白い毛並みに金色と緑の模様を持つ美しい身体が、ひらりと宙を旋回し、それからふいに下向きになつた。下降を始めたのだ。

だが衝撃はほとんどなく、俺は余裕を持つて周囲の景色を確認することことができた。左前方に黒くつじめく小川、蛇行するその川に沿つて伸びる道、辿つた先にはひどく崩れているものの、あれは

おそらく朱の鳥居。

抑えてはいても隠しきれるものではない妖気が、鳥居の奥のこんもりとした林の中からあふれ出でていた。

「神社に隠れているのか……」

俺が呟くと、花緒はうんと首肯した。

『今は誰も参拝しない、廃れたお社。忘れられているけれど、ここが元々の彼の家だった。北山の塚は後から人が勝手に作ったものだ』

彼、というのが誰を現しているのかは無論明白だった。

俺は花緒の言葉に胸を痛めて、崩れ落ちた鳥居を見下ろす。

忘れられた神、つまり。

俺達が忘れ、見捨てた神。

「どうして、人は……」

俺は花緒の毛皮に顔を押し付け、知らず呟いていた。  
風がゆるやかに吹き付けて髪を動かしていく。

「……人は、見えなくなってしまったんだろう……」

ここに、確かにあるものを。

こんなに温かいのに。やわらかいのに。

彼らは確かに生きていて、人と同じものを見て、同じことを感じる心を持っているのに。

『 降りるよ、蒼路』

静かな声で花緒が言つて、やがて彼女はふうわりと地上に降り立つた。あまりにもなめらかな着地で、そうと言わなければ気付かないほどだった。

彼女の身体が水平になり、俺はようやく地面に降りる。まだ完全に落ちていない日が照らし出す、眼の前の光景。そこには、ぼろぼろの鳥居があつた。

太い柱が中ほどからぽつきりと割れ折れて、半分しか形を保てていない。

うつそつと茂った雑草は周囲の木立と同じほどの高さがあつて、かつては参道であったであろうものを完全に覆い隠していた。

壊れた鳥居、それが、西日を浴びて燃えるような朱色に輝いている。

### 『蒼路』

地に鼻をこすりつけて匂いを嗅いでいた花緒が、顔を上げて俺を見た。俺も頷いた。

鳥居の方へと数歩足を進め、草むらの中に埋もれてはいたものを取り上げる。

「ああ」

それは、千切れた注連縄しめなわだった。

人の住む現世と神の常世といよを隔てるもの、つまり結界の役割を果たす縄。

縄が落ちていた場所の草は、折れてまだ間もない様子だった。つまり つい最近誰かがここに来て、この縄を切ったのだ。明確な目的を以て。

『呪力で切られてるね。この縄』

「ああ

花緒の指摘に俺はふたたび頷いた。

彼女が身体を緊張させているのがわかつた。

美しい毛並みが波打ち、見えざる敵を威嚇するかのように一本の尾が天に向いている。

俺はしばらく手の中の縄を見つめていたが、やがてそれをぽいと林の中へ放り投げると、歩き出した。

注連縄が切られたとはいえ神域は神域、参道に一步足を踏み入れた途端、襲い来る魔蟲たちの数は激減した。

だが彼らが鳴りを潜めているのは結界の効力よりも、恐らくは、この奥に控えている存在への恐怖のためであろう。

俺は昼間会つたばかりだからさほど驚きはしなかつたが、『彼』と初めて見えるらしい花緒はさつきから全身を緊張させて、できれば前に進みたくないというようにじりじりと俺の後を一步ずつ着いてきていた。

それはそうだ。何しろ、今も全身に吹き付けてくるこの気配。時刻が時刻であるだけに、闇が濃くなる度に肌が凍りそうなそれでいて、焼けつきそうな そんなただならぬ気配が辺りを支配してゆくのが感じられた。

妖氣、と一口にくくつていいものではない。  
初めて出会うものではあるが、これこそが恐らく神氣といつもの一種ではなかろうかと、俺は歩を進める度に思った。

「蚊がす」  
「な

ぱちん、と腕を手のひらで叩いて俺は言った。

なんと場違いな一言を、と思われそうだが、これは重要なポイントだ。

魔物が生息する場所には、生き物の虫は決して寄りつかないのだ。人よりも本能に依つて生きる生物であるだけに、動物や虫たちは彼ら魔物を感じる力がとても強い。

だから、今こうして辺りをうわんうわんと蚊が飛び回っているといふことは、逆にいえば、他に魔物がないという証明になる。

それだけあの鎮守神の力は強く、高位にあるのだ。

証拠に花緒が立ち止った。

どうしたよとふり返れば、首を横に振つてこれ以上は行けないと言つた。

『ダメ。さすがに恐れ多す、あるいは

言つなり花緒は後ろ足を置んで、お座りの格好に座り込んでしまつ。

尻尾もしゅんと前脚に巻き付けて、本当に弱つた様子である。俺は仕方なく頭を搔いた。

「じゃあ、ここで待つてくれよ。何かあつたら合図するから  
『うそ』

花緒は尾を振つて答へ、それから、思い付いたように言葉を付け足した。

『でも、気をつけてよ。蒼路』

「大丈夫だ。あいつは、悪い奴じゃない」

俺は言つと、いま一度前を向いた。

さすがに長い夏の日も沈みかけており、一寸先は闇だった。

鬱蒼と茂る木立のシルエットが不気味に参道に覆いかぶさり、こちらの侵入を拒んでいるように見える。

だがその奥に、ぼんやりと浮かぶ光があつて、それが『彼』の灯したものだと俺には何故かわかつた。

いま一度花緒を振り返り、俺は笑つてみせた。

魔物たちにも笑顔の意味は通じるのだ。

「じゃ、行つてくる。ああ、もしも俺の身に何かあつたら、高台の  
覓のババアに伝えてくれ」

『わかつた』

花緒がしゃがみこんだまま頷いたのを見届けて、俺は闇の奥深く  
へと入つて行つた。

\*\*\*

この神社は、昔は相当な数の参拝者がいたに違いない。

昔は大きかつたであろうと思わせるきちんとした造りをしていた。  
参道をゆつくりと歩いていくと、手を清めるための手水舎を横目に  
に灯籠が立ち並ぶ場所に差しかかつた。

苔むして草花がびっしりと生い茂るそこを過ぎれば、元々は拝殿  
だつたのであるう、崩れ落ちた建物が見え、その前には一頭の狼の  
石造せきぞうが鎮座ちんざつしていた。

俺は立ちどまるとその眷属の像を手のひらで撫でた。ひび割れて  
耳や尾のあちこちが欠けた痛々しい姿。

かつては訪れる者たちを見守つていたのであらうが、今は石造と  
呼ぶのすらためらわれる佇まいだつた。

「……よう

俺は石造たちの、黒ずんだ瞳を覗き込みながらそう声を発した。

「長いお勤め!」「苦労さん。お前らの主人はどうだ?」

いら  
応えは、無い。

だが石でできている筈の彼らの瞳が、俺の呼びかけに反応し、濡れたような艶と生き物の細胞を取り戻した。

虚空を見つめていた瞳に魂の意思が宿り、明確な焦点を伴う。ぎょっとして俺が見つめると、その驚くべき変化はひび割れた石造の全身におよび、彼らはたちまちのうちに、輝くような銀色の毛並みを持つ狼と成り変わっていた。

唚然として物もいえない俺を尻目に、彼らはやがて四肢を踏ん張つてぶるぶると身震いをしあげた 動いた！

『ふあーあ。しばらくぶりの来訪者じゃのう』

思わず戦闘態勢を取った俺に対し、彼らは存外穏やかな口調でそう言った。

先ず口を開いたのは左方の石造、眼も同じように見開かれ、そこにはあの鎮守神とは異なる、澄み切った蒼い瞳が存在していた。

『誠に久しき客人じや。人の子よ、おぬし星を持つてあるな、我ら主人が求める者か』

「……求める者かどうかは知らんが」

続けて口を開いたのは右方の狼。

麗しい一頭の狼に挟まれて、眼を白黒させながら俺は答えた。

「お前たちの主人に用があつて来たのは確かだ」

『では先ず名を名乗られい、人の子よ』

右方の狼がひらりと台座から飛び降りた、と思つたら、そのまま地上に足を着けることなく、優雅に宙を泳ぎ俺の目の前に静止した。

『我らは主を守る者。素性の知れぬ者を、しかも人の子を、いくら

星持ちとて軽々しく通すわけには行かぬ

『安心せよ、星の子よ。我らは神に通ずる者。おぬしを卑しめる存在ではない』

左方の狼も台座の上で立ち上がると、闇の中でも冴え冴えと蒼く輝く双眸で俺を見つめ、そう言った。

……しかしだなあ……。

俺はちょっと困って、考える間を取った。

箕の鬼ババアの顔が脳裏を占拠していたのだ。

よいか蒼路、いくらお主が術者の最下位に位置する者であるうとも、これだけは心せよ。

彼女はいつもそう言っていた。

呪術を使う身として、どんな理由があろうとも、軽々しく相手に名を与えてはならぬ。

なぜならば名はその者を体を現し、名を奪つといふことは命を奪うということだ。

魔物に名を奪われて殺されてしまった術者は、実際に俺の周りに何人もいる。

故に、俺たちは本当に信頼のおける存在にのみ己の名を伝え、それ以外の者の前では固く口を閉ざしていなければいけないのだ。

それが普通。

それが、大原則。

なのだが。

「……高村、蒼路」

俺は名乗つていた。

二頭の狼が、視界の両端で驚きに眼を見開いたのが見えた。いくら自分たちからひつたとはいえ、ここまであつさりと名乗つてもらえるとは思つていなかつたらしい。

一頭は互いの顔を見合させて、まったく同じじぐさで瞬きをした。その様子がおかしくて、俺は思わず笑みを漏らしながら、もう一度こう言った。

「俺は蒼路だ。お前たちの主人に会いに来た。害をなすつもりはない。案内してくれ」

その言葉に嘘はない。

だからこそ俺は名前を名乗つたのだ。

『……誠に変わった人の子じや』

『全くじや。星を持つているとはとても思えぬ』

『主様は人間がお嫌いだぞ、星の子』

『取つて食われても知らぬぞ、星の子』

狼たちはきつちりと順番に俺の顔を見つめて、四つの蒼い瞳をきらめかせた。その輝き。

闇に潜む、闇こそを好む生き物とはとても思えぬ、鮮やかな光。

俺は頷くと、はつきりといつて言つていた。

「構わない。だつて、襲えるものならとくに襲つていいだろ  
う？」

俺の声は、闇の合間に存在するこの不思議な社の中に、妙にくつきりと響きわたった。

一頭の狼が再び顔を見合せたのがわかる。

彼らはしばらく考るよう互いの瞳を覗き込み、尾を打ち振つていたが、やがてふいに天に向いた。

『……主様』

一頭の声が重なり、闇を震わせる。

急に風が起きて、ざわざわと周囲の林が不穏に重くうごめいた。

『主様』

『仰せになられた人の子がここに』

『此処に』

『星持ちの子供です』

『まばゆい光を宿しております』

『主様』

『主様！』

彼らの呼びかけの一聲ごとに、風は強く、大きくなつて、社の全体を包み込むようだつた。

俺はふいに、息が詰まるような圧迫感を感じ、眷属たちと同じよう天を見上げていた。

闇に塗りつぶされた暗い空、だがそこから、何かが来る。強大で恐ろしい、凄まじい力が

「――」

思わず、眼を閉じていた。

地面が割れたかと思った。

足もとから脳天を突きぬける衝撃、これを地震と呼ばずになんと呼ぶのか。

突如として大地を揺らした巨大な揺れに、俺は軽く脳を揺らされて吐き気を覚えたが、なんとか堪えて眼を開けた。するとそこに『彼』がいた。

『……そなたが、星持ち』

緋色の瞳が、触れれば溺れてしまいそうなほどすぐ近くに在った。巨大な頭が俺の顔の前に突き付けられ、生温かい吐息が髪を揺らす。

彼の発する妖氣と神氣の入り混じったエネルギーによって、周囲の草木がぶちぶちと弾け飛んで空に舞つた。

彼は息を荒く乱していた。ひゅうひゅうと、風を切るような音は、彼の呼吸が立てる音だ。

まともな音ではない、と俺は思った。

少なくとも健康な生き物がたてる音ではないと。

「腹が減つたか」

俺は緋色の瞳に問うた。

すると瞳が欲望の輝きにきらついた。

黒妖犬の意思が答えているのではない、彼の本能が感じたのだ。その瞳を見て、俺は決心した。

左手を彼の前に掲げ、昨日からまだ解かれていなかつた包帯を解いた。すると流れた白い布の下から現れた、まだ塞がり切つていない生傷。

とたんにかつと眼を見開いた鎮守神に対して、俺は、こう言った。

「俺の血をやろうか。鎮守神」

俺には生まれた時から魔物が見えた。

星を持つて生まれたのだから当然だ。

山奥の里で過ごした幼少時代、世界は一面、彼ら魔物の織りなす不思議な色彩で満たされていて、俺は彼らが彩る景色が好きだった。きらきら輝く湖の水面に、はしゃいだように跳ねる人魚。真つ赤に染まつた秋の山肌を駆けまわる山犬、あでやかな着物をまとつて舞う女妖、見事な樂でそれを離す天狗たち。

あれは悪いものだ、決して話しかけてはいけない。近づいてはいけない。

里の人たちにそんな風に教えられる度、どうしてだろうと悲しい気分で思ったものだ。

どうして話してもいいのに悪いものとわかるのか。

そもそも、本当に彼らは悪いものなのか。

幼心に不満でたまらず、俺は人たちに尋ねた。  
ねえ、だつて『あれ』、ぼくたちと同じことばをはなしているよ。  
もみじをきれいだつて言つて、水がおいしつて言つている。  
なのに、『あれ』はぼくたちと、何が違うの？

(……お前はやさしそうなあ、蒼路)

教えられることに対していくつも、何故、どうして、と返していた俺を、困ったように笑んで見つめる人がいた。

ずいぶん前に死んでしまった、否、死んでしまつたことになつている人。

俺に星師の手ほどきをしてくれたのは彼だった。

あの里、深紅の一族が治める星の里で、五辻一族を守護する任についていた屈強の星師。

親父は、俺にとつて憧れの星師だった。

（人を、動物を、魂を愛して止まず、魔物にすら心を碎く……それは星師として、許されないことであるにもかかわらず）

（どうして？）

尚も尋ねる俺の頭に手を置いて、親父はわしゃわしゃと髪を搔き乱した。

大きくあたたかで、ほんの少しじりじりしていた、傷だらけの手のひら。

頬に星印の刻まれた顔で、親父はやさしくほほ笑んだ。

（さあな。きっと誰にも答えられまい。星を持つて生まれたからと言つて、彼ら魔物を虐げる権利は、実は俺たちにはないんだから）

（しゃいたげる？　いじめるってこと？）

（そうや。だから、蒼路。お前はそのままでいいんだよ）

彼のその一言を、俺は今でもはっきりと覚えている。

（そのままで、進め。がむしゃらに、もがけ。誰がなんと言おうと、自分が信じる道を行くんだ）

まっすぐこ、曇りのない心で、蒼穹のよつな路みちを切り開け。

（やうすればきっと、いつか誰かがわかつてくれるさ……）

俺はひとつ、瞬きをした。

思い出が遠ざかる。同時に、胸に迫り上っていた熱いものを、無

理やりに飲み下す。

深く息を吐き出して、いま一度田の前の瞳を見つめた。

夕焼けの色、花の色。

血の色と呼ぶにはあたたかすぎる緋色の眼を。

「……どうだ？　俺は本気だぞ。お前に俺の血をやるわ」

言いながら、宙に掲げたままだつた左手を、強くぎゅっと握りしめた。指先を手のひらの肉に爪立てるようこじてあらん限りの力を込める。

すると、縫われた傷の合間から焼けるような痛みが走り、そのままどりと流れ出しが感じられた。

ゆっくりと、指を開く。

闇に覆われた視界のなかで、鉄錆の匂いが一際くつきひとつ鼻孔に流れ込んできた。

鎮守神が、堪え切れないように喉の奥で低く唸つた。巨大な瞳の上に様々な光が乱舞して、その心の亂れをこぢらせて伝える。

「星師の血だ。数滴でも、常人一人を喰らつより、よっぽど空腹が満たされる。飲めよ。それで、力をつけろ！」

『……小僧、何を、考えてある』

今や口の端から泡を噴き出しながら、それでもこの鎮守神は耐えた。

涎を垂らし、凶悪な口を半ば開いて、周囲の闇と同化するほど漆黒の毛並み、それを激しく波立たせた。

轟くような咆哮を上げ、彼は苦しげに叫ぶ。

『我を、馬鹿にしておるのか？…………』

毅い声だった。全身の肌にびりびりと響き、体がわずか背後に後退する。

俺はとっさに顔の前で両手を組んだが、星の力は使わなかつた。

戦うつもりは、毛頭ない。

「馬鹿になんて、してねえだろ！　俺はただ……」

だがそう言いかけた言葉は、今や怒り心頭に達してしまつたらし  
いこの鎮守神によつて遮られた。

彼は四肢をつっぱり、しろがねの爪をむき出しにして、屈辱に身  
を震わせていた。

『うぬれ、思いあがつた星持ちの小僧よ……！　昼間といい、今と  
言い、我は人に情けをかけられるほど弱き存在ではないぞ！』

俺の顔の前でがつぱりと、狼の口が開いた。

赤黒い口腔内、隙間なく並んだ鋭利な牙。

今の今まで一言も発さずに沈黙していた鎮守神の眷属たちが、慌  
てたように叫ぶ声が耳に届いた。

『なりません、主様！』

『また人を喰らひては、今度こそ御身は……！』

『黙れ！…』

眷属達の悲鳴を叩き潰すように神は吠えた。

彼らはその一喝だけで全身の毛を逆立てて、怒りの衝撃波に吹き  
飛ばされた。

「おい、何で」とするんだ、あいつらはお前の事心配して……！

思わず力チンと来て鎮守神を怒鳴りつけようとした俺は、しかし、次の瞬間本気で頭蓋を噛み砕こうと飛びかかって来た犬の頭に気が付いた。

ただでさえ暗い視界が犬の影によって尚暗く塗りつぶされる。ライライラしやがつて。

俺はちちと舌打ちをすると、そのまま眼を閉じて息を吸つた。全身をぴくりとも動かさずに、次の瞬間の訪れを待つ。鎮守神のあぎとは俺の頭など卵を割るように容易に噛み砕き、そのまま丸飲みにして

脳をすすぐり、血を舐める、筈だが……？

予想していた事態が起きない。

俺はうすく眼を開けた。だがそこには何も見えない。

視界が機能しない代わりに、強烈に鼻をつく生臭い匂いがある。生臭く、温かな、しめつた匂い。

『……何故だ……』

ぐぐもつているのに、脳を揺さぶる程の音量の声は、頭の上から聞こえている氣もしたし、両脇から聽こえている氣もした。

俺はようやく予測がついた。ああ、これは犬の口内だ。

こいつ、俺の事、噛まなかつたんだ。

『……何故反撃せぬ、星持ち』

ゆつくりと、犬の声が遠ざかっていく。

同時に生温かな吐息も離れて、やがて程なくして、夏の夜氣が汗にしめつた俺の頬に触れた。よつやく瞬きをすることができる。

「それはこっちの台詞だろうが。喰うなら喰えよ。もつたいぶつてないで。でないとお前、本当に飢え死ぬぞ」

『そなた星持ちであろうが。魔物に何故情けをかける』

「腹減つてゐる奴を切るほど卑怯なことはねえだろ?』

『……我は人は喰いとうない』

「もう既に喰つたんだろう?』

『人間は嫌いだ!』

鎮守神が再び吠えた。

俺は思わず天を仰いだ　さっぱり、わからない。

人が嫌いだから人を喰つたのか。

喰つたから嫌いになつたのか。

それとも、全然違う、何か別の事情があるのか。

……どちらにしても。

「……あー！　面倒くせえ！…」

「話わないことには事情もわからん。そして今のお前は話すことが  
深く考えることが苦手な俺は、天を見上げたままそう叫んだ。  
とたん、鎮守神とその眷属がぎょっとして飛び上がるのを尻目に、  
とにかく、と彼らの傍に詰め寄つて言った。

「話わないことには事情もわからん。そして今のお前は話すことす  
ら困難なほど腹を空かしていると来た！　だつたらその辺からウサ  
ギでも魚でも獲つて来てやらあ、だから待つてろ！…」

『……話?』

「そう、話だ！　話をしよう、ともかくにも！…」

さすがに予想外の一言だつたらしい。

犬は眼を丸くして体の動きを全停止したが、俺はその様子を肯定  
と勝手に受け止めた。

踵を返して歩き出すと、術で呪力の糸を紡ぎ、それをそのまま眷  
属の片方の首に巻き付けた。

『ちょっと……何をするのだ星の子よつ？』

「道案内してくれ。それに、こつでもしなきゃあいつ、戻つて来ても待つてつかわかんねーじゃん。……悪く思つなよ」

言いざま俺は、眷属もろとも、神社の周囲を覆う森へと飛び込んでいった。

ぞぞい、ぞぞい、と音を立てて、鋭利な草の葉が肌を切る。

僅かに傾斜した地面をスニーカーの足元が滑る。土が湿氣を含んでいるように感じるのは、たぶん氣のせいじゃない。

近くに川が流れているのだ。

完全な日没を迎えた今、この山の中は伸ばした手の先すら見えない眞の闇に包まれた。

役に立たない視界に代わり、聴覚と嗅覚が普段の何倍も鋭敏に辺りの様子を把握する。

俺は眷族の首に巻いた糸をひっぱり、彼に尋ねた。

「とりあえず川に行くか。……お前の主人、魚は好きか？」

闇にほんのりと浮かぶ銀の毛並み持つ狼は、俺の問いを完全に黙殺した。

代わりに手足をじたばたさせながらこいつをめぐ。

『小僧！！　いい加減にせぬか、先ほどから、これは我ら神に通ずる者に対して純然たる侮辱であるぞ！』

『侮辱だろうがなんだろうが、腹が膨れりや何でもいいだろ』

『良いわけがなかろう』

『つっせえなあ、じゃあなんだよ、お前はこのまま自分の主人が食え死にするのを黙つて見てるつていうのか。それがお前らの役割だつて言いたいのか？』

言いざま俺は狼を見下ろし、その首に巻き付けた糸をそりこいつぱった。

細い糸に喉を圧迫され、さしもの神の眷族も必死の形相で苦しみ出す。

やめろやめろと動かされる銀の手足を今度は俺が黙殺して、取り敢えず歩き出した。

空いた片手をポケットに突っ込み、ひらりと一枚の紙を取り出すと、そのまま宙に放り投げた。

「顯現せよ」  
けんげん

短く呟くと、紙片がたちまち一羽の鳥へ変ずる。

夜目にも鮮やかな白い鳥。それが軽やかに上空へと舞い上がり、星の印を持つ翼を羽ばたかせた。

小さな嘴には明るく輝く球体が咥えられており、それは俺たちの足元を照らすだけの光をもたらしてくれた。

わずかに明るくなつた視界のもと、たちまち群がる虫を横田に俺は眷族を振り仰ぐ。

「おい、行くぞ」

『……主様のお言葉さえなければ良いものを……』

狼はまだ地に体躯を伏せて嫌がる気持ちを全身で表現していたが、俺が黙つて見つめているとやがて身を起こした。

「で? どうだ?」

俺は小さくほほ笑んで問う。  
すると狼は答えた。

『……右だ』

その、瞬間だった。

俺たちの頭上、この山の上を、風のように飛んで行つた凄絶な気配があつた。

俺と狼はまったく同時に、弾かれたように天を見上げた。闇の中にも気配は見える。

これは、善い気配ではない。邪悪な氣だ。

狼が、闇空に軌跡を残して飛んで行つたその気配を眼で追つた後、やにわに叫んだ。

『 主様！－』

そして突然、狂つたように全身をくねりさせて暴れ始めたのだった。

『 小僧、この、糸を解け！！ 早くしろ－』

「え？ どうしたんだ、一体……」

『 戻るのじや－！ このままでは主様が』

銀狼の最後の言葉が、悲鳴のように闇に響き渡つた。

『 主様が危ない－－』

『主様！…』

捕縛を解いた瞬間、銀の狼が天めがけて彗星のように駆けあがった。

その軌跡が闇の中に尾を引いて、俺が進むべき道を示す。湿つた草を搔き分けながら走り始めて程なく、社の方角からすさまじい咆哮が響いた。

鎮守神の声だ。

「 犬つころ！？」

俺は走る速度を上げる。

元より全速力で走つてはいるが、逸る心にとても足が追いつかない。

灯りを持たせた式神を頭上に飛ばし、寄りつづく虫や餓を手で払いのけながら、何とか元来た道を辿った。

汗が、珠のような汗が、額から首へ、首から背中へと伝い落ちる。全身が灼熱のように暑いのに、心は嫌な予感に冷えていた。

……だつて、今の気配。

まっすぐ社目がけて飛んで行った、あの邪悪な気。まだ信じられない、けれど認めなくてはいけない。あれは 星の気配を秘めていた。

『 来るな！ 小僧！！』

視界が開けた。

同時に鎮守神の怒号が飛ぶ。

突風が湧き起こり、熱氣を孕んだ風が渦を巻き、社の周囲の草木をなぎ倒してゆく。

俺は思わず腕で顔をかばつた。

重い音をたてて灯籠がなぎ倒される。森全体がきしむように悲鳴を上げる。

眷属達が吼えているのが聴こえた 憎しみのこもった威嚇の声。その声の上から、鎮守神のものともまた違つ、空を裂くような獣の声が重なつた。

鳥類の鳴き声だ。

『魔の道に墮落した鎮守神……貴様がこの上抗つて、一体何を守るといふの』

優美といつてもいい、樂の音の如き声色だったが、はつきりと侮蔑の色が込められていた。

人ではない、雌の魔物だ。

……ちくしょう、誰なんだ一体！

俺が風に抗いながらもなんとか瞼をこじ開けると、まず視界に映つたのは、天を突くほどに巨大な甘茶色の双翼。

獰猛に湾曲した嘴を持つ頭部は鷺、しかし、筋肉の隆起した見るからに俊敏そうな胴体は獅子のそれ。

「 グリフィン……！？」

驚愕のあまり声が出ていた。だつてこの獣、ほとんど伝説上の獣だ。しかも西洋の魔獣だから、実在することすらも知らなかつた。

俺の声に反応して、それまで鎮守神に向けられていた鷺の黄色い双眸が、ぎょろりと俺の姿を捕えた。

まるで本当の鳥のよつて、横を向いたままひびきの様子を確認し、瞬きを繰り返す。

『その声。五辻の姫の護衛たる少年ね  
「え?』

俺は茫然としていたと思つ。

このグリフィンの体から発せられている気配、話す内容、全てが俺の予感が正しい事を示している。

なのにまだ信じられない。信じたくない。

彼が　あの人ガ、まさか。

まさかこんな非道なことをする、わけが　。

『　いかん！　小僧、早く逃げよ！』

鎮守神が叫ぶのを、俺は他人事のように聞いた。

ぼんやりと顔を上げ、そのやせ細った神を見つめる。

眼に映すたび胸が引き裂かれそうになる、弱つた体、それに相反して生への渴望をみなぎらせている強い瞳。

(こいつを……)

こいつを、無理やり、起こした奴がいる。

封印をこじ開けて、その眠りを妨げ、こんな体で現世に放り出した人間が。

俺はこいつを許せないとthought。

全身から音もなく焰が迸り、気付けば刀を抜いていた。

(こいつを、墓から引きずり出したのは……！)

『聞こえぬのか、小僧！　こいつは貴様を狙つておる！　早く  
「　お前。伊勢遙の召喚獣だな』

喚き立てる鎮守神の声を遮つて、俺はグリフィンにそう言つた。闇に響く己の声を聞いて、不思議なほど落ち付いているなと思った。

怒り狂つているのに、胸の内は氷のよつて冷たい。理由はわかっている。あまりにも怒りが烈しいから、ではない。  
……悲しいのだ。

『だとしたら如何するの。ハルの憎む星師の小僧?』

グリフィンはゆつたりと翼を広げながら歌うよつてそつといた。やつぱり、と俺は胸がふさがるような閉塞感を覚えた。喉が痛む。刀を握る手に知らず力がこもり、絞り出すよつて低い声を出した。

「聞きたいことがある。答える」

俺はゆつくりと、鎮守神の方へと歩み寄つて行つた。

ちよつび、参道の真中だ。一頭の眷属たちが地に体躯を伏せ、微動だにせずにグリフィンを睨みつけている。

彼らは主を守るために一頭で結界を張り、その印を結んでいた。攻撃されれば反撃はできないだろう。

だから、俺は狼たちを背中に庇つ位置で立ち止つた。

『小僧……』

いま一度、怒つたよつに叫ぶ鎮守神を黙殺して、刀の切つ先をまっすぐグリフィンに向ける。

黄色い瞳の瞳孔がまぶしいものを見るよつて細くなつた。

「ほんの ほんの封印を解いたのは、あいつなのか」

押された声で俺は問うた。

焰がめらめらと、闇を揺らす。

ここに存在する者すべての色を照らし出しながら。

銀、紺、蒼。魔物だろうが神だろうが、みな同じように生きて呼吸しているもの達の色だ。

グリフィンは答えるまでに間を取った。けれどその反った翼と曲がった嘴は戦意を喪失していない。

鎮守神が、いつでも飛び出せるように低く身構えたのがわかる。

俺たちの間に緊張が膨れ上がった。

頬を、背筋を、つうと汗が伝い落ちる。

『……ええ、そりよ』

やがてグリフィンは言った。

主人によく似た、甘く優しい、けれど一欠片だって容赦のない声で。

『お前と、そして、五辻の姫。邪魔な星師を消すためだけに、その犬は解き放たれたの』

どくん、と心臓の鼓動が俺の体を貫いた。  
まるで喉元まで心臓が迫り上げているかのようだ。  
血の脈動がうるさい程に耳の中で鳴り響いている。  
怒りのあまり、視界が一瞬、真っ暗になった。

『早くその小僧を喰らひのよ、けがらわしい魔物』  
「……止める」

俺は掠れた声で呟く。

グリフィンが、嘴を開いて嘲笑する。

鎮守神が背後で侮辱に身を震わせるのが伝わってくる。

ああ、傷ついている。俺は悟った。

そして

『何のためにハルが自分の手を汚してお前などを呼び起したのか  
考えなさい。よぼよぼの鎮守神。それともやはり、山を失い、信仰  
を失つたお前はもう、なんの力も持たないただの老犬に過ぎないの  
かしら?』

グリフィンが、翼を広げて飛翔した。

それと同時に俺も限界を迎えていた。全身から呪力を解き放つ。  
燃え上がる刀を地面に突き刺し、飛び散つた土くれを顔に受けな  
がら高速で呪を唱えた。焰よ!

『  
焰  
縛!  
』

叫ぶと同時に、刀を中心として焰が宙に弧を描いた。  
鞭のように長くしなやかに伸びた焰が、高く跳躍し、弾みをつけ  
て突つ込んできたグリフィンの手足を絡め取る。  
動物性のものが焦げる匂いが辺りにたちこめ、高い悲鳴が闇を裂  
く。

どん、と重い音を立ててグリフィンの体が地面に倒れ込み、その  
まま俺は術を解いた。

飛び立てないように羽を足で踏みつけて、刀の切っ先を鷲の首元  
に突き付けた。

『小僧、お前……』

黄色い鳥の眼が、苦痛にまみれながら俺を睨みつける。  
俺はじろりとその鷲の頭を見下ろした。

「何

『……お前の任務はハルを守ることでしょう、なのに、私に攻撃を仕掛けた許されると思つていいの……！？』

「お前にだけは言われたくねえんだよ。この言いなり野郎が」

俺は怒っていた。猛烈に怒っていた。

何がつて、ハル先輩もそうだが、そのハル先輩が明らかに悪しき行動をしていて止めるのに止めないこの召喚獣に対してもブチ切れていた。しかもこいつが言った通り、ハル先輩は俺にとつて任務の依頼人なので、ぶつ飛ばしてやることもできやしない。

だが、だからと言つて、このまま引き下がれるわけもない！

俺は息をひとつ、吸い込んだ。

刀の切つ先に力を込めて、そして

「俺はてめえみたいな自己意思のない奴がいつちばん嫌いなんだよ！」

この獅子鳥。獅子舞野郎

暴言を吐きはじめた。

脇で、鎮守神とその眷属が、ぱちくりと瞬きをするのが見えた。  
グリフィンが屈辱のあまり身もだえする。

『しつ……！　け、獣の王たるこの私に何たることを！』

「誰が王だ、バー力。俺たちにちょつかい出してる暇があつたら主人の暴走止める。だいたいグリフィンは欲に墮落した人間を処罰するものが役目なんだろう。主の命令だからって何でも従つてんじやねえぞ、この召使」

『この……半人前の、忌まわしい星師のくせして……！』

「忌まわしいのはどつちだ！…』

俺はついに怒り心頭に達して怒号を発した。

空気が揺れた。グリフィンが気押されたように嘴を閉じる。

「お前は……お前は、それでいいのか！　ハルが星師を憎めばお前も憎む。ハルが魔物をクズのように扱えばお前もそうする。そこにお前の意思はないのか！？　お前の正義は、忠義は、そんなものなのかよ！　召喚獣になつたからって己の誇りも品格すらも失うような奴に比べたら、いくら空腹でも俺の血に手をつけなかつた鎮守神の方が百倍ましだ！！」

迸るような　我ながら驚くほど感情の奔流であった。  
鋭利な言葉の余韻が、尾を引いて闇空に響き渡る。

俺は言いたいだけ言うと刀を引いた。

大きく見開かれたグリフィンの瞳めがけて呪を唱え、眠らせるといつやく背中を向けた。

茫然とした様子でこちらを眺めている鎮守神と眷属たちを横目に、口許に指を当てて高らかに指笛を打ち鳴らした。

『蒼路！　大丈夫だつた！？』

たちまちの内に、木立を搔きわける音を立てて、白い猫又が登場する。俺は頷くと、柔らかなその背の上に飛び乗つた。

そして僅かに高くなつた目線から、鎮守神と眷属達に声をかける。

「　おい、行くぞお前ら」

『……行くとは一体？』

『どこに行くのじゃ？』

困った顔で首を傾げる眷属の間で、ただ鎮守神だけが、打たれたような顔をして俺の顔を見つめていた。

言葉は無い。

だが、俺には彼が何を考えているのか、少しわかる気がした。  
思い切り頷いてみせ、そして笑つてこう言った。

「一緒に行こう。鎮守神。とりあえず飯を食つて  
んと、話をしようぜ」

父さんに、もう一度だけ会えるなら。  
叶わないとはわかっている、けれど、もしも、本当にもしも。  
ただ一度だけでいい、あの憧れの人には会えるならば。  
聞いてみたいことがある。

＊＊＊

東の空から暁の光が輝きはじめる時刻。

つまりは早朝、黎明の時。

俺は花緒の背にのつてひょっこりと、自宅であるマンションの上  
空に姿を現した。

見下ろす街が淡い群青にかすみ、しかしながら、そこかしこに太  
陽の光である薔薇色を浮かべて、闇を排し、生の色を脈打ち始める。

「きれいだな……」

俺は感嘆に思わず声をもらした。

ひんやりとした朝の空気が頬を撫で、一晩中酷使したせいで熱を  
持つ眼もとをここちよく冷やしていく。

わずかに眼を細めて、俺は眼下の情景に魅入った。

君見丘、これが俺の守る街。

隆起した丘の上に並ぶ住宅街、人気のない学校、もうすでにぼら  
ぼらと人影のみえる駅。

いつとう高台である町はずれには、箕家の屋敷が見えた。

まだ闇の残滓に覆われ、影に覆われている裾野の山林には、眼ざ

めの早い鳥たちが羽ばたいているシルエットが確認である。

『「」の街、好き』

花緒の短い言葉に、心から賛同した。

答える代わりに夜明けの輝きを取りこみ輝く、純白の毛並みを撫でる。

花緒は『』の肩越しに俺の顔を振り仰いで、左右色違の眼を瞬かせた。

『降りるよ。蒼路』

「ああ」

答えると同時に、白い体が優雅になつた。

ちょうど水に飛び込む様な姿勢で花緒は空を降下してゆき、あつとこつ間に俺のマンションのベランダに舞い降りる。大きな猫の頭が地面に軽く伏せられて、俺は造作なくその背から降りることができた。

「ありがとうな、花緒。色々付き合わせひまつて、悪かつたけど」

花緒の頬に手を伸ばし、そこをそつと撫でながら俺は言った。

彼女は髪をそよがせながら眼を開じた。

『そんなことはない。鎮守神を捕獲してくれたから、助かったのはこっちのほう』

「うーん。捕獲したつもりはないんだが。まあ、あの体で野放しにされているよりは、ババアの結界の中に保護されてる方がいいにとっても良いだろ。少しは飯も食つてたし、元気になると良いなと思つてゐる

俺は頬をかりかりと指先で搔きながら答えた。

どういうことかと簡単に説明すれば、さつき社で鎮守神とその眷属に見えた俺は、そのまま彼らをババアの屋敷へと連れて行つたのだった。

彼らは封印から解かれたばかりで弱つていたし、しかもそのまま放置すればハルに利用されてしまうこと間違いないという酷い状況にあつた。

しかし、いくら弱つているとはいえ神は神。俺がどうにができるレベルの存在ではない。

ゆえ俺は花緒とともに簞家の屋敷の門をたたき、ババアに事情を説明して、しばらく彼らを預かつてもらう事にしたのだった。

……まあ、現実はこんなに簡単にはいかなかつたんだが。それはまた後で詳しく説明する事にしよう。

『蒼路は本当に、わたしたちの良い理解者だ』

くすくすと花緒はわらうと、そのまま体を通常の猫の大きさに縮め、瞬くたびに明るさを増してゆく天空へと再び飛び立つていった。

俺は大きく手を振つて、薔薇色の空に一点浮かぶ白い小さな姿を見送る。

やがて彼女の姿が朝日に遮られ、完全に見えなくなると、ふいと体の向きを変えて私室の窓に手をかけた。

がらがらと横開きにその窓を開き、靴を脱ぐと部屋の中へ踏み入る。

毎度のことながら、こいつ風に星師として戦ってきたあの帰宅は、ものすごく安心して気が抜けると同時に、ものすごく後ろめたい。

それは多分、いつも家族に心配をかけているということがわかつていながら、それでも星師としての仕事をやめられない自分に対しだ。

ての後ろめたさだった。

「 ただいま」

呟く声は、低く小さく。ほとんど申し訳程度に。  
けれど、足音を忍ばせて風呂場へと赴き、そこに真新しいタオル  
と着替えが用意してあるのを見た瞬間。  
シャワーを浴びた後、水を飲もうと出て行つたリビングで、きちんとラップのかけられたハンバーグの一皿が残つてゐるのを眼にした瞬間。

後ろめたさはほんの少しだけ軽くなる。  
許されているのかしれないなと思つ事ができる。たとえ、本当はどうであれ。

しんと静まり返つた家の中で、穏やかに歸つてゐるであつゆ  
妹、彼女たちのおかげで。  
待つてくれている人がいるおかげで。  
俺はこゝにして、ちゃんと帰つてこよつと想つのだ。

\* \* \*

風呂を浴びたあと、ハンバーグを食べて、ベッドに倒れるようにして眠りについた。  
きょう一日で眼にした様々な映像が、色鮮やかで胸に迫る多くの  
画像が、眼を閉じた後の暗い視界をよぎつてゆく。  
遠くを見ているアンナさん、健気な花緒、銀の狼。  
初めて眼にした西洋の魔獣、その、残酷な黄色い眼。  
彼らとかわした言葉の残響が脳裏にひびく。  
すでにうとうとして始めた意識のむこうに、遠く波のように打ち寄  
せる感情がある。

怒り、切なさ、悲しみ。

(ハル先輩……)

彼に對して激怒していた。いや、今も。  
けれどどうしてだ、憎みきれない。あの碧の眼を思い出すと胸が  
痛む。

鎮守神をあんなふうに扱われてさえ。

(……犬っこころ……)

口から泡を吹きながらすら、俺の血に手をつけなかつた誇り高  
き神。いや、もう、神ではない。

かつては神だった、けれど今は人を喰らい、妖怪へと転じた存在。  
無理やりに封印を解かれて、彼はいまどんな気持ちでこの現世に  
よみがえつたのか。

(……墮落した存在だって、あのグリフィンは言つてたけど……)

俺にはそつは思えない。

絶対にあいつはそんな奴ぢやない。

なにか理由があるんだ、きっと。人を喰わなければいけなかつた

理由が。

(でなきゃババアがあいつを受け入れるわけはねえ)

あの人はずい星師なんだ。

優しさをきちんと知つてはいるけれど、公私混同は決してしない。  
だから、ババアが受け入れたということは、犬っこころは絶対に悪  
い奴ぢやないのだ。

(……親父、……)

俺はそこで、襲い来る睡魔に耐えかねて、口渦しばじめた意識を手放した。

むづくつと、背中から海に沈むよじへ、世界が形を失っていく。

(なあ、親父。俺は間違っているのかな)

眠りに閉ざされた最後の瞬間、俺が想い返したのは、もうすこぶる前の画像。

闇に向かつて歩いて行く、強くまっすぐな背中だった。

この問いを投げかければ、幼いじいと同じように、きっとまた困らせる。わかっている。

けれどそれでも、どうして教えてほしい。

(俺は、魔物も尊い魂だと思つ)

きむんと呼吸をして、人と同じように必死に生きている、かけがえのない命なんだと思つ。

あいつらは、虚げられるために生めてきたわけじゃない。

そんなことのために生まれたんじゃない。

そう思つ俺は、間違っているんだろうつか?

## あかい目醒め

短い眠りの中で夢を見た。

とても、とても悲しいゆめを。

冬枯れた木立の中にひとりの女性が立つていて。  
着物を着たうしろ姿はひどく痩せて頼りない。

その人は、吐く息がまっ白く立ち昇るのにも、手足の指先が真つ赤に悴むのも、全く気が付いていない様子で、ずうっと木立の向こうを見つめていた。

灰色の乾いた空に小高くそびえる、山並みを。

(……め……)

その人は繰り返し繰り返し、あるひとつの一言葉を呴いていた。

(ひざめ……)

呴いては山を見て、山を見ては呴いて。  
やがてちらちらと小雪が降り始めて、太陽が傾き、辺りが薄闇に包まれ始めても、ずっとそこに立って、その言葉を繰り返していった。

その言葉。

誰かの、名前のようにだと俺は思った。

女性の声が、誰かを想つて発せられる音をしていたから。

(緋醒)

ひざめ、と。

彼女はまた、その名を呼んだ。

そしてやがて俯いた。僅かに傾いた肩こりに、その顔が垣間見えた。

頬のこけた青白い顔。唇も血色が悪くかさついて、見るからに尋常ではない様子であった。

(許してくれ、緋醒)

その人は、言った。

(もう、会えなくなるんだ……)

そこで眼が醒めた。

『蒼路、怪我はなし、熱もなーし。でも、他の魔物の匂いがするなあ。どうしようかな、今日は登校させて大丈夫かな～？』  
「……」

田ぞめていっとう始めて視界に飛び込んできたものは、俺の上に腹ばいになり、騒いでいる一頭の青い鹿だつた。

見ていた夢の名残が一気に脳裏から？き消えて、俺は思わず頭を押さえる。

……この状況は、どうしたことだ。

俺はまだ夢を見ているのだろうか。

いや、それにしては腹の上が重すぎるし傷も痛い。

『この匂い、どうやらあの鎮守神だよね。あ～あ、蒼路つづばやつぱり一人で出かけたんだ。だから一人にしておくのは反対だつて言ったのに。深紅も心配なら心配つて素直に口にすればいいのにさー、

つんつんしてぱっかりこるから」『うつ事になるんだよ』

寝起きの頭にべらべら喋くる鹿の声がわざわざわしい。

青藍の声は丸っこくて高い。

耳触りの悪い声ではないが、決して朝起きてすぐに聞きたい音でもない。

俺は手を伸ばし、眼前でゅうりゅうと揺れている角をがっしと掴むと引っ張った。

とたんに青藍は、己の危険を察知して泣きわめくひな鳥の如く、ぴいぴい声をあげはじめめる。

『痛いっ！ 蒼路、何するんだよ、離してよー』

「それはこちらのセリフではないのか……」

『僕は深紅に頼まれたの！ 離せつてば、角は鹿の急所なんだよー

！』

角を引っ張られているから、青藍は頭を伏せた体制で首をぶんぶん振り、必死に俺の手から角を解放せんと暴れる。

ひづめの付いた四肢に体重をかけ、精一杯俺の腹の上に踏ん張るものだから、傷が痛い痛い。

俺は堪え切れずうめき声を上げ、青藍を投げ飛ばすように退かすと起き上がった。

そのまま床にでも激突すればいい、と本氣で思つたのだが、おあいにく、身軽な青鹿はそのままひらりと空中に逃れ、停止した。

黙つていれば愛らしい黒い眼が、非難と恨みのこもつた視線でじとじとこちらを見つめてくるのに睨み一発で答えると、俺は薄いタオルケットを跳ねのけてベッドから飛び降りた。

「だー！ お前、朝っぱらから何なんだよ一体！ いくら主の頼みだからって、人の寝起きを楽しげに邪魔すんじゃねえ！」

『邪魔はしてないさ。ただ、調べてただけだよー、蒼路がきのい、深紅が見ていないところでまた何か無茶をしやしなかつたかと』

『あくべり。

青藍のことばに思いつきり頬が引きつった。が、別に何も悪いことはしていないと思いなおし、俺は寝巻を脱ぎ捨てた。

「……べつに。おとなーしく過ごしてたぜ」

『嘘がへつたくそだなあ！ 相変わらず！ 魔物の匂いふんふんいしてるよー？』

「うるせえなー！」

俺は叫んだ。

青藍はおしゃべりだ。はつきり言つて騒々しいことおびたらしい。なぜこいつがあの冷静沈着な深紅の召喚獣になどなれたのか、俺は常々不思議で仕方がない。

「つうか深紅なら、わざわざ調べなくたつて俺の行動くらいお見通しだろうよ。お前はいったい何をしに来た」

『だからー、深紅に頼まれて』

ワイシャツに袖を通しながら尋ねると、青藍はふよふよと部屋の中を飛び回りながら答えた。

そして広い部屋でもないのですぐに端から端に行き辺り、結果として彼はぐるぐる旋回しながら飛んでいく。

『蒼路の怪我の具合はどうか見て来い、見てまだ動かない方が良さそうなら学校休ませうって言われたの。あと、どうせ昨日、深紅が見てないとこで鎮守神とひと悶着やらかしただろうから、その様子も探つて来いって』

「……そら見ぬ。やっぱお見通しなんじやねえか

ふうとため息をついて着替え終えると、俺は部屋の時計を見た。六時七分。昨日の夜におかずを作ることができなかつたから、今田は一から弁当を作らないといけないのだが、青藍に構つてゐる暇なんぞ全くない。

「怪我なら問題ねえから、学校は行くぞ。それより深紅は大丈夫なのか。昨日、ハル先輩は何か面倒なことしなかつた？」

部屋のドアを開けながら青藍に尋ねる。  
まだ寝ているであらひ母と妹を気遣つて、自然と声は小さくなつた。

『昨日は存外大人しかつたよ。こつちが見張つてるのには当然気が付いてるんだろうけど、敢えて突つかかつて来るよつなこともなく。深紅が拍子抜けするわね、つて言つてたぐらい』

「あん」

俺はかすかに笑みを漏らした。彼女のその言い方は想像に易い。昔つから生真面目に過ぎる生真面目な性格をしているから、深紅は何事にも全力投球なのだ。手抜きを知らない。

「まあ、無事なら良かつた。ハル先輩も」

廊下をすたすた歩いて行き、リビングのドアを開けた。  
瞬間だつた。

俺は眼の前に開けたリビング、そこに、既に灯りがつてゐることに気がついた。

ぎょっとして視線を巡らせると、よつによつて藍が、パジャマ姿

でソファに腰掛けオレンジジュースを飲んでいる。

「げつー？」

思わず背後を振り仰いだ俺の脇を青藍がすり抜けたのと、藍がこちらに気が付いて顔を上げたのはほぼ同時。

「あ、お兄ちゃん。お 」

はよう、と続くはずだった藍の言葉は中途で途切れた。  
それもそのはず。

彼女の眼は……リビングの天井付近にふよふよと浮かぶ青い鹿の姿をしつかりと捕え、ぐき付けになってしまっていたのだ。  
驚愕の色をいっぱいに湛えたその眼差しを一身に受けて、さすがの青藍も気がついたらしい。

気まずそうに俺をふり返った。

わざかな沈黙が流れたのち、彼は言った。

『……蒼路……もしかして』

「……もしかするんだよ」

はあー、と再び頭を押さえながら俺は答えた。  
肺の奥からため息が出てくる。そういうのだ。

藍は 魔物が見えるのだ。

＊＊＊

「つづりで、勝手に青藍をよじねるのはもうやめてくれ

そのあと、登校した学校で俺は深紅に物申した。

時はホームルーム直前、場所は一年生の廊下。

深紅ははじめこそうとうしそうに俺から眼を背けていたが、話を聞くに従つて、大きな黒い瞳を見開いて驚きを露わにし、最終的には素直に謝つてくれた。

「……そだつたの。悪かつたわ。ごめんなさい、まさか妹さんに靈感があるだなんて思わなくて。それに、ランが勝手に家を飛び回つたみたいで、そちらもごめんなさい。厳しく申しつけておくわ」

「ああ。頼む」

俺は頷いたが、怒りは既に消えていた。

深紅が言つたように悪いのは勝手に動き回つた青藍であるし、何より彼女はすぐに己の非を認め、謝つてくれた。

プライドはエベレストより高いが、深紅は己を過信しない。他人に対しても自分に対しても、不正あらば正し、けして踏みにじられることのない、真に毅い心を持つている。

俺は彼女のそういうところが好きだった。

……つて、べべべ別にへんな意味じゃねえからなつ！？

「つていうか！ エーとそうそつ、お前もう怒つてないわけ？」

自分で自分の感情にじびきまきしてしまつた俺は、いきさか無理やりに話題を転換した。

すると深紅は軽く目を見張り、それから何故か、ふと俺から目を逸らしてじつ言つた。

「……なによ、いきなり」

「え？ こきなりつていうか、昨日あんだけキレてたくせに、今日は存外ふつうだなあと思って」

俺は言つた。言しながらさりげなく深紅の顔色を観察する。

わずかに赤いような氣もするが、いつもより血色がよく、目立つた怪我もない。

青藍が言つたように昨日は大きな出来事はなかつたようだ。

俺の視線を受けて、彼女は居心地悪そうに小さくつぶやいた。

「べ、べつに、本氣で怒つてたわけじゃない」

「えー？ それであんなビンタするかよ？ 結構効いたぜ、あれ」「うるさいわね！ そんなことよりお前、傷の具合はどうなのよ！？」

「え？ 傷？」

意外な深紅の言葉に俺はきょんと目を瞬く。

「ああ、これ。ほんと良いけど？ 体力だけは自信あるからな、もう動いても問題はない」

言いじぎま制服の上から腹をぽん、と手のひらで叩き、笑つてみせる。

すると深紅はなぜか大きく息を吐いた。

華奢な肩の線が呼吸に大きく上下する。

俺は深紅の質問の意図を計りかねて首をかしげたが、彼女はすぐ話題を別のところに移してしまつた。

「……それよりも、蒼路つて妹がいたのね。知らなかつたわ」「うん」

軽く頷いて、俺は壁に背中を預けた。

「俺が里を出た翌年に生まれたんだよ。つまり、親父がいなくなる年に出来たこども」

「やつ。やつだったのね。ではもう、六歳なんだ

親父という言葉に反応し、僅かに顔色を翳らせた彼女を見て、俺はつとめて明るくいつも答えた。

「そ。可愛いぜ。一回、会いに来いよ

「わたしが？」

軽く眼を見張った深紅の表情がなんだか可愛らしく、俺はまた少し口角を上げた。

「うん。母さんも、今回の仕事の話をしたら会いたがつてたし歓迎するよ。俺も飯つくるし」

「蒼路、料理できるの！？」

「失礼だなあ、お前。できるよ。母さん働いてつから、うちの家事は分担制。じゅみえて炊事洗濯は得意分野なんだぜ！」

「それつてもしかして、お前の唯一の特技なんじゃないの？」

「……ひるせえな！ 唯一の、は余計だ！」

たちまち囁みついでやると深紅は笑つた。

珍しく、声を上げて。

口許に手を寄せて、いつもは怜俐な印象すらある声色を、鈴のようになに響かせて笑う その様子が、あんまりきれいで。

思わず見入つてしまつたところで、タイミング悪く予鈴がなつた。

「あら、時間だ。もう帰つた方がいいわよ、蒼路」

たちまち深紅はいつもの無表情に立ち戻る。

おのれ、と内心で予鈴を呪いながら俺は頷いた。

「……おつ

そして別れよつとした刹那、重要なことを思い出して、俺は踏み出しかけた足を戻した。

ふり返る。

「ああ、それから深紅。ハル先輩のことなんだけど」「何?」

いまや教室のドアに手をかけていた深紅もふり返った。  
振り向いた拍子、額の星が垣間見えて、俺は思わず自分の右手を意識する。

手甲をつけて、ふだんは痣を隠している右手。

「多分もう知つてゐると思つた。鎮守神を起こしたの、あいつだ。  
しかも昨日の夜、俺に召喚獣を差し向けてきやがった」

短く昨日知つた事実を伝えると、彼女はわずかに不快そつた表情をした。

眼をつこと細め、柳眉を軽く寄せて。

「先輩、今日は午後からいらっしゃるやつよ」

と言つ。俺は軽く瞬いた。

「え。マジ?」

「ええ。多分、体力の消耗が激しいんでしょう。そういう余計な事ばかりしているからだわ」

微かに苛立つた声でそう言つと、深紅はではね、と黒髪をなびか

せて、教室の奥へと消えて行った。

その後ろ姿を見送つてから、俺も歩き出す。時間が時間のために、自然と早足になつた。階段を駆け下りながら、ある一つの問いを、今まで何度も繰り返したかしれないその問いを、誰にともなく投げかける。

なんで顔なんだろう。

なんで深紅の星は、顔にあるんだろう。

彼女みたいにきれいな女の子にとって、それはあまりに酷な話だ。変わつてやりたいと本当に思う。

無理だと知つても、それでもどうにかして。

彼女の担う苛酷な運命の、その内わずかでも、俺が背負つことができたらと。

(いや、できたら、じゃないな……)

ぐつと右手を握りしめた。

身の内でぱちぱちと、焰が音を立てて燃える。できたらじゃない。やるんだ。

深紅を守るために。

その苦痛を少しでも和らげるために、俺は星師になつたのだから。

というわけで、意気込んで廊下を走り抜け、教室に飛び込んだ俺は、この時まだ気が付かなかつた。

一頭の銀の狼が、開け放しになつた廊下の窓枠にちょこんとお座りして、俺を見つめていた事に。

午前中は面倒くせえことこの一時間連続で体育だった。

しかも剣道。

この暑い夏に剣道着を着せて体育館で授業させるとは……毎度思うが学校側は俺達を殺そうとしているのではないだろうか。女子なんてプールで水泳なんだぞ、水泳！ なんだよこの違いは！？

俺は昨日ほんと徹夜に近いんだ、睡眠は一時間ぱつち、おまけに怪我もしてんだよー！

……とまあ、実際はそんなことを言えるはずもないから、授業も出ぬしかないんだけどな。

「高村あ、お前、昨日、よくも逃げやがったな！」

試合中、じじじとばかりに竹刀を振るつてきた石岡にしつぶされても、心身ともに疲れている俺はもう言ひ訳すら面倒くさいを感じる始末。

彼の一撃をかる一へ受け流しながら空とぼけた。

「あ～？ 何のことかな石岡くん

受け流した後は、すぐこゝ上まるよひこゝちらからの一撃を返す。しゃつ、と空気が裂ける快い音が立ち、石岡が若干じびつた顔で一步退いた。

その表情に俺はくつくつ笑みを漏らした。面白え。

「ど、とほけるんじやない！　お前がお前が逃げたあの後、俺は一人で永富に怒られて散々だつたんだぞ！　しかもその後もお前帰つて来ないし、帰つて來たと思つたら夕方で、もう下校時刻だし！　学校生活やる気あんのか！」

やや離れた位置で聞合いを取りつつも、そんな風に騒ぐ石岡。彼の問いに対しても俺は無情なほきつぱり答えた。

「ないね」

「……このやうひつー」

彼はとたんに突っ込んできた。どうやら逆鱗に触れたらしい。面越しに俺をぎらりとした眼でにらみつけ、彼は叫んだ。

「お前に深紅さまのお傍に寄る資格はないつー！」

同時に竹刀を高く掲げる。そのままストレートに振りおりして面打ちを取ろうとこいつもりのようだが

「あーはーはー、五月蠅いつるせー」

この俺が深紅の名を出されて黙つているわけがなかろう！  
俺は軽く床を蹴り、石岡の聞合いで入り込むと、その胴を打突した。

「逆胴打ちー　高村、一本ー！」

体育教師の声が響き、俺の勝利が決定する。  
軽く拍手が起きて俺は面を外す。顔をゆすって汗を振るい落とした。

たしか、これでクラス一位か。つてことは今度行われるクラス対抗の試合にも出ないといけない。

……面倒くせー。

「今日までー、各自<sup>ひとりごと</sup>づけをしてから着替えて教室に戻るよ  
うに」

教師が言い終えない内にチャイムが鳴り、ようやく午前中の授業が終了した。

「ちくしょー、勝てると思ったのに……」

「百年早えよ」

呻いている石岡の手を引いて立たせ、器具を<sup>上げ</sup>づけにかかる。  
ふと目線をやつた入り口に何やら集まっている女子の集団が見えて俺は首をかしげた。なんだろう。

「おい、石岡。あの女子どーかしたのかな」

ふり返つて聞いてみると、石岡は何故か忌々しげに舌打ちをした。

「……勉強ができないってことは男の障害にはならないってことだ  
る。……よかつたなー高村

「はあ?」

意味が判らなくて首を傾げた俺に対して、石岡はなぜか軽く壁壁目めした。

「え、お前、まさか自覚ねーのー? 勿体なつー」

「意味がわからん」

何の話だ、と俺は肩をすくめて再び片づけの作業に戻った。

「石岡、お前だいじょうぶか？ わつきの一撃、かなり手加減したつもりだつたけど」

「お前がバカなのはしつてたけど、鈍感だとはしらなかつたよ……」

「だからー、何の話」

喋りながら片づけをしていた俺だったが、ふと、この後の昼休みには深紅との約束があつたのを思い出し、あつと大きく叫んでいた。

「悪い、石岡！ 俺、先行くわ、約束あつた！」

言つが早いかだと走り出して手を振る。

石岡は、近頃恒例のパターンになりつつあるが、俺の背後でぴーちく喰いた。

「あ、なんだよ高村、待てよこいつ！ お前最近守き合て悪いぞ！」

？

「結構」

ふり返らずに、俺はちいさくほほ笑んだ。

深紅に会えるのなら、誰に何と言われようが構いはしない。

\* \* \*

しかして、近頃の俺は万事が平和に進んだためしがない。この依頼を受けて以来、なんだか毎日怪我してるし、気付けばいつも戦っている。

今までだつてババアのお使いで仕事はやらされていたが……今回

は俺個人の受けた依頼だし、何よりも学校の中での仕事だ。

俺もいろいろと敏感になつてゐる。

そんなわけで、着替え終えてからいつたん教室に戻り、そこから弁当片手に屋上へと歩みを進めていた俺は、ふと神経に触れるものを感じて窓の外に眼をやつた。

( …… 妖氣？ )

かるく眉を潜めると同時に星が痛んだ。

だが向けた視線の先には真夏の白い日差しを受けて、疲れたよう

な緑の木立が生い茂つてゐるだけ。

俺は立ち止ると右手にはめていた手甲を外した。

露わになつた星に神経を集中し、いま一度外の風景を見つめる。すると、さわさわと微かに揺れていた緑の木立の合間から、するりと細長い影が滑りだしてくるのを捕えた

蛇！

ぬめぬめと蠢く太い身の丈はゆうに一メートルを超している。緑がかつた鱗が木漏れ日を反射して、毒々しい光沢を放つた。明らかに普通の蛇ではない。

思わず窓に手をかけて身を乗り出した俺だが、さらに信じがたいことに、蛇は一匹ではなかつた。同じ蛇が次々と、辺りの木立やら草の茂みやらから湧いて出てくる。

何かに感應されたかのように後から後から登場し、ひとつの方角を目指して動きはじめたその数　捕えただけで十数匹。

「ちよつ……ぢづこいことだ！？」

即座に胸ポケットからノートの切れ端を取り出して式神を創り出し、屋上へ向かつているはずの深紅の元へ飛ばす。事態を知らせるためだ。

そして即座に駆けだした。

「俺の星をかいくぐつて侵入するとは……いい度胸じゃねえか！」

全力疾走して廊下の奥、この時間には人気のなくなる特別教室棟に渡る。周囲に人目がないのを確認してから、窓を開けて地上へと飛び降りた。

軽い衝撃が足もとから突き上げるのをやり過（）し、再び駆けだそうとした時、俺は気がついた。

しゅるしゅると、衣擦れのような奇妙な音が、俺を中心としてちょうど八方から聞こえてくる。瞬時に全身が緊張した。

その場で構え、神経を研ぎ澄ませて気配を探る。

やがてあの緑の蛇がゆっくりと。だが大挙して俺を取り囮むようにな集まつてくるのが見えた。

陽に焼けたアスファルトを這うその細長いシリエットは、まるで不吉な文様のように、地に黒く印を描いている。

「……俺が狙いか？」

低く呟き、俺は眼をわずかに細めた。迷う。

真昼に力を使うわけにはいかないが、ここからは明らかに俺を狙っている。

しかし蛇の正体を見極めない内には攻撃すること自体ためらわれる。

どうする？

迷ううちに蛇の群れはどんどん近付き、やがて俺の手前一メートルほどの地点でようやく動きを止めた。

水銀の色をした瞳のない眼が言葉なく俺を見つめ、紅い舌がちらと燐光のように蠢いている。

「やるしかないか……」

再び呴いて、星に左手を這わせた。

刹那。

『星の子！ いかん、退け！』

怒号一発、天から降つて来た銀の矢が視界を駆けた。

俺は瞬く。昨夜は月明かりの元で眺めた白銀の毛並みが、今は太陽の光を受けて七色に輝いている。

「眷属！？」

そう、鎮守神の眷属である銀狼が、緑の蛇の群れに突っ込んでゆくところだった。

「お前、何でこんなところに……！」

『話はあとじや、それよりも、これは術者の式神！ お前の周りに魔方陣を描くための手段にすぎぬ！ 早くこの場を離れよ、術中に嵌まるぞ！』

蛇を次々噛みちぎりながら狼は澄み切った青い瞳でこちらを振り仰ぐ。

俺はといえば、指摘されて初めて蛇の描く文様が魔方陣だと気がつく羽目になり、盛大に舌打ちをしながら蛇を焰で焼き払った。

手じたえのない感覚が腕を伝つ。

くそ、式神なんて一体誰が ？

その問いは、燃え上がった蛇が緑の葉っぱと化して辺りに舞い落ちるのを目にした瞬間、雲散霧消した。

緑。

「……まさか」

「そり。 そのまさかさ」

甘い声が、突如としてその場に響き渡った。  
甘く優しい声、なのに、背筋を氷の手で撫でられるような、ぞつ  
とする殺意を孕んだ声。

俺はとっさに身を固くした。

応じるように眷属が、ひらりと田前に降り立つ。

銀の毛並みを逆立てて威嚇の吠え声を上げ、彼は全力で眼の前に  
立つ人間を敵視していた。  
つまり ハル先輩を。

「へえ……」

凍て付く碧の双眸が、まず眷属に、次いで俺に向けられる。  
それだけでもぞつとするほどの威圧感だった。

この人は既に人でありながら人でない、と俺は悟った。  
眼を合わせるだけで胸の内に黒く重いものが凝つてゆくこの感覚  
闇を。ハル先輩は蓄え始めてしまっている。

「……やるなあ、高村くん。神狼を配下に下したのかい？」

口調は柔らかくとも、明らかに軽蔑を ほとんど憎悪と言える  
それを宿した声だった。

「……そんなんじゃねえよ」

短く答えて、俺はかるく息を吸う。

碧の眼から目を逸らさないように、ぐつと堪えた。  
落ちくぼんだ眼窩がんか、げつそりとこけた頬。

数日前と比べて様変わりしてしまった、その秀麗な容姿。明らかに生氣を吸い取られてしまっている。

駄目だ。同情するな。

「こいつらは、俺の配下なんかじゃない。そんなものに成り得るわけがない。こいつらは、自分の意思で自分のしたいことをする、誇り高い魂だ」

そう、こいつらは自由なんだ。  
誰の指図を受ける義務もない。

俺は言った。

「それは鎮守神もあんたのグリフィンも　それからアンナさんだつて、同じ事だろ？」「……戯言だな」

アンナさんの名前を口にした瞬間、碧の眼に暗い閃光が走った。俺は即座に刀を取りだした。迷つたら、負ける。

「きみにアンを語る資格なんてないんだよ、星師」

先輩の輪郭からじりじりと黒い燐光が立ちのぼり、揺らめくそれは見つめる内にやがて五芒星を宙に描きはじめた。

俺がはつとしたのと、先輩の背後に出現したその魔法陣から音もなく巨大な鷲の頭が現れ出でたのはほぼ同時。

「眷属！　退けッ！」  
「オーア！」

俺の悲鳴にかぶさるようにして響いたのは先輩の声。

その声にグリフィンは反応した。

鋭く湾曲した嘴をぐわりと開いて前へ飛び出し、まっすぐに銀狼の脇腹にかぶり付く。

俺は全身から血の気が引くのを覚えた。嘘だ。

「……眷属 ッ！」

グリフィンの嘴は寸分の狂いなく狼の腹を食いちぎった。

大量の血潮が飛び散り、狼が苦悶の唸り声を上げる。

眼の前があかく染まる光景を悪夢のように見送つて、俺は気づけばグリフィン目がけて思い切り刀を振りかぶっていた。

「よくもやりやがったな！！」

怒りが赤い火花となつて脳裏に炸裂する。

俺の焰はそんな俺の心情を鏡のように反映し、火柱のようにめらと高く燃え上がつた。

怒りの一閃は、しかし、グリフィンの血濡れの嘴によつて受け止められる。

がちりつ！ と石が打ち合つような重い音を立てて、俺の刀は宙のある一点で喰いとめられてしまった。

グリフィンの巨体の重さが容赦なく刀の薄い切っ先にかかる。しかし俺は刃が折れる可能性などまったく危惧せず、ぎりぎりと全体重を刀にかけた。

「ざけんじやねえぞ……」

睨みつける先でグリフィンの黄色い眼が剣呑に輝いている。

彼女も相当な力で刀を受け止めているらしく、苦しげな呻きが鳥の喉からぐるぐると漏れた。

「……退きやがれ獅子鳥ッ！」

咆哮と共に全身から呪力を爆発させる。

眼に見えないその力の放射をまともに食らい、グリフィンは吹つ飛んだ。

巨体がアスファルトに沈みこみ、重い振動が足もとから突き抜け

る。

俺は即座に眷属の元に駆け寄ろうとした

が。

鈍くきらめく銀色の刃が行く手を阻んだ。

「……てめえ、いい加減にしろよ」

俺はぎりぎりと歯ぎしりをして短剣の使い手を睨みつける。

彼はにこりとほほ笑んだ。

「それはこちらの台詞。昨日も思つたけど、君つてほんとに馬鹿だよね 低俗な魔物なんかを庇つて」

先輩の肩越しに、グリフィンがよろめきながら再び翼を広げ、眷属に襲いかかるのが見えた。

傷ついた銀狼も、下肢をふんばりながら凶悪な口を開けて猛然とグリフィンを迎撃つ。

「憎むぞ、あんた！」

俺は本気で呴いて、先輩の腹にひじ打ちを喰らわせた。だが先輩も素早い。即座に身を退き攻撃態勢を取った。銀の短剣が太陽の光を弾き、一瞬、眼がくらむ。

「望むところや。本気になれよ、高村蒼路。でないと君が死ぬんだぞ」

ぎんと振り下ろされた一閃は、予想をはるかに上回つて重い！

(……こいつ、本当に強え)

その一太刀を受け流し、切り返しながら俺は内心眼を見張った。半星なのに、召喚獣を召喚したままでこれほどの力を操れるとは。完全な星師だつて召喚術には相当な呪力と集中力を要するものだ。ほとんどの術者は魔物を召喚している間は身動きが取れない。深紅はできるが、あいつは天才だ、比較の対象にはならない。

(……けど、憑依された状態でこんなに力を使つたら……！)

刀と剣で烈しく打ち合いながらも、俺の心を焦りと恐怖の入り混じった感情がかすめてゆく。

だって、目前に迫つた先輩の顔を見れば、事態が緊迫していることがぐらいはすぐにわかる。

あきらかに尋常でない、顔色。脣。ぱさぱさの髪。

「完全な星を持つていてこの程度の力か？」

碧の眼が酷薄に笑う。

狂気に取り付かれたようなすさまじい攻撃の嵐の中でも、あまりに冷え切つて、見ているこちらの胸が痛くなるほど悲しいそ

う、哀しい碧の瞳。

「うっせ……星師は、星師を傷つけちゃいけねーんだよ！」

俺は咄嗟に身を退いた。

後ろ足で一步下がり、間合いを取るようにして刀を構える。

汗が眼に入つて酷く染まる。

かるく頭を振つてそれを振るい落としながら、ふと異常に気がついた。

どうして誰も現れない？

白昼堂々、場所がいくら裏庭とはいえ、生徒が凶器を持つてチャンバラをやってるんだぞ！？

（もしかして、最初の魔方陣に何か……）

俺は思い当たつたが、時すでに遅しだ。

先輩が短剣を振りかざして助走をつけたのを、舌打ちしながら迎え撃つた。

「ちくしょひ、深紅、はやく来……っー？」

しかし、体重を移そつと僅かに足の位置を移動しようとした瞬間、異常に気がつく。

手足が 動かない。

無数の細かな蔓を持つ植物がアスファルトの割れ目から伸び、俺の手足に絡みついているのだ。

「なつ……なんだ、これ！」

「馬鹿にするなよ？ 高村くん」

身動きを封じられた俺の耳元を甘やかな声がくすぐる。ぞ、と仰け反った瞬間、息も止まる程の重い衝撃が右肩を貫いた。

「 ッ！」

灼熱の温度の後に、信じられないほどの激痛がやってくる。

俺は声にならない悲鳴を上げた。

腕がしびれ、たちまちの内にその感覚を失う。

手のひらから刀が滑り落ち、先輩がそれを革靴の足もとで思い切り踏みにじった。

「弱いな……」

「う、ああッ！」

囁きと共に、先輩が躊躇なく俺の肩から剣を抜く。

痛みのあまり全身がびくりと痙攣する。傷口からぼたぼたと鮮血が滴り、制服を汚した。

ワイシャツの白い布地を血が染めてゆく速度に比例して、右肩から広がるすさまじい熱と、激痛があった。

「…………毒…………か…………！？」

意識が白く霞がかかつていぐ。俺は必死で頭を振った。

血濡れた短剣を手にしてほほ笑んでいる先輩を、唇を噛んで睨みつけた。

「そう。なかなか効くだろ？ 人の血肉を糧に成長する、寄生植物の種を撒いたんだ。この間も撒いたけど、どうやら効かなかつたみたいだから。もう一度」

「…………あんた…………狂つてるよ…………」

空いた左手で右肩の傷を押さえながら、俺はせいぜいと言葉を紡ぐ。

「もうやめろ、こんなこと……一 こんなことをして、何になるんだ！」

「だから、何度も言つただろう？　君を殺して、あの忌々しい姫君を殺して。僕はアンを守るんだ。そしてもう一度と、彼女を離さない。苦しめたりしないって誓つたのさ」

「違う！――」

俺は必死に首を振つた。叫ぶ。

「俺を殺したって、状況は何も変わりはしない！　むしろあんたが、やり場のない苦しみにどんどん追いつめられていくだけだ！」

「わかつてないなあ……本当に」

ハル先輩は嘲笑し、指をぱちんと打ち鳴らした。  
途端に俺を捕縛していた植物が消えうせて、俺はどうぞりとアスフアルトの上に投げ出される。

かつかつと足音を立てて、眼の前に先輩の皮靴のつま先が近づいてくる。

「高村君。僕は、苦しんでなんかいないんだよ」

ハル先輩の声は、まるで夢を見ているかのように、遠く幻想的に響いた。

白刃が眼前にひらめき、視線を上げた先には、美しくほほ笑んでいる先輩の顔があった。

「アンの幸福が、僕の幸福。彼女が僕の傍で生きていくことこそがね」

「……ちがつ……」

俺は眉を潜めて、そう呟いた。  
「俺は眉を潜めて、そう呟いた。  
痛い。それに、熱い。」

額から脳天が燃えるように熱くて、眼をあけていられない。

だが俺は毒に朦朧とする意識を敢えて痛みに集中させてこじらえ、苦いものの込み上げる喉から必死で言葉を絞り出した。

怒りが 悲しみが。

もう、爆発しそうだった。

「……死んで……る、なんだよ……！」

「何？」

怪訝そうな先輩の声に、何とか顔を上げて彼を見据えた。肩の傷口に左手をめり込ませる。

ずぶりと、嫌な感触が痛みをさらに燃え立たせた。

「アンナさんはもう、死んでしまっているんだよ……っ！」

叫ぶと同時に左手を傷から引き抜き、たっぷりと滴る血潮を先輩めがけて浴びせかける。眼つぶしだ。

「現実を見る！ アンナさんはこんなことは望まない！ あの人は、実の兄が死んだ妹のためにその手を血に汚すなんてことを、絶対に許したりはしない！！」

「く……そつ！」

ハル先輩は俺の血糊をもろに喰らい、目元を手で押さえてよろめいた。

その瞬間をねらって突進し、体当たりを喰らわせて先輩を転ばせると、俺は地面に転がっていた刀を拾い上げた。

同時に全力疾走を開始する。

「畜生が……オーア！」

血のりで眼が開かない先輩は、しかし、耳だけで俺の動きを察知したらしかった。

よく通る声を張り上げて己の召喚獣を命令を下す。

しかしこの頃には俺は眷属の元に辿りついていた。

翼を反らせ、嘴を大きく開いて迎え撃つたグリフィンの腹に、刀の柄で打突を喰らわすと、眷属から引きはがした。

「眷属！ 大丈夫か、眷属……！」

『……星の子……』

この時には眷属は、下肢の動きが完全に不自由になっていた。前脚だけで体を起こし、ふらつきながら俺を見上げる。

『構うな……！ そなたはそなたの戦いに、集中しろ………』

「何言ってんだ馬鹿野郎、助けてくれた奴を巻き込めるか……！」

怒号を発して、なんとか自由になる片手で、下手ながらも治癒の術を施そうとした俺だったが

「 もう一度、言つてみる……」

先輩の吠え声とともに背に凄まじい衝撃が走った。固く重いもので殴られた いや、蹴られたのだ。

肩の傷が、腹の傷が、もうどこもかしこも痛い。意識が一瞬まっ白になった。

四肢に力が入らず、せめてもと、眷属に覆いかぶさるよひにしてうずくまる。

「僕が愚かだと……アンが、死んだなどと……よくも、よくも……」

狂ったように叫びながら、先輩は何度も何度も俺の背中を蹴りあげる。その度に呼吸ができず、文字通り血反吐を吐きながら俺は堪えた。

腹の傷がいい加減、開きそうだ。

体の下で眷属が喚くのを他人事のように聞いた。

『どかぬか、星の子！！ 私は主様より頼まれて、そなたを守りに来たのじゃ、そなたに守られては本末転倒もいいところ……』

「どかねえ、よ

へへ、と俺は小さく笑い、先輩に蹴りあげられる律動のなか、眷属の蒼い澄んだ瞳を見詰めた。

「俺は動物には、優しいんだ」

『……！』

返す言葉を失い、おろおろする眷属の顔が 次の瞬間、見えなくなつた。

「うわああああ！」

先輩が、叫びながら一際強く、背骨を蹴つた。

それが利いた。

痛みが臨界点に達したというか……そろそろ、キツイ。

マジで殺されるかもな、と俺は薄れゆく意識のなかで考えた。

それはまずい、何よりも、先輩にとつて。

先輩がその手を血に染めれば染める程、アンナさんが悲しい顔をするんだ。

それは見たくない。

アンナさんは、太陽みたいに、ひまわりみたいに笑っている方が似合つんだ。

(　俺はまだまだ、弱い………)

く、と唇を噛みしめて眷属の柔らかな体を守るために抱きしめた俺は、ふと、この身を包む風を感じた。

それは、竜巻のように烈しく周囲の建物を軋ませて俺の体を揺らしたが、それでも何か、とても柔らかな風だった。

重い物が一度、なにかにぶつかるような音がして、直後地面が上下に揺れる。

眷属が驚愕したように呟いた声が、朦朧とする俺の耳朶を打った。

『……主様……』

「え……」

のろのろと薄眼を開きながら俺は、そういえば先輩の攻撃が止んだことに気がついた。

ゆっくりと、首を巡らせてふり返る。漆黒の毛並みが視界を覆つた。

「鎮守……神」

『お前は本当に変わっているな、星持ちよ』

瞠目する俺の肩に、鎮守神の尾が伸びてきてそっと触れた。

見た目よりずっと柔らかく、なめらかなその毛束が傷口を撫でると、不思議なことに痛みがすりつと引いていく。

濃い土の香りが鼻孔をついた　なにか懐かしい、野山の香り。

『星を持つ身で我ら魔物にそれほど心を碎く者を、我は知らぬ』  
「お前、なんでここに……！ ババアの家から出るなって、あれほど

「 蒼路！ ！」

今度は女の声がした。

はつと視線を探らせると、華奢な腕がハル先輩の首を背後から捕えた所だった。

やつと来たのか でもちよつと、タイミングが悪すぎるー

「深紅！ ！」

怒り

「おせえぞっ」

俺が叫ぶと深紅も負けじと叫び返した。

「馬鹿者、結界が張られていたのよ！ 壊すの大変だつたんだから！」

「結界だつて？」

「そう、この人人が張つたのよ！ お前、気が付いていなかつたの？」

凛と声を張り上げながらも深紅はハル先輩の胸に銀針を打ちこむ。先輩は悲鳴すらあげずにがくりと頭を落とし、そのまま深紅の腕からすり抜けるとアスファルトの上につづぶせに倒れ込んだ。

「深紅つ！？ 何してんだよ！」

とつさに怪我も毒のことも忘れて前へ飛び出した俺に対し、深紅はそれ以上の大喝でもつて答えた。

「 麻酔針だ、馬鹿者が！－ 状況を見極めよ！」

びりびりと、肌に響くような声。

ひつと俺は息を呑んだ。  
ま、また怒つてるよコイツ！  
何で！？

『…………星持ち…………』

とたんに竦んだ俺を鎮守神がふり返り、哀れみの視線を向けてきた。

ついでに言えば、俺の腕の中に横たわったままの眷属も、なぜか首を左右に振つて同情のまなざしだ。

が、そういうしている内に深紅は先輩の体に何やら術を施し終え、それから俺の方へとつかつか足音を立てて近づいてきた。

「言いたいことはどこにあるが」

やがて深紅は鎮守神の前で立ち止った。

ああ、と俺は腕の中の眷属をきつく抱きしめながら縮みあがつた。

怖い！

妖怪よりも魔物よりも、俺から言わせれば怒つた深紅の方が百万倍も怖い！

「まず何よりも、蒼路。」（あちらへ來い）

大きな眼に剣呑さも露わに俺を睨みつけ、深紅は両腕を組んだ。

今や彼女は怒りの水煙を全身から淡く立ち昇らせていた。ゆらゆらと揺れるその煙が、薄衣を一枚通したかのように彼女の全身像をかすませて見せる。

俺より背が低く、華奢な体をしている癖に、こうこう時の深紅の威圧感はどうしたことか。

完全に上に立つ者の風格だ。

「……はい」

俺は真っ青になりながらも立ち上がった。

腕の中の眷属は何か言いたげに尻尾を振っている鎮守神に預け、深紅の目前までゆっくりと歩み寄ると、そこに片膝をついた。

そしてビンタの一発ぐらいは喰らひのだろうなど覚悟を決め、すうと頭を垂れた。

毒のせいか、身体じゅうが異様に熱を持っている。

しかし、先刻から量に出血しているせいか手足は恐ろしく冷えていた。

左肩を刺し貫かれた痛みそのものは鎮守神が何かをしてくれたらしくかなり和らいでいたが、それでも完全に消えてはいない。そつと傷口に左手を当てるど、深紅が細く深いため息を吐きだすのが聞こえた。そしてその後すぐに響いた重い声。

「毎度毎度のことながら……その満身創痍はどうしたことだ」「……申し訳もございません」

俺は殊勝に謝った。同時に体を固くする。

絶対に殴られるであろうと予期したことだったが、まったく驚いたことに、深紅はそうしなかった。

代わりに短くこう言った。

「顔を上げよ

「……」

言われたとおりに顔を上げると、あたたかな光が皮膚にふれた。

紅い光。

深紅がいつの間にか眼の前に膝を折つており、俺の肩の傷に手をかざしていたのだ。

「……深紅?」

俺は驚きに瞬いた　怒られないことに対する驚き、ではない。  
無論それもかなりあるが、この時の俺は、深紅の美しい顔があきらかに悲しげに歪んでいる事に対して驚いていた。  
どうしたんだと思った。

気丈で、いつも強く前だけを見据えている深紅。  
この人がこんな顔をするなんて、記憶の限り、7年前のあの時だけだった。

「どうかしたのか？」

俺は尋ねた。「じく当たり前の質問だったと思つ。だが深紅は眼をみはり、まじまじと俺を見つめるといつ行動に出た。

……まるで俺が驚くべき発言をしたかのように。

「な、なんだよ」

困惑してどもると、深紅は何故かやれやれと首を振った。  
そして自嘲するかのように小さく笑った。

「……お前の傍にいるところは、楽ではないな」

「は？」

「再会してからずっと、心の休まる暇もないわ

そして彼女は治癒の術を唱え終えた。立ち上がり、俺の背後に目線を向ける。

その視線を追つて俺は急に焦りを覚えた。

そういえば、魔物に対して冷酷無比との評判高いこの深紅が、鎮守神と眷属を放つておくわけがなかつた！

「み、深紅、やめろ！」

俺は深紅の腕に取りすがっていた。

すると彼女は俺に目線を戻し、不思議そうに小首を傾げた。

「……何を？」

「あいつらは 鎮守神と眷属は、悪いことはしていない！ むしろ俺を助けに来てくれて、そもそも、訳あって今は魔物になっちゃってるけど、元々はエライ神様なわけで！ だから手を出さないでくれ。頼む。殺すな！」

まくしたてる間じゅうずっと深紅は無表情だったが、俺が話を終えると、やがて小さく息をついた。

今日何度もため息だよ！ と内心俺が突っ込んだところ、彼女は何故か頷いた。

「 大丈夫。わかってる

「え？」

俺は瞬きをした。深紅の言葉遣いが、普段通りに戻っている。

ということは、怒りが解けたということか？

考えている間にも、深紅は長い髪をなびかせながら鎮守神の前に進み出た。

伸びた背筋で、顎を上げ、まるで舞を舞うかのように胸の前で両手を打つ。

俺ははつとする。

柏手 かしわ 神に対して感謝や喜びを表す、あるいは、邪氣を祓うための作法。

『……』

空を裂く柏手に反応し、手負いの眷属の体を尾で撫でていた鎮守神は、うつそりと首を曲げてこちらを見た。

深紅も、いつも以上に固い無表情でもって、その巨大な狼を見上げる。

そして言った。

「礼を、言う

俺は仰天した。

この深紅が 魔物を憎しみの対象としてしか見ていない筈の深紅が！

今や黒妖犬と化した鎮守神に、礼を言った！

『……ほつ？』

驚愕のあまり口をぱくぱくさせていた俺を尻目に、しかし、鎮守神は余裕すら感じさせる動作で大きな口を開いた。

どうやら笑っているらしい。

『星持ちの姫よ。魔物を憎むそなたが我に、なんの礼を述べるというのだ』

「それはひとえに、我が朋とも、蒼路を救つてもらつたが故」

深紅は迷いなく答えた。

きつぱりとした言い方に喉元が熱くなる。

信じられなくて、思わずその言葉を胸の内で繰り返した。

( 朋? )

『そなたには我を殺す義務があらう、姫よ』

鎮守神はゆつくつと身を屈め、深紅の顔の前にぬつと鼻面を突きだした。

鋭い牙の合間から、ぬらりと光る赤い舌が見える。はつと身を硬くした俺だったが、しかし、深紅は微動だにもしなかつた。

ただ射るように鎮守神を見据え、落ち着いて言葉を紡いだ。

「是<sup>ぜ</sup>。しかしながら、朋がそれを望んでいない以上、私にはお前を殺すことはできぬ」

『義務は朋よりも軽いものと?』

「愚問だらう」

深紅はふ、と笑みを漏らした。  
そして言った。

「かつて同じ選択をした我らの仲間を　お前は知っているのではないのか。鎮守神」

謎めいたこの深紅の言葉を俺は全く理解できなかつたが、鎮守神にはどうやら思い当たるふしがあるようだつた。

紅葉の色の瞳を大きく見開き、それから細めて。彼はやがて瞑目した。

その巨大なあぎとも閉じられて、俺はよつやく肩の力を抜く。

「とにかく、そういうわけで」

わざかな沈黙が流れたあと、俺の元へと戻ってきて、深紅は言った。

「お前の手前、鎮守神とその眷属に手は出さない。約束するわ」「深紅……サンキュー」

俺は心から礼を言つた。  
が、次の瞬間深紅にぎゅっと耳朶を引っ張られて飛び上がつてい  
た。

「痛えつ！」

「礼は後。いまはとりあえず、お前の流した血の洗浄をして頂戴。

昼間だつていうのに、大層汚してくれたわね」

「俺のせいじゃねえよー」

耳元を押さえて俺は呻いたが、言われて見てみれば、確かに周りのアスファルトは血まみれだつた。

そして麻酔を打たれたものの、どうやら意識はまだあるらしく、アスファルトに転がつたまま眼だけで俺達を殺しそうに睨みつけているハル先輩が。

こんな状況、誰かに見つかつたら即警察沙汰だと思うのだが、そ  
こはさすがに深紅、抜け目がなかつた。

「先輩の結界を解除した後、私の方でもう一度結界を張つたから。  
あんたが洗浄を終えるまでは誰にも見つかる心配は無いわ」

そして深紅は先輩の元まで歩いて行き、立ち止ると、なんとある  
ことかその体をローファーの足もとで蹴飛ばしたのだった！

「ええつー？」

『なんと』

『……哀れな……』

俺はもぢりん、鎮守神、眷属までもが揃つて驚きに声を漏らしたのを尻日に、深紅は今度は先輩を殴つた。グーで！よくよく見れば、その背中からは再び怒りの証、水煙がにじみ出ている。

ああ成程、と俺は悟つた。

怒つてたのは、俺に対してじゃなかつたんだ。先輩に対して、だつたんだ。

「お悔やみ申し上げます……ハル先輩」

『呴いている場合ではないのではないか、星持ちよ

思わず制服の袖で目元を押さえてしまつ俺に対して鎮守神が突っ込んだ。

が、時既に遅し。

深紅は燃えさかる怒りを今度は言葉にして、ハル先輩に浴びせかけたのだった。

「この 愚か者でシスコンかつ情けない半人前の腹黒半星が！  
三度目はないぞ！」

俺は黙つて血の洗浄作業に取り掛かった。

鎮守神も眷属の治療を再開し、ただ先輩を罵倒する深紅の声だけが結界のなかに響き渡つた。

「良いか、今度このような真似をすれば、私がお前を殺してやる。嘘ではないぞ。朋を傷つけられたこの恨み 私は決して忘れ得ぬ

！」

……アーメン。ハル先輩。



## 迷い

しかし そのあと、俺たちは異常に気がついた。

ハル先輩の様子がおかしいのだ。

否、もともと性格に二面性があるし、厭味つたらしくして、変わった人には違いないのだが、俺がここで言いたいのはそういうことでなくてだな。

つまり、いきなりもんざり打つて、死ぬほど苦しみ始めたのだ。俺たちは彼を暴れないようにと拘束したのだが、動かない手足をイモムシのようにばたつかせ、全身をのけぞらせて苦しげな悲鳴を何度も何度も上げて。

痙攣しながら白眼を剥き、口からは血の混じった泡を吹いた。

「せ……先輩ッ！？ どうしたんだよ、おい……！」

当然ながら動転し、その身にすがりつこうとした俺を深紅が止めた。

「何だよ！ と噛みつぐと逆に怒鳴り返された。

「落ちつきなさい！」

「ああ！？ これが落ち着いていられるかよっ、この人いちおう依頼人だぜ！？」

「だからこそ、でしょーうー バカ！」

叱咤とともに強く腕を掴まれる。

深紅のまっすぐな黒曜の瞳と瞳が交わり、俺ははっとした。そこには、彼女の眼の中には、俺と同じように不安と心配の色が確かに

に浮かんでいたからだ。

「……そうだ、先輩は、俺だけの依頼人じゃない。

俺は思った。

動搖が少しだけ冷めて我に返る。  
軽く息を吸い込むと深紅が言った。

「蒼路。これは予期していたことだわ キヨ様の御屋敷へ、運び込むわよ」

「……先輩の、限界か……」

深紅の言葉には答えずに、俺は逆に小さく問い合わせをした。

ハル先輩を見つめる。

全身を横倒しにして、獣のような吠え声を上げながら苦しんでいる。

その肌は全身土氣色に染まり、もはや生者の色をしていない。  
なのにじわじわと体の内側から染みだし、先輩の全身をぬめるよう<sup>リ</sup>に覆つて行く、暗い緑の瘴気があつた。

アンナさんだ。

先輩が意識を失えばアンナさんは先輩の体を乗っ取りやすくなる。  
だから恐らく今、先輩は必死で意識を失うまいと戦っているのだ  
ろう。

「己の身体を喰らおうとする妹の靈と、精神が壊れるぎこちのうの  
インで激しく攻防を繰り広げているのだらう。

「…………お、あああっ！…」

「先輩……」

悶える先輩の姿を前に、俺は唇を噛んだ。ちくしょう。

わかつていたことだ。

このままアンナさんに憑依され続ければ、ハル先輩の肉体が持た

ないと。

俺たちがもたもたしていればしている程、先輩の命は確実に削られる。

わかつていたのに 今だつて、苦しむ先輩を前にして、痛いほどそのことはよく理解しているのに。それでもためらつてしまつのは。

アンナさんを殺さなければ、先輩が助からないから。  
けれど悪霊と化して先輩を苦しめている彼女を 僕は友人として好きになつてしまつたから。

### 「蒼路」

深紅がいま一度、俺の名を呼んだ。

責めるような強い音ではなく、むしろ逆に俺をいたわつているかのような柔らかさのある、静かで穏やかな声色だった。

「屋敷に、先輩を運びましょう。このままではどちらにしろ この人は助からない」

俺はすぐには答えられず、しばらく黙つてハル先輩を見つめた。  
きつくきつく唇を噛んで、右手を拳に握りかためながら。  
どちらにしろ 俺たちがアンナさんを祓おうと、祓うまといと。  
このままでは確實にこの人は死ぬ。

「……わかつた」

やがて俺は、低くひくく、咳いた。

「行」

\* \* \*

屋敷ではまるで俺たちの来訪を予期したかのよう、ババアが庭先に立つて待っていた。

鎮守神の背に乗つていた俺たちは空から屋敷へと飛び降りて、そのあと漆黒の狼が庭先へ降りてくるのを見守った。

巨大な狼は突風を巻き起こしながら地面に四肢を付き、しなやかに身を屈めると、背中にしょつていたハル先輩を下ろした。

「この者が遙か。アンナから聞いてはいたが、見えるのは初めてじやの」

小股で近づいてきたババアは、苦悶しているハル先輩の様子を見ながらそう呟いた。

はじめは何の表情も浮かべていなかつたしわくちゃの顔が、みるとみる厳しく引き締まり、それから俺達を見た。

「状況説明を」

「はい」

問い合わせに対し答えたのは深紅だった  
よく通る、明朗な声で持つて彼女は言葉を紡ぐ。

「本日正午過ぎ、学校にてこの者が蒼路を襲いました。

蒼路は結界のなかに取り込まれ、戦いの際に右肩を負傷。応急処置は済んでおりますが、解毒はできておりません。

また、蒼路を救うためにそこな黒妖犬と眷属が屋敷を抜け出していく参りました。眷属の方が下肢を負傷しています。

伊勢遙は私が麻酔を打ち拘束しましたが、直後に様子がおかしくなり、このように苦しみ出しました。以上です」

「ふむ。成程な」

ババアは満足そうに頷くと、ハル先輩の頭の脇あたりに片膝をついてしゃがみ込んだ。

小さく、なめし皮のような質感の手のひらがふいに宙に掲げられる。と、音もなく白い袴に身を包んだ一人の男たちが顕現した。

俺と深紅は軽く息を呑む。ババアの式神だ。

壮年の男の身かけをしたその式神たちは、呻くハル先輩の体を抱え上げると、屋敷の奥へと運び始めた。

同時にババアは立ち上がった。

「蒼路、深紅」

名を呼ばれ、俺たちは同時に返事をすると膝を折った。

凛々しい深紅の声と沈んだ俺の声が不調和に響き合つ。

ババアはその音にちらりと俺を見やつたが、すぐに眼を閉じていた。

「　これはあくまで、そなた等の受けた依頼、そなた等の仕事じや。私は介入はせん。最低限の手助けはするが、それはそなた等のためになく私自身のためと覚えておけ」

「わかつてあります」

「……」

深紅が優雅に一礼する横で、俺は答えに詰まっていた。

当惑しきつっていたのだ。

これが俺たちの仕事であり、自分たちで完遂しなければ一人前の星師として認められない重要な任務であること、それは無論わかっている。

わかつてはいるが　俺は自信を失いかけていた。

(……怖いんだよな?)

自分で自分に問いかけた。ほとんど責めるより。アンナさんを祓うことが。ハル先輩が苦しいことが。

そして双子のどちらもが、これ以上悲しい想いをすることが本当に嫌で、本当に怖い。

俺の役目はハル先輩を助けることなんだ。既に死んだアンナさんを救う事じゃない。

今生きて、苦しんでいる生身のハル先輩を助けること。

ああ、わかつている。わかつている。

けど、頭では理解していくても、どうしてもビビりかを選ぶことができないんだよ!

「……蒼路?」

ババアの怪訝そうな声が耳に届いたが、俺は顔を上げられずに俯いた。

胸元を手で探る。ワイヤーシャツにして、固く小さな感覚が指にぶつかった。

これは、アンナさんがくれたペンダント。

彼女が俺に、輝くような笑顔で渡してくれた、あの夏の森の色をした宝石。

俺は見た。

さつき、苦しみに悶えるハル先輩の首元から、全く同じ石が顔をのぞかせていたのを。

(あげる。きっとあなたを守ってくれる)

ペンドントをくれた時の、まったく明るいアンナさんの声と笑顔

を思い出して、俺は溜まらず両手で顔を覆つた。

の人を。

自分が消滅するかも知れない恐怖の中ですら、他人を思いやつてくれるあの優しい人を、俺は殺さなければいけないのか。

それが 星師の仕事だつていうのか？

本当に？

「……深紅。先に行つて休んでいなさい」

ババアの声がとても遠くに聞こえた。

深紅の答える声はしなかつた。あるいは俺が聞きとれなかつただけなのかもしけないが。

全身が石になつたような気がした。

重く冷たく沈みこんで、このまま凍りついてしまいそうな。さわさわと、軽く土を踏む音が聞こえ、やがてババアの草履の足もとが視界の端にちらと映つた。

「……蒼路よ

「……はい」

俺は投げやりに答えた。

怒られることは予期していた。

どうせまた甘いとか、毎日怪我ばかりして心構えがなつていないとか、そんな風に怒鳴られるのだろうと。

だが違つた。

「犬が、そなたを心配しておるだ？」

「……え？」

意表をつかれ、俺はゆるゆると顔を上げた。

すると感じた、ふわりと鼻腔をつく大地の香り。

俺は僅かに眼を見開いた。

影が 酷く巨大な影が、俺を包みこみ、夏の日差しから遮つてくれていた。

「鎮守神……？」

いつの間にか漆黒の巨体がすぐ傍に控えていたのだ。  
緋色のまなざしが俺に据えられている。静かで深く、底知れない  
瞳をしていた。

彼は口を開いた。

『そなたでも、迷うことがあるのか。星持ちよ  
「……お前に俺の何がわかる』

思わずぶつきらぼうな口を利いていたが、鎮守神は気にせずに言  
葉を続けた。

『そなたと同じ眼をしていた人間を知っているのだ』

「え？」

『そなたと同じ場所に星を持つていた。女だったが、そなたと同じ  
ように真に変な人間で、異形を人と同じ程に愛していた。よせと言  
うのに我ら異形に心を碎いた』

「鎮守神？」

彼が何を話し始めたのかわからなくて、俺は思わずババアを見た。  
が、気がつけば彼女はもういなかつた。

屋敷の庭先に取り残されたは俺と巨大な漆黒の獣、それからその  
眷属だけ。

『その者は言っていた。道を、選ばねばならぬ時、一つの内どちらか片一方のみしか選べない時。そういう時は、自分のためにならない方を選ぶのだ、と』

俺は落雷に打たれたような気がした。

脳天から足もとまでをも突き抜ける、白く静かな稻妻。

それは衝撃というやつだつた。

早い話、鎮守神の言葉に俺は思い知らされたのだ。  
自分が悩んでいるのは双子のためなんかじやない。  
ただ自分の　自己満足のためだつたのだ、と。

「……俺は……」

俺は鎮守神から眼を反らせずに彼を見上げた。

熱い。

夏の熱気を、彼が遮ってくれているはずなのに、全身が熱くて、  
眼頭に何かこみあげるものがあった。

「……そうだよ、俺は、自分のために、アンナさんを祓いたくない  
……！　好きだからだ。あの人に友情を感じてしまったから、幸せ  
になつて欲しいと思つてしまふんだよ……！」

『されどそなたには、あの男を守る義務がある』

「そうだ　でも、ハル先輩は、アンナさんがいなければ幸せにな  
れない。あの人は、自分のせいで妹が死んだのだとずっと自分を責  
めている……だから俺たちは、の人から二度も妹を取り上げること  
だけは、してはいけないんだ！』

『ならば、そなたのすべきことは明確ではないか。星持ちよ』

次第に震えを増し、動搖を露わにする俺の声とは反比例して、鎮  
守神はどこまでも静かで落ち着いた声をしていた。

緋色の眼が細くなる。

『どちらも見捨てたくないのなら、見捨てなければ良いだけのこと』

俺ははつと息を吸い込んだ。

見返した先にある緋色の瞳は、初めて会った時からずっと、俺を見透かして誰かを思い出すような色をしていた。

切なさをはらんだ懐かしさ そしてそれらの源泉となる遠い想い。

「お前……」

俺は思わず手を伸ばしていた。

神に触れるなどと、あまりにも畏れ多い、しかし、彼は拒まなかつた。

なめらかな漆黒の脇腹に顔を埋める。

見た目よりも柔らかなその体毛は、先日よりもずっと健やかな艶を帯びて 懐かしいような大地の匂いがした。

「……どうして、俺を、助けてくれるんだ……」

『勘違いをするでないぞ？』

鎮守神が体を震わせてかすかに笑ったのが伝わって來た。

それからふわりと背中を包む感触。尾だ。

鎮守神は俺を抱きしめるかのようにその体毛で包みこんで、やがて厳かに呟いた。

『我はな、あの男に無理やり封印を解かれて立腹しているのだ。だがそなたにあの男を救つてもらわねば復讐することもできんではないか。故にこれはお前のためではない。我はただ、我的目的のため

にだけ動いているのだ』

「……そか」

俺も小さくほほ笑んだ。  
鎮守神から身を離して、いま一度その眼を覗き込む。  
そして言った。

「ありがとう

確かに、迷うなんていちばん俺らしくない事だった。

(アンが死んだなどと……よくも、よくも!—)

焼き付いたのは、アンナさんと同じ色をした碧の瞳。<sup>め</sup>  
进るような悲しみと切なさに氣も狂わんばかりになつて、それで  
も大切な人を守ろうと必死になつてゐる、心優しい人のまなざし。

(ハルも、本当は優しい子なのよ)

アンナさんの声が耳によみがえつた。  
双子の兄について話す時、いつも満面の笑顔を浮かべる妹。  
あの人�헤의存在が今までどれほどハル先輩を支えてきたことだらう。  
俺は熱にうずく肩の傷を押さえて瞑目した。

わかるよ。アンナさん。

この世ではいつも、誰かが誰かの事を想つて。  
そしてその人のために何かしてあげたいと願つてゐるんだ。

(あたし、ハルが大好きなのよ)

うん、大丈夫。  
俺さ。

ちゃんと わかつてゐるよ。

\*\*\*

屋敷に上がった俺は、傷を手当するより着替えるより何よりも  
やく、まずハル先輩の後を追った。

彼は屋敷の最奥、北対きたのたいと呼ばれる離れに運び込まれていた。  
ババアの弟子である俺は、その北対というのが魔物を調伏する際  
にのみ使用する特別な空間だと知っていた。  
だからこそ急いだのだ。

「蒼路？」

母屋から渡り廊下を進み、高熱にふらつきながら北対に赴くと、  
白い袴に身を包んだババアの式神がふたり、薙刀を手に入口を守護  
していた。

今しも離れの中から出てきたババアが俺の姿を認めて声をあげる。  
答えるのがおっくうで俺は黙つて彼女の目前まで歩を進めた。

「……お前、怪我の解毒は済んだのか」

厳しい口調で尋ねられて、ただ首を横に振った。

息が弾み、体が熱い。

額から流れ落ちる汗が眼に入ったのを無造作に手で拭いながら俺  
は口を開いた。

「先に、先輩に会いたい」

ゆつくりと、一語一語を区切るようにしてそれを伝える。  
ババアは物々しく俺を見上げて黒い鋭い眼を光らせた。

「危険な、状態じやぞ。ハルにとつても、お前にとつても  
……わかってる。ただ、もう時間がないだろうから」

そこで言葉を切つて、息を吸つた。

そう、俺は認めなければいけない。

ハル先輩にもアンナさんにも、残された時間は少ないと。  
それは絶望的な事実だが、だからこそ俺はここで迷つてはいけないのだ。

「 後悔を、したくない。させたくないんだ」

俺の言葉を聞いたババアは、やがてゆっくりと、頷いた。  
小さな片手が宙に挙げられ、式神が無言で脇に退いた。  
おかげでぽつかりと開いた北対の入り口、そのわずかな空間に、  
白く半透明の膜のようなものが張り巡らされているのが見えた。  
結界だ。

淡く光る表面には、朱色の漢字に似た文様が施されている。

「 入るが良い。ただし　その犬と一緒に」「……へ？」

予想外の言葉と共に背後を指差されて、前へ足を踏み出そうとした  
ていた俺は意表を突かれた。

一呼吸を置いてふりかえり、緩慢にまばたきをする。  
するとそこには　澄ました顔でお座りの体制を取つていてる鎮守  
神の姿があった。  
奇妙なことに平生はゾウよりもゆうに大きい巨体が、いまは中型  
犬と同じくらいの大きさにまで縮んでいる。

「 おま……」

お前、ここで何してるんだよと、言い差して俺はやめた。

だつてそんなことを言つても無意味だ。

我は我の意思によつてのみ行動するのだと、彼はさつき言つていたではないか。

代わりに何か知らんが口許が勝手にほころんでしまう。熱があるせいだろうかと思いながら膝を折り、鎮守神と田線を合わせた。

「……ついてきてくれんのか？ 犬っこ！」

『お前は危なつかしいからな』

鎮守神は軽妙に答えながら尾を振つた。

『貴重な星持ちの血がこれ以上むだに流れるのは、いち魔物として、絶対に見過せん』

「……さーんきゅ」

そして俺は、最強の隨身とともに内へと入つて行くことになったのだ。

＊＊＊

闇 　だつた。

真夏の曇下がりだといつのに、北対のなかは漆黒の闇で満たされていた。

それは異常なことだつた。

ババアの屋敷は典型的な武家屋敷、屋外に面した壁などはほとんどない。

いつもあちらこちらから風が通り、庭先からあふれるよつた光の降り注ぐ、異形たちの笑い声あふれる心地よい家なのだ。

それに、周囲に沈殿してゆくようなこの重い空気は。

「……寒い」

俺は呟いた。

そう、ここには恐ろしく寒かつた。  
体が発熱しているだけに、皮膚にふれる屋内の空気が凍り付きそうなほど冷えているのが際立つてよくわかる。

信じられない事に息が白い。

体の内と外の温度差があまりに激しく、俺は吐き気すら覚えた。  
俺の足もとにいるはずの鎮守神が低く声を出すのが聴こえた。

『ひどい妖氣だな。とても人間、それも仮にも星を持つ者が発する  
氣配とは思えぬ』

「ああ……」

俺は堪え切れず立ち止った。

右肩の下、先輩に刺し貫かれた肩の下に、何かがうごめいている  
ような奇妙な感触がし始めていた。

……たぶん、除去されていない種が成長しているのだろう。  
次第に吐き気も強くなり、手で口許を覆つてうつむいた。

『氣を失うなよ、星持ち』

「……っせ。余計な御世話だ」

鎮守神に言い返しながら喉元にこみあげてくる苦いものを懸命に  
飲み下した。そのとき、ふと。  
俺は、冷え切った闇の先から響いてくる、かすかな音を捕えていた。

「……歌？」

風のかすかに揺らぐよつな

雨の清かに滴るよつな、それはほ  
そく柔らかな旋律だつた。

鎮守神もむ、と喉を鳴らして耳をそばだてる（……氣配がした）。

『女の声ぞ』

「……女……？」

なにか懐かしく、心の奥底のとても幼くやさしい部分を撫でるような旋律だつた。

誘われるようにして数歩歩みを進めた俺は、その歌が英語で歌われているものだと気がついた。

少し低く、甘い声で語られる異国の歌

「アンナさん……？」

名を、呼ばわった瞬間 眼前の闇が、開けた。

まるで閃光が奔つたかのようだつた。

稻妻が音もなく地を張つたかのように、視界を塗りつぶす漆の闇を蹴散らして、俺たちの視線の先、この屋根の下に居るひとの姿を映し出した。

闇が裂けたのは、わずかな刹那。  
だがそれでもじゅうぶんだつた。

「……アンナさん…」

闇のなかに、闇の先に居たのは彼女。  
そして彼女がその腕で？き抱いた兄だつた。

（ だれ……）

再び俺たちの視界は重い闇に塗りこめられる。  
けれどさっきまでと違つのは、彼女の姿が　そう、アンナさん  
の姿が、ちりちりと揺れる碧の燐光に包まれて顯れたことだつた。

(やこに頼るのはだれ……?)

アンナさんの声を聴いて、俺は先ほどまでの歌を彼女が歌つてい  
たのだと悟つた。

俺の知るアンナさんの声とは全然ちがつ、頼りなくて行き場のな  
い、迷子の上げるような声。

「アンナさん、俺だよ、蒼路だ!」

(……お前も、あたし達を引き裂くつじてるの……?)

「……何言つてるんだ?」

俺は違和感を覚えた。

話が噛み合わない、といつよりは、アンナさんの言ひ言葉が理解  
できない。

(……やうやく……あたしからハルを奪いに来たのね……)

「アンナさん! 何言つてるんだよ、あなたはお兄さんを助けたい  
んだらうー! ?」

『おかしいぞ、星持ち』

困惑する俺の足もとで鎮守神が言った。

アンナさんの放つ燐光のおかげで彼の姿が見える。

彼は強い警戒を露わに、低く身を伏せて牙を剥いていた。

『あの女が顯れているところ! とほ……兄の方はもう

「　　ハル先輩」

はつと俺は瞳を凍り付かせた。  
碧の燐光に身を包んだアンナさんの、もはや輪郭が消えさせて、  
眼から光の失われた虚ろな顔。

その膝の上に崩れるようにして横たわっているのは、俺と同じ高校の制服を着た青年だった。

その腕はアンナさんの腕とからみ合ひ、蟻のような露は、今しもアンナさんによつて口づけを受けようとしている。

「馬……つ鹿ヤロウ！！」

俺はとつせに　　床を蹴っていた。

が、タイミング悪く右肩周辺に激痛が走り、着地にもろに失敗する。

痛みに声無く身を仰け反らせ、つんのめるよつこにして床に転げると、俺は爪を立てて肩の皮膚をかきむしった。  
痛い、熱いあつい痛い！！

『星持ちー？』

鉤爪と床のこすれる音をたてながら鎮守神が飛んでくるのと同時に、俺の耳に届いたのは、今度は男性の声だった。

「…………いまじる、萌芽か……ずいぶん時間がかかったな……」

手のひらで刺すように肩を押さえながら、俺は苦痛にゆがんだ顔を上げた。

碧の燐光。だがアンナさんは消えていた。

いまその光に包まれているのは、生身の人間の体。

「……先輩……ツ」

そう、ハル先輩が、起き上がりつて俺を見ていた。

げつそりとこけた頬に落ちくぼんだ眼窩が黒い影のように映る顔で、やつれた肩をぜいぜいと荒い息に上下させている。

その姿を見て安堵すると同時に、俺はまた堪え切れない激痛に喘いだ。

肩を押さえる指の間から、ぬるぬると這い出る細い糸のようなものがあった。これが恐らくは寄生植物なのだろう。

悶える俺の姿を喰らい顔で見つめながら、ハル先輩がじくじくと喉を動かした。

「……アン……？」

(なあに、ハル)

兄の声に導かれるようにして、妹の姿が再び降るようにして顯れた。

彼女は兄に背後から抱きついてにして、そのままおぼろな手足をずぶずぶと兄の肉体に沈みこませてゆく。

やめろ、と俺は声にならない声で叫んだ。やめてくれ。

「もう、一度と離れないでくれ……僕の傍にしてくれ、アン」

(それはあたしのセリフだわ……ハル)

冷たく無機質なアンナさんの声が闇の中によく通った。

(あたしは一度、独りで死んだ。とてもとも、寂しかったわ……だから、今度は一緒に行きましょ(う)

『……怨靈めが……！』

鎮守神が、低い唸り声を上げて俺の傍で立ち上がった。

ふいに凄まじい程の妖氣　いや、神氣だ　を爆発させて、本來の巨大な姿に立ち返る。

鎮守神、と俺が必死で伸ばした手に、彼は答えるようにまなざしをくれた。

アンナさんの声が、ハル先輩のそれと重なつて響く。

(今度は、ふたりで、一緒に……！)

双子の手のひらがしつかりと重なり合い、絡み合つ。闇がどろりと粘度を濃くした感覚があり、碧色の暗い輝きが北の対を内側から侵食するように広がつてゆく。

『……星持ちの望まぬことは……させぬ

俺は、動けなかつた。

もう駄目だと本氣で思った。

碧の闇が頬に触れてくる。触れた先から根っこそぎ体温を持つて行かれるような感覚に、抗う事も出来ずに眼を閉じた。

だが、其れを。

その凄まじいまでの双子の執念、双子の闇とも呼べるもの。

『私は一度と……同じ過ちは繰り返さぬー!』

「この鎮守神は　　一瞬で碎いた。

## 声、聲

足もとを衝撃が突き抜けた。

地の奥底から大地が唸り、雷鳴のよつた轟きと共に一度大きく揺らめいた。

闇と光が交錯しながら視界を駆け抜け、絡み合うように明滅する。俺はとても眼を開けていられなくなり、まぶたを下ろした。

風が 土の匂いを、森の匂いをはらんだそれが 竜巻の如く巻き起こつて髪を、服を乱してゆく。

俺は血の気が失せてゆくのを感じた。全身がざつと鳥肌立つ。

これが 神氣。

脆弱な魔物など触れるまでもなく消滅せしめるであらう、凄まじいほどに高貴な気配。

美しいのに、同時に恐ろしいものだ。

それが鎮守神を中心に迸り、世界を大きく揺るがしている。

「これが……神……」

俺はからからに乾いた喉で茫然とそう呴いた。

大地が、鎮守神に共鳴している。

そのことがはつきりとわかる。

山を守る神にとつては母体ともいえるべき山 それが、彼の感情に呼応して吼えているのだ。

『……命はいつか死くるもの……』

鎮守神が口を開いた。

体の中心に直接響くよつた太く毅い声音だ。

俺はうすく眼を開こうと試みて、成功した。

そうして始めて、先ほどまで体を取り囲んでいた風の障壁が弱まつていてることに気づく。

闇は 搓き消えていた。

『人の命は、ことさら短い』

彼の声に導かれるようにして俺も双子の姿を田で追つた。  
彼らは 彼らも、神気に気押されて微動だにもできないようだ  
った。

指先さえ動かせぬまま、見開かれた碧の双眸を持つ男女が一人、  
驚愕と恐怖の色をいっぱいに湛えてこちらを見つめている。

『されどそなた等は決して』

鎮守神が風を纏いながら宙を跳んだ。耳元で風が唸る。

俺は微動だにもできなかつた。

ただ打たれたような心持で、彼の姿を その声が紡ぐ想いを、  
聴いていた。

『 決して、苦しむために生まれてきたわけではない!』

はつと息を呑んだ。

鎮守神が、双子を……呑む。

巨大なあぎとを開いて彼らの闇を喰らつ。

その後はふたたび世界が眩くもめいた。

碧色の閃光が爆発し、凄まじい衝撃が空間を揺さぶつて、俺はふ  
たたび眼を閉じた。

頭をどこかに激しくぶつけて意識が急に遠ざかる。

「……が、み……！」

喰きは、風の唸りに捉えられて？き消える。

今にも意識を失いそうな状況の中で、けれど俺は、遠く彼方からかすかに響いてきた音を捉えていた。

(……醒)

地揺れと風の口の中にいるにも関わらず、俺の心に直接触れてくる、それは特別な声だった。

( 緋醒か。良い名だな )

女性の、声。

ほほ笑みを含んでやわらかな、温かい人の言葉が、俺の脳裏にひとつずつ画像までをも映し出した。

(……お前は、何と言つた前なのだ？)

それは秋深い、紅葉に真っ赤に染まつた山の中。

錦の様にはらはらと舞い散る落ち葉の向こうに、景色の紅とあざやかな対比をなす漆黒の狼と、その脇腹によりかかつて座る着物姿の女性が見えた。

(わたしは、八宵)

彼女は言った。

ぬばたまの黒髪を無造作に束ねて、ちいさく白い顔には、声と同じくあたたかな笑顔を浮かべた妙齡の女性。

(お前の友人の、八音だよ。……)

彼女がほほ笑みながら髪を搔きあげた拍子、俺ははつきりと見た。その右手。ほつそりとした骨格の浮かぶ甲の上。俺とまつたく同じ場所に浮かんだ 星型の大きな痣を。

\*\*\*

『めんなさい』と、繰り返しつかえし謝る声がする。

『めんなさい、『めんなさい。あたしはあんたに何をしたの、助けてほしいとねが希つたのに。』

ごめんなさい、蒼路。

『めんなさい。』

でもあたし

『もうあんたに声が届かない…………』

\*\*\*

「 アンナさんッ！」

自分で自分の叫び声に飛び起きた。

拍子に汗が額から、背中から、零れおちて我に返る。

甘い香りが鼻をついた。これは、紫檀しだんだ。

薄ぼんやりと明るいのは、すぐ脇に置かれている行燈のおかげだ。

「 ジジ……は」

一呼吸ついて、俺ははつきりと、自分が北の対ではない場所にいるの

だと気がついた。

左手の下にやわらかな感触がすると思つたら、布団だった。

俺、寝てたんだ。

『気がついたか』

「え……」

耳朶を打つた低い声音に顔を上げると、行燈の光が届かない部屋の隅に、闇に溶け込む毛色の狼がうずくまっているのが見えた。鎮守神、と口の中で呟くと同時に俺は咳き込んだ。ひどく喉が渴いていた。

『……』

そんな俺の様子を見て、鎮守神は無言でのそりと身を起こした。少し開かれていた障子の隙間にするつと身を滑り込ませると、そのまま部屋の外へと出て行く。

俺は彼の姿を眼で追っている内に気がついた　日が、暮れてい

る。どうやらかなり長く眠ってしまったようだ。

「マジかよ……」

寝てる場合じゃないじやんか、と独り口ひながら俺は身にかかつていた布団を跳ね飛ばして起き上がった。

が、途端に眼が眩み、俺は手足をもつれさせて畳の上にひがる。何だろつ、手足がうまく動かない。

特に右手の感覚が全くなく、重い棒が肩からぶら下がっているような違和感しかしない。

「つだよ……これーー！」

俺は苛立つて声を上げた。

何で動かないんだ、俺の体！

俺は、今ここでのうのうと寝ているわけにはいかないんだよ。

ハル先輩が　それに、夢の瀬で捉えたあの泣き声。

アンナさんが。

今も苦しみながら、二人で泣いているつていうのに。

「時間が、ない……！」

「蒼路」

苛立ちこ、拳を畳の上に思い切り叩きつけた瞬間だった。  
障子が大きく横に開き、廊下に膝を折った来訪者の姿が闇に浮かび上がる。

名にふさわしい暗紅色の着物を着て、浅縫あさなはなだの帯を締めている。  
きつちつと結い上げられた髪型のために、額の星印が際立つた。

「深紅……」

「動いては、だめよ。まだ麻酔が効いているわ」

深紅は静かにそう言つと、手にした盆と共に部屋の中に入つて來た。

後ろ手に障子をぴたりと締めてしまつと、彼女は盆を畳の上に置いて、いまだに半ば倒れた体勢でいた俺を助け起こした。

金刺繡のされた袖が肌に触れたひょうし、甘い香りが匂い立つ。  
体の自由が効かないぶん、俺はされるがままになつて、恥ずかしさとも照れともつかない感情に声を荒げた。

「……や、やめろよー！」

「怪我人が何を言つてゐるの？」

涼しい顔で答える深紅に俺は必死に首を振つた。  
ちがう、そういう意味じゃない。

焦りともどかしさのために思わず叫んでいた。

「そつじやなくて　俺は、こんなことしてゐる場合じやねえんだよ  
つー」

叫びそのまま深紅を見る。

「先輩が……アンナさんが！　苦しんでる、早く何とかしないと、

本当に二人とも」

「ええ。一人ともこのままでは死ぬわ」

彼女は何の表情も浮かべない顔でそう答えた。

冷静な様子に俺の苛立ちはさらにも募る。

わかつてゐなら何故止める、そつ、思い切り言い返してやるつと思つた瞬間だつた。

「けれどそれが……お前まで死んでいい理由にはならないでしよう

深紅の顔が　ゆがんだ。

柳眉をきつく寄せて、唇を噛みしめて。

俺ははつと息をとめた……[冗談ではなく、泣かれるかと思つたのだ。

けれど彼女はそつしなかつた。

俺を揺らぐ瞳でじつと見つめてから俯くと、黙つて布団へと誘導した。

そんな顔をされても俺も逆らえず、しぶしぶ布団の中へと戻るし

かない。

「……」

微妙な沈黙が流れた。

深紅が捧げ持つてきた盆の上から水差しを取り、俺に差しだしてくる。

俺は黙つて自由の効く左手でそれを受け取つた。

切り子の水差しはよく冷えていて、中の水は清流のように乾いた喉を潤してゆく。

「……っは……」

一しきり喉を鳴らしてそれを飲むと、俺は大きく深呼吸した。

焦りに逸つっていた気持ちがすこし落ち着いてくる。

ふたたび伸ばされた深紅の手に水差しを手渡すと、口許を手でぬぐいながら彼女の様子を窺い見た。

きちんと背筋を伸ばして正座する、端整な姿。

けれどどうしてだろひ。

その長い睫毛も、優美な口許も、いつもみつめたりを帶びたように見えた。

「……あの、や」

俺は慎重に、というかややビビりながら、口を開いた。  
深紅に怒られるのはゴメンだし、泣かれるなんてもつての外ほかだが、  
前述したとおりに俺はいま黙つて寝ているわけにはいかないのだった。

「あの、先輩と……アンナさんは？」

深紅が返事をしないのをいいことに俺は思いきって尋ねた。  
昼過ぎに北の対を訪れたあとから今まで、俺の中には何時間も空  
白の時間が在る。

鎮守神があの凄まじい力を見せた後、双子はどうなったのか。  
そして今、どうなつているのか。

確認しない事には気が済まなかつた。

しかし俺の質問に対して、深紅はまず深いため息を吐きだすことで答えた。

「……まったくお前は……」

はじめ剣呑な、次いで呆れたような視線を深紅は投げかけてくる。  
ともすればそれだけで竦みそうになる心を俺は必死で堪え、彼女の次の言葉を待つた。

「いつもいつも、人の事ばかり考えて。自分の身を省みない。だか

らかしら、お前が鈍感なのは

「えー……と?」

どうにも要領を得ない。

首をかしげてしまつた俺に対し、深紅はまわつこじり息を吐くと、行燈に油を追加しながらこう言つた。

「安心おし。鎮守神が、一時的にハル先輩の体を侵していた瘴気を祓つた。いまは体調が落ち着いて眠つているわ」

「……それじゃ、アンナさんは?」

俺は尋ね返す。

双子の片方だけが無事と聞いてもまったく安堵できなかつたのだ。すると深紅は顔を上げた。

冴え冴えと落ち着いた黒曜の瞳が俺を見据え、嫌な予感が胸に走る。

「蒼路。わかつてゐるかもしけないけれど　彼女とはまつ、触れ合ひつゝと叶わぬ」

ずきん、と、鋭い痛みが脳天から爪先を刺し貫く。

俺はすぐには答えられず、黙つて拳を強く握りしめた。

呼吸ができなくなる。

喉に、なにか硬くて張り詰めたものがつかえているようだ。

「兄に長い間憑依していた結果、彼女はもう、本当に悪靈になつてしまつたの。……それも、兄が生きていることを恨む怨霊にちかい存在へと変化してきている」

「……見えたのか?」

「ええ」

深紅の答えは短かつた。  
しかし、その声音の強さに、俺は自分が眠っているあいだに何か  
が起きていたことを悟る。

「そんな……違ひ、アンナさんは……」

アンナさんは、そんな人じゃない。

俺は言おうとした。でも、喉からはやはり声が出せなかつた。  
代わりに俯いて、左手で布団をぎゅっと握りしめた。  
深紅のしづかな声が暗い視界の向こうから響く。

「……お前、<sup>しん</sup>真にはわかっているのでしょうか？」

迷いのない声が、甘さに引きずられそうになる心を現実へと引っ張り上げる。

俺はかすかに顎を引いた。

そうだ わかつて、いたことだ。

最初からわかつていた。アンナさんはもう死んでいる人なんだと。  
本来ならばとっくにこの世を去つて、成仏しているべき魂など  
と。

それなのに、今まで何をぐずぐずしていたのだろう。

俺の役目はこれ以上アンナさんを苦しめることじやない。  
彼女をハル先輩の体から解き放つて 成仏をせること。  
そして双子をふたりとも、自由にすることだ。

「……ああ。わかつてる」

苦しい、重い塊をなんとか呑み下して、俺はようやくそう言つた。  
ゆづくつと顔を上げると、深紅が先ほどと変わらずに俺を見据え

ていた。

その瞳の輝きは、勇氣だ。

いつだって変わらない彼女の信念。

この眼がずっと昔から俺を強くしてくれた。

「わかつてゐる……ありがとう」

深紅の眼を見据えながら俺はそう言ひ、ひとつきつぱりと頷いた。  
ようやく、決意が固まった。

い。

アンナさんも、ハル先輩も、どちらもこれ以上傷つけたりはしない。  
見据える闇がどれほど深く、果てのないものに思えても どんな場所にも光は射すと、俺は信じる。

俺は俺の星をもつて、双子を闇から解き放つて見せる！

\*\*\*

「……肩の傷は、まだ痛む？」

長い沈黙が流れた。

それを破つたのは深紅だった。

深く瞑目していた俺は、突然声をかけられて反応が遅れる。

何を言われたのかわからなくて顔を上げると、彼女が自分の肩をとんとんと手で叩き、それから俺に向けて首をかしげる仕草をした。

「え、肩？ ああ

慌てて自分の右肩を見下ろして、そこに意識を集中しながら俺はつぶやく。

「……そういえば、痛くない。全然。なんでだ？」

「私が治療したからよ、もちろん。バカ。大変だったのよ、萌芽した種子が筋肉すれすれまで根を張つていて。あと少しで神経に傷がついていたかも知れないんだから」

睨みつけられて、俺はうつと軽く身を仰け反らせた。

毎度のことながら、我ながら深紅にはほんと弱いと思つ。

「……すまん。ありがとう」

戦々恐々しながら頭を下げるが、深紅はなぜかほほ笑んだ。眉を少し下げるが、困ったような顔で。俺はとまどつた。

なんで、こんな顔をするんだろう。

さつきも泣きそつた顔を見せた。それに昼間も、俺がハル先輩と一緒に交えたあとで、彼女はこんな顔をした。

心細そうで、寂しげな、けつして良い表情ではない。

俺のせいか……？

俺は思案した。

が、いくら考えをめぐらせててもその理由が思い当たらない。

大体、深紅の幼馴染でありながら俺は意外に深紅のことは知らないのだった。

気が強くて頭の良い容赦のない美人、とかいうことはわかつても、それはしょせん表向きの彼女。

苛酷な運命を担つたその心がふだん何を想い、何を考えているのか、そんなことは俺には全然わからないのだ。

……わかりたいとは、焼けつぶよつと思つてゐるけれども。

「……蒼路は……」

やにわに、深紅が口を開いた。

俺は遠慮がちに顔を上げる。が、深紅は俺を見ていなかつた。伏し目がちに俯いて、その手を膝の上で所在なさげに組み合はせている。

「蒼路は、いつもそつうね。いつも独りで考えて、行動して。無茶ばかりする。毎日怪我をして満身創痍なのに、笑うから。……毎わたしの足もとはおぼつかなくなつてゆくわ」

「……みこいつ？」

俺は珍しい事態になつてゐることに気がついた。

深紅が、心の内を、喋つてゐる。

それは とても稀なことだつた。

聰明で誇り高い深紅。

人にも厳しいが、誰よりも自分に厳しい彼女は、己の心を他人にさらけ出すことを恐らしく弱さとみなしている。

彼女が弱音を吐いたり涙を見せたことは、俺の記憶の限りではただの一度だけ。

そう、彼女の親父さんが亡くなつた時だけだった。

「お前の事が、わからなくなりそう。わかっていると思つていたのに」

深紅は言葉を続ける。

静かな空氣を、その声はやわらかく揺らし、俺の心に大きな波紋を広げてゆく。

「幼馴染なのに、こんなに遠いと思わなかつた……」

遠くなんか　ない。

俺はここにいる。ずっとお前の傍に居る、そのために強くなつたんだから。

そう思つてゐる、そう言いたい。

なのに何故だ　声が出ない。

情けない俺を尻目に深紅の瞳はいよいよ潤んできた。

ど……どうしよう!

「お前はわかつていないのでしょう?　お前が怪我をするたびに、私を置いてどこかへ行つてしまふ度に、私がどんな気持ちになるか。だからバカだつて言つてゐるのに、お前は懲りてくれない。私の声など届かないのだわ、お前にば。お前は、自分の信じるものしか信じない。だったら　だったら、私がお前の傍にいる意味は何よ?」

「それ、は

違つ、と動搖しまくりながらも俺は口をさしはさもうとした。  
けれどできなかつた。

深紅が　顔を上げたからだ。

濡れた黒い瞳で、今しもそこから一粒の涙をこぼしながら俺を見つめる。

白い手が伸ばされて俺の手のひらに触れた。  
驚くほどやわらかで、そして冷たい手だった。

「蒼路」

酷くか細く、頬りなげな声色に、俺は動けなくなつた。  
じりじりを訴えるように見上げてくる瞳は涙にぬれている。

今や喉は完全にその動きを停止して、ただ心臓だけが異常なほど速く脈打っていた。

「 お願いだから、自分で無茶をするのはもうやめて

彼女は言った。そしてその言葉で俺は気がついた。

深紅は……俺を、心配してくれていたのだと。

思い付きで突っ走り、いつも一人で無茶ばかりをする俺を察し、見守ってくれていたのだと。

あのビンタもいわれのない大喝も、つまりはそういうことだったのだ。

「私が何も知らない間にお前が怪我をするなんて、耐えられないわよ……！」

なのに俺はそんな彼女をどれほどないがしろにしてきただろう。考えてみれば、今回の依頼は俺と深紅が二人で引き受けた依頼だ。なのに俺は自分ばかりが気を張つて身勝手に行動していた。

深紅がそれによつて何を思うかなどと、考えもしないで。

「 深紅……」

ぽろぽろと涙をこぼし、俺の手にすがる彼女に、俺は弱り果てて息を吐いた。顔が熱い。

心臓がばくばくして、触れられている手からそれが伝わるんじゃないかと思う。

でも、そんなことはとつあえず脇に置いて、俺には言わなければいけない事があった。

「あの、さ、深紅。……」「めん

声がふるえたのは、鉄の意思で無視した。

俺の手を取つている深紅の手を、恐る恐る握り返して、俺は再度繰り返した。

「……ごめん。俺が、悪かった」

だから頼む。

泣かないでくれ、そんな風に。

お前に泣かれると、俺、どうしていいかわからなくなるから。

「泣くなよ……」

つないだ手がふるえている。

華奢な手のひら、普段のその気丈さからすれば、信じられないほどにやわらかく細い指。

着物に包まれたなよやかな肩の線に、脳裏をよぎる記憶があつた。

蒼路

六年前のあの雨の日。

俺たちの里が魔物に襲われて滅んだ、悪夢の日。

深紅の親父さんも、俺の親父も、みんなあの日にいなくなつてしまつた。

怖いよ、蒼路……！

「の、ひとは。

」の華奢な肩には過ぎる重荷を背負つて生きている。

五辻の後継として、呪われた姫君として。

ああ 俺はほんとうにバカだな。

彼女を守るために星師になると決めてここにいるの。

結局なにもできずにまた泣かせてしまつたんだ。

「深紅……」

心底弱り果てた俺が今ひとつ肺の奥から熱いためいきを吐きだし、深紅の手を強く握りしめた その、刹那。

眼が回った。

「H……？」

ぐりりと体が傾き、訳がわからぬままに俺は布団に倒れ伏した。耳の奥でざあっと血の気が引く音が聞こえる。視界がまづくらになつて手足が冷たく縮こまつた。

「そ 蒼路つー」

深紅の、悲鳴にちかい声がすぐ耳元で聞こえる。

「いやよ、蒼路、蒼路……」

「み……」

深紅、と、言いたいのに言葉にならない。だから未だつないだままだつた手に力をこめた。意識が急速に闇に呑まれてゆく。貧血だろうか。障子が勢いよく開かれる音がして、誰かが部屋に飛び込んできたのがわかつた。

『何事だ、姫君ー』

鎮守神の声だった。

俺は布団につつぶした状態で怠慢に瞬きをする。

動きたいが、もはや一步も動けない。

意思に反して悶ぜられ始めた意識の向ひつで深紅と鎮守神の声が交錯した。

「蒼路……蒼路、しつかりしてー」

『これは 大丈夫だ、血が足りていなければ』

深紅の甘い香りが近づいたと思つたら、直後、背に触れてくるやわらかで温かな感触がした。土の香りが匂い立つ。鎮守神の前肢あしだろうか、と思つたすぐ後、深紅の金切り声が耳をつんざいた。

「蒼路に触らないで、魔物！」

『何を言つ、触らねば容体もわからぬであろうが。少しば落ち着け、

姫君よ』

「つむれ……お前に……お前に何がわかるつていうのよー?」

冷静な鎮守神の声が逆鱗に触れたように、深紅はさらりと叫んだ。

「わかるわけがないわ、お前なんかには、絶対にわからない！ 蒼路があたしにとつてどれほど大事な存在か、蒼路が、ここにいると、いうことが、どれほど幸福なことなのか…………！」

『 わかつているー!』

鎮守神が怒鳴った。

それに虚を突かれたように深紅が息を飲む。

『わかるのだ……姫よ』

声を和らげて、いま一度彼は言つ。

『そなたの気持ちは、よつわかる』

「……なこ、こを」

『この者は 蒼路は。なんだか無性にあたたかい。離れがたくなる、際限ない光の子供よ』

大地の香りが俺を包む。

それはまるで、あたたかな落ち葉に潜り込んだかのような、懐かしく優しいぬくもり。

なんとか氣絶しないようにと頑張っていた意識がその温かさに急に挫けた。

俺は眼を閉じる。

とろけそうな眠りに背中から落ちてゆく。

『我々は同志なのだ、姫。……同じ者に心惹かれた』

「……ではお前は、言えるの？ 蒼路を守ると？ そのために、蒼路のためにここにいるのだと？」

『一目で、わかつたのだ』

まぶたの裏側で最後に聞こえた一人の声は、なんだか心切なくなるほどに優しい音をしていた。

『蒼路を見た瞬間 この者のために我は現世に蘇つたのだと』

『……導かれて……焦がれて』

『そうだ。だから愛しい。だから……傍に、居たいのだ』

理由なんかない。

大切な人は、ただ大切なだけ。  
だから傷ついてほしくないだけなんだ。

いつだって、誰だって きっとそうだろう。

\* \* \*

ふたたび夢を、見た。

ひびく美しい そう、美しすぎる、なんだか悲しくなるぐらいの 薔薇園に俺は立っていて。

はしゃいだ声を上げてそこを駆け抜け、一人の子供を見つめていた。

(早く早く、ハル！ ママがバタークッキー焼いたんだよー。)

(待ってよ、アン！)

(早くしないとハルのも全部食べちゃうぞーー！)

金の髪が太陽にきらめく。

碧の瞳が生き生きと互いの姿を眼に映し込む。

良く似たセーターと靴を履いて、泥に汚れた手をしつかりと握り合った彼らは、笑顔満面でとても仲睦まじそうに見えた。

甘い薔薇の香りがむせかえるようだ。

彼らは俺の前を通りすぎると、白い壁にレンガ色の屋根をした家に入つて行つた。

笑い声が家のなかから聞こえてくる。

けれど、どうしてだろう。

こんなに幸福な情景なのに、俺の胸はひどく切なくて、泣きそつだつた 。

(半星つてなに？)

情景が切り替わった。

さつきまでとは季節が変わっていた。冬だ。

金の髪をした子供達は、今は家中でそれぞれ、楽器を練習していくところだった。

(あたしたちもアストリアになるんでしょう？ パパとママと、おじいちゃんとおばあちゃんと同じよつて

大人びた物言いをする女の子は、ヴァイオリンを額にはさんでいた。

まだ小さいから、楽器もちいさい。

そのすぐそばでは男の子の方が足に挟む楽器  そうだ、チョロを、同じように練習している。

(おばさんが言つてた。ぼくたちの使命は、星をつかつて悪い怪物をやつつけることだつて)

(そうだよな、ハル。がんばろうね! -)

(がんばろうね、アン)

そうして笑いあう一人の子供を、心配そうに見つめているのはきれいな女人の人だった。

子供達が外国人風の見かけをしているのに反してその人の髪は黒く、肌もアイボリーの色をしている。

ソファに物憂げに腰かけて子供達を見つめる瞳は、なんだか例えようもなく暗かつた。

(どうしてなの……)

やがて子供達が会話に飽き、再び楽器をさらり始めた時、彼女はぽつりと呟いた。

俯いた拍子に長い髪がさらりと零れおちて、白い首筋が露になる。そこには  五芒の星が刻まれていた。

(どうして、あたしの子供なのに、半星なんかに生まれたの…… -)

重い咳きは、ほとんど憎しみとも言える響きを伴つていた。

だが子供達はそれに気が付かない。

一人で夢中で楽器を弾いて、やがては同じ曲を弾きはじめた。  
たどたどしい旋律を耳で追う内に俺はふと首を傾げる。  
この曲。

聴いたことがある。

(夏の一)

女の子が歌い始める。

(夏の名残りの薔薇……)

旋律が急速になめらかさを帯びた。  
それだけじゃない。音も変わった。  
低く豊かな 明らかに以前よりも上達した響き。  
それを発しているのは、さつきまでの子供じゃない。  
もう大人になりかけた青年の背中。  
雨のざあざあ打ちつける窓際で……妹から遠く離れて。  
けつして振り向かずに彼はチョロを奏でていた。

(どうこうひと?..)

妹は部屋の戸口に立っていた。

俺はそのすぐ脇に居たので、彼女の背がどれほど伸びたのかを目の当たりにする。

すんなりと伸びた手足に、高い音。

金の髪はすこし色が濃くなつた。碧の眼はそのままだ。

(ねえ、答えなさいよハル どうこうひと、アストリアをやめる  
つて!)

激情を隠さずに叩きつけられる声は、雨に振り込められた部屋の中で際立つてよく響いた。

だがそんな声を出しても俺にはわかった。彼女が、ものすごく悲しんでいることが。

(どうも。そのままだよ。僕はもう星は捨てる)

兄が背中で言った。

雨の庭に眼を向けたまま。

振り向いてくれない事に焦れたのか、妹はさうに声を荒げる。

(捨てられるわけがないじゃない！ これは いの星は、あたしこの運命よ！ 背負って生まれたものなのよ、ハル！)

(……煩いな。静かにしてくれよ、君がいると気が散るんだ)

興奮している妹と比較して、兄の声は同じまでも柔らかく、残酷な程に落ち付いていた。

ぎりり、といつ音がして俺は顔を上げた。

妹の方が強く歯ぎしりをして拳を握りしめたのだった。

(……いつから)

(何？)

(いつからそんな風になつたのよ、あんたはッ！)

迸るような怒号と共に部屋の窓ガラスが砕け散った。

俺は思わず腕で顔を覆つたが、銀に輝く破片は俺の肉体に触れる

ことなくすりぬけてゆく。

そこで初めて、これが夢なのだとわかつた。

夢 いや。

思念、想い出、回想？

「」の兄と妹の 遠い日の姿。

(……何をするんだ！)

(黙れ！ 一人で冷静ぶつてるんじゃない、ひきょう者！ あたし達が、あたし達が星を捨てられるわけないでしょ！ そんなの、ただ逃げているだけよ！)

(……黙れ)

(黙るもんですか、いくらでも言つてやるわ ハル。あんたは世界一の卑怯者よ！ 半星だから、血を見るのが嫌いだからって、自分の背負つたものと向き合はずにただ逃げているだけ！)

(黙れよ！！)

兄の絶叫と共に轟音がどどりこいて、世界が一気に暗転した。

(……ふつ……)

冴え冴えと明るい満月が、天窓から大きく覗いている。

俺は今度はどこかの屋根裏部屋に居た。

窓から見える景色は色あざやかで、日本のそれとは明らかに違う。大きな時計塔に石造りの橋 西洋の街並みだった。

(……馬鹿、ハルの大馬鹿野郎……！)

すすり泣く声に首をめぐらせれば、部屋の隅の寝台で金の頭がふるえていた。妹の方だ。

だがさつきの場面からはまた時間が経っているらしい。  
奇妙なことに、月光が照らすその彫りの深い顔立ちはげっそりと瘦せて、さつきまでの進るような生命力の残滓すら感じられなかつた。

明らかに彼女は病氣で そしてとても孤独だった。

(誕生日、なのと、今日はあたしたちの……)

涙にぬれた声に、じりじりして誰も居ないんだろう、と俺は胸を突かれるように思つた。

どうして彼女の兄はここにいなーんだろ。

そして父は。母は。

あの痩せこけた手足がこんなに切なく伸ばされているのに　び  
うじて誰もそれを摑もうとしてあげないんだ。

(おめでとう　……　言えないじゃない　……　…)

つこにたまらなくなつて俺は彼女の方へ歩み寄つた。  
ベッドの上に投げ出された手に手を伸ばす。

青く筋の浮いたその指先に触れた瞬間、眼に、碧色の光が差し込んできた。

それは

(……おめでとう　……　ハル)

森の輝きを秘めたペンダント。

(……めん、アン)

彼女の声に応えるようにして、俺の耳には兄の声が届いた。  
そして伸ばした手先が溶ける。  
また場面が切り替わった。

ぐるぐると回るよじこして、俺は時空を超えてゆく。

(傍に届かれなくて　　本物めん)

兄はあの薔薇園に居た。

太陽の光を弾いてきらめく植物たちの緑、むせかえるよつた薔薇の香り。

柔らかな芝生の上に膝を突いて彼は泣いていた。

右手がきつく胸元のペンダントを握りしめている。  
ぽたぽたと透明な滴が際限なく庭を濡らし、不思議な事に、彼の涙に濡れた大地はそのまま 新たな植物を芽吹かせた。  
みるみるうちに若葉が芽生え、茎が伸び、蔓を這わせて、それらはやがて彼の体に絡みついた。

捕えるように、しがみつくように。

どこまでも伸びてその姿を覆い隠してゆく。  
知らなかつたんだ、と彼は慟哭にむせび泣いた。

(星が僕らを喰うだなんて、知らなかつたんだよ …… )

それから後は、混乱したように画像の断片が飛び交つた。  
激昂した様子で両親と言い争う兄。

白い部屋でベッドに横たわりながら一輪の薔薇を手にした妹。  
浮かぶ笑顔、それに反して、ベッドに突っ伏して泣き叫ぶは兄。  
ぼたぼたと降る血の雨のなか、巨大な翼を広げたグリフィンに乗つて、彼は無表情に魔物の心臓を素手でえぐつた。

(助けて)

(大好きだよ、嘘じやないんだ)

(気にしないで。あんたのせいじゃない)

(助けて、誰か、どうか彼女を! )

(もういいから……やめて、ハル! )

(誰かアンを助けてくれよ! …… どうして誰も )

『

誰も、助けてくれなかつたんだ………！』

身を切るよつなその叫びを　俺は確かに、この耳で聴いた。

山へと

……

なにか、固いものが割れる音に、眼を醒ました。  
同時にざわりと全身を走った違和感に眼を開ける。  
と、頬にぽたりとつめたい滴が落ちてきた。

( 路…… )

碧の燐光が眼前で燃えていた。

焰。

否、それは、燃えているといつにはあまりにも弱々しく痛ましい

今にも消えそうなほど小さく細い鬼火だった。

風もないのに明滅をくりかえすその焰の下から時折、蝶の羽といふ

白い顔が覗く。

涙はその碧の眼から滴り落ちていた。

( 蒼路…… )

「ハル……先輩？」

俺ははっと眼を見開いた。

そう、彼が、俺の上に覆いかぶさっていた。

けれどその口から発せられる声は先輩のものではなく、また、白い顔も彼の顔ではなかった。

( 蒼路 )

「……アンナさん」

俺は驚愕に思わず手を伸ばした。

燐光にふれる 手が、冷たく焼けた。どこまでも冷えて、体温を持つて行かれる。

先刻の夢はもしかしたらこのひとの思念だったのだろうか。そう考えながら俺は碧の眼を見据えた。

「…………ここに来たの」

俺に会いに来たの?

何を言いたいの、もうほろぼろのその魂を、むりに傷つけような真似をしてまで?

( て……星が…… )

「え?」

か細い声に雜音が混じつて聞き取れない。

聴き返す内にアンナさんの顔がハル先輩の顔と入れ替わった。骨格が軟体動物のように蠢き、女のものから男のものへと変化する。

だが燐光が最後の足掻きのように弱々しく閃くと、またそれはアンナさんの顔に取つて代わった。

( たすけて……このままじゃ、星が…… )

「星が?」

( ……暴走してしまつ …… )

それが限界だつたようだ。

燐光はついに消えた。

支えを失つた先輩の体が、俺の体の上に容赦なく倒れ込む。

ぐつ、と俺が思わず声を挙げたのもつかの間、次に気がついた時には、先輩は目の前から消え去っていた。

「なつーー？」

驚愕に声を上げた直後 今度は轟音とともに屋敷が揺れた。

「！？」

どんっという爆発音とともに衝撃が室内を走る。障子が音もなく吹き飛んで、生ぬるい外気が室内にぱりぱりと流れ込んだ。

思わず腕で顔を覆いながらも俺は、闇の向こうで強烈な気配が空へと駆けあがつてゆくのを感じた。

これは 双子の気配。

「結界が、破られた……！？」

先輩の運び込まれた北の対にはババアが結界を張っていたはず。だが今感じた双子の気配は明らかに屋敷の外へと飛び出して行つた。ということは、つまり結界が破られたのだ。

俺はとっさに体の自由を確認していた 右肩に突き抜けるような痛みが走る。

麻酔が切れているのを確認してから部屋の外に飛び出した。

「深紅！ ビニだーー？」

白木の廊下が月光に照り輝いている。  
庭の池も銀色の光を反射していた、が。

そんな幻想的な光景をぶちこわす異常が屋敷に発生していた。

庭の松が 苔が、竹が、天へ向かって伸びている。  
猛烈な勢いで成長したそれらは、やがてぎょろりと光る眼を持つ  
た。

「げつ……」

思わず声を漏らした俺に、すぐ軒先の下の苔が気付いた。  
大きくふくらみ、水草のような葉と長い根っこでもつて立ち上が  
つた まよい！

『翔焰！』  
しょうえん

俺はとっさに手で印を組んで吠えた。

月光に輝く庭をバックに飛びかかってきたそのバケモノに、焰の  
つぶてを叩きつける。

が、この術、俺にも使えるほど簡単な代わり、威力が低い。  
焰のつぶてはバケモノ苔を庭に押し返しただけで、その身を焼く  
までには至らなかつた。

そうこうしている内に今度は松の木が地面から根を引き抜いて歩  
き出した。

俺目がけて。

「……マジかよー！」

眼を剥きながら、仕方なく俺は右手を掲げた。

右肩の傷がきしむように痛む、が、仕方がない。

俺はいまのところ肉弾戦以外は能のない星師なのだ。  
癌に左手を沿わせて刀を取りだそうとしたところ

『碎破！－』  
さいぱ

鋭利な声が響き渡った。

同時に視界を紅い光が駆ける。

どぐつと耳にこたえる嫌な音がして、上空から何かぱりぱりと墜  
い破片のようなものが降つて来た。

「うわっ、なんだよコレッ！」

眼にも口にも入つたそれを吐きだしながら叫ぶ。

と、甘い香りが鼻をついた。

俺はまばたきして顔を上げる。

「安心おし、ただの松の木よ」

脇に青藍を従えた深紅が目の前に立つていた。

俺は膝を伸ばして立ち上がる。

彼女はもはや涙の跡かたもなく、いつもどおりぴんと背筋を伸ば  
して、自分だけの力でそこにじっかりと立つていた。

「……サンキュー。助かった」

「怪我はないわね？」

「ああ。それよりも 何が起きている？」

低く問ひ合間にも庭先からは次々と植物の化け物が生まれてゆく。  
これはおそらく、双子の力のために生まれた魔物たちだろう。  
ババアの結界を破つて彼らが外に出た今、その力は星と相まって  
多くの魔を引き寄せ、生みだしていくのだ。

「ラン」

深紅がみじかく青藍を呼び、その頭を撫でた。

青藍は答える代わりに庭先を一瞥すると、月光をバックに空中を駆け上がる。

みごとな角が天に向けて掲げられ、美しく締まつた四肢は泳ぐように宙を搔く。

青味を帯びた体が月明かりを吸収し、オパールのように輝いて大きな角が一振りされると、無数の銀の雨が天から降つた。

浄化の雨。

それに触れた魔物たちは悲鳴すらあげる間もなく溶解してゆく。俺たちはその光景を横目にふたたび走りだしていた。

「詳しいことは道すがら説明するけれど、とりあえず、私たちは双子を追わなければいけないわ」

深紅が滑るように先を走りながら言つ。

次々と襲い来る魔物の魔手は「ことじ」とく青藍が打ち払つてゆく。俺は少し緊張を緩めて問うた。

「……つてことはやつぱりさつきのは、双子が結界を突破した音だつたのか？」

「そうよ。キヨ様の結界が見事なまでに木端微塵。双子に空間師の力があることを忘れていたわ……私たちの失態よ」

「……あのぞ、深紅」

俺は言つていいのか迷いながらも口を開いた。

深紅がちらりと肩越しにふり返つてこちらを見る。

「何？」

「さつき……双子が」

「双子が何？」

「俺の所に、来た」

「……何ですって！？」

かなり驚いた様子で深紅は走るのをやめた。  
と、それとほぼ時を同じくして、再び大地が鳴動した。

「……また、今度は何だ……！？」

バランスを崩した深紅の体を抱きとめながら俺は床に片膝を折る。  
度重なる揺れに屋敷がきしみ、軒先からぱらぱらと埃が降つてき  
た。

今度の揺れは長かつた。

大地の奥底から何かが突き上げてくるように 重い響きが耳朶  
を打つ。

腕の中で、深紅がはつとしたように眼を見開いたのがわかつた。

「……街が……」

「え？」

「……街が、吼えている……！」

「」

俺も理解した。

君見丘が すなわち山が、叫び声を上げているのだ。  
そしてこの感覚を、この山の主を、俺は既に知っていた。  
突風が起きる。猛烈しい咆哮が闇を裂いた。  
鎮守神、と俺はその声の主を呼んだ。

「怒っているのか……！」

「蒼路、あれ……！」

深紅が叫んだ。

細い指が屋敷の彼方、闇空の一点に向かっている。  
俺もそちらに眼を向けて そして信じられない光景を見た。

「な……」

碧色の、火柱。

山の裾野の森の中から巨大なそれが天を突くように放たれている。  
めらめらと燃える焰は強力で、全てを呑みこむかのように猛々しくうねっていた。

「あそこへ、居るのか」

俺はかすれた声を絞り出した。

深紅がかすかに頷いた。

「双子が、あそこに……！」

行かなければ、と進るように俺は思った。  
行かなければ。  
今、すぐに。

「あの山へと……！」

星が、急に痛みを訴えた。

凄まじい程の羽音と鳴き声が耳を突く。

屋敷の周囲を取り巻く闇が不気味につゝめき、赤や青の光を明滅させている。

「……っ！」

急激に下がった气温に怖気が走り、思わず体を震わせていた。  
これは魔の氣配。

思い当たつて空を見上げれば、破られた結界の綻びから待ち焦がれたかのように黒いものが　妖気が流れ込んで来るのが見えた。ぱきんっと結界の残滓がさらに碎けて飛び散る音が響き渡る。同時に屋敷の上空に姿を現したのは夥しい数の魔物たち。俺は眼を剥いていた。

「……マジかよーー？」

脳裏に蘇るは六年前のあの雨の日。

闇から飛来する魔物の大群を、里の外れから茫然と見つめていた俺と深紅。

そこまで考へてはつと俺は彼女を見た。

深紅は、黒耀の瞳にすさまじい怒りと憎悪を燃えたぎらせて天を睥睨していた。

「深紅」

「……嫌なことを思い出すな」

口調が変わっていた。

同時に豊かな黒髪がぱちぱちと呪力をはらんで翻る。

俺はとっさに彼女の腕を掴んでいた。

「ちよ、深紅、落ちつけ……ツ」

金糸の刺繡の施された布地に触れた瞬間、ものすごい呪力に手が弾かれる。ぱちっ！ と放電するような音が響いた。

深紅がぱつと俺を見て叫ぶ。

「ちよ、馬鹿、何をしているのよ！」

「何つて、お前を止めてんだろ？ が！ すぐにカッとするの止めろよ！」

「何を言つているの！？」

「……だからっ！ この状況をお前一人で打破するのは無謀だつて言つてんだよ！ 自分の体のこと考えろ！」

「バカにしないでっ！」

「してねえよ、逆だ！」

『 星持ち、姫君！ 何をしてこる、前を見よ……』

言い争つている俺たちに、屋根の上から鎮守神の怒声が飛んでき  
た。

言われたとおりにしてみれば、成る程、今しも先頭の魔物が屋敷の庭先に降り立つたところ。

蛇の体に蝙蝠の羽を持つ氣味の悪い魔物が一匹、煙のよつに大量の魔蟲を引き連れて俺と深紅の方にその頭を振りかぶつた。

「……いけない！ 蒼路、息を止めて！」

深紅が叫び、俺は咄嗟に口許を袖で覆つた。

視線の先で蛇の姿の魔物が首を大きく仰け反り、大きく息を吐く。闇の中でも白く霞がかつた呼気が庭じゅうに大きく撒きちらされた

毒だ、と俺は悟った。だがその刹那。

『しゃらくさいわ!!』

鎮守神が天に飛翔した。

彼が轟くような雄叫びを上げただけで、毒蛇の太い胴体が木端微塵に吹き飛ぶ。肉片が飛び散った。

同時に大気に広がった毒の息も、ハエの如くそこいらじゅうを飛び交っていた魔蟲たちも、一掃される。

漆黒の毛並みを月光にきらめかせながら彼は付き従つ二頭の眷属に命じた。

『吟ぎん、織おり!』

『はつ』

二頭の狼は明朗に声を上げて鎮守神の目前に進み出る。

俺がようやく眷属の名前を知ることができたなあ、などと思つていると、鎮守神は厳しい声で彼らにこう命じた。

『今夜この屋敷に一片たりとも闇を引き入れること許さぬ! そな

たら一匹で守護を務めよ!!』

『畏まりまして!』

『確かに、承りました!』

眷属 ギンとオリは答えると、そのまま一匹で屋敷の上空、はるか高みへと駆け上がつて行った。

銀の毛並みは月光を受けてまばゆく清らに光つている。

一頭で舞を舞うように螺旋を描きながら飛びあがって行った彼らは、天のある一点に辿りつくと動きを止めて、それから甲高い声を上げ始めた。

細く高い、まるで鳴弦のような鳴き声。

屋敷の周囲に群がっている魔物達がその響きに恐れをなしたかのようにじわじわと後退し始めた。

深紅が俺の脇で呟く。

「腐つても神狼ね……それなりの破邪の力を持つているようだわ」

忌々しげな物言いに俺はさすがに呆れて声を上げた。

「腐つてもつて、お前もつ少し言葉選べよ……あいつらすぐえ良い奴なんだぜ！？」

「お前は魔物に甘いのよ」

「お前は容赦なさすぎるんだよ！」

ふたたび一人で喚いている間にも、神狼たちの鳴き声は細く張り詰めるようにずっと続いていた。

そしてある瞬間、急に自分たちを取り巻く大気が硬く、それでいて清浄なものに変化したのを感じ取り、俺と深紅は口をつぐんだ。天を見上げる。

ギンとオリが一頭で向かい合い、再び舞うような不思議な動作を見せていた。

魔物達は今や屋敷からかなり離れた場所まで身を退いている。その闇を纏つた姿が、薄く紗を通したかのように霞んで見えることに俺は気がついた。

「結界が……修復されている？」

眩いた時、ふつと呼吸が楽になつた。

同時に辺りを色濃く取り巻いていたあの冷たい魔の気配が、闇が。ふつりと感じられなくなる。

「……見事なものじや」

そう、感嘆に声を漏らしたのは俺の横にいる深紅ではなく。いつのまにやら俺たちの背後に出現していた、ババアであった。

「うわあ……」

「……あ、嘉代さまー!？」

いつも通り叫んで飛び退つた俺と、さすがにポーカーフェイスを崩して驚いた深紅。

ババアは俺たちの反応を無表情で一瞥してから口を開いた。

「なんじゅ、お前たち。仲良う驚いて」

「そりや驚くだろー! 今までどじこいたんだよ、この非常時に

!」

「やかましー!」

思わず突つ込むと怒鳴り返された。ええつー?

ババアはぎろりと俺を睨みつけ、深紅はそっちのけで説教を始めた。

「そもそもこれはお前達が招いた失態ではないか、馬鹿者がつ! 私の庭をめぢやへぢやにしておいて責任を人になすりつけるでない、未熟者!」

「別になすりつけてなんかねえだろ! ただどじこ居たのかつて聞いたまでで!」

「わしに頼ろうといつ態度が見え見えなんじや、この甘つたれ！」  
「んなことカケラも思つてねえよ！」

「顔に出でるわ、阿呆！」

「ああああ馬鹿だのアホだの未熟者だの、どー考へても言こすぎだろッ！？」

「……あのう、喜代様。それから蒼路

舌戦を繰り広げる俺とババアの間に割つて入つたのは、深紅の涼やかで落ちついた声だった。

俺とババアは即座に彼女の方を向いた。

「何じや、深紅」

「何だよー！」

重なつた俺たち老若の声に深紅は落ちついた様子で答える。

「……お気持ちは分かりますが、今は言に争つてゐる場合ではない  
かと。一刻も早く我らは山に向わねばなりません」

『姫の言つとおりだ』

深紅に同意する声は低く豊かに、俺たちの立つてゐる軒先のすべ  
近くから響いた。

庭を埋め尽くすよつとして鎮守神は俺たちの目前に立つてゐた。

『我が山が吼えている。双子の力が暴走を始めているのだ。キヨ、  
このままでは街全体が危ないぞ』  
『れ。お前、ババアのこと知つてんのか？』

俺は思わず鎮守神に突っ込んだ。

昨日の今日で彼がババアを呼び捨てで呼ぶわけはない、と思つた

からそうしたのだが、彼は尾を軽く振つてこう答えただけだった。

『少しな』

「……ふうん?』

さまざま疑問が頭をかすめていったが、確かに今は時間がない。俺はひとつ息を吸い込むと、思考をきつかり切り替えて、ババアの方に向き直った。

「ババア 師匠」

「なんじや、馬鹿弟子」

返つてくる罵声は無視して俺は彼女の足もとに膝を折った。  
じりじりせよ、俺たちだけではこの屋敷を脱出できない。

「俺は深紅、鎮守神と共に山へ向かいます。つきましてはなにぞ後援をお頼み申し上げたい」

「……フン」

ババアは相当厭味つたらしく鼻を鳴らしたが、断りはしなかった。黙つて天に視線を向けると、山から迸る碧色の火柱を見つめていた。

その僅かな沈黙の間に、俺は深紅を見、鎮守神を見、屋敷のはるか上空に控えている眷属たちを見やつた。  
そして今胸に荒れ狂つてゐる様々な感情の名を確認する。  
愛しさ、懐かしさ、哀しみ、切なさ。  
けれどそれらよりもっとずっと強いものは 誇り。

俺が己の星に眼を落とした時、ババアがよつやく口を開いた。

「……良じやううつ

彼女は俺を見た。

「そなたらを屋敷から無事に出してやる。　だがな  
「……何ですか？」

嫌な予感に顔をひきつらせる俺に、ババアは静かな声でいつ囁つた。

「必ず、帰つて来るのだぞ。蒼路。深紅とその犬とともに」

「」

俺ははっと眼を見開いた。

ババアの小さい眼と視線が真っ向からぶつかる。

「お前は自覚せねばならぬ。お前が人を、魔物を愛して止まないの  
と同じように……お前も、周囲から愛されて止まぬといふこと  
をな」

「バ……

ババア、ヒ、俺は呼ぼうとした。

けれど言葉にはならなかつた。

驚きとも、喜びともつかない奇妙な感覚が、身体じゅうを走り抜  
けてもどかしい。

「ヤ。わかつたらさつと身支度をするのじや。　鎮守神、これ

らを頼む

『さつ』

ババアは鎮守神に命じると背を向けて行ってしまった。

俺はその小さな背を見つめて何とも言えない感情が胸に満ちてゆくを感じる。

『ぱうっと見送っていると、深紅が俺の腕にそっと手を置いて声をかけてきた。

「……や。 蒼路」

「……ん」

俺はちいさく頷くと、鎮守神に向き直り、その広い背に飛び乗つた。

……なんか変な気分になってしまったが。

俺はとにかく前に進まねばならない。

この夜を、走り抜けなければいけない。

優しい人たちのやせしさには、帰つて来てから存分に答えよう。

「 行ひう」

\* \* \*

「頼むぞ、たまえた珠枝！」

齡八十八とはとても思えぬ、よく通るババアの声。

それに答えて俺たちの先鋒を務めるのは金色の毛並みに九本の尾を持つ大妖、九尾の妖弧。

『グズの蒼路の手助けをしなきやいけないなんてねえ。あたしも見下げられたもんだね、まったく！』

ぶつくさ言いながら光の如き速さで空を滑空する彼女の後ろに俺たちは続いた。

珠枝はババアの召喚獣。

その見かけどおりスープーワルトラ強くて性格の悪い妖弧で、俺は修行と称されでは何度も殺されかけたかわからない。

だがその実力は俺の知りうる召喚獣の中でも最強。げんに今、屋敷の結界を何事もないかのようにすりぬけた珠枝は、そのままうぞうぞと結界の周囲に群がっていた魔物たちの中に突っ込んで行くと、面倒くさそうに数本の尾で宙を煽いだ。

それだけ。

それだけ、である。珠枝がしたのは。  
だのに。

「…………恐ろしい…………相変わらず恐ろしい獣だ……っ！」

ひいい、と俺は自分で自分を抱いていた。

何が起きたのかと言うと、あれほど大量に蠢いていた魔物達の姿が一瞬で金の灰となつて崩れ去ったのだ。

それはあたかも風に砂が飛んでいくかのよつた、あまりにも静かでゆるやかな変化で、だからこそ俺は恐怖を覚える。

『ほら、これでいいんだろ?』

面倒くさそうにこちらをふり返った珠枝に、俺はがくがくと首を縦に振つて答えた。

途端に鎮守神が猛然と滑空を開始する。

うわ、と俺はバランスを崩し、深紅ですら小さく恐怖の声を上げた。

「ちょ、鎮守神……もつと静かに飛べよつ！」

『そんなことを言つている余裕はない！ しつかりつかまつていろ、星持ち、姫！』

風を切りながら朗々とした声で鎮守神は叫ぶ。

そしてそのまま凄まじいスピードで山の裾野めがけて飛び始めた。これでは山に辿りつくまでに死ぬな、と思ったのは、恐らく俺だけではなかつたに違いない。

「もつ、だから魔物は嫌なのよ……ツー！」

深紅の悲鳴が、闇空に尾を引いて響きわたつた。

## 魂の

『我が身は御身、天より地より賜りしもの　　我は山の砦、山の牙  
なり！』

鎮守神が朗々と祝詞のりとを唱え、俺たちの腹の下、漆黒の体躯に苛烈な神気が迸つた。肌が粟立つ。

向かう先は空の海、そこを埋め尽くすように飛来するのは双子の邪氣により寄り集まつた無数の魔物。

鎮守神は空中でぴたり静止すると、一度大きく頭を振つた。

見えざる力の閃光がぱりと開かれた巨大な口から放射され、まるで火炎放射器のように、目の前に存在する魔物達を一匹残らず呑みこんでゆく。

グギヤツ、だの、ギギツ、だの、魔物達はまことに嫌な声を上げながら絶命して、その体液と肉片が雨のように空からぼたぼた降り注いできた。

「うわっ！……ちょ、鎮守神、お前やり方が乱暴だぞっ…」  
「全くだわ！　服が汚れてしまうではないの！…！」

手で顔をガードしながら口々に文句を言ひ俺と深紅を、鎮守神は完全に黙殺した。

目前の障害物がいなくなつたと見るや、彼はぐんつと加速をつけて前のめりに宙を飛翔し始める。

足もとをすくわれる激しい浮遊感、急速な高低差と気圧の変化に体が反射的に恐怖を訴える。

思わず漆黒の毛並みを両手でしつかと捕んだ俺、そんな俺の背中に声も出さずにしがみついたは深紅。

ワイシャツの薄い生地一枚越しに彼女のあたたかな体温と甘い香りを感じ、俺はつと身を強張らせた。

ちっ、近い！

深紅が近い！！

「……お、お前、そういうのは高所恐怖症だったけ？」

苦しみ紛れに俺が呟いた一言に、深紅は「」の上なく悔しそうな声でいつ答えた。

「……放つておこでよ」

と。

俺は思わず、口許に笑みがこみ上がるのを止める「」ができない。可愛い、と思った。

激烈と言つてもいい程の性格をした「」の深紅にも、当然恐れるものはあるのだ。

当たり前のことだけど、自分だけがそれを知つていいと思うとなんだか妙に誇らしくて、嬉しさに胸がはちきれそうな感触があつた。

「……蒼路、笑つてない？」

「いやいやいや。笑つてねーよ」

「声が笑つてるわ」

「笑つてませんとも、姫」

「お前までその呼び方は止めて……」

ぴしゃりと怒鳴つて、深紅はぱっと俺の背中から離れた。

ふり返ると何か思い出したかのように着物の合わせに手を差し込んで探つてゐる。

「深紅？」

危ないから静かにしてろよ、と言おうとした所、目の前にさりと銀色の針が輝いたので心臓が止まりそうになつた。思わず仰け反る。

「……ご勘弁。悪かつたよ」

咄嗟に口走ると深紅は笑つた。

「ばかね。痛み止めよ」

「痛み止め？」

「肩の傷よ。本当は使わせたくないけれど……お前は刀を抜けないと自分の身も守れないからね」

冷静な物言いに俺は返す言葉が無かつた。ぐ、と詰まる。悔しいけれど、深紅の言うとおりだ。

俺は召喚術も使えなければ呪術も下手だ。

もしこの後、山で双子と戦いに及んだ場合、刀が抜けなければただのお荷物になつてしまつ。

自分の力不足で自分が死ぬのならまだいい。

だが俺の大事な存在に、深紅に、鎮守神に、迷惑をかけて傷つけることだけは、それこそ死んでもやつてはいけないことだらう。

「……そだな」

ひとつ頷くと、俺は制服の襟元をはだけて右肩をむき出しにした。深紅が手早く傷の状態を検分し、薬草で消毒すると痛み止めを打ちこんだ。

長い銀針が皮膚の下に潜り込む感覚に、わずかばかり体が震えたが、痛みは全く感じなかつた。

「解毒薬も打つておくわ。でも、くれぐれも、無茶はしないで。怪我を忘れて暴れた場合、一生腕が使い物にならなくなる可能性だつてあるのよ」

「……うん」

言い渡された事実にひやりと背筋を撫でられる感覚を覚えながら頷く。

深紅は一本目の針を打ち終えると、針を消毒して再び胸の合わせにしまい込んだ。

その後軽く怪我の表面をガーゼと包帯で保護してもらい、治療が終わると、俺はワイヤーシャツのボタンをかけ直した。

「それよりも、お前 もつき双子に会つたと言つていなかつた？」

やがて深紅が言った。

その言葉に俺はああ、と喉を鳴らす。

「そうだ、さつき。双子が屋敷を脱出する直前に。アンナさんが、何かを伝えたかったみたいで……」

「 アンナと話をしたの！？」

言い差した俺の言葉を深紅が思い切り大声で遮った。

彼女にしては珍しく、心底驚いた顔をしていたので、俺はきょとんと眼を丸くしてしまう。

「……したけど？ それがどうかしたのか」

「どうかしたのか、じゃないわよ だって、だって彼女、私と喜

代さまが対峙した際には、見境なくこちらを攻撃するだけの、怨嗟の塊みたいな鬼と化していたのに……！」

「鬼？……俺が双子と対峙した後の話か？」

「そうよ……」

もどかしそうに叫んで、深紅は俺の腕をきつく掴んだ。

黒曜の瞳に見据えられて俺は頭が混乱してしまつ。何なんだ？

「蒼路、本当に彼女と言葉を交わしたの？ 彼女は一体、何て言つてた？」

「や、喋ったわけじゃない、ただ一方的に向こうが何かを伝えようとして……」

「だから何で……」

「助けて、って

記憶を探り、俺は低く言葉を紡いだ。深紅の動きが止まる。

「このままじや、星が暴走してしまつって……なあ、それ一体どういう意味なんだ？」

「……夢見の才……」

俺の言葉に答えているのかそうじやないのか、深紅は今度は茫然とした様子でそう呟いた。

俺はますます訳が分からず首を傾げる。

「なに？ ゆめ？」

「“夢見の才”よ。……本来ならばけして触れ合ひ事叶わぬ魂と、

夢の瀬で触れ合ひとのできる力。まさかお前に、その力があるなんて

「……深紅、お願ひだ。まず説明を求む

完全にお手上げ状態になつて俺は言った。

すると深紅ははつとこちらを見、何か気を落ち着けるように息を吸うと、居住いを正した。

彼女がいよいよ口を開こうとしたその刹那、俺は、彼女の彫りの深い顔立ちを照らす光に気がつく。

夜なのに。

不審に思つて背後を振り仰ぐと、目指す目的地、碧の火柱を吹き上げる山が目前に迫つていたのだった。

鎮守神が重々しく唸る。

『 着陸するが。良いだろ？』

「 ……ええ」

答えたのは俺ではなく深紅だった。  
『まかされたような気がして俺は思わず彼女を睨むが、深紅は、軽く首を振つて答えた。

「降りたらちやんと説明するから。今は、伏せてないと舌噛むわよ

彼女が言い終わるが早いが、鎮守神の体が思いつきり傾いた。目の前に迫る山肌に対してほぼ直角に、迷いなく、彼は風を纏つて突っ込んでゆく。

「 ……ちょ、待つ、鎮守神つ！」

「動かないでちょうどいい蒼路つ！」

「うわわわ墮ちるつ」

「不吉なこと言わないでバカ つ！」

慌てて伏せた俺と深紅であったが、着陸時の乗り心地は、今まで

のそれとは比較にならぬほど恐ろしく激しいものだった。

『転回するぞ、眼を閉じよ……。』

「……嘘だろお つー?」

天地がくるめぐ。

風が暴れ狂う。

何回もぐるぐると宙返りを繰り返し、俺たちに阿鼻叫喚の地獄体験を味あわせながら、そして彼はようやくと山に着地した。

耳をつんざくばかりの轟音と、すさまじい衝撃を伴って。

\* \* \*

「……酷えな……」

「痛いわ……」

「まつたくだ、あちこちが痛い……つつつつー。」

俺たちは投げ出されていた。

夏の夜の山の中、鬱蒼と茂る林の中に。

深紅がとっさに衝撃緩和の術を唱えてくれたからよかつたものの、俺の服は木の枝に突き刺さって破れ、深紅は草の上に完全に横倒しになっている。

『だらしないのう、星持ちが二人も揃つて。ほれ、我らが既に敵陣にある。そなたらもつとしゃきつとせんか!』

一人平然としている鎮守神が俺たちの傍で尾を振っていたが、そもそもこの酷い着地を反省するような気持ちは彼には全く無いようだった。

はあ、と短く息を吐きながら俺はシャツに突き刺さった木の枝を抜き、立ち上がりつづポンの膝を払った。

それから深紅の元へと歩いていくと、彼女を抱きかかえるようにして助け起こした。

「大丈夫か？」

顔色が青い気がして尋ねると、彼女は喉の奥で低く呻いた。

「仮にも神の末席を汚していたものとして……」の着地の仕方は許しがたいわ！」

「……どこか打つたか？」

「なんとか無事よ。でも一生忘れないから、この恨み

深紅が今一度呻きながら身を起こす。

鎮守神はあせっての方向を見つめながら空とぼけた。

『何のことかのう。我にはわからぬぞ、姫君』

『いい度胸してるじゃないの……魔物のくせに……』

びきり、と首を立てて深紅の額に青筋が浮かんだ、よう見えた。

同時に彼女は手に魔法円を掲げる。

俺は慌てて止めに入った。

「わー深紅、落ちつけっ！ 頼む！！ 鎮守神は俺の恩人なんだよ

つ

「人じやないじゃないの、そもそもこれは！」

「これとかいうなよ、俺たちと同じ、魂だぞ！」

必死に吼える。と、深紅はぴたりと動きを止めた。

剣呑な瞳が俺を見据え、何か言いたげに柳眉が潜められる。

俺はその手の中の魔法円が自分に向けて放たれるんじゃないかと内心相当ひやひやしたが、幸いなことに、彼女はしばらくしてその魔法円を引っ込めてくれた。

着物の肩が大きなため息に上下する。

はあ、と息を吐き出して、彼女はおもむろに立ち上がった。

辺りに沈黙が訪れて、俺たちは誰に言われるまでもなく、同じひとつの方に向いて眼を向けることとなる。

間近で見ると、その闪光はひどく澄んだ色をしていた。

「……すげえな」

俺は咳いて、思わず腹に力を込めていた。

めらめらと燃える焰のようでありながら、逆流する滝の流れのように見える　其れはまさしく、星の力そのものであつた。

澄んで鮮やかな星の力。

だけど、それだけじゃない。

双子の力はもはや闇へとその性質を違え始めていた。

碧の閃光に照らされて辺りは明るい筈なのに、何故かそうは感じられなかつた。

木々の隙間から洩れるその光は、ひどく冷たい。

氷のように冷たい気配が気温さえ著しく下げて、山の中には凍ついた空気がどろりと重く滞っていた。

「ひどい妖氣……吸うだけで肺が腐りそつ」

口許を袖で覆いながら深紅が眉をひそめた。

『全ぐだ。お陰で我が山の生き物たちが一匹残らず逃げてしまった

わ』

答える鎮守神の厳しい表情が火柱に照らされて際立つている。

彼が全身をぶるりと大きく震わせると、漆黒の毛並みが蛇のよう  
に波打つてうごめいた。

ぐると喉を鳴らし、辺りの妖氣を振り払つかのように、彼はそ

の身に鮮やかな神氣を纏う。  
深紅の足もとに音もなく青藍の姿が顯現し、同時に俺も刀を抜いていた。

さくり、と。

普通の人間になら絶対に聞きとれないであろう、本当にごくわずかな足音が、俺たちの背後に響く。  
場に緊張が走るのが感じられた。

「……なあ、深紅。結局夢見の才ってなんだ？」

顔の前で真一文字に刀を構え、そこに焰を乗せながら、俺は言った。

深紅も着物の合わせに手を差し込みながら、静かに答えた。

「星師の能力の中でも異才とされる力よ。……その力を持つ者は、夢の瀬で魂と触れ合うことができる。例えその魂が、既に消滅した魂であつたとしても、怨靈と化した魂であつたとしても」

「……成程」

俺は理解した。

確かに俺は何度も何度も夢を見た。

鎮守神の夢。

彼を友人だと言った、俺と同じ星を持つ女性。

そして、双子の アンナさんとハル先輩の夢を。

『来るぞ　　！』

鎮守神が高らかに吠えて、同時に、凶悪な気配が飛来した。

甘茶色の翼、黄色い眼、鋭く湾曲した嘴。

風切羽が鮮やかに宙に飛び散った。

同時に俺たちの立つ周囲の木々が、突如として意思を持ちて動き出す。

「確かにお前にも、俺は夢で出逢ったな」

言いざま俺は刀を高く振りかぶった。

巨大なグリフィンが全身を猛々しく仰け反らせ、まっすぐに俺目前に突っ込んでくる。

「ああ　獅子鳥ッ！！」

「 破<sup>は</sup>ツ！！」

気合一閃、振り下ろした刀の腹をグリフィンの嘴が掴みとる。キン！ と硬質な音が夜の森に響き渡つた。

同時にそれを合図としたかのように、鬱蒼と周囲に茂る木々がぼ

いぼこと幹を脈打させて動きはじめる。

縁の性質を持つ双子の妖気に取り込まれて変化したのだ。さつき屋敷の庭で暴れてた苔だの松だのも同じ理屈だろ？

「いよいよバケモンになってきたんじゃねえのか……お前の主人は？」

その嘴をぎりぎりと受け止めながら俺が口走ると、グリフィンは巨大な翼を羽ばたかせた。

『お黙り小僧 ハルの元へは、行かせない！』

風が巻き起こり、抜けた羽が視界を舞う。

思わず眼を細めた俺は、グリフィンの声に違和感を感じた。なんだろう。楽器のように美しい声なのは以前と同じだが。何か耳に障る、呼吸の響き。

もしかしてこいつ、消耗してるのか……？

思ったのと、背後で深紅が叫んだのはほぼ同時。

「蒼路、飛んで！！」

そう言われ、咄嗟に刀に体重をかけて反動で一端背後に飛び退つた。とたん、深紅の体を中心として、凄烈な呪力が解き放たれた。

『汝らの魂たま、魔みからだの道ゆを行くものにあらじー。汝らは、神より生まれし其の御体みからだ！！』

邪氣祓いの呪文だつた。

鋭利な声と共に柏手が森の闇を切り裂いて、紅い光が視界を奔る。宙で体勢を整えてやや離れた場所に降り立つた俺の眼に、苛烈な呪力が森を薙ぎ払う光景が飛び込んできた。

光はまるで意思を持つたかのように的確に蠢く木々を捕え、その邪氣を呑みこんでゆく。

呑まれた木々は引き攣ったような悲鳴を上げて全身を硬直させ、それからどうと次々に地面へ倒れ伏した。

直後、青藍が空を駆け上がり、先刻屋敷に降らせたのと同じ浄化の雨を再び降らせた。

「すつげ……」

額をつうと汗が伝つた。

次元が 違う。

俺の非力な術から比べれば、彼女のそれはさながら龍だ。凶暴で絶大な力持つ紅き龍を完璧に手懐けて操つている。

「何をしているの、蒼路、魔物！ サッサとグリフィンを倒して先へ進むわよー！」

唚然として目の前の光景を見つめていた俺に深紅の叱責が飛んだ。はつと我に返った俺の頭上を今度は漆黒の巨体がかすめてゆく。俺は「ぐり」と息を呑んだ。

自分でも手に負えない感情が喉元に迫り上るのがわかる。

深紅の術はあくまでも悪しき力、悪しき物を祓う術であるため、人を手助けする召喚獣という位置づけにあるグリフィンには直接ダメージを与える類のものではなかつた。

だがそれでもその力は、彼女の翼から飛翔するエネルギーを奪うには十分な威力を持ち合わせていた。

「……待つてくれ」

俺はたまらず唇を動かしていた。

獅子の足で体を支え、弱つた翼を足搔くように羽ばたかせる彼女の姿には、なにか、見るものの胸に迫るものがあつた。

おかしい。戦い始めてまだ十分と経っていないのに、グリフィンはもう小山のような背中を思い切り上下させている。

よく見ればその黄色い眼は濁り、甘茶の毛並みはところどころ毛が禿げていた。

「待つてくれ 鎮守神ッ！」

制止の声もむなしく、鎮守神は黒い矢の如くグリフィンの胸倉に齧り付いた。

どおん、と轟くような衝撃が森を揺らす。

巨大な狼と巨大なグリフィンの一騎打ちだ、その凄まじさたるや眼を疑うものがあつた。

鎮守神が前脚でグリフィンの腹を抑えつけ、その喉元めがけてあぎとを開く、グリフィンは鋭い鉤爪の生えた前脚でそれを猛然と阻止する。

獣の咆哮がびりびりと空気を揺らし、血しぶきが、抜けた毛と羽が視界を覆つた。

俺は胸がはげしく痛むのを感じ、矢も盾もなく走りだしていた。

深紅がぎょっとしたように声を荒げる。

「蒼路！？　ばか、近づくんじゃないわよ！」

「つるせえ、放つとけっ　鎮守神、止まるんだ！！」

吐き捨てながら俺は一頭の巨大な獸がもつれ合ひ口の中に駆けよつて行く。

彼らは全く聞く耳をもたなかつた。

壮絶な唸り声を上げながら、互いの急所を狙つては離れ、狙つては離れを繰り返している。

彼らが取つ組み合ひ度に地面が揺れ、倒れた木々に足を取られながらも、俺はなんとか彼らの元へと近寄つた。

「止まれ！　止まれって、言つてんだよ！…！」

「やめなさいってば、蒼路！」

「止めんな深紅！」

制止せんと追いかけてきた深紅に対し怒号を発し、刀をざしゅつ、と地面に深く突き立てる。俺は記憶を探り探し印を組んで術を唱えた。

『焰よ、紅く燃える命の火よ、災いを縛りて封じる檻と成れ！』

刀に焰が燃え上がる。それはそのまま地面に走る亀裂を辿り、二頭の獸を囲う様に大地の上を走り抜け行く。

……ところどころ火が消えているのは御愛嬌、と思いたい所だが、いつのまにか俺の横に駆けつけていた深紅がそれを見て頭を抱えた。

「あいかわらず、ほんとうに、術が下手っ！」

「つるせえな、言われるまでもなくわかってるよー。」

がおうと怒鳴り返してから、俺は勢いに任せるように術を発動させた。

『 焰縛！－』

ぼ／＼んつ、と耳に籠る音を立てて大地から焰の触手が飛び出した。めらめらと燃え上がるそれが自分たちの体めがけて巻きついてくると、さすがの獣たちも冷静さを取り戻す。

すんでのところでそれを避けた鎮守神だが、俺の姿を省みて、狼狽したように緋色の眼を白黒させた。

『な……何をするのだ星持ち！？』

「退けと言ったのにどかないから実力行使に出たまでだつ。いいから下がれ！」

焰の壁のなかに飛びこんで、グリフィンを背中の後ろに守るよ／＼にして立つと、俺は鎮守神を睨みつけた。

彼は俺の言葉が信じられないように、じわじわと少しずつ後ろに下がつてゆく。

俺は舌打ちをした。

その退行の速度と、未だ戦意を喪失していないむき出しのしろがねの爪に業を煮やして、さらに大きな声で怒鳴り付ける。

「聞こえないのか！？ 下がれ、でないと、ご自慢の毛皮を燃やすぞ！」

これが決定打になつた。

鎮守神は衝撃を受けた顔をして、数歩大きく後ずさると、そのまま犬のように後ろ足をしまいこんでお座りの体制を取つた。

尖った耳に長い尻尾が打ちひしがれたように垂れているのを見て、やりすぎたかな……と俺がちょっと反省したとき。

「 ちょっと蒼路…… わざから黙つていれば、何好き勝手にやつているのよッ！」

深紅の平手が飛んできた。

\* \* \*

鮮やかな一撃に思い切り頬を打たれながらも、俺は足を踏ん張つて、グリフィンの前から動かなかつた。

烈火のごとく怒った深紅が俺の胸倉をつかみ、堪りかねたよつて矢継ぎ早に、怒声の嵐を叩きつけてくる。

「 ……この馬鹿者が！ 一度ならず一度までも魔物を庇うかつ」

「すまん」

「先ほど私が恥を捨てて頼んだばかりだといつのこ、お前はいつもあつさりと、また無茶をするというのだな！？」

「『めん』

「今度こそ見捨てるぞ、一刻の猶予もない状況であるとこい事は、誰よりも依頼を受けたお前が一番理解していなければならぬことであらうがっ！」

「 ……その通りだな」

彼女の言葉の全てに対し、いちいち答えながら、俺はそれでも動かなかつた。不思議な程気分が落ちついていた。

だがその冷静さが逆に深紅の怒りを煽つたようだ。

次に息を吸い込んだ時には、俺の首筋には小刀があてがわれていた。

「そこを　退け！　そのグリフィンは、私が殺す！」

怒りに頬を紅く染め、深紅は迷うことなき眼で言った。  
たぶん本気だらう。彼女は何より自分の感情に正直だから。

が。

迷いが無いのは、この俺とて同じこと。

「……それはできない」

低く言うと、小刀の刃に加わる重みが増した。

小さな痛み、熱さに近いその感覚が、俺の首の皮膚に沈む。

「深紅。こいつは　獅子鳥は、他でもないハル先輩の召喚獣だ」

深紅の瞳を真正面から見据えながら俺は言葉を紡いだ。

小刀は動かない。

深紅は黒耀の瞳を怒りに細めた。

「だから、なんだ？　だから情けをかけると言つのか。お前のその  
情の甘さに、こちらを巻き込むのも大概にしろ

「そうじゃない。　……見る」

言いざま俺はすっと右手を宙に掲げて、深紅の視線が背後のグリ  
フィンに向けられるようにと促した。

酷薄で苛烈な、相対する感情を併せ持つ深紅の瞳が背後にわずか  
ばかり向けられて、すぐに戻る。

が。彼女は一瞬のちまたグリフィンに視線を戻した。

その瞳に、驚きの色が宿り、次いで疑惑の念が浮かぶ。  
紅色の唇が物言いたげに開かれて、それから閉じた。

俺は彼女の小刀を握る手首を取った。

そして、ゆっくり背後を省みた。

「……わかつただろいっ？」

そこには グリフィンが、横たわっていた。

甘茶色の禿げた毛並を荒い息に上下させ、全身のいたる所に付いた傷から血を流して。

震える鉤爪で地面を搔き、なんとか身を起こそうとしているが、その動きは幾度繰り返されても途中で挫けた。

フーッ、フーッ……と、怒った猫のようにじゅうじゅう息を漏らしながら、彼女は濁つた瞳で、それでも俺たちを睨んでいた。

俺まいま一度深紅を見た。

「こいつの体力は既に十分、削り取られている。主であるハル先輩の体が限界を迎えた今、その僕であるこいつもまた尋常でない負担がかかっている。俺にはわからないけれど 召喚獣と主の絆は、それほど密接なものなんだろいっ？」

尋ねると深紅がはじめて迷う色をその眼に浮かべた。

青藍のことを想い浮かべたのだと、容易にわかる。

俺たちは 星師は、こう教えられて育つ。

召喚獣は己の移し身、今一人の己自身だと。

星師の血肉を分け与えることを条件として、彼らは俺たちと主従の契約を交わす。

だが、その存在はただ便利な召使、都合の良い時に振りかざす盾ではない。

彼らは いくら代償をもひつとはいえ、闇に生きる運命を負つた俺たちと、一生共に歩んでくれる。

時に苛酷で淒惨な道を進む俺たちの、かけがえのない朋であるの

だと。

「深紅」

俺は彼女の小刀を草の上に投げ捨てた。

「わかるだろ？ 戦う必要なんてないんだ」

「……ここつは、敵よ……」

深紅はじっと俺の背後を見据えながら、小さな声でさう言った。  
「違う。敵とは、俺たちと戦わんとする輩のことだ。でも、彼女には、もう戦う意思は無い」

その、瞳を見れば。心が見える。  
言葉を交わせば、通じ合える。

信じている、俺は。

獅子鳥も ハル先輩にオーラと名付けられた彼女も、主を助けたいと願っているのだと。

「……そうだらう、獅子鳥？」

やがて俺はグリフィンの傍に膝を折った。

見るからに苦しそうに嘴を開いては閉じるを繰り返し、彼女は黄色い瞳をぎょろぎょろと動かした。  
掠れた声が、その喉から漏れる。

『……を、る、な……』

聞きとづくり。

思わずもつと近くに顔を寄せた俺は、一瞬後、耳に火がついたような痛みが走るのを感じた。

深紅が術を唱えかける。全力で吼えて止めた。

「 止めろ深紅！！」

ぼたぼたと、耳元から首筋を流れるぬるい感触は、血だ。耳朶を食いちぎられた。

でも先刻痛み止めを受けたせいか、対して痛くはない。

俺は深紅を制したまま、グリフィンに視線を注いだ。

「 ……意外と元気じやん。何か、言いたいことが、あるんだろ？  
……言つてみろよ」

『情けを……かけるな！』

調子の狂つた喇叭のような声でグリフィンはよやくそう絞り出した。俺は軽く眼を瞠つたが、一瞬後にはふつと鼻で笑っていた。ぐだらねー。

思ったので、実際そう口に出してみる。

「この期に及んでプライドだけ高えんだな、おまえ。……下らねえ

よ

『な……ん、だと……！？』

「蒼路、下がれ」

怒りに眼をむいたグリフィンを見て、深紅が固い聲音を発した。恐らくまだ術を唱える体勢を崩していないのだろう。俺は彼女を振り向かずに首だけを横に振った。

「言つただろ？。こいつにはもう戦う意思はないって

「けれど、その耳は……」

「大丈夫だ。……悪あがきみたいなもんだろ」

言に募る深紅に眩いで、俺はふたたびグリフィンに尋ねた。

「さあ。一度くらい、お前の。お前自身の心の本音を言つてみるよ

『……何を、言つてこる……?』

さくさくと、背後から草を踏む音がする。

土の香りが鼻孔に流れ込むまでもなく、鎮守神だと解った。

彼は俺のすぐ脇にやつてくると、そこで再びお座りの体勢を取る。見下ろされ、グリフィンはさりげなく辱的に身を震わせた。

『……うぬれ……私の体の動きが利かないことをいいことに……汚らわしい魔物に見下ろされるなど誇りが許さぬ!』

『貴様の誇りは、何のためだ』

鎮守神が低く言った。

グリフィンが眼を剥ぐ。

『何ですって?』

『己の保身のためならば、そんなものは無いに等しい。そなたは主を持つ異形。ならば、そなたの誇りはあなたの主を守るべきものではないのか』

落ちついた声であつたが、グリフィンを鎮静化させることはできず、むしろ逆の効果を及ぼした。

『……お前に……お前に、何がわかるとこりのー?』

驚いたことに、そう金切り声を上げるやいなや、彼女は今までど

うしても起こせなかつた上半身を奮い立たせたのだ。

鋭い鉤爪が地面にめり込み、湾曲した嘴が猛々しく一つに開かれた。

驚きに眼を見張る俺の体を、ふいに押す力があつた。  
見れば鎮守神がその長い尾で俺の肩を押している。まるで下がれ、  
というように。

「鎮守神？」

『下がれ、星持ち。……私はこやつと話がしたい』

「危ないぞ」

『そなたに言われても説得力が無いわ』

低く笑う声に、思わず成程、と納得してしまつ。  
俺が一步下がると、彼は逆に一步踏み出した。

今や獅子の下半身までをも何とかふんばろうとしているグリフィンの、その鼻先（……嘴先？）に佇んで、静かな緋色の眼で彼女を見つめる。

グリフィンはふらつゝ後ろ足で地面を探りながら、苛立つた瞳で鎮守神を見返した。

『……貴様こそ下がれっ！ 人を喰らつた汚らわしい身で、この私に近づくな！』

その言葉に、胸を氷刃のように冷たいものが走り抜けた。  
人を、喰らつた。

思わず鎮守神を見つめてしまつが、彼は俺の方を見ずに答えた。

『我が人を喰らつたは我が意思のみに非ず。それは、他でもない我が友の望みであった。 貴様にとやかく言われる筋合いはない』

耳を疑つた。

本当、だつたのか。

全身を落雷に打たれたように硬直する俺のそばに、いつの間にか深紅がやってきて、耳の怪我に治療の術をかける。

彼女は何も言わなかつた。

俺も 何も、言えなかつた。

グリフィンの声が嘲笑を含んで森の中に響き渡る。

『ついに認めたわね、人を喰らい、畏れ多くも神から魔の道へ堕落したと！……そうよ、お前は鎮守神などではない。人を殺して黒妖犬に成り下がり、あまつさえ人に封印されてしまった食人鬼なのよー。』

狂つたように行けたけたと嗤う、その、声が。

森の闇を、俺の心を、めちゃくちゃに搔き乱す。

俺は拳を強く強く握りしめていた。

口の中に鉄鎧の味が広がった。どうやら、唇をかんだらしい。

悔しかつた。

鎮守神が黙つていることが。

何も言い返さない、彼が。

「…………言い返せ…………」

俺は喉の奥から声を絞り出した。

深紅が俺の名を呼んで肩に置いた手を、振り払う。

「…………言い返せよ、鎮守神！！」

自分の声が鋭利な余韻を伴つて、大気を震わせた。

『言ひ返すことなど』

彼は、だが、笑いすらした。

『なにもない。星持ちよ。我が友をわれことなき事実なのだからな』

「……っ、けど、どうして……あの人は、八宵さんは……お前を友人だつて、言つてたじやないか……！」

『……何故それを、知つている?』

俺の言葉に、鎮守神がこれ以上ないほど驚いて、眼をみはつたその一瞬の隙。

碧の閃光が一筋空から奔り抜け、鎮守神を、グリフィンを、串刺しにするように突き刺した。

深紅が喉の奥で悲鳴を漏らした。

俺は何が起きたのかわからなかつた。

茫然と見送る視界のなかで、その胸を貫かれた鎮守神とグリフィンが、もつれ合ひのようにひと塊りとなつて地上に沈み込んだのがわかつた。

どおん……と、重い地鳴りが足を云つてはじめて、意識のピントが現実にあつた。

「 鎮守、神……?」

ふらりと、一步踏み出した俺の目の前で、彼は信じられない量の血塊をその口許から吐き出した。

「ほりと嫌な音が耳朵を打つ。

全身から血の気がひく音がした　　どうして。

「どうして……お前達が……っ

傷つかなければいけないんだ。

やつ、言おうとした。けれどできなかつた。

『……決まつてゐるでしょ？……』

肌を焼くような　怨嗟の念が、ふいにその場を振つて來た。  
同時に俺は周囲が明るくなつてゐることに気がつく。

碧の光が足もとを照らしていたのだ。

今やその光は　冷たくさえざえと、太陽の光のように俺たちの姿を曝け出していた。

『……あたしの邪魔をするものだからよ…………？』

「この世のものとは思えない冷徹な声に、思わず全身が竦み上がつた。

彼の女は、死蠅の唇を吊り上げてほほ笑みながら、ゆきくじと歩み寄つて來た。

森の奥から　全く物音も立てず。

「……来たわ、ね」

深紅がじくじと生睡を呑みこみ　そして、その名を紡いだ。

「……アンナ……」

森が その姿に感心してざわりと蠢いた。

片膝の下で大地が一際不穏に呻つたのがわかる。

碧の光が広がり、触れてゆく先から倒れていた木々が起き上がり、草花は枯死しては萌芽を促され、異常な速度で成長してゆく。みしめしと苦しげな音を立てながら周囲の木立が太く、高く伸び上がり、瞬く間に辺りは密林と化していた。

天が闇ざされ、狭められた空間内に濃密な妖気が漂う。

『おの……れ……』

眼前の光景が信じられずに呆然としていた俺は、耳朶を打つた低い声にはつと状況を省みた。

足元に際限なくひろがる血溜まりがある 俺たちと同じ、真つ赤な血。

それを流しているのは心も体も傷ついた二頭の異形の獣たちだった。

尋常でない妖気のせいでのひどく下がった気温の中、彼らの血潮は湯気を立て、命が流れ出す如くにとめどなく溢れ続けている。

「 鎮守神……っ！」

叫ぶ自分の声がまるで他人の声に聞こえた。

次の瞬間には何時の間に移動したのか、俺は彼らの体躯にすがり付いていた。

「鎮守神、グリフィン！　おい、しつかりしろ、大丈夫かー？」

『……あの、女……我が山、を……！』

鎮守神は怒りに燃えた瞳で俺の肩を通り越した先を睨みつけた。漆黒の毛並みの一部、ちょうど肩甲骨の辺りを刺し貫かれた彼は肺を損傷したらしい、吐き出す呼気が赤く染まっていた。

愕然とする俺の瞳に今度は、鎮守神と折り重なるように横臥したグリフィンのびくりとも動かない姿が映り込む。

心臓が張り裂けるように痛んだ。

一刻も早く治癒の術を施さなければ彼らは間違いなく死んでしまう。

「　深つ……」

深紅、はやく、早く治療を！

俺はそう彼女を呼ばうとした。だができなかつた。

何かが、起きたのだ。

全身に見えざる強大な力が圧し掛かり、俺は獣たちの血塗れの体の上に叩きつけられた。

肩が、背中が、鉛か何かで押しつぶされたかのようだ。起き上がりきることができない。

突つ伏した毛並みの下で鎮守神が苦痛の呻き声を上げる。

彼らが横たわる下の大地があまりの負荷に大きくぼごりと凹んだ様子が、からうじて開いた視界の端に見えた。

(……なん、だ……)

かは、と喉を引きつらせて呼吸しながら俺は愕然と視線を動かす。

なんだ　この圧倒的な力は。

人の、操ることのできる力じゃない！

「ハル……せん、ぱ……？」

つむぎかけたその名を遮ったのは深紅だった。

「ちがう、あれは遙ではない！」

彼女は俺から少し前に出た場所で、圧し掛かるこの凄まじい負荷をものともせずに立っていた。

怒りとも苛立ちとも知れぬ感情に細められた眼が見つめるのは眼前の光景を照らす碧の光。

そしてそれを纏った細身の、ぐれあたりまえの、青年の姿だった。

「あれはアンナだ！ 蒼路！」

「……じゃ、憑依、が……っ？」

体をみしみしと押しつぶし続ける負荷に抵抗しながら俺は深紅を顧みた。

眼前に立っているのは紛れもなくハル先輩その人だ。

だが彼が彼でない、という事は つまり。

向けた視線の先で張り詰めた横顔が一度ゆつくりと頷く。胸が引き裂かれるように痛んだ。

最も恐れていた事態が、起きてしまったのだ。

「完全、憑依……！」

ハル先輩はついに、その身も心も奪われてしまった。  
愛する妹に。

否、愛しているからこそ其の死は自分のせいだと口を責めて、歪

んだ形での彼女の再来を喜ぶことしかできず。

たぶんそれがどんなに愚かで無意味なことがわかった上で、彼は。ハル先輩は。

もう死んでいるアンナさんを守ることを、選んだ。

「ばか、やひり……っ！」

「まったくもって同感だ」

堪え切れず呟いた俺に答えた声があった。  
深紅だ。

抑えきれない怒氣を孕んだその声音に俺ははっと目を瞠る。  
呼吸すら妨害するほどこの重圧を、まるで感じていなかのよう  
に伸ばされた気丈な背中。

そこにかかる豊かな黒髪が風も無いのにざわりと揺れた。

怒ってる？

俺が思った瞬間、ハル先輩 否、アンナさんが、色の無い唇の  
端をもちあげてほほえんだ。

『……五辻の姫……』

凄惨と形容するにふさわしい表情で彼女は暗く眼を光らせた。  
ささやくようなその声も、深紅には聞こえないのだろうか。  
彼女の声は、もう俺にしか届かないものなのだろうか。  
瞬きよりも短い間に俺は考えて、だが次の瞬間圧力を増大した負  
荷に声にならない悲鳴を上げていた。

体の骨が鎮守神の背骨にぶつかり、双方いやな音をたてて軋む。

『なぜ貴様が生きている？…………私を殺したお前が！』

爆発するような怨嗟の念がアンナさんから放たれる。

碧の閃光が視界を埋め尽くし、森を、俺たちを、呑みこんでゆく。凍てつく寒波が押し寄せて体温を奪う。一瞬で凍えた。

(やつぱり、変だ……)

俺は寒さに震えながら必死に思考をめぐらせる。  
アンナさんの、この異常とも言えるほどの力。  
まさしく怨靈こそが持ち得る力だが、そもそも怨靈とは憎んでも憎み足りない相手を持ち、死して尚その者を憑り殺そうとする存在のことだ。

私を殺したお前が！

それはむろん真実ではない。

深紅がアンナさんと知り合ったときには彼女は既に死んでいたのだから、そんなことはありえない。

だつたらその言葉が意味する所は。

(……もしかして……)

俺は冷たい感触が心臓を撫でてゆくのを感じた。  
いやな予感が胸を逸らせる。だが心に反して身体はまだじりじりと負荷をかけられたまま、指先すら動かすことができない。  
からうじて動かすことのできるのは目線だけで、その先に今しも地面からばつくりと大口を開いて現れた、大蛇にも似た植物の存在が映り込んだ。

( もしかして、アンナさんは……… )

俺は言葉なく瞠目した。

本体らしきものが一本に、天地八方からぼこぼこと飛び出してきた触手が四本、合わせて五本の緑の大蛇が、俺たちの先頭に立つて

いた深紅に踊りかかったのだ。

「深ツ……」

背筋を凍りつかせながら俺は叫んだ、何より大事なその人の名を。蛇が彼女の華奢な手足を絡めとる、首を締める。

「 深紅！！」

『死ね！ 死んでその罪を贖え、呪われし姫君！』

「 ……ツ、やつぱりか……！」

高笑いするアンナさんに俺は本気で殺意を覚えた。ぎりぎりと歯噛みする。あまりにも強くそうしたので唇を噛んだ。鉄鎧の味が口内に広がる。

やつぱりそうだ。認めたくはなかつたことだが。

( アンナさんは深紅のことを憎んでる…………！ )

五辻の、姫だから。

天から初めて星を賜り、俺たちに戦つ運命を定めた一族の、その後継たる人だから。

「けどつ、そんなの……」

俺は呻つた。

唇から一筋、つうと血が伝い落ちる。

「そんなの、深紅のせいじやねえんだよ…………！」

刹那。

視界に、紅蓮の光が迸つた。

凄烈な呪力が凍てつく妖氣を押し返す。

光の眩しさに思わず閉じたまぶたの向こうへ、怒りの咆哮が響き渡つた。

「舐めるな この愚か者がッ！」

雷の いかづち ような怒声と共に、その身を拘束していた碧の大蛇が弾け飛ぶ。

現れた深紅はどうしたことかおどろに溶けた着物の袖を振り払いながら、鮮やかな手つきでアンナさんに銀の針を放つた。

『……何、といつ……！』

ずぶりと胸にもぐりこんだ銀針にたちまちその動きを束縛されて、

アンナさんはハル先輩のものである顔を醜く歪めた。

深紅はそんな彼女を憤怒にきらめく瞳で見据え、叫ぶ。

『天照皇太神の宣わく、人はすなわち天下の神物なり！』

「つ……！」

俺はぎょっと息を呑んだ。古式の祝詞！

高天原に居わす神々を讃え、その力を借り受けるために唱えるものなのだが、俺たちが普段使う術と比べて威力も身体に掛かる負担も半端ではない。

生半可な実力しかない術者が使えば神の怒りを買い命を落とすことをすらあると、俺はババアに教えられた。

「深紅、やめる！ そんな術をつかつたらお前、体が……ッ」

『須らく鎮まることを司る心は即ち、神と明との本の主たり』

が、深紅は俺の声などまるで聞いていなかつた。

低く祝詞を唱えながら同時に放出する呪力でアンナさんを押さえつけ、一息に大祓の術を完成させる。

『我が魂を傷ましることなれ、是ゆえに 無上靈宝、神道加持  
!』

刀印を形作つた指先が、刃のように鋭く宙を切り裂いた。

\* \* \*

世界から全ての音といつ音が消えうせる。

かと思えば瞬きひとつに満たぬ次の瞬間、今度は爆音が生じて俺たちを包み込んだ。

……俺は深紅と再会して以来、彼女が本気でパワーを爆発させるのを見たのは初めてだったが、はつきり言つてそう何度も遭遇したい現場ではないと思つた。

爆風が襲い来る。

鼓膜をつんざく轟音に両手で耳をふさいでしまいたい衝動にかられるが、動けないためそれもできない。

苦し紛れにまぶただけ下した視界において、尚その存在を凄烈に主張する深紅色の光の洪水が感じられた。

「私が死んで、全ての星導師が救われるのならば死にもしようよだがな！」

深紅が吼える。怒りのあまりその声色すら変化させて。

俺は堪らず眼を開けた。

彼女がその身を削るようにして戦う様を、俺だけは見逃してはい

けないと思つたのだ。

真つ赤に染まつた眼前で、声と共になぎ払われた指先の軌跡が大地を抉つた。

「そうではないとわかつてゐる以上、私には、果たさねばならぬ責任があるのだ！！」

紅蓮の光が密林を焼き払い、凶暴な龍と化して、碧の閃光を纏うアンナさんに頭からに突つ込んでゆく。

紅と碧の色の衝突が眼に焼きついた。

わずかな力の競り合いの後、勝つたのは紅蓮の龍。

碧の大蛇はその光に飲み込まれて消失し、直後、俺たちの頭上にふたたび闇空が姿を現した。

開けた視界のなか休みなく深紅が次の術を繰り出し、それに対しアンナさんが猛然と短剣を打ち振るつて応じる様子が映りこむ。

『憎い　姫、貴様が憎い、憎い憎い憎い！』

蝶のような唇の端が頬のなかほどまで切り込んで、眼と鼻がぬうつと前にせり出している、まさしく鬼とよぶにふさわしいその形相。俺は背筋を悪寒が這い上がるのを止められない。

だが深紅は毅然とした表情を変えずに、今度は降魔の術を唱えた。紅の波浪がアンナさんを追い詰める。

「悲しみに呑まれて星の運命を放棄し、あまつさえ星を暴走させたその罪は、いくら半星といえども許されん！」

二人は壮絶に力をぶつけ合いながら、俺たちから次第に離れた場所へと移動してゆく。

暗い森のあちこちで星の力が爆発し、周囲の木々をなぎ倒し、地

面に亀裂を窺つていいく。

その、田の前で繰り広げられる光景に冷や汗を流しながら俺はなんとか鎮守神の背に語りかけた。

「……っ、鎮守……神……！」

応えは、無い。

聞こえるのはひゅうひゅうと弱弱しく風に混じる、文字通り虫の息の呼吸音。

まさか。

心の臓にナイフを突き立てられたような激痛を覚えながら俺はなおも彼と、グリフィンの名を呼んだ。

「っ、おい、鎮守神！？ …… グリフィン！？」

だが、いくら呼んでも返答はなかった。

俺はそこではじめて、腹の下の鎮守神の身体が冷たくなり始めていることに気がつく。

全身がぞつと総毛だつた。

あたたかな体温が 魂が、彼らの肉体を離れ始めている。あるいは、もう。

「……っ……」

俺は強くつよく唇を噛んだ。口の中に鉄錆の味が広がる。圧し掛かる負荷に抵抗してなんとか起き上がろうと試みた。

(嫌だ……っ)

「」のままじや 六年前と何一つ変わらない。

無理やり人に封印を解かれ、だが、なぜか俺の傍にいてくれた鎮守神。

ハル先輩を、アンナさんを守ろうと必死だったグリフィン。

そしてその身に封呪という戒めを受けながらも気高く気丈に戦っている深紅。

俺だけが。

ぐ、と鉛のように重く感じられる指先に、渾身の呪力を流し込み負荷を押し返す。

「俺だけが、何にもできていない……！」

嫌なんだ。

自分が弱いせいで、誰かが泣くのは。悲しむのは。  
魔物であろうが人間であろうが、俺は誰が傷つくるも見たくない。  
だつて、傷を負えば痛いだろう。  
そして痛みの記憶は生涯けして忘れ得ないものなんだ。

(何もできないで……ただ見ているだけで)

指先が、わずかに自由を取り戻した。  
続けて見えない枷を嵌められたかのように動かなかつた全身に、  
電流の如く呪力が流れる。  
ぎりぎりと左手を引きずるようにして、右手に刻まれた星に触れた。

「大切なものを失うのは、もう……！」

輝く焰が顕れ出でて心を焼く。  
燃え盛る壁の向こうに憧れて止まぬ背中が見えた。

「絶対に、嫌だーー！」

『謹請し奉る』

己の口が祝詞を唱えるのを他人事のように聴いた。

身体の自由を取り戻した俺は呪力を爆発させた反動で宙に飛び、地面に降り立つまでの一瞬のあいだに呼び出した焰を全身に纏つて鎧とする。

なぜそんなことをしたのかはわからなかつたが、そうすることでのアンナさんの力の影響を受けなくなつたことに後から気づいた。異常に体が興奮しているにも関わらず頭はひどく醒めている。

刀を抜いた。

自らの流した血溜りのなかに浸りながら死に向かう獣たちを、刀身から迸る炎の魔法陣で包み込む。

今の俺の実力では、この術が成功する可能性は五割も無い。だがやらなければ獣たちは確実に死ぬ。

謹請し奉る。何卒、我が願いを聞届け給え。

『火之迦具土神……！』

莊厳なその名を口にした瞬間、全身見えない巨大な手で握りつかれたかのような圧迫感に襲われた。その感触は冷たく、だが熱く。命を暖めながらも焼き尽くす、まさしく焰そのものだった。

「……ツ……！」

俺は言葉無く眼を見開いた。

これが、神の焰

その激しさのあまり母女神すら焼き殺した、呪われた神の力。  
心臓を内側から<sup>な</sup>弄<sup>な</sup>られ焼かれて、あまりの激痛に悲鳴をあげそう  
になるが唇を噛んで堪えた。

深紅は、深紅は微塵の躊躇も苦しみも見せたことがない。

俺がこの程度で音を上げてたら、彼女の傍にいる資格なんてない！  
かつと見開いた瞳の向こうに獣たちを取り囲む焰が大きくふくら  
んで、激しく燃え上がる様が映り込んだ。

わずかに緋色の眼を開いた鎮守神に、血塗れた甘茶色の身体  
をやはりぴくりとも動かさないグリフィン。

死んでほしくない。

ぜつたいに、死なせない！

(全ての魂は……傷ついたために生まれてきたわけじゃない)

俺はひとつ呼吸を吸い、星に全神経を集中させた。  
身体の内の奥ふかく、体と心が解けあう場所に暴れ狂う七色の焰、  
それに心の手を伸ばす。

とんでもない暴れ馬だ。まるで野火だが、こいつをねじ伏せないことには先へ行けない。

「大人しくつ……しゃがれ！」

忌々しく吐き捨てた瞬間、焰がその激しさを増して俺の全身を包  
み込んだ。

生来持っている俺の焰と、猛り狂う神の焰が渦を巻きながらぶつ  
かり合う。

火柱に包まれて、耐え切れぬその熱さに俺は天を見上げて絶叫し  
た。

## 負けない

俺は弱いけれど。特別な力も武器も持たないけれど。でも知っているんだ、どんな闇にも光は届くと。

太陽が隠れても、月が消えても、名も無い星が輝けばいい。だから俺は。

俺たちは。

「 絶対に、負けらんねえんだつ！！」

叫んだ瞬間、なにかが俺の中を駆け抜けた。

蒼い焰が燃え上がり、七色のそれを一息に呑み干す。

とたんに熱さも痛みも焼き消えて、俺は焰が体内に戻るのを感じた。

一瞬の間を挟み、表面に何も纏わない手のひらをきょとんと眺めて、焰なしでもアンナさんの影響を退けている自分に気がつく。だがそれも一瞬で、俺ははっと顔を上げると獣たちを囲んだ魔法陣に眼をやった。

そして心底安堵する。

温かく揺れる火の壁の向こうで　彼らが眼を開いた様子が見えた。

緋色と黄色、その瞳に明らかな意思が宿り、澄んだ命の輝きを取り戻したさまが。

ああ

目頭に熱いものがこみあげ、同時にすさまじい疲労感に襲われる。ぐらりと前後に体が傾いだが、休んでいる暇はない。

心臓にナイフで刺されたような鋭い痛みを覚えながら、俺は駆け出した。

立ち止まつてはいけない。

俺はまだ、やるべきことを何一つ成し遂げては居ないのだから。

「深紅……」

強く脆い深紅、それに悲しみに囚われた双子。

あなたたちは知っているのだろうか？

光の届かぬ闇はない。晴れない闇は、無いということを。

どれほど暗く果てしない、太陽も月も隠れた真の夜の中にさえ、  
“それ”は絶対に存在する。

俺は空を見上げた。

妖気に薄く紗のかかつたような夏の夜空、月は見えない。  
だがびろうどのカーテンのようなその果てしない空間には無数の  
星がきらめいていた。

\*\*\*

「深紅　　！！」

彼女の星の気配を目指して草むらを駆ける俺の耳に、今一度鼓膜  
を揺るがす爆発音が届いた。

突風が巻き起こり、大量の土くれと木片が周囲に乱れ飛ぶ嵐が起  
こる。

顔を腕で庇いながら俺は爆発の起きた地点を眼でさぐった。

気配がぶつかりあつてるのは右方前方。

熱気を孕んだ風が吹き抜けた後、耳がわずかな悲鳴を捉えた。

「……深紅っ！？」

戦慄にも近い悲鳴が口を突いて出た。

あの深紅が悲鳴をあげるなんて、一体何が。  
痛む心臓を押さえながら駆ける速度を上げ、彼女の気配めざして  
ひたすらに前へ進む。

焦る気持ちに足が追いつかずにつの上ない苛立ちを覚えた。

はやく、もつと早く！

木の根を飛び越し、おいしげる茨を？き分け、目前をふさぐ名も知らぬ植物を斬り払いながら俺は駆けた。

腕や足にあちこち小さな熱が走る。おそらく茨で切ったのかと思われるが、はつきり言つてどうでも良かつた。

「ここにかつ！」

深紅とアンナさんの気配が押し寄せて、はじけた。

同時に開けた視界に映り込んだ光景は、巨木に背中から叩きつけられた深紅の姿、その無防備な喉元めがけて、今までに短剣を振り翳したアンナさん。

そしてハル先輩のものである 血走った碧の瞳。

「やめろ！…」

怒りで頭がまっしろになる。

理性の掛け金が弾けとんだ。

俺は刀を引き抜くと、無我夢中で打ち振るつた。

「深紅に、触るんじゃねえーッ！…」

刀を斜め十字になぎ払つた途端、全身を走つた異様な手ごたえがあつた。

刀身がかつてなく重い。ずつしりと、まるで何かが宿つたかのようだ。

そして刃の軌跡に燃え上がつたのは、紫に近い蒼い焰。

いつもと焰の色が違う……？

だが刀についてそれ以上気にすることのできない内に、俺の斬撃

がハル先輩の肉体を横殴りに吹き飛ばしていた。

衝撃のままに跳ね上がった体は宙に弧を描き、木立の向こうの暗がりへと突っ込んでいく。

止めようがなく胸が痛んだ。

中身はアンナさんでもあの体はハル先輩のものだ。手加減できなかつた、ときつく眼を細めてから首を振り、俺は深紅の元に駆け寄つた。

慣性で木の根元から少し離れた場所に転がり、彼女は意識を失つていた。

破れた着物のあちこちから覗く肌が紙のように白い。

特に大きく切り裂かれた左の脇腹は、ぱっくり開いた傷口と、そこから流れ落ちる血の色のせいで、ひときわ白さを増して見えた。

「……っ！」

頭から絶望に喰われそうになつた。

さつきの悲鳴の原因は恐らくこれだ。

僅かな間にどれほど激しく戦つたのか、聞かずとも十分すぎるほどよくわかる。

刀を地面に突き刺して、俺は彼女を抱え上げた。

「み、深紅！ 深紅、眼を開けてくれ！！」

右手の星で傷口の出血を抑えながら俺は彼女の名を呼んだ。細首が支える頭が重力のためにかくんと落ちる。

いつもの艶やかさを失つた唇から一筋、血の雫がこぼれ落ちた。

「コウフ……！」

憮然とした俺は、今一度その名を呼んで細い体を掻き抱いた。

する、と。

なめらかな瞼が僅かに震えた。

同時に地面に投げ出されていた小さな手がぴくぴくと動く。

息を詰めて見つめている鼻先で、やがて夜空のようにな黒ての無い、  
あの大きな瞳が開かれた。

「……そう、る……」

耳に届いた細い声に全身で息を吐き出した。

ぼんやりと霞がかつた瞳が俺を捕え、やんわりと細められる。  
まるで笑っているかのようなその表情に戸惑つていて、やがて  
彼女は口を開いた。

「……なつかしい

「え？」

「コウ、って……お前がくれた、愛称だった……」

小さな手が俺の手を捲すように動かされる。

応じるようにぱしつと掴んでからその指先の冷たさに驚いた。  
手を握られたことに安堵したのか一度ふかく息を吐き出して、そ  
れから深紅はふいに顔を歪めた。傷が痛むのだ。

「コウ……

「……だい、じょ……ぶ

「じほ、と鈍く咳をしながら深紅は首を振る。  
また鮮血がその唇から伝い落ちた。

全然大丈夫なんかじゃない。

首を振つて治癒の術を唱えよつとした俺の手を、しかし深紅は押  
されて止めた。

「ほんと、に、大丈夫だから……無駄な力を、使わないで」  
「 無駄なわけあるかっ！」

思わず俺が大喝すると、彼女は心底びっくりしたように黒曜の眼をみひらいた。そこに一瞬映り込んだ碧の光。はっと振り返るよりも先に、背後から伸び上がった白銀のひらめきが俺の頭上に躍りかかった。

「蒼……っ」

深紅の声を遮つて、肉を切り裂く音が耳の奥にこびりついた。遅れて灼熱の痛みが背中を斜めに走りぬける。舌打ちをして振り仰いだ先には狂気に吊上がった碧の眼。

『邪魔するなら貴様も死ねよ、護衛のがきが！』

俺の血脂で濡れた短剣が今ひとたび空を切った。  
裂けた唇からぬらりと長い舌が覗き、涎が飛びちらる。  
俺のことも完全に忘れてしまったのだと判るその一言を聞いて、胸に走った感情があつた。

心まで奪われて。

けして失くしてはいけないものを、あなたは失くしてしまったのか。

(……許さない)

眩しさにも似たその気持ちに俺はきつく眼を細めた。  
時が、ひどくゆっくりと流れているように感じられる。  
心の中が真空になり、誰の声も、どんな色も映し込まない。

前触れなく右手のひらに降り立つた硬いものを何の躊躇もなく握り締めた。

『……ツ、な……！？』

実際には、それは数秒だったのだろう。けれど俺にとつては一分にも一分にも感じられる長い瞬きだった。アンナさんが、ハル先輩の唇を驚愕に幾度も開閉させている。その腹には俺の掲げた両刃の剣つばなが深々と突き刺さっていた。そしてその刀身から燃え上がる紫の焰が一拳に燃え上がりて彼女の、否、ハル先輩の肉体を包み込んだ。

「蒼、路……お前……っ」

俺は剣を無造作に引き抜いた。

腕の中に抱えたままだつた深紅が眼前の光景に息を呑んでいる。

「刀が……焰が、変化している……じつこいつ」？

「コウ」

俺は深紅を遮つた。

立ち上がり、彼女を抱えなおすとその眼を見つめる。

今一度息を呑む気配が伝わってきた。

「後は、俺に任せてほしい。お前は自分の怪我を治してろ」

「そ

「俺に何が起きてるのか、俺にもよくわからない。でももう、そんなに長くはかかるないから」

深紅を少し離れた木の根元に座らせた所で、闇夜を劈く悲鳴が響

いた。

アンナさんだ。

俺の焰は調伏の焰。怨靈と化した彼女に対しでは想像を絶する苦しみを与えていた筈だった。

俺は立ち上がった。

天を衝くほどに燃え盛る焰に身を包まれて、アンナさんは、今まさに本当の終焉を迎えようとしていた。

## 眞実

『熱い、熱い熱い熱いいいつ……』

背筋を仰け反らせて焰に焼かれる、アンナさんの姿を見て俺は理解した。

星の暴走といつ言葉が一体何を意味するのか。

それは。

『どうして、だ……！　どうして私たちばかりが　こんな苦しみを負わされる…』

星に負ける、といつことだ。

己の星を認めず受け入れることができず、その運命に屈した者が迎える哀れな末路。

「……ハル先輩だけじゃない」

風が吹いた。

森の木立がじうとう音を立てて葉ずえを揺らし、散った青い葉が闇に呑まれて消えていった。

俺は一步前に足を踏み出した。

さわりと、ごく微かな音が耳を打つ。

『なぜ　何故、なぜ、どうして…』

苦しんでいる心がある。

もがくよつに、すすり泣くよつ

ただ一つの願いのため、あ

まりにも大きな代償を払つたふたつの心が。

「アンナさん。貴女もやつぱり、星を憎んでいたんだ  
『苦しい、熱い……ツ、止めるー』

頭を搔き遍りながらもんじりつっていたその体は、やがて熱さに堪えかねて地面に投げ出され、転げ回り始めた。

焰を消し止めたいのだろう。

しかしそれはこの焰の主である俺だけができる芸術だ。  
そして俺にはまったくその気は無かつた。

再び両刃の剣を手にし、冷徹にアンナさんを見下ろした。

この人はいつか言った。

誰も憎んでなんかいないと。

その言葉におそらく嘘はなかつた、けれど彼女はきっと、彼女自身気づかない場所に深く暗い傷を負つていたのだ。

そのことに今更思い当たつた自分が本当に愚かで不甲斐なく、そして歯痒い。

「家族には疎まれ。お兄さんが星に背を向けて。ただ独りで戦い続けて、あなたは」

あなたは、本当はさびしかつたはずだ。

家族に認められないことが切なくない人なんていない。

魔物を殺すことが好きでたまらない人もいない。

己に嘘を続けた結果、その体は、心はいつしか血にまみれてしまつた。

けれど自分が孤独だと認めてしまえば、そうやって必死に守つてきたものがたちまち砂と化して崩れ落ちてしまうから。

「だから、あなたは……」

俺はアンナさんの目前に立つと、焰でその手足を絡めとい、自由を封じた。

抵抗する力を奪われて、更なる苦悶の声が上がる。

俺は静かに剣を構えた。

あなたは、自分を騙したんだ。

自分は幸せだと思い込み、戦いの日々に逃避した。

星の力を星を憎むために用いて、だから。

「あなたは……死んだ。星に殺されたんじゃない、「の星を認められずに、それに負けただけなんだ」

眼を、見据える。

焰に焼かれて苦しみもがきながらも尚、Hメラルドのよつに澄んで美しい瞳を。

「そしてハル先輩は　あなたの心を知った上で、あなたを守つた  
『…………』

驚くほど長い時間が経過していくよつに感じられた。

この瞳と瞳を合わせて確かな言葉を交わした日々を思い出す。  
本当に昨日のことなのに、まるで百年も昔のようで一瞬眩暈すら覚える。

彼女はどんな気持ちでこの現世に留まって、ハル先輩の傍にいたのか。俺や深紅と言葉を交わしたのか。

あややかな金の髪を風に揺らして、鞠のよつによく跳ねる体で駆けて、常に笑顔を絶やさなかつた彼女が願っていたことさせつとしただ一つ。

「……！」

俺ははっと眼を見開いた。

エメラルドの瞳が、俺を見ている。

ただ茫洋とした視線を投げているという意味ではない、しつかりと明確な意思を持つて俺をその中に映しこんだのだ。

ずっと、言葉も届かない場所に彼女は深く沈んでいた。けれど今。

そこから必死に這い上がりとしている、手を伸ばしている。

「アンナ、さん……」

『…………』

碧の眼から涙がこぼれた。けれど容赦ない紫の焰に巻かれてそれはすぐに蒸発する。

動かない両手を必死で動かそつともがきながら、彼女は今度こそはつきりとこう言った。

『助けて、蒼路……！』

俺は、頷いた。

構えた剣を顔の高さまで持ち上げて息を吸う。この声が聽こえるのがほんとうに俺だけならば。この人に報いられるのも俺だけだろう。

『……助けるよ』

静かに剣を後ろに引いた。

頬をなにか冷たいものが伝うのを感じながら、俺は剣を振りかぶった。

片刃の刀は切り裂くもの、けれど、両刃の剣は貫くものだ。  
その思いを 憎しみを、悲しみを。  
滅ぼすもの。

「 『めんな

焰を受けて紫色の尾を引く剣の切つ先を、俺は一思いにアンナさんの首筋めがけて突き立てる。

\*\*\*

握り締めた柄を通して、手ごたえのない感触が手のひらを伝い抜けた。

俺が貫いたのはあくまでアンナさん、その魂の核たる星。ハル先輩の肉体を傷つけたわけではない。

『……！』

碧の瞳が言葉無く見開かれ、瞳孔が開く。  
だがそこに浮かぶのはもはや苦痛ではなかった。

ゆつくりと、瞳の表面に夢のようなるやかさで涙が盛り上がりてくる。

やがてしっかりと俺を正面から見据えて、彼女は アンナさんは、言つた。

『ありがと……』

俺は言葉を失つた。

その言葉をかけてもらえるようなことを俺は何も出来ていない。  
むしろこの弱さのために、愚かさのために、悲しい想いをさせて

しまった。

長く苦しめてしまつた。

「…………」

ひどく小さな咳きは喉に引っかかり、ほとんど声にならなかつた。頬を次々と伝うゆるやかな雨がある。

ゆつくりと、力の入らない手で剣を抜いて、俺はそれを投げ捨てた。

ふいに頬を撫でたあたたかな感触に気がつく。

顔を上げれば目の前のその人が、もはや兄の顔を借りずに本来の自分の顔で微笑みながら、俺の頬を拭っていた。

気がつけば。

金色に輝く影のような姿となつて、アンナさんはハル先輩の肉体から解き放たれてゆく。

光に包まれて宙に浮いたハル先輩は、やがて再び草むらの上に横たえられた。

『…………ありがとう……蒼路』

「俺…………は、何も…………」

喉が詰まる。

視界が一面の銀にかすむ。

必死に首を振る俺を、しかしアンナさんは抱きしめた。

『あなたがいてくれて…………本当に、良かつた』

感触の無い光の腕。

だがそれは傷ついた体に染み入るように温かくやさしかつた。堪えきれずまぶたを閉じる直前、その体が闇に輝く粒子となつて

溶け始めたのが見えた。

『本当に、ありがとうね

……』

蒼路、と。

今一度、本当に、ほんとうに安らかな声でそう俺の名を呼んで。アンナさんは、天に昇華していった。

\* \* \*

「……」

俺は長嘆した。

水を打つたように鎮まり返った森の中、がくりと地面に膝を折り、そのまま前のめりに倒れ伏した。

「蒼路！」

どこから深紅の声が聴こえた。

あるいはそれはひどく近くから発せられた声だったのかもしれないが、今の俺には遙か彼方から聞こえるものに感じられた。もう……力が残っていない。

火之迦愚土神の焰を借り受けた。

鎮守神とグリフィンを死の淵から引き上げた。  
そしてアンナさんを成仏させた。

重く閉じかけたまぶたの隙間から、地面に転がっていた両刃の剣が星に戻すまでもなく姿を消したのが見えた。

(あの、剣……)

俺は深いため息を吐き出した。

恐らく神の焰の影響なのだろうが、以前と比べて恐ろしく力を使う剣になってしまった。

ほんの一瞬ほど振つただけでもう全身の体力を吸い上げられたような気がする。

俺は眼を閉じた。

もうほとんど力は残っていなかつた。

しんど、恐ろしく静かな森のあちこちに、次第しだいに虫の声が響き始める。

…… 妖気が祓われたからか。

遠のく意識の向こうで俺がそう考えたとき、ふいに鼻腔に甘い香りが流れ込んできた。

「蒼、路？」

俺はふたたび眼を開けた。

それだけでも渾身の力が必要だつたが、やつただけの価値はあつた。

体を少し引きずるよつにして、深紅が俺の傍に膝を折つた所だったのだ。

なめらかな手がそつと顔を救い上げる。自然と上向いた視界のか、静かに俺を見つめる瞳と眼が合つた。

「……よくやつたわね」

深紅の口から労いの言葉がかけられたのは初めてだつたが、俺はそれに対して驚くよりも喜ぶよりも、ただ首を横に振つた。

「……いや」

また息を吐き出して、それから深紅の手のひらをやんわりと退けた。まだだ。

まだ、救われていない魂がある。

俺の甘い心のせいで恐らくいちばん辛い思いをさせた人。まつたく力の入らない体を叱咤してなんとか起き上がる。心臓が痛い。背中が痛い。

もうどこが痛いのかもわからないほど全身が痛んでいた。

「蒼路？　何してるので、今、治癒の術を？」

怪訝な声と共に引き止めてくる深紅を俺は片手でさえぎった。

彼女は黙る。

訪れた沈黙の元、わやわやと静かに葉ずえを鳴らす木々の口の中、独り取り残された者が発する呆然とした声が響いた。

「…………アン…………？」

## 悲しみの果て

双子のうちの一人を片割れと呼ぶことがある。対になつたものの一方、本来は一つであつたものが割れた片方という意味だ。

「アン アンッ……！ どこだ、どこに行つたんだ！？」

ただひたすらに妹の名を繰り返す、その声が切なすぎて俺は耳を覆いたくなつた。

草むらに投げ出された手が必死になにかを探している。

骨ばつて痩せこけたその指先は、しかし何を掴むこともできずにただ宙を、土を、むなしく搔いただけだった。

沈黙が落ちる。

残酷に肩に压し掛かるそれを、やがて張り裂けんばかりの先輩の慟哭が貫いた。

「…………！」

横で深紅が顔を背けたのがわかつた。

それほど、余りにも悲しい叫びだつた。

自分にとつて掛けがえのない人、もう一つの心臓にも等しい、ぜつたいて失えないあたたかいもの。

それを、奪われた者の絶望の悲鳴だ。

俺は残る力を振り絞つて立ち上がつた。

この悲鳴を……俺たちは既に知つていた。

「アン！ アン！ 僕を置いていくな、行かないでくれよッ

半狂乱になつた先輩は、自分でも気がついていないのだろう、再びあの碧の閃光を纏つて泣き叫び始めた。

その悲痛な声が闇を裂くたび、全身に負つた傷から血が流れるたび、そして瞳から涙が零れ落ちるたび。

碧の光は混乱したように進つて森を照らした。

ハル先輩はその光すらもアンナさんの面影と感じたらしい、もう既に限界を超えているはずのその体で立ち上がると必死に木立や茂みの中を掻き分けた。

アンナさんの名を、呼びながら。

「……先輩……」

そんな先輩に声をかけるのは躊躇われたが、俺にはそうする必要があった。だつてこれ以上力を使わせたら先輩の命まで危ない。

茨の茂みに顔を突っ込んで、その肌が傷つくのも構わずに両腕で茨を掻きまわす先輩の背後に立つと、俺は今一度彼を呼んだ。

「ハル、先輩」

「……ッ……！」

ぎらりと、憤怒と憎悪にぎらつく瞳が振り向いた。

乱れたぼさぼさの髪の隙間から俺を捕えて先輩は拳を振りかぶる。稻妻のように素早く宙を斬つたその一撃は、見事に俺の頬を直撃した。

脳天に火花が散る。

骨が割れた音が鼓膜に刻み付けられて、俺は背中から地面に叩きつけられた。

「蒼……ツ」

「 手え出すな深紅！！」

背後から聞こえた彼女の声を全力で遮った、とたん、休む間もなく再び先輩の攻撃が飛来する。

「どぐつ！ とみぞおちを思い切り殴られて呼吸が止まった。

夕飯を食べていなくて幸いだつた。

食べていたら間違なく吐いている。

ちょっとと見当違いないことを考えながら俺は爆発したように咳き込んだ。腹が激しく上下する。

だが先輩は今度はその腹の上に馬乗りになつて、ふたたび俺の頬を殴つた。

「お前の……ツ！」

激情が、まじりけのないそれが、真っ向からぶつけられて来る。これを拒絶する権利は俺にはない。

だから抵抗せずに先輩のされるがままになつた。

「お前のせいだ、アンは死んだんだ！ 殺されたんだツ！」

何度も殴られた。膝蹴りも受けた。

顔がみるみる腫れ上がり視界が歪む。

余りにも強いパンチを何度も受けたので、頭蓋骨が揺さぶられたのか、次第にひどい頭痛にも襲われた。

脳髄が内側からかき乱されるように痛む。

それでも俺は反撃しなかつた。

「 お前の……ツ、その……星の、せいだ……！」

やがて腫れ上がり熱い頬にぽたりと滴つたつめたい感触があつた。

俺はかなり制限された視界のなかでその正体を見極める。

それは 泪だった。

先輩の碧の瞳から音もなく流れ落ちる滂沱の涙。

何か言おうかと息を吸つたが口の中は血で溢れ返つていた。

十中八九鼻血が流れてるし、口腔内も切つたためだと思われる。

これは俺の血ではない。

ハル先輩の心の血だ。

「……返せよ……」

その言葉が胸を刺し貫いた。

決して、けつして応えられない想い。

行き場のない感情。

「僕にアンを、返せよ ッ！」

俺はただ首を振つた。

掛ける言葉がある筈も無かつた。

だつて誰かを失うということは、こういう苦しみと独りで戦わなければいけないということだ。

死んだ人の時はもう動かない。けれど生き残つた自分のそれは、否が応にも前に進んでゆく。

時に癒されて。薄れ行く傷の痛みを感じながら。やがてはその人のぬくもりを 忘れ。

「ハル、先輩……」

あなたも、本当はもう、わかっているのでしょうか。

俺はそう言おうとした。  
けれど出来なかつた。

「 殺してやるー！」

胸元に突き立てられた白銀のきらめきがあつたのだ。

俺は先輩が両手に握つた短剣を夜闇に振りかざす様を見た。  
とつさに横向きに転がつて交す、だがまたすぐに覆いかぶさられ  
ていた。

膝で膝を押さえつけられ、恐ろしいほどの力で動きを封じられる。  
……刺される。

奇妙に冷静に、そう判断した。

逃げることは不可能だ。かといって反撃する力はとうに使い果た  
している。

深紅が何か叫ぶ声が聞こえたような気がしたが、耳をそばだて  
る暇すらも無く、銀の一閃が心臓めがけて振り下ろされていた。  
ほんとうに瞬きする間もなかつた。

せめてもと眼を閉じようとした時に、ぱさりと何かの翼が空を打  
つ音がした。

\*\*\*

甘茶色の風切り羽が閉じかけた視界に舞う。

銀の短剣は俺の心臓に届かなかつた。

代わりにそれに刺し貫かれたのは、光の如き速さで俺と先輩のあ  
いだに舞い降りたグリフィンの、その、翼。

「 .....オツ.....」

ハル先輩の瞳が みるみる自己を取り戻した。

ぱたぱたと頬にかかる血が誰のもののかを理解した瞬間、彼は、囁く様な声を喉から絞り出していた。

「……オーア……？」

グリフィンは何も言わなかつた。

ただ巨大な頭をもたげてじっと主を見つめると、それからふいに傷ついていない一方の片翼を羽ばたかせた。

猛烈な風が舞い起こり、ハル先輩は俺の腹の上からじりじりと脇に押し出される。

よろめくよにして草むらに転がされた先輩は、己の友に歯向かわれたことが未だ信じられないようだつた。

裏切られた衝撃にしばし呆然としていた彼は、だがすぐに体勢を整えて起き上がると、再び俺めがけて斬り付けようとした。だがまたしてもグリフィンがそれを防いだ。

彼女は俺をその背の後ろにかばい、獅子の後肢でそびえるように立ち上がったのだ。

その断固たる態度に、さすがの先輩も動きを止める。

悔しさと怒りに全身を震わせて、彼は触れれば切れそうな視線で己の召還獣を睨みつけた。

「なんの 何のつもりだ、オーア！！」

激しい一喝だつた。

今までのグリフィンならきっとここで怯んでいたに違いない。だがいま彼女は怯まなかつた。

主から眼をそらさずに、あの忘れようもなく美しい、楽の音の如き声で言つた。

『これ以上、罪を犯さないでください』

「罪……だと……？」

先輩の声が震えた。

グリフィンは明確にはい、と答える。  
そしてその背に備わった優雅な翼を、今度は傷も構わずに、見事  
に両方とも開いて見せた。

右翼から血潮が滴つた。痛くないわけがない。

けれど彼女はただひたすらに穏やかな声でこう続けた。

『あなたはもう、十分すぎるほど罪を犯した。アンナのために。け  
れどもう止めてください。私はあなたに……私の友であるあな  
たに、これ以上の罪咎を背負わせたくない』

そのとき、俺は見た。

異国の城で王冠を戴いた女王の姿。

聰明なその横顔を誇らしむる畏敬の念持つて見守る心を　ああ、  
これはオーアの心だ。

戦禍が広がつて赤黒く染まる都の空に彼らの姿がシルエットとな  
つて浮かび上がつていた。

滅びた都。死に絶えた伝説の獣たち。

けれど遙かな時を経て、冷たく孤独な眠りに沈んだ心に触れてき  
たのは、一対のちいさく暖かな手のひらだった。

何者だ

警戒する目線が追つた先には、輝くエメラルドと見まいづ澄んだ  
瞳を持つこども。

ひどく幼い男女だった。

人間が、どうして

忘れたくせに

かつて私たちを必要としたことも、共に暮らしたこと、お

前たちは忘れてしまつたくせに

もう近づいてくるな！

人間は嫌いだ、大嫌いだ……！

(ハル、ぼくはハルだよ)

(あたしは、アン。よろしくね、グリフィンさん)

(きみはきょうから、ぼくらのともだち)

太陽の如きこの笑顔を、命掛けて護ろうと決めた。  
そのためにだけこれから自分は生きようと。  
けれど護れなかつた。悲しみの果てに死なせてしまった。  
あまつさえ残された片方の心が道を踏み外しかけたというのに、  
それを引き留めることすらもできなかつた。  
だから。

現実が戻つてくる。

グリフィンが言った。

『もしもあなたが更なる罪を犯すと言つならば、わたしは今度こそ  
この命懸けてあなたを止めます。そして死なせてしまつたアンナの  
ためにも、あなたを全力で護つて見せる』

「……つ！ 何を馬鹿なことを……そこの星師に縛されたか！？」

『あるいはそうかも知れません』

激昂する主に対してグリフィンは静かに答えた。

俺が声もなく成り行きを見守つていると、ふいに深紅が傍に寄つ  
てきた。

ぎゅっと強い力で服の裾を捕んだ手を迷わず取つた。

『私はこの者に命を救われました。弱いと思っていた。情に甘く、  
見境のない、魔物を殺戮するだけがとりえの星師だと』

ふいに風が巻き起る。

俺たちの髪を、ぼろぼろの衣服を乱して、唐突に止む。

闇に溶け込む漆黒の巨体がすぐ傍に降り立つた。

驚いてその名を呼ぼうとした俺を、ふたたびグリフィンの声が遮った。

『けれどこの者は　本氣で我々を助けてくれた』  
「それ以上は……やめる、オーラ、……ッ」

ハル先輩が俯いて、低く搾り出すような声を出す。

その手が短剣の柄を強くつよく握り締めた音が俺たちの耳にまで届いた。

グリフィンは無視して続けた。

『やめません。ハル、あなたとて本当はわかっているはず。彼があなたを救ってくれたということを』  
「…………の、為…………に…………！」

先輩の声にみなぎり溢れ出したものがあった。

勢いよく顔を上げたその顔に伝うは新たにあふれた涙と、唇を強く噛みすぎたせいで流れ落ちた血の筋。  
押さえ切れない激情に翻弄され、痛めつけられて　彼はついに己にその矛先を向けた。

「そのために　……僕なんかのために！　アンは、アンナは死んだんだ！－」  
「…………ハル先輩…………ッ！！」

短剣を両手で握り締め、先輩はその切っ先を己の喉に狙い定めた。  
誰もが、止められないと確信した。

俺は前に飛び出そうとしてもつれて転び、既に飛び上がっていたグリフィンの嘴も、主の腕にあと僅かばかりの位置で届かない。だが俺たちをはるかに凌駕したスピードで闇を飛翔した影があつた。

短剣がわずかに先輩の肌を斬り、血潮が飛び刃の切っ先が完全に肉の中に潜り込む寸前で 漆黒の狼が雷鳴のように先輩の腕に喰らいついていた。

「……ぐ、あッ……！」

先輩は苦痛の悲鳴とともに短剣を取り落とした。むろん鎮守神は相当手加減していただろう。だがそれでも彼の牙は確実に先輩の腕に沈んでいた。

『 貴様は眞実、愚か者だな』

巨大なあぎとを開いて口内に残った血糊を吐き出し、鎮守神は忌々しげにそう言った。

『自分のためにどれほどの者がその身を投げ打つたか、この場に及んでまだわからぬと申すか！』

グリフィンが低く滑空して先輩の元へ馳せ参じる。もはや彼は全ての力という力を削がれて膝を折つてしまつていた。鎮守神はそんな彼の姿を一瞥し、怒氣を孕んだ声で吐き捨てる。

『死んで貴様の気が済むのならば、くらでも死ねば良い。我は一向に構わぬよ だがな』

彼はどうやら怒つてゐるようであった。

さすがに哀れに思えてハル先輩を見てみれば、彼は今しも両手で顔を覆い、背中を丸めて地面の上に突つ伏した所。

俺は堪らず眼を伏せる。

鎮守神の声が空気を震わせて響き渡った。

『貴様が死んで一人でも救われる者がいるかどうか、その愚かな頭でもう一度ようく考えてみることだな!』

肩を丸め、頭を抱え。

固く握り締めた拳を大地に幾度も叩きつけながら。

ハル先輩は今度こそ、声を上げて号泣した。

これでいいのか？

自分自身に問いかける。

東の空が色を淡くし始めていた。

地平線から光が湧き上がり闇を排して、大気が紫色に変化してゆく。

黎明の時を迎えるとしているこの中で、しかしながら、ひとりだけ夜に置き去りにされた者がいた。

胸を搔き鳴るように号泣して、呼吸すら止まつて。

あまりにも深い傷を負ったせいで、きっと先輩はもう田が見えない。

(助けて……蒼路)

アンナさんの振り絞るような最期の願いを思い出し、俺はきつく眼を細めた。

あの言葉の意味は。

彼女が命懸けて希望<sup>こじねが</sup>ていたことは。

眼を閉じた。

ハル先輩のむせび泣く声が聴こえる。

俺はいつか鎮守神と話した。双子の内のどちらも見捨てることができないと。

でもどうすれば彼らを一人とも救うことができるのか、それがずっと判らなかった。

正直言うと今もわからない。

けれどこのままでは絶対にハル先輩は救われない。  
それだけは判っていた。

「……深紅」

名を呼ぶと彼女は俺を見た。

俺もその瞳を見返して、ずっと握っていた手を離す。

そしてそのまま首筋に手をやると慣れない手つきでペンダントの

留め具を外した。

チキ、と微かに金属のしなる音と共に人肌のぬくもりを吸った宝

石が手のひらにすべり落ちる。

輝く夏の森と見まじつ碧の石。

その鮮やかなきらめきにアンナさんの笑顔が重なつて消えた。

「……蒼路？」

何かを感じ取つたように深紅は声に不安を滲ませる。  
そんな彼女に俺は堪えきれず謝つた。

「ごめん

軽く息を呑む気配が伝わってくる。

聰い彼女は気づいたのだろう、俺がこの期に及んでまだ何か無茶をしようとしていることに。

発熱し始めたらしく、潤んでぼんやりとした瞳が俺を見つめる。

早く彼女を、静かな場所へ帰してあげたかった。

そしてどんな不安も取り除いてただ穏やかに眠らせてあげたい。  
その想いに嘘は無かつた。

ずっとやう想つてきた 彼女と初めて言葉を交した時から、ずっと。

できるなら戦いの日々から永遠に解放して、真綿でくるむよいつやさしくしてあげたいと。でも。

「……」めん。俺は、まだ帰れない

眼に熱いものがこみ上げたが、涙にはならない。

言葉無く俺を見つめてくる眼から眼を逸らせなかつた。

これは、この感情は切なさではない。口惜しさだ。

俺の力が至らない為に、何より大切な人も守れない悔しさ。

「ここで終わりにしたくない。このままじゃ先輩の魂はたつた一人で夜に置き去りにされる。俺にはまだやり残したことがあるんだ」

「……」

青ざめた唇が何か言おうとして息を吸つた。  
けれどそこから言葉は出でこない。

風が一陣吹き抜けて、俺の、彼女の髪を乱していく。  
手内の碧の石を握り締めた。

俺は、俺の最期の力をこれに懸けると決めた。

たとえ深紅が何を言おうと、ふたたび泣いて俺を引きとめようと。

俺は、星導師なのだから。

「……わかつたわ」

永い、ながい沈黙が流れた後、ふいに深紅がそう言った。  
俺は一瞬なにを言われたのかわからなかつた。

まばたきを幾度も繰り返してその言葉の意味を反芻し、よつやく

受け入れられたのだと思い当たる。

「え　いいの、か？」

思わず問い合わせてしまつと深紅はちこちへ苦笑した。

「いいも悪いも。どうお前はもう決めているのでしょうか。だったら私がいくら止めようとも意味が無いわ」

「……まあな」

さすがに深紅は鋭かつた。俺は認めざるを得ない。  
そして内心で彼女が引き止めるかもしないと一瞬でも考えた自分を恥じた。

深紅こそ「星導師」としての運命を受け入れている人はいないと、俺は誰よりもよく知っていたのに。

「「めん」

再び謝ると深紅は柳眉を跳ね上げた。

「何に対しても謝っているの?　考えていうことがあるのなら、さつとやつてお仕舞いなさい」

「はは。やうだな」

非常に彼女らしい言い回しに俺は今度は微笑んだ。  
要するに、応援すると言つてくれているのだ。

「サンキュー。深紅」

「礼は不要よ。お前の背中を見届けるのは私の権利。邪魔はしない  
でも」

言い刺して深紅は眼を伏せる。

熱で赤らんだ頬に長いまつげの影が落ちた。

わずかな間を挟んだ後、彼女は俺を見ずに言つた。

「お願い、蒼路。……無事で」

「うん」

胸に、押し寄せてくるものに心がふるえた。

息も詰まるようなその想いの烈しさに、目の前の華奢な肩を抱き

寄せたい衝動にかられたが堪える。

代わりに首を振つて立ち上がった。

「鎮守神」

『うむ』

呼びかけた先で短く答える声がした。

沈黙を守つていたが彼はずつとそこにいたのだ。

「深紅を 賴んだ」

言ひざま俺は踏み出した。

膝が挫けて全身のあちこちが軋む。

すきすきと痛みを訴えてくる心臓を無視して再び剣を取り出した。紫の焰を纏つて現れたのはやはり以前と形状を変えた両刃の剣。柄を握るだけで魂を喰われるような心地がしたが、最後の気力を振り絞り、切つ先で大地に五芳星の陣を描いてゆく。歪んだ線が完全な陣を描き終える前に膝が折れた。

額から脂汗が滲み出る。

ぐらぐら揺れる視界のなかで何とか陣を描き上げると、俺はその

中央にアンナさんのペンドントを置いた。

この魔法陣が現世と常世をつなぐゲートの役を果たす。ペンドントは代償だ。

死者を今一度、この場に呼び寄せるための代償。頼む。

成功してくれ。

「……アンナさん」

深々と剣を大地に突き立てて、俺は祈りにも似たその名前を口にした。アンナさん。戻つてくれ。

「　　ハル先輩に、言いたいことがあつたんだが……？」

紫の焰が魔法陣をなぞつてゆく。

その焰はいまの俺の力を反映し、ひどく不安定で頼りなげに揺れている。

全身から擦り取られてゆくものに喘ぎながら、俺は顔の前で刀印を組んだ。

自分の夢見の才とやらがどれ程のものなのかは見当も付かないが、少なくともこれだけは言える。

聴こえてくる声があるんだ。

そしてそれに答えることのできる声を、俺は持っている。

「だから……俺の力をぜんぶ貸すから」

戻つておいで。

そしてハル先輩を助けてあげて。

この夜が明ける前に、彼を闇から連れ出してくれ。

ぱたぱたと、顎から汗が滴り落ちて地面を濡らした。

眼を閉じれば消失してしまいそうな意識を気力だけで奮い立たせ、

最後の力で刀印を横一文字に薙ぎ払う。

紫の焰が丈高く燃え上がったと思つたら、次の瞬間には魔法陣の中央目掛けて迸つた。

小さな碧の石が衝撃を受けて宙に浮く。

その身になだれこんだ焰の全てを飲み干してから、高い音を立てて砕け散つた。

「……！」

失敗か。

思った瞬間気がゆるみ、ふらりと体が前後に揺れた。そのまま地面に横臥する。

(……力が……)

指で大地を搔きながら俺は呻いた。

力が、足りない。余りにも。

急速に闇に呑みこまれていく意識のなか、心底己の弱さを呪つ。

(……畜生……ッ)

俺は。

俺がもつと、強ければ。

「俺にもっと 力が、あれば ……！」

誰にも辛い想いはさせないのに、と。  
足搔くようにそう思つた瞬<sup>またたき</sup>だつた。

(…………では、手を貸してやろうつか？)

心の最奥に降り立つた、紫の瞳の女性が居た。

\* \* \*

お前の願いはよくわかった。  
だから少しだけ手助けをしてあげる。  
ほら 耳を澄ませてみてござりん。

\* \* \*

(…………『めん）

歌が、聴こえた。  
異国のことばでうたわれる優しい旋律。  
それに重なるようにして、誰かと誰かが話している。

(こんなに傷つけて、苦しめて。なのにまだ、行つてほしくないよ  
……！)

はつと眼を見開いた。

ハル先輩が、そこに居たのだ。  
そしてその両手がすがるようて求める先には、彼の誰よつ愛する妹が。

(…………あたしはずつと、あんたと一緒によ。ハル)

「」の足元にしがみ付いて泣く彼に、アンナさんはいじりじいほど健気に笑った。

（嘘じゃないわ。もう一度と会えないけれど、いつもあなたの傍にいる）

（……っ、僕は……！）

「」の傍を離れつつあるその存在に、兄は必死に想いを伝える。

（僕は、君に謝らなくちゃいけない。ずっと君を疎んでいた。優しくできずに眼を背けた。本当はいつも、話したかったのに　きみと話がしたかったのに）

（……わかつっていたわよ。そんなこと）

妹の碧の瞳に涙が浮かんだ。

（あなたは優しすぎるから、あたしの痛みまで一緒に背負い込んでいるんだってわかつてた。あたしには、確かに独りの夜があった。とても寒くて、とてもとても寂しかった）

（アン）

（でもそれはお互い様）

「」まかすように微笑んで、アンナさんはハル先輩の手を取った。

（あんたがあたしに謝るなら、あたしもあんたに謝らなきやいけなかつた。ずっとそれを悔やんでいたの。独りで勝手に行動して、勝手に死んで……辛い思いをさせてしまって、本当にごめんなさ

（い）

妹の思いがけない告白に、兄は眼を大きく見開いて、それからきつく、きつく細めた。

双子の顔はお互いの表情を映し出している。  
まるで鏡のようだつた。

(……僕たちは)

兄が囁くように言つ。

妹は涙を流しながらも、愛らしく首を傾げて微笑んだ。

(なあに?)

(僕たちは、最高の双子だつた。……そう思つてもいいだろうか)

光が一人の周りを取り囲み始めていた。

否、よく見ればそれは妹の体から発せられている。

蒸発するように天へと霧散してゆく金の粒子。

輝くその金色のひかりのなかで、アンナさんは最高の笑顔を浮かべた。

(あたりまえじゃない!)

その笑顔に引き寄せられるようにして、お兄さんも微笑んだ。

(……ぼくの)

(え?)

(僕の、太陽。君はずつとそうだつた)

今だから思つ。

君がいるから僕は生まれて、生きてくることができた。

(……ありがとう)

兄がまた、笑う。

空に溶け行く妹の体をいとおしげに抱き寄せて、ほじばしる感情に目元を歪ませる。

けれど彼はもう泣かなかつた。  
アンナさんも泣かなかつた。

(ありがとう……)

きつく、きつく。

兄の背中に爪を立てるようにして抱きしめ返して。

彼女は心底安堵した表情で眼を閉じた。

その足が、背中が、砂が崩れるようにして消えていく。

歌が　途切れた。

やがて兄を搔き抱いた一本の腕も、さらりと崩れて。

『さよなら』

彼女はまやしく、太陽のようだ。

金色に輝く光となつて、消えていった。

## いたわり

駆け抜けた、その先に待つものがやさしさであればいいこと知つ。  
みんなの悲しみが報われてくれればいいと思つ。

だから だから。

アンナさんも、ハル先輩も。

最後に会えてよかつたと。

お互いの笑顔が見られて、うれしかつたと。

そう僅かでも思つてくれれば

……

俺はもう、それでいい。

\* \* \*

涼しい風が頬を撫でる。

遠くかすかに蝉の鳴く声がする。

俺はふつと眼を覚ました。

香が焚かれた部屋のなか、うつ伏せに寝かされていた。

「……」

控えめに開け放たれたふすまの隙間から陽光がさしこんでいる。  
白く強烈なその眩しさに俺は思わず眼を閉じて、それから何度もまばたきを繰り返した。

やがて光に眼が慣れてきて、今更のよつと想つたことは。

夏、だ。

そうだ。今は、夏だったのだ。

「そつか……」

忘れていたのは、単純に季節を省みる余裕がなかつたからだらう。依頼を受けてからといつも毎日本当に無我夢中だつたから。当たり前の事実を思い出したといひで、目頭から流れ落ちるものに気づく。

俺は　泣いていた。

部屋に差し込んでくる太陽の光に重なつて見える幻像がある。

金色の、光。

固く抱き合つた双子を取り巻いていた、あの切ないほど優しい光。それが、まだここに残つているような気がした。そんなことは、ぜつたいに在り得ないのに。

「……アン……ナ、さん……」

俺は掠れた声でそのひとの名を呼んだ。もう決して、けつして届かない呼び声。彼女は去つた。遠い場所へ行つてしまつた。他でもない俺にその魂を、討たれて。

これで、よかつたんだ

とめどなく流れ落ちる涙とともに、そう思つ。思い込もうとする。

けれど何度これでよかつたと繰り返しても、胸が引き裂かれるようにならぬのは、あの人の笑顔にもう一度会いたいと思つてしまつ俺の心のせいだ。

わがままなんだ。わかつていてる。

何も犠牲にせずに誰かを助けるなんてこと、できやしない。

そうや、わかつてゐるんだよ。  
でも、どうしても考えてしまつ。

「……もつと」

もつと。

一緒に過ごせたら、良かつたのにな　と。

「ツ」

堪えきれない感情にまた新たな涙があふれる。  
そのまましばらくなつてやうつかと俺はやけっぱちに思つたが、  
ふいに部屋の外からぱしゃん、と快い水音が聞こえて來たので我に  
返つた。

あわてて拳で涙を拭く。  
と、水音とともに誰かが喋る声も耳に届いた。

『おや？　どうやら星持ちが眼を覚ましたようですね』

『うむ。ずいぶん長いこと眠つておつたの?』

「……んだよ、鯉たちかよ……ー」

耳をそばだてていた俺は会話の主が庭の池に住む鯉だと悟り、脱  
力した。

気になった自分がばかだったと思いつつ、起き上がろうと両腕に力を  
込める。だが半身を起こすだけでも相当難儀に感じた。  
かなり体が疲れているらしい。

つーか俺、一体どのくらい眠つていたんだろうか。  
いま気づいたが腹の空き具合も半端ではない。

「あれから何が、どうなったんだる……？」

咳いて俺はようやく起き上ると、足を腹の前に引き出してあぐらの姿勢を取った。

そこで初めて自分が単衣を身に着けていることに気がつく。はだけた合わせを直してから、凝り固まつた首や肩を撫でたりうとしたところ、全身のあちこちに激痛が走った。

特に痛いのは腹に右肩に背中。

わけても先輩に負わされた肩と背筋の傷の痛みには堪えがたいものがあった。

「そ、そーいえば、背中もやられてたんだっけ……っ！」

うめきながらふたたび前かがみになり、痛みの波が過ぎ去るのを待つ。うつ伏せに寝かされていたのはつまり、傷に触らないようにという配慮だったのだ。

ああ痛い。それに、ひどく喉が渴いた。

普段の俺はどちらかといふと堪え性のあるタイプなのだが、いまははどうやら、戦いが終わって気が抜けてしまつたようだ。

とにかく誰かはやく来て、と痛みに脂汗を流しながら考えている俺の耳に、再び鯉たちが喋る声が聞こえてきた。

『これで姫君も安心なされるでしょうな』

『うむ。喜代様と二人そろつて心配されておつたからの』

『おや？ なにせら嫌な気配が』

彼らは一匹でワンセグトだ。

一匹が喋り、また一匹がそれに対する応じよつとしたところ、

『それは本当か、化け物鯉ども——ッ！』

ぱっしゃーん！と盛大に水がはねる音が響き渡つた。

ぎょっと顔を上げた俺の耳に飛び込んできたのは、鯉たちのものとはまた違つ、高くよく響く声。

『いまのは真か！星の子がつ！ようやつと田覚めたと！？』  
『おや、これはこれは。神崩れの銀狼どのではあーりませんか』  
『つむ。全くもつて騒がしことにのつえないわ。誰が化け物か、このたわけ者つ！』

『質問に答えぬかつ！まこと星の子は田覚めたとつ？偽りではればただではおかぬぞ、貴様ら一匹とも我らが丸呑みにしてくれるわ！』

……どひやら鎮守神の眷属（の片方）だった。

時刻も場所も全く構わず鯉たちと喧々諤々やらかしている。つるせえな。

それに、迷惑！

寝起きの頭を押さえながらげんなりと俺は思つた。  
眷属とその主をこの屋敷に連れ込んだのは俺だ。つまり、その眷属がなにかやらかせば俺がババアに叱られてしまつ。  
そんなの御免だ。

俺、今回の依頼けつこう本氣で頑張つたんだから。

「おー、ためーーり……！」

だがしかし、俺が這つように床から抜け出し、半ば開いたふすまをさらに大きく開け放とつと、そこに手をかけた時。

『ちよつちよつと、蒼路起きたの！？会いたい入れてよつ、お願い喜代のお婆一つ！…』

今度は 屋敷の上空から発せられた、割れんばかりの大声が。  
……どいつもこいつも……っ！

今度こそ呻きながら立ち上がり、俺はふすまを勢いよく右に引いた。

すぱんと快い音が立つ。

同時に視界にあふれかえった白い陽光に思わず眼を瞑りながらも、あらん限りの大声でこう叫んだ。

「 バカヤロウ、お前らも少し静かにしゃがれ！！」

なかなかの声量であった。

語尾の余韻が尾をひいて朝の空気に響き渡り、来訪者たちもびっくり仰天してくれたらしく、ぴたりとおとなしくなった。

が。

(……あれ？)

俺は足元がぐらりと傾ぐのを感じた。眼がくらむ。明るいはずの目の前の景色が急に降りてきた間に見えなくなつた。冷や汗が、額から頬を滴り落ちる。

あ。

まずい。

( 倒れる )

部屋の入り口から外は、磨きぬかれた白木の廊下だ。

俺はゆっくりと木の床めがけて倒れ伏す。

また傷が痛むなあとぼんやり衝撃の瞬間を待つていたが、しかし一瞬後に俺の体に走つたのは、温かくふさふさとしたクッションのような感触だった。

なめらかな、けれどほんの少しだけ硬い毛並み。  
鼻腔に大地の香りが満ちた。

『無事か　蒼路』

低い声が耳朵を打ち、俺は知らずほほえんだ。

「……ありがとう。鎮守神」

眼を閉じたままで手を伸ばし、鼻面とおぼしき場所に手を置いた。  
鎮守神も答えるように俺の手に頭を擦り付けて、あまつさえそこ  
を舐めさえした。

ぞりりとした温かな感触におどりこいて眼を開ける。

と、まだ薄暗い視界のなか、俺は自分が狼たちに囲まれているこ  
とを知った。

同時に廊下の向こうから息せき切つて駆けて来るババアの姿が見  
える。

そういうえばさつきの上空からの声は？　とゆつくり視線を上向け  
ると、そこにはなんと、結界に張り付くようにして空中に留まつた白  
い猫又の姿があった。

「……花緒」

俺は彼女の名を呟いた。

花緒、鎮守神。それに眷属たち。  
みんな心配してくれているんだ。

「　ありがたいなあ」

噛み締めるように呟いて、俺は太陽のまぶしさに眼を細めた。

\* \* \*

その後がまた面倒だった。

目覚めたとたん獸まみれになつてゐる俺を発見するや否や、ババアは烈火のごとく怒つて獸達を追い払い、そのまま俺を奥座敷へと連れて行つたのだ。

式神によつて抱えられていつた俺は、しばしの後ひろびろとした板張りの空間に降ろされて、横になるようこと命じられた。

そこには巨大な魔法陣が描かれていた。

白い光で形作られた、五芳星の陣。

おとなしくその中央に横たわると、不思議なじんわりとした温かさが感じられた。

肌を通り越し、内臓までをもやわらかく撫で、疲れを取り去つてくれるような。

「……気持ちいいな、これ

思わず呟くと、ババアがふんと鼻を鳴らしてこいつ答えた。

「失われた体力、呪力を回復させる魔法陣じゃ。お前は過日戦いで消耗しそうだ。覚えてはおらんだろうが、今日でちょうど一週間も眠り続けていたのだぞ」

「いつしゅうかん！？」

驚愕の事実に俺は眼を剥いた。

思わず起き上がりそうになるも、ババアの厳しい声がそれを留める。

「寝ていろ、馬鹿者……でなければ本当に死ぬぞ……」

「お、おーげただって、俺」の通り元気だし……つーか一週間つてマジでー?」

「わしが嘘をつくでも思つのか、」の戯け者

「いや! 思いません、思いませんが、でも」

必死で首を振りながら、俺は内心で頭を抱えた。やつちまつた。一週間。あれから一週間も経過していくとこつことせ、つまり。

期末、受けそびれた……

発覚した恐ろしい事実にほとんび絶望じやうになる。いや、つていうかした。俺は絶望した!

寝ている間に一学期が終わってしまったとは、何たることだ。

ああ、俺の成績は。

一体どうなる、学校生活。

「……俺の期末……」

「安心せい。お前は追試じや。優子が学校に頼んでおいたそひじやからな」

頭を抱えて沈痛な声を挙げていぬと、ババアがそういうもなづに言つてきた。

とたん俺はびたりと動きを止めて、訴えるように師匠を見つめる。

「え、本当ー? ……ほんとこほんとー?」

「本当じやとも。試験日は今月の十五だといつ」とだから、一週間後じやな

「ありがとうゆことー。」

諸手を挙げて喜ぶ俺を、ババアは冷静に見つめていた。

ひとしきり喜んだ後は気持ちも落ち着いてきて、俺もその視線に気がつく。

火のよみに輝く瞳の奥に横たわる、さもありまな感情や思惑を見て取つて、そういうえばまだ何も話していなことには気がついた。寝ていろと言われたが半身を起こし、姿勢を伸ばす。

そして師匠に向き直つた。

「それで。この一週間のあいだ、一体なにがどうなつたんだ?」

俺は言った。

ずっと心に引っかかっていた疑問が堰を切つたようにあふれ出してくる。

ハル先輩はぶじなのだろうか。そして深紅は?  
一人ともいま、どこにいて、一体何をしているのだ？

「それに、鎮守神。あいつもまだここにいるみたいだつたけど……」

「蒼路」

言いかけた俺をババアがさえぎつた。

強い声に、嫌な予感が胸を刺す。

俺はわずか眼を細めて師匠を見つめた。

「師匠……？」

「お前には話さねばならぬ」と、聞かねばならぬことが余りにも多くある。休ませてやりたいのは山々じゃが、あまりゆつくりはしておれんぞ

「それは」

どういふ意味か、と尋ねようとした俺を、ふたたびババアは遮つた。

そしていつ言ったのだった。

「先ずは、よく戻つた」

「師……」

驚愕のあまり瞬きを忘れた。

喉にこみ上げる熱いものに声が出ない。

俺が微動だにできずに見つめていると、ババアはやうに言葉を続けた。

「深紅も遙も、怪我はしているが命に別状はない。そして一人とも、お前が居なければ助からなかつただろうと口を揃えておる。戦いのあらましも大体聞いた。……アンナも、成仏できたようじやな」

「つ

息が詰まった。

今度こそ眼に涙が浮かんだが、泣きたくなくて堪える。

ああ、じゃあ、会えたんだ

その事実が俺の全身を包み込んで、この上もない喜びに代わる。会えたんだ。ハル先輩とアンナさんは。夢で見たあの笑顔は、あの金色の光は。幻では、なかつた。

「……よかつた……！」

それだけ呟くと、俺は唇を？み、单衣の裾をぎゅっと握り締めてうつむいた。

そうしないと感情があふれ出してしまってやつだった。

ババアのしわくちやの手が伸びてきて、俺の頭をあやすよつじょんぽんと叩く。

彼女は、言った。

「よくやったな、蒼路」

お前は本当に、よくやっただも。

## 問われる罪

そして俺は聴かされることとなつた。

ハル先輩は、深紅は。 いまどこにいるのか。

一人が何故いま俺のそばにいないのか。

「蒼路」

「はい」

「 遥が<sup>いんようかい</sup>陰陽会に囚われた。 深紅は五辻の人間として、彼の審問に参加してある」

「陰陽会に……？」

予想だにもしていなかつた事実に俺はただその名前を繰り返すしかできなかつた。

「陰陽会。」

日本全国に散らばる異能者たちの組織の名だ。

陰陽師やら星師やら退魔師やら、その名前やタイプこそ違えど、闇と戦うことを生業としているひとたちは全國に山ほどのわけで、そういう人間を一括してとりまとめてるのが陰陽会。

星師の管理、育成を行つてているのは言うまでもなく五辻家だが、その五辻も陰陽会という森の中ではただの木の一本に過ぎない。

……森。いや、どつちかつーと井戸だろつ。

俺は忌々しく思った。井の中の蛙。

陰陽会は好きじやない。特殊な力を持つ者同士の馴れ合い。

互いのやつてることを怠慢しあい、その力を誇示しあつてはまた魔物を殺そうという士気を高める、偏見と差別意識に凝り固まつた人間の集まりだ。

けどその陰陽会にハル先輩が囚われた、なんて

「なんで……先輩が？」

「なぜだと思'う？」

声を低めた俺に対してババアはそう切り替えてきた。虚を突かれながらも、俺は少し考えてからこいつ答えた。

「確かにあの人は暴走して俺と深紅を傷つけたけど、それはあくまで個人的なものだった。五辻の後継としての深紅を傷つけたという罪を責めるなら、陰陽会が出てくる必要はない」

「その通りじゃな。では、何故か？」

「……鎮守神を解き放ったから？」

俺は重々しく言った。

ババアは無言のまま首を縦に振った。厳然たる肯定。

あー、と俺は天井を仰いだ。

審問、つまり先輩はいま罪を問われているのだ。

想像するだけで暗澹たる気持ちになる。

「陰陽会の主張としては、東京本部の管理下にある君見丘に脅威を及ぼしたことが罪の核心だということなのじゃが。そもそもあの山はこの覓家の所有であり、ひいては現当主であるわたしの私物じゃ。陰陽会が口を出せる領域ではない」

「……しゃしゃり出てくんなつてんだよ、バカ陽会」

「全くじゃな」

俺が忌々しく舌打をするとババアも応じた。

彼女は　彼女も陰陽会を快く思っていないと俺は知っている。

特に陰陽会東京本部長のジジイと折り合いがよくないらしく、し

よつちゅうの競り合戦を起らしてこねとのことだ。

ため息をつき、しばらくまた沈黙した。

無視しようとthoughtてもじわじわと怒りが、不安が滲み出してくる。

「……ふたりともを」

「うん？ 遥に深紅か？」

「ああ。一人とも、体は無事なの」

うむ。お前が昏倒して運び込まれた後、丸一日は休ませた。

「うーん、成る程、アリマジン。」

גַּעֲמָל

俺は不思議に感しながら黙りこぼす。力の弱さを嘆く。

ハル先輩も深緋もかなり消耗してしまった。丸一曰休むだけいやとて  
も足りない。

だ血を流し続けていいんだろう。

だのに陰陽会の奴ら、ふたりを無理やり引っ張り出したって言うのが。

俺だけがのんきに眠り続けていたのかと考えるとそのこともまた

腹立たしい

「……………」

俺はさつりと歯みした。

おうやく任務を遂行し終えたといふの、まさかこんな心持にな

るとは予想谷もしていなかつた。

そして更にはババアに告げられた一つの事実が、俺の心にとても

つもなく暗い雲を投げかけることとなつたのだ。

「時に蒼路」

「なに」

俺はババアを見ずに答えた。

かなりあからさまに反抗的な態度だったと思うが、ババアは珍しく何も注意しなかつた。

代わりに彼女はこう言つた。

「鎮守神のことじやが。あれだけの大妖を野放しにしておくわけにはいかん」

「……」

俺は無言で眼を瞬いた。  
当然のことだ、と思った。

俺は彼とともに戦つて、その凄まじい力を目の当たりにした。  
いくら今は魔物に過ぎないと言つても、元々はこの君見丘の土地  
神であつた獣。

そこにいるだけで周囲の空気を動かし、生態系にさえ影響を与えててしまう。

事実彼が解き放たれて以来、君見丘ではめつきり中級以上の魔物の姿が見られなくなつた。

弱い魔物は強い魔物を恐れて遠ざかる。

そういうことだが、ババアが懸念しているのは逆のパターンだらう。

つまり、強い魔物に引き寄せられて、むろに強い魔物が襲来する、  
ということもあるから。

「…………じゃあ、また……封印しなきゃいけないってことか?」

沈痛に考えをめぐらせていた俺は、やがて重々しくそう言った。  
だが言つたあとに自分で自分の発言に打ちのめされた。

封印。

鎮守神が　俺の傍からいなくなる。

ババアが言つた。

「あるいは、今度こそ恩の根を止めるか。選択肢はその一つじゃな。  
お前にとつては、辛いと思うが。いずれにせよまた上から連絡があるだろう」「う……」

すなわち、五辻。

俺はこみ上げる感情に田元を歪ませた。

辛いどころじゃない。申し訳ないんだ。

鎮守神は被害者だ、人間に封印されて、また人間に無理やりその封印を解かれて。

望んで現世によみがえったわけではないのに、あまつさえ。  
あまつさえ今度は　殺す　だって？

「…………ざけんな…………」

強く拳を握り締めて俺は俯いた。

そんなこと、できるわけがないだろう。

ああ、深紅がいれば。

彼を殺さないでくれと頼むこともできたらうか。

いや、しかし殺されなければ彼は封印されるだけだ。

そのどちらの道が彼にとって幸福かなどと、俺にはとても言えない。

言いたくない。

だつて俺は　俺の心はもう決まっているのだから。

「……なあ、ババア」

「なんじや。蒼路」

今日のババアは心なしか優しかった。

本当に氣のせいかもしれないが、その優しさに俺は甘えてしまつた。

ほんとうはこういうこと、第三者に聞いてはいけないのかかもしれないが。かといって鎮守神本人にそれを尋ねるほど俺は傍若無人ではない。

「教えてくれないか」

だから俺はババアに尋ねた。

今回の依頼で俺はそうとう自分勝手に戦つたが、その上でなおかつまた我儘を言おうとしていた。でも、これが最後の我儘だ。

「鎮守神が、否、緋醒ひさめが。一体どうして人を喰らって、神から魔物へと成り果ててしまったのか。その話を

＊＊＊

「人あこがれた神様がいたんだよ」

……ババアは語り始めた。

「巨大な狼。百年もの、千年もの時を生き抜いて、やがては生まれた山を守るようにと天から命じられた鎮守神さ。

彼はいつも一人でねえ。なにしろ見かけが恐ろしかったから、皆が彼を怖がったのさ。彼はとても優しかったのに。ただその牙のため、巨大で恐ろしげな風貌のため、彼の傍には誰も寄り付きはしなかつた。同類の狼にすら、優しくて狩ができないという理由で、馬鹿にされていた。

彼はほんとうにいつも一人ぼっちでいたよ。

見晴らしのよい山の峠から、人の住む村を見下ろしては、その明かりを暖かそうだと憧れて。

楽しそうに遊ぶ子供たちを見つめでは、自分も一緒に遊びたいなと憧れて。

人はいくらでも仲間を作る。動物にも妖怪にもできない、自由に絆を広げる力を持っている。

彼はそれに憧れたのさ。

憧れて、憧れ続けて……いつかその山から、人を見守る神となつた。

でも神になつても彼は一人だった。  
いつまでもいつまでも一人だった。

これからもずっと一人なのだろうかと考えていたとき、一人の女性が山の中へと分け入ってきた。

「女性……？」

思わず口を挟んだ俺にうなづいて見せて、ババアは重く次の言葉を口にした。

「”右手の甲に不思議な星を持つ女”、だつたそうだ  
――！」

俺は呼吸できなくなつた。

八宵さんだ。

黙つているとババアは話を続けた。

「本当に変な女だつたらしい。神である狼の姿が見える上、見えてもちつとも怖がらない。あまつさえ、手にしていたまんじゅうやら団子やらを差し出してくる。そして、彼にこう言つたんだそうだ。

”あなたがこの山の守り神？ いつもありがとうございます。ここにお礼を持ってきたわ”

「それは……」

俺は胸を打たれた。どんなに嬉しかつただろう、鎮守神は。

憧れて憧れ続けた人間に、はじめて向けられた好意。暖かな礼儀。狼は、彼女に自分の言葉が通じることを知つた。そして、初めて話をした。人と。ずつと話をしてみたかつた人間と、他愛もない、山の話をした。

通じる言葉がある。それは幸せなことだ。  
人と魔物の間でさえ。それは確実に存在する。

「女はよく笑う人間だつた。なぜ言葉がわかるのかとたずねれば、私は星持ちだからと答えたそうだ。狼は、そこではじめてこの世に星を持つ不思議な人間たちがいることを知つた。

さまざまことを、女と話して知つた。とても楽しかった。女はそれからちょくちょくやってくるようになつた。いつもお土産を持って。酒や、きのこや、若鮎や。だから狼も彼女の来訪を心待ちにするようになった。

山菜や、果物や、花を用意して彼女を待つた。

彼女はそれらをとても喜んでくれたから。

彼女の笑顔を見ると、狼は自分の心が、とても温まるのを感じたから。だからうれしかつた。

たくさん話をした。もつと話をしたかった。

けれどある時、八宵がひどい怪我を負つて山に来た。

”どうしたんだ？”

狼は薬草を探つてきて八宵に渡した。

”大したことないのよ”

八宵は笑つて答えた。

”いつものことなの。私は人間じゃないから、仲間ではないんですつて。せつかく皆のために、悪い鬼を退治してあげてるのにねえ”狼はよくわからなかつたが、八宵の笑顔がすこし寂しげなことに気がついた。

ややあつて、その怪我が人によつて負わされたものだとわかる。驚いた。

”人間なのに人間に噛み付くのか”

”まあそういうことね。 緋醒、あたしはね、特別なのよ。人はみな星のさだめの下に生まれていて。けどあたしは、星そのものから生まれた、星を持つ者。”

そして女は右手につけた手甲をはずした。

華奢な甲にくつきりと浮かび上がる、あざ。星の形をしていた。

”覚えておきな、緋醒。この星を持つものは、あたしと同類。妖を、鬼を、祓う運命を担つていて。あんたがこの山を守る責任を負つていてるようにな”

だからあたしは一人でいいのさ、と八宵は言った。

いつ死ぬかもわからない。奇妙な力を持つて生まれて、魔物といえば聞こえはいいが、紛れもない魂を殺す呪われたさだめなのだから。

帰り際、狼は女に声をかけた。

なんだかもう会えなくなるような気がして。

”また来いよ。八宵”

八宵は、笑つて手を振つた。

けど、来なくなつたのさ。

あるときからぱつたりと。

狼は待った。昼も夜も。雨の日も風の日も雷の日も。けれど八宵は来なかつた。

もう来てくれないのだと思つた。

きつと忘れてしまつたのだ、八宵は。

まあいい、どうせ今までどおりの静かな日々が戻つてくるだけだ。

八宵はうるさいし、酒飲みだし、いないほうが静かでいい。

……そう思つた。けれど、やっぱりいつも待つてしまつ。

峠で彼女の姿を探してしまつ。

八宵。八宵。どうしててくれないんだ。

我のことを嫌いになつたか。

どうして。どうして。

まだ話したいことがあるんだ。

たくさんたくさん、話がしたいんだ……

「……っ」

俺は腕で目をこすつた。

知らぬ間に涙があふれていた。

かなしい。こういう話は、辛い。

鎮守神の心が痛い。

馬鹿野郎、星師はそんなに暇じゃねーんだよ。

ババアは俺を横目で見たが、何も見なかつたかのように話を続けた。

た。

「……時間が経つた。ある日、狼が峠から寝床に戻ると、そこに八宵が立つていた。

喜び勇んで声をかけた。だが、彼女はどこか様子が違つた。

”八宵？”

名前を呼んだ。すると、彼女は淡くほほえんだ。

”緋醒。すまない”

狼は人に謝られたことがなかつた。だから理解できなかつた。  
けれど次の言葉を聴いたときは、とてもとても苦しかつた。  
八宵は、こう言ったのだ。

”  
すまない。……お別れを言いに来たんだ”

八宵は山のふもとの村を守る星師だった。

とても小さな村だった。

人々が日々の糧を得るのでやつとの、貧しく、けれど幸福な。  
それがある日、山を三つ越えた町からの使者がやってきて、村を  
大きくすることになった。

すると当然、山が邪魔になる。

峠を越えるのは難儀だし、あの辺りには狼が出る。  
けれど自分達は山と共に生きてきた。

山があるからこそ生きてくることができたのだ。

……村人たちはためらつたが、その感情も豊かさには変えられな  
い。

なによりも、子供が病にかかるたび三つの山を越えなければいけ  
ない距離は辛かつた。

そして人々は山に道を通すことにした。

そこで、山に住む狼たちを一掃退治することにしたのだった。

狼は危険だし、人を食えば妖怪にもなるといつ。

だが村人たちが一致団結し準備を進めていたところ 立ちはだ  
かつた女性がいた。

八宵だ。

(あんたたちは、自分が何をしようとしているのかわかつているの  
かい)

彼女は言った。まっすぐな、けれど悲しい目で。

(狼たちはずっとあんたたちを見守ってくれてた。一度だって人を

襲つたことはないぢやないか。それを、ただ邪魔だからつて、そんな理由で殺そうつて言つのかい？）

人々は八宵を恐れていた。奇妙な力を持つ、鬼の娘。  
彼女に退くようにと何度も言ったが、彼女は頑として譲らなかつた。何度も衝突が繰り返された。

そしてついにある日。

彼女の存在を忌んだ商人が、彼女を捕らえた。  
そしてその隙に山に火を放とうと算段した。

八宵は毒を盛られていた。けれどこのままでは、緋醒たち狼が殺されてしまつ。

彼女は必死に牢を抜け出した。

そして緋醒にこの事態を告げようとしたが、体が動かない。  
仕方なく魂魄だけを山に飛ばして息も絶え絶えに緋醒に告げた。  
すまない、お別れをつけに来た。逃げてくれ。

（逃げてくれ、緋醒　！）

驚愕する緋醒の耳に、同胞たちの悲鳴が届く。  
山に火が放たれた。

飛び交う怒りの声、憤り、憎しみ。

仲間を逃がしたが、八宵の体が見つかっていない。

星持ちの体は魔物に食われるという。

緋醒は仲間の止める声も聞かずに山を駆け下りた。

すると峠で虫の息の八宵を見つけた。

そしてそのまま背後まで迫つた人間。

緋醒を守ろうとした仲間たちを殺し、高笑いをあげて、その歪んだ心に鬼が寄り集まり始めていた。

よくも

緋醒の心に怒りが燃える。

よくも、八宵を

よくも仲間を。よくも山を！  
許さない。

( 許さんぞ、人間ども！－！)

緋醒は力を爆発させた。

怒りに我を忘れた。何人も殺した。

腕をちぎつた、目玉を潰した、内臓を引き裂いた。  
飛び交う血糊、肉片、その背後で赤々と火柱を上げる山。  
まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。

やがてすべての人間を殺しつくした時、緋醒の輝く白銀の体毛は、  
血を吸つてどす黒く変色していた。

蒼く澄んだ空のようだつた瞳も、怒りの緋色に染まって。  
彼はふらふらと八宵の元へと近づいた。  
彼女の死を待ち、後から後から際限なくわいて来る鬼たちが、じ  
つと離れた場所にうずくまつていた。

(……八宵)

緋醒は彼女の顔に鼻面を寄せた。

八宵は微笑んでその鼻面に手を触れた。

( ありがとうね。……緋醒 )

そしてすまない。あんたに人を殺させてしまった。神であるあん  
たに。

( 我が決めたことよ。お前が気に病むことではない )

それよりも傷を治さねば、という緋醒に八宵は首を振る。

(もう助からん。それよりも、頼みがある。最初で最後の、とても残酷な頼みだ。友であるお前にしか、頼めない)

友。八宵はそう言った。  
緋醒はうなづいた。

(聞こう)

(私を、喰つてくれ。このままではどうせ鬼に食われる。そうなればまた厄介な鬼が増えるだけよ。だが星師の私が死ねば、その鬼を退治する者すらいなくなる。……この地は荒れるであろう。だから緋醒、私を食べろ。そして私の力を得て、この地を守つていってくれ)

そして緋醒は、八宵の願いを聞き入れたのだ。

友を喰い、その血肉を得て、彼は鎮守神でありながら妖怪となつた。

呪われた神。人食いの神よ。

(今度生まれるときは……)

八宵はつぶやいた。  
今際の際に。

(また互いに友となるつぞ。緋醒)

人を恨むなよ。

つらむより、愛する方がずっと心は安らかだ。  
星持ちはまたその定めを繰り返す。

私と同じ右手に星を持つものがいれば、それが私の魂の後継。

(きっと、また会える。それまで、またな)

そして彼らは別れたのだ。

残つたのは血で穢れた山、殺された人間と狼の累々たる死屍。  
遣りどころのない憎しみと寂しさに猛る緋醒は里の人間までをも  
殺そうとしたが、八百の今際の際のことばを思い出し、最後の最後  
で思いとどまる。

人を恨むなよ

うらむより、愛する方がずっと心は安らかだ

だから、彼は敢えて。

あえてその身を捕えようと/or>する人間達のされるがままとなり、三百六十五日飲まず喰わずでさらしものにされたあげく封印を受け入れたのだ。

人を憎みながらも愛そうとして。  
愛しながらも、憎まずにはいられず。

永い長い年月を眠っていた彼は、だがしかし、不測の事態によつて再び現世によみがえることとなつた。

「……あとは、お前も知る通りじゃろう」

ババアが言った。

俺は何も言えずただ首を振つた。

そうだ、知つている。

ハル先輩によって目覚めさせられた鎮守神。

人を憎む心を抱いていた彼は、おそらく先輩に人間を……俺と深紅を殺すようにと命じられ、断る由もなく従つた。

人は嫌いだから。

大切な友達を、仲間を、山を、私利私欲で汚し殺したおぞましい存在だから。

きっと彼はそう思つて俺たちを見つけ出したのだろう。

けれど。

けれど……彼は俺たちを殺さなかつた。

それどころか、協力して、助けてくれて。

その強靭な心で護つてくれた。

「どうして……」

俺は掠れた声を喉から絞り出す。

本当に、どうして。

人に、いつもいつも人に、翻弄されてきたのに。

大切な人を奪われて。

傷つけられて、悲しまされたのに。

「どうして、俺なんかの、そばに……っ」

「明白じやろうが。バカ弟子が」

絶え間なく白く湧き出でる淡い光のむこう、ババアがそう呟けた声を出したのが聞こえた。

「あやつはお前のことが好きなのじやよ。蒼路」「好き……？」

思いもがけぬ言葉だつた。

起きてから何度も泣いたせいで熱く腫れ始めた目元を感じながら、俺は顔をあげてババアを見つめる。

「鎮守神が……俺を？」

「そんなわけない、といつ顔をしどるな」

ババアはさりげなく笑を深くする。

顔の皺がもつとシワシワになつた。言えないが。

彼女は続けた。

「だがこういう感情には理由などない。……遙がアンナを愚かさに  
まみれながらも離さなかつたように。お前が深紅を命がけで護るう  
とするようにな。あやつは、鎮守神は、ただそうしたいからお前の傍  
においてお前を守護することを選んだのだ」

「

「よく似てゐるが、お前とあの犬は、素直で、一途で。呆れるほど  
に純粹だ」

「似てる……？」

俺は涙に濡れた眼を見開いた。

なにか、言いよつもない感情が心を横切つていつた。

言葉を発しようとして、けれど何といえбаいいのかわからない。

口元に手を当てて考え込んだ。

言葉を切つたババアはそんな俺を横目で見守つている。

( もしも )

俺は考える。

もしも本当に、鎮守神が俺を好きだと想つてくれてゐるなら。

そしてその感情のためだけにどんな痛みも傷も厭わず、俺の傍に  
いてくれたとしたなら。

それはどれほど強く純粹な想いだろう。

(……いや、もしもじゃないな)

俺は眼を開けた。

そしてここには無いものを見るよひに眼を細め、彼の、鎮守神の瞳を思い出した。

緋色の瞳。

夕焼けとも花ともつかぬ、あたたかに燃え上がる紅葉の色をしたあの澄んだ眼を。

そして自分はとっくに彼の想いを知っていたことに気がついた。ああ、そうだ。

「……ババア」

俺は顔を上げた。知らず微笑んでいた。

師匠はいつもどおりの仏頂面でこちらを見、なんじやと短く問い合わせ返す。

俺は明朗にいつ言った。

「この魔法陣、いつ出でいい？ 俺、鎮守神と話がしたい」

そう。話がしたい。

たくさん、たくさん。

あいつの気持ちに答えてやりたい。

哀しい過去を消すことはできなくて、楽しい未来と一緒に作っていいくことはできるのだから。

「俺は 俺も。あいつが好きだ

俺は言った。  
だから。

「これからもずっと、あいつと一緒に生きて生きて生きてたい」

俺はババアにそう言った。

彼女はただ頷いた。

小さな瞳がきらりと光る。

「……そ、うか

「うん」

「気持ちちは、決まつておるのだな」

「うん」

確かめるように向けられるまなざしに、俺は迷い無く顎を引いた。ババアはそのまま何か思案するようにしばし考え込んでいたが、程なく膝を伸ばして立ち上がり、部屋の出入り口を手指数して歩いていった。

「おい、ババア……」

さつきの質問の答えをまだもらっていない。

声を上げかけた俺を、ババアは片手でさえぎった。

「正午になれば少し外へ出ても好い。それまでは食事をし、睡眠を取つて休んでいろ」

＊＊＊

正午を迎えるなり俺は飛び出した。

庭で俺を待ち構えていた眷属たちに居場所を聞いて、そのまま彼らと一緒に鎮守神の元へ向かう。

彼は、屋敷の外に出てしまっていた。

だから俺はなおさら急いだ。

陰陽会が鎮守神の件でハル先輩にいちやもんをつけている今、当の鎮守神がひょうひょうと空を飛んでいては非常にまずいものがあるからだ。

彼はいつか俺が花緒と尋ねた、あの朽ちた社に居た。

裾野の只中にあるそこまでの距離を、半ば走り、半ば眷属たちの背に乗せてもらいながら、俺はなんとか辿りついた。

「……はー……っ」

半端じゃなく息が上がる。

自分でも心配になるほど心拍数が跳ね上がっているのがわかった。ぽたぽたと珠のような汗が額からあふれて、絶え間なく頬を、顎を滴り落ちる。

『だ、大丈夫か星の子?』

密な樹木に囲まれて、辺りはつつそうと暗かつた。

崩れかけた灯籠に手をついて膝を折った俺を、眷属たちが心配そうに覗き込んでくる。その毛並みが淡く輝いて見えた。

俺は大丈夫、とみじかく答えて、あまり間をおかず再び歩き出す。

全身の傷は絶え間なく痛み、体は鉛のように重かつた。

でも、彼の気配がする。

彼は確かにここにいる。

そのことがわかつていたから、俺は、全然苦しくなんてなかつた。

「……絆醒」

参道の真中で立ち止まり、その名を呼ぶ。

彼のまことの名、かつて八宵さんが愛しきを込めて呼んでいたであつた。

「緋醒、いるんだろ？……出てきては、くれないか」

俺は拍手を打った。

静寂を待とう社に乾いた音が響き渡る。

崩れかけた本殿の屋根に巻きついた赤い布の切れ端が、ふいにひらりと揺れたのが視界の端に見えた。

風が、吹く。

俺は眼を閉じてその瞬間を待つた。

鼻腔にあたたかな大地の香りが流れ込むのを感じた瞬間、眼を開ける。

漆黒の狼が、参道に降り立つた。

社を埋め尽くすほどの大な体躯、どこかさびしさを含んだ緋色の底の無い瞳をして。

何も言わずにただじっと俺を見ている。

俺は彼の元へ歩み寄った。

精一杯のやさしさで以つてあたたかな毛並みに手を当てる。そして、言った。

「……ありがとうな」

俺の心から、彼の心から、あふれてくるものがある。  
それを互いに伝えるには、言葉だけではとても足りない。  
でも言葉にしなければその僅かすらも伝わらない、だから俺は彼の眼を見てこう続けた。

「本当に、ありがとう。……そしてすまない。いつもいつも、人の

都合で振り回して、哀しい想いを寄せてしまつて

俺の言葉を聴いて、緋色の瞳にふつと理解の色が過ぎる。  
彼の体温が手のひらに染みた。

八宵さんと同じ星を持つ、俺の右手に。

「けれど」

俺は、八宵さんじゃない。

彼女の代わりには決してなれない。

時間は巻き戻せないのだし、過去をなかつたことにするにしても  
きない。

でも。

「共に　生きては、くれないか。緋醒」

でも、俺は、いまを生きている。

そしてこれからを緋醒とともに、生きていくことができる。  
決して離れず。

『……』

手の下の毛並みが、ふるえたのが感じられた。

はじめは大きく、その後小刻みに全身を震わせて、緋醒は泣いた。  
そう、驚くべきことに　その緋色の瞳からは透明な涙が滴り落  
ちたのだった。

「ひざめ……」

思わず強くその毛並みを掴んだ俺だったが、よくよく見ると彼は

何故か笑っていた。

『……くれ、と』

「え?」

ようやく発せられた低い声は抑えたように小さかった。

聞き取りづらく問い返す。

今度ははつきりと大きな声が空気を揺らした。

『殺してくれと。そう、頼もうと思っていた』

衝撃の告白だったが、俺はなぜか驚かなかった。

それは彼の言葉が過去形で発せられたせいかも知れなかつたし、あるいは彼が笑っていたからかも知れなかつた。

首を振つて、今度はその鼻面に手を寄せた。

『……お前が、死ぬ必要なんてない』

『我は呪われた鎮守神。人を、友を喰い、妖怪と成り果てた存在だ。今だけではない。生まれた時からずっとそうだった。誰もが我を疎む。恐ろしがつて遠ざける。だから、誰かと共に生きることなどでききないのだとthoughtいた。我は、存在するだけで誰かを不幸にするのだと』

俺は言葉に詰まつた。

それは違う、と言えなかつた。

だつて彼の言葉はある意味では正鶴せいづるを射ている。

恐ろしい狼、強大な力を持つ鎮守神。

そんな彼は星師である八宵さんを喰らつたことで、さらに尋常ならざる力を持つ、神でも妖怪でもない存在へと変化してしまつた。そんな彼を傍において共に生きてゆくのは俺にとっても決して簡単

単な道ではない。

でも、俺にはもう迷いはなかつた。

### 「緋醒」

俺は彼を呼ぶと少し離れ、距離を置いた。

そして剣を抜く。

両刃の剣が出てくるかと思つたが、今まで通りの手になじんだ刃本刀が顯れた。

輝く焰が緋醒の瞳にちらちらと揺れる。

俺がこの刀で彼を斬ると思つたのかもしない。  
硬い表情で緋醒は言つた。

『……なんとする。蒼路』

「もつ一度言つ。俺と一緒に生きてくれ」

いいざま俺は刃で手首を浅く斬つた。  
わずかな痛みの後、焼けるような熱さが皮膚を奔る。  
あざやかに盛り上がってきた鮮血の霖をまとつ右手を、俺は彼に差し出した。

「この血は契約の証」

『契、約……?』

「お前は、死んではいけない。俺と一緒に生きるんだ。そして楽し  
いことをたくさんして、幸せにならなきゃいけない」

『幸せ?』

それはどういう意味の言葉か、といつよつと、緋醒の瞳が限界まで見開かれた。

いや、たぶん意味は知つてゐるだろつ。

ただ心底驚いているのだ。

それほど彼は今まで疎まれ、忌まれ続けてきたに違いない。

### 「選べ、緋醒」

俺は強い声で言い、右手を差し出したままさらに前へと一步足を踏み出した。

緋醒は微動だにもしない。

ただ息を呑んでいるのが感じられた。

「俺に殺されるか　あるいは、この血を飲み、俺と共にこの現代で新しい生を生きるか」

言いざま自分に反吐が出そうになつた。

血を飲むということは、彼を俺の召還獣に下すということだ。

本當はそんなこと、もちろんしたくない。

俺は異形たちを召使として扱う人間は肩だと思つてこらのだから。

でも、仕方がない。

今は　これ以外に道が残されていなかつた。  
彼を護るために。

### 『……そなたは』

長い、長い沈黙があつた。  
やがて緋醒は口を開いた。

透明なしづくはまだその瞳から伝い落ちている。

『そなたは、無謀な戦いをする。また八百のよつにひつに張つてしまつた  
り、きっと我是耐えられぬ。我はそなたを死に追いやつた者を間違  
いなく殺すぞ。たとえそれが人間であつても。　それでも良いの

か?』

「構つもんか」

俺も、また頬を伝う涙を感じながらそつ答えた。  
彼の心が嬉しかった。

切ないほどの、その真つ直ぐさ。  
裏切られてもまた信じよつと、何度も手を伸ばしてしまつ。  
その気持ちを受け止めて、ぜつたに絶対に、見捨てるものかと  
心に決めた。

「いくらでも、殺せばいい。俺が死んだ後にはな。……でも、死ぬ  
前はだめだ」

そう言つて微笑んでみせる。

さらに一步前に踏み出すると、血の滴る俺の右腕は、ほとんど緋醒  
の口許の位置にあつた。

「大体なあ、俺は死なねえよ。お前を残して先に逝つたりなんかし  
ない。俺がどーしょーもなくなつて死ななきやなんねえ時は、お前  
も一緒に殺してやる。それでいいだろ?」

『我はお前の……傍にいていいのか?』

自信の無い声を彼は出した。

尖つた耳が垂れ、ふつさりとした尾がしょんぼりと揃えた前脚の  
間に挟みこまれる。

ああ、本当の犬みたいだ。

俺は再度笑つて、その瞳をまっすぐ見つめた。

「あたりまえだ!」

緋醒がまぶしそうに眼を細めて、それから閉じる。漆黒の毛並みを濡らして、また涙が滴り落ちる。けれどそれが最後で、彼はふるりと大きく身震いすると、涙を体から弾き飛ばした。

つい、と静かに巨大な顔が前へ乗り出していく。俺の手首をざらりと温かな感触が撫ぜていって

彼は、俺の血を確かにその体の中に入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7753u/>

---

星師

2012年1月12日21時45分発行